

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 11 No.2

第42号

September 2020

対人援助学会

NO. 4 2 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
援助職の未来(2)	千葉 晃央	017-020
臨床社会学の方法(30)	中村 正	021-032
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団 遊	033-035
カウンセリングのお作法(24)	中島 弘美	036-041
集団精神療法について(5)	藤 信子	042-044
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援(9)-	岡田 隆介	045-051
「Family history」(1)	団 士郎	052-062
社会的養護の新展開 11	浦田 雅夫	063-064
幼稚園の現場から 42	鶴谷 圭一	065-072
福祉系対人援助職養成の現場から42	西川 友理	073-078
ああ、相談業務	河岸 由里子	079-083
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	084-086
ドラマセラピーの実践・研究・手法(2)	尾上 明代	087-091
対人援助学&心理学の縦横無尽(休載)	サトウタツヤ	
きもちは言葉をさがしている(41)	水野 スウ	092-097
ノーサイド(休載)	中村 周平	
盆踊り漫遊(9)	竹中 尚文	098-099
周旋家日記(休載)	乾 明紀	
男は痛い！(36)	國友 万裕	100-106
役場の対人援助論(34)	岡崎 正明	107-112
臨床のきれはし(10)	浅田 英輔	113-115
発達検査と対人援助学(1)	大谷 多加志	116-120
講演会&ライブな日々	古川 秀明	121-138
家族と家族幻想(3)	坂口 伊都	139-143
周辺からの記憶 —東日本大震災家族応援プロジェクト—(28)	村本 邦子	144-167
病児保育奮闘記(24)	大石 仁美	168-169
対人支援 点描(23)	小林 茂	170-173
精神科医の思うこと(18)	松村 奈奈子	174-176
馬渡の眼	馬渡 徳子	177-178
東成区の昭和 やぶにらみ日記	柳 たかを	179-187
町家合宿 in 京都 (15) (休載)	山下 桂永子	

そうだ、猫に聞いてみよう(19)	小池 英梨子	188-193
先人の知恵から (29)	河岸 由里子	194-197
私の出会った人々(休載)	関谷 啓子	
うたとかたりの対人援助学 (15)	鵜野 祐介	198-201
ああ結婚 (15)	黒田 長宏	202-205
PBLの風と土(14)	山口 洋典	206-211
接骨院に心理学を入れてみた(13)	寺田 弘志	212-220
現代社会を『関係性』という観点から考える(13)	三浦 恵子	221-226
マイクロアグレッションと私たち(12)	朴 希沙	227-230
保育と社会福祉を漫画で学ぶ(11)	迫 共	231-234
「余地」—相談業務を楽しむ方法—(11)	杉江 太郎	235-237
統合失調症を患う母とともに生きる子ども(番外編)	松岡 園子	238-240
生体肝移植ドナーをめぐる物語(10)	一宮 茂子	241-253
「盲ろう者」として、自分らしく生きる(7)	中條 興子	254-257
こころ日記「ぼちぼち」 part II	脇野 千恵	258-260
MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～(5)	高名 祐美	261-264
原田牧場 Note (3)	原田 希	265-266
みちくさ言語療法 (休載)	工藤 芳幸	
新連載 2 回目 かけだ詩(2)	川畑 隆	267-271
新連載 2 回目 ブルーグレーの肖像(2)	天川 浩	272-275
新連載 2 回目 応援、母ちゃん(2)	玉村 文	276-280
新連載 2 回目 HITOKOMART	篠原ユキオ	281-284
新連載 アダルトグッズ OL 日記(1)	楊 梓(ヨウ シ)	285-287
新連載 キャリアと文化の心理学	土元 哲平	288-303
新連載 フランスのソーシャルワーク	安發 明子	304-326
編集後記	編集長&編集員	327-328

ハチドリの器 25

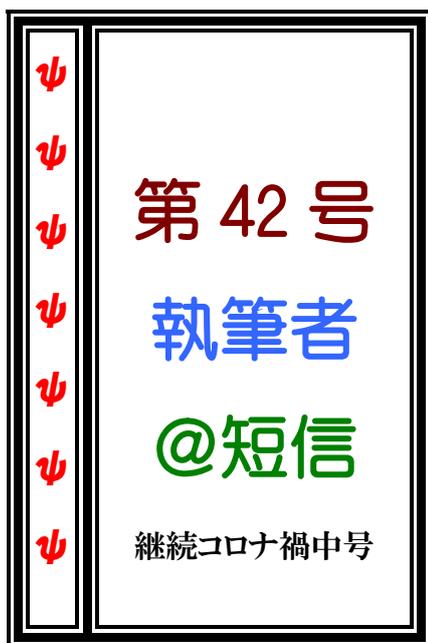
見野 大介

Mino Daisuke



上：樫灰釉波紋丸皿
中：蒼天釉菓子鉢
下：鳩羽釉デザートカップ





楊 梓(ヨウ シ) 新連載



今年3月からかぎ編みを始めました。最初は小さな丸や星しかできなかったです。それでも、「すごいね」と褒めてくれたことで、どんどん難しいことに挑戦するようになります。やはり子どもでも大人でも褒めることが伸びることにつながるのを改めて実感しました。

自分にとって、とても良いフロー体験ができて、楽しかったです。コロナであまり外出できない今こそ、おすすめします。



アダルトグッズOL日記 P285~

土元 哲平 新連載

はじめまして。今号から連載させて頂くこととなりました、土元哲平です。キャリア心理学と文化心理学が専門。学部時代には理学部で人工衛星の研究をしていまし

た。博士論文では、自分のキャリア支援・被支援経験について研究しました。理系から文系へ、右往左往し他者に支えられながらキャリアを歩んできたこと、その中でどんなキャリア支援が重要だったのかを理解したいと思ったからです。このライフストーリーについては、博士論文(近々出版)、今回の連載でも触れています。

私自身、マジシャンとしての活動を8年間続けています(マジシャンてっぺー)。京都・大阪を中心に活動し、300以上ステージ出演をしています。去年はラジオにも出演させていただきました。新型コロナの影響で、ご依頼が少なくなり、場合によってはお断りすることもあり…大変ですが、ゆっくりと再開に向けて頑張りたいと思います。ちなみに、演技はこんな感じです。

ステージマジック in 姫路

<https://youtu.be/g9pBdgqbwZY>

趣味はマジック、コーヒーを飲む、レザークラフト、盆栽、文鳥・メダカを育てること…など。趣味の世界を知ること、新しいことばに会ったり、身近なものを別の視点で見れるようになることが楽しみで、色々なことに手を伸ばしています。盆栽は最近始めた趣味で、真柏、檜、五葉松を育てています。京都にある盆栽園が、すごく素敵な場所で、店員さんも親切でした。「この枝を伸ばしたいから…」などとじっくり考えながら木と向き合っています。普段と違う時間の流れ方を味わい深く感じています。盆栽をはじめ、これまで気にも留めていなかった道ばたの庭木や鉢植えが、生き生きと輝いて見えるようになりました。

ここ数日は、引っ越し作業をしていました。研究の本が多くなり、手狭になってしまったのです。引っ越しは作業員の方に手伝ってもらいましたが、とはいえ骨が折れる作業でした。翌日は全身筋肉痛でした。

facebook もやっていますので、もし私のことについてご関心がおありの方は、お気軽にご連絡ください!

キャリアと文化の心理学 P288~

安發明子 新連載

首都圏で大学時代(2000~)児童自立支援施設で学習ボランティアをしながら全国

各地の児童福祉関連施設や少年院を訪問、その後スイスの施設にも通い、北海道家庭学校とスイスの施設で暮らす子どもたちから見た自分の人生、自分の未来への気持ち、制度が違えば人生も変わるという現実についてルポルタージュ『親子』を書きました。

大人の暮らしも知りたくて生活保護の窓口でも働きました。2011年からはフランスにいます。児童養護施設、親への支援、不登校支援とテーマを決めて数週間から数年かけて現場に通い、フランスの対人援助を学ぼうとしています。

民間団体がメインで活動しているフランス、熱いプロフェッショナルたちがしのぎを削り、エネルギーと希望に満ちた大好きなフィールドです。フランスの対人援助についてここで紹介していけることを楽しみにしています。

フランスのソーシャルワーク P304~

玉村 文 連載第2回

前号から連載させてもらっています。前号が対人援助学マガジンに掲載されてから、そこで事例を取り上げた Yさんとより親密な関係になったように感じています。それは、「あなたのことを書きたいと思う」と伝えたことで、より深く語っていただけからだと思っています。マガジンを書くことを後押ししていただきました。この調子でマガジン原稿を書き続ければ、そこに登場する人たちから「応援」してもらえるのでは、と期待しています。

応援 母ちゃん!(1) P276~

川畑 隆 連載第2回

もう「かけだ詩⑥」まで書きましたよ。けっこう書けるもので、テーマが思い浮かんだら机の前に貼った「かけだ詩・題材集」にメモしています。

仕事のほうは児童福祉ケースを関係者のみなさんと一緒に検討する機会が少しずつ入ってきていて、頭の中が錆びついていないかなというのが若干心配だったのですが、そんなことはない、わりとよく整理ができてると自分で思えます。そしてそれで元気が湧いて出てきます。

大学の元同僚から「あんたはホンマエ

え時に大学やめたなあ」と言われ、私も「ホンマにそうやで」と思います。オンライン授業の大変さと、まだ動きはとれないでしょうけど公認心理師の実習関係のことなどは、「ご苦労さま」としか言いようがありません。

「かけだ詩⑥」に収めましたが、家の「洗濯機」が新しくなりました。それと同時に窓をふさいでいた乾燥機もお払い箱になって、そのスペースがいっぺんに明るくなりました。灯りが点いていると思って消そうとするくらいで、そこだけ新築の家に住み始めたようです。さて、コーヒーでも飲んで「かけだ詩⑦」にとりかかりましょうか。木曜日の午前です。

「かけだ詩 ②」

P267～

天川 浩 連載第2回

提出一週間前に自宅のパソコンがクラッシュして初期化するという事態が発生しました。バックアップなどを取らない性分なので今までの全てのダウンロードしたりデータが吹っ飛びました。正直爆笑しかありませんでした。ロールアウト時にインストールされていたソフト以外はすべてが消えていきました。

もちろん 6 月中には出来上がっていた第 2 回の投稿もどこか彼方に飛んで行きました。笑うしかありません。

その代わり、スマホ版のワードをダウンロードしたり、音声認識ツールアプリを使用したりまた新たな便利ツールを手に入れることができました。怪我の功名というものかもしれませんが、そういうことでもない新しいことを始めるということができないことが多いので、大変良い経験をさせていただきました。

皆さんもパソコンのバックアップはとて重要だと思いますので取っておいた方がいいと思いますよ。

ブルーグレーの肖像

P272～

篠原ユキオ 連載第2回

コロナ禍の自粛生活をどう過ごすかがその後の生活にはっきりとしたカタチとなって現われると思ってひたすら作品づくりに没頭してきた。5月に思いついて始め

た100日連続で新作の一コマ漫画を描き続けるという目標はお盆に無事に達成した。世の中はまだまだ手探りの状況が続いているが、焦る事なくどれもプラスに考えて毎日をマイペースで過ごさせているのは定年後の独り身の自由な生活のお陰だと思う。(篠原ユキオ)



HITOKOMART

P281～

原田 希

私事ですが、両親ともに早く亡くなったので、私たち姉弟の面倒をみてくれたのは祖母でした。この春までなんでもひとりでやってきた祖母も 97 歳になり、体調を崩し入院。大阪の実家に帰ると、仏壇は花もお供えもなくがらんとして留守のようでした。実家には弟夫婦が居てくれるものの、休めない仕事、コロナ、育児、思いどおりにいかない日々に、ひずみが出始めていて、仏壇まで手が回らなかった様子。仏壇のことも祖母まかせにしている、すまない気持ちになりましたが、生きている人たちの一大事が最優先なのも確か。仏さんは皆、祖母のいる病院へ出掛けていて、そばについていてくれると思うことにしました。そのおかげか、危ない時期を乗り越え間もなく退院できそうです。自宅介護が始まります。今度は私が祖母に恩を返していく時です。

原田牧場 Note

p265～

工藤 芳幸

今号は諸般の事情で「みちくさ言語療法」を休載いたします。申し訳ございません。

私の勤務先の言語聴覚学専攻では新型コロナウイルスの影響で春学期の臨床実習が中止。各地の医療機関で受入れが困難な

状況では致し方ないことでした。この状況の打開策として、臨床実習に代わる学内演習を新たに準備し、実施してきました。前例のないことです。渦中にあった学生たちは残念な思いだったことでしょう。全く同じことは提供できないとしても、臨床的な実践につながり、かつ敢えてこの状況だからこそできる学びを模索しました。検討の結果、全学生が全ての領域(失語・高次脳、発声発語・嚥下障害、聴覚障害、小児発達障害)で1週間ずつ、ペーパーペシエントやケースの映像を用いたケース検討を実施することになりました。私の領域(発達)では、言語発達検査の実施場面を見せて各自に検討してもらい、毎週のように小グループで Teams を用いたディスカッションをしました。学生がどこまで考えを深めて取り組めるか、リアルタイムの接続が上手くいくか…など、不安要素が多かったのですが、結果的には普段以上に1人1人の言葉や思考を辿ることができたように思います。果たして学生にとってはどんな体験だったのか、顔を合わせたときに聞いてみたいですが、同業者(ST)にこの話をすると「うらやましい」「いいなあ」という声を複数聞きました。かつて学生だったときに教員とじっくり膝を突き合わせてケース検討できる機会がほとんどなかったそうです。イレギュラーな対応でしたが、通常のスケジュールでは不可能なことに取り組んだ意味は大きかったかも知れません。リアルタイムのオンライン授業は少人数のものに限定されたため、大人数の授業では来る日も来る日も題提出へのコメントや添削、オンデマンド配信の授業も試みました。対面での授業の意味、学生との向き合い方、伝える内容や方法を考えさせられた時間でした。

みちくさ言語療法

休載

高名祐美

5月23日、里帰りしていた次女が無事に男児を出産いたしました。私は陣痛が起きた次女を深夜に病院に連れて行っただけで、コロナ禍で分娩に立ち会うことはできませんでした。次女の夫は、病院での面会も許されませんでした。我が家には

初めての男の孫。日々の成長を楽しんでいましたが、お盆には兵庫県に帰ってきました。当初、夏休みを取ってしばらく兵庫県にいくつもりをしていましたが、これもコロナでかないませんでした。しばらくは会うことが許されません。予定していることが次々と取りやめになる日常です。そうすると、何をすることもモチベーションが下がってしまいます。こんな時だからこそ、できることもあると思いなおすのですが、なかなか意欲向上できない私です。すっかり怠けてしまっています。

1年前に初投稿し今回5回目の投稿となりました。3か月に一度の締め切りが、すぐに来てしまいます。「MSWという仕事」の魅力や、事例を通して伝えたいと思って書いています。実践事例からバイステックを再考したいと思っていますが、なかなか筆がすすみません。今回は、「非審判的態度」について考えてみました。援助期間の長短に関わらず、印象深い事例を振り返ってこうと思います。

MSWという仕事 P261～

大石仁美

チャドクガから学ぶ

I 万分の I ミリという小さなウイルスが、衣類を通り越して、容易に侵入するということを、可視化してくれる事件が起きました。

気が付くと、なんと椿の葉にチャドクガの幼虫がびっしり並んでいるではありませんか。うじゃうじゃと蠢いて、なんともおぞましい。早速、殺虫剤を購入して散布しました。

長袖シャツにマスク、帽子に首巻、手には使い捨てのポリエチレンの手袋といういで立ち。

ところが終わった後、腕に強烈な痒みを生じ、慌てて服を脱いだところ、前腕部が発赤し、熱を持っていたのです。

慌てて患部を石鹸で洗い流し、氷で冷やし、副腎皮質入りのかゆみ止め軟膏を塗布しました。しかし、一日たっても痒みは収まらず、時間を経るごとに次々と新しい発疹が出現しました。前腕から上腕にかけて、さらにわずかながら胸部にも。「抜かった！ 甘く見すぎた!!」

チャドクガは断末魔の苦しみから、毛をまき散らして死んでいったのです。その粒子は、布など簡単に通すのですね。なんと怖ろしい！ 実は、ゴミ袋を使ってコロナウイルス用の防御ガウンを仲間と作っていたのですが、この時もそれを着るべきでした。

ウイルスはもっと小さいのですから、油断すると簡単に感染してしまうということをも身をもって実感した出来事でした。コロナウイルス侮るなかれ！

病児保育奮闘記 P168～

岡田隆介

もともと「聴く」より「喋る」が好きで「書く・描く・読む」は苦手、「精一杯」やっ ても「ほどほど」のフリをし、「競い合い」を避けて「折り合い」って生きてきた。そしていま、「ステイ・ホーム」ではひとり悦にいてパワポにふけり、Facebook や Instagram は眺める程度でメールはいつそう短くなった。これは変わらぬ自分の流儀か、それとも老境に入ったのか、興味深く行く末を眺めている。

エア絵本 -ビジュアル系子ども- 家族の理解と支援(4)- p45～

一宮 茂子

【藤井聡太棋聖(18歳1か月)】

新型コロナウイルス感染症関係の暗いニュースが多い中で、明るいニュースがありました。2020年8月20日に高校生の藤井聡太棋聖(18歳1か月)が木村一基王位と対局し、王位獲得で史上最年少記録二冠を達成したのです。このように記述した私ですが、将棋にかんする詳細はよくわかりません。けれども彼の人間性に深く感銘いたしました。彼は18歳とは思えないほど思慮深く、語彙力が高く、言葉を選んでソフトな口調でインタビューに答えています。その対応を見ていると、謙虚、誠実、爽やかで可愛い若者なのです。背が高く着物姿がよく似合います。対局中の姿は神々しく、普段の姿はおっとりして見えます。このギャップがたまりません。若き天才棋聖はパソコンも自ら組み立てるのだとか。「SHOGI AI」を超える能力があるそうです。福岡で対局した勝負飯は「冷やし能古うどん」、おやつは「マンゴー杏仁プリン」とのこと。私も一度食べてみたいのです。将棋のルールや内容はよくわかりませんが新たな楽しみが増えました。

生体肝移植ドナーをめぐる物語 P241～

松岡 園子

今回は番外編として、私が11歳の時に書いていた日記を紹介しました。

大人になるにつれて、社会に出ていくにつれて、「してはいけない・しなくてはならない」(と思いついでいる)が増えてきます。でも本当にそのことをしてはいけない、また別のあることを本当にしなくてはならないのでしょうか。

子どもの頃に感じた素直な思いや情熱は、この世界に生まれてそれほど年月を経ていない純粋な視点の産物だと感じます。自分の感じたことや常識への疑問を素直に表現し、社会の枠に囚われない発想で自分の世界を形づくっていく。

自由で軽やかに生きる世界がそこにあるような気がします。

統合失調症を患う母とともに 生きる子ども P238～

中條 與子



今号もエッセイを書くことができないと思い、休載させていただくつもりでした。思いがけず書くことができましたので、続きは私のエッセイのページを良かったらご覧ください。どうぞ宜しくお願いいたします。

「盲ろう者」として自分らしく生きる」 p254～

杉江 太郎

児童福祉現場で働く、杉江と言います。突然ですが、半沢直樹が好調のようである。池井戸潤さんの小説はその多くを読了しており、ドラマも見るようにしている。作品は「正義が勝つ」の一言に尽きると思っている。

関谷 啓子

異常ともいえる今年の暑さだが、コロナによる外出自粛と重なり自ずと家にいる時間を見直すこととなった。早々と断捨離した友人あり、保存食作りに精を出した友人ありで、時間の過ごし方にその人の知らない面を見せられる心地がした。

友人が2014年から続けているささや

かな読書会のテキスト目録を作ってくれた。事前に作品を読んで感想を語り合う…と言う定形のやり方も面白いのだが、時々開く「妄想読書会」は新しい発見があり楽しい。なんとなく話は知っているがきちんとは読んでいない作品をテキストにするので自ずと童話が多くなるのだが、今思い出しても「幸福の王子」(オスカー・ワイルド)「マッチ売りの少女」(アンデルセン)はかなり盛り上がった。王子の銅像は何時ごろ建てられたのか？その頃の社会情勢はどうだったのか？マッチ売りの少女は雪の中のような履物を履いていたのか？彼女はマッチをどのようなルートで入手したのか？胴元らしき大人が介在したのか？などなど。作者の生きた時代の妄想もかなり生き生きと話が盛り上がった。最後に原文(子供向けに書き直されていないもの)を一人が朗読して、長かった夢

朴 希沙(Kisa Paku)

暑い夏もようやく終わりが見え始め、9月を迎えるにあたり色々なことが一気に動き出しています。

まず、個人的なところでは初めての出産を迎えます。さらに同じ月に長年の夢であった在日コリアンのためのカウンセリング&コミュニティセンター(ZAC)のオープンを仲間と共に京都にてスタート。

研究にも進展がみられます。新しいことが目白押しで一気にやってくるので、果たしてやっていけるのか?!という不安はありつつも、これから始まる新しい物語にわくわくしています。

マイクロアグレッションと私たち

P227～

浅田 英輔

青森市の中心部では、春以降、気温が上がってくると笛や太鼓の練習の音が聞こえ、7月末から棧敷席が組み上げられるなど、街全体が8月初めのねぶた祭にむかっていく。祭期間中、県庁の人は、即帰るか9時過ぎに帰るかしかなくなる。例年、ねぶた祭りには200万人が訪れるそうだ。それが、今年はない。ねぶた祭に熱心なほうではないけれど、さみしいもんだなあ。

臨床のきれはし

P113～

三浦 恵子

コロナ禍の現状下、分断と社会的排除の空気が広がっているのではと感じる場面が少なくないことと、執筆者・読者諸兄も感じておられるのではないのでしょうか。

ただ、こうした状況下においても、より厳しい生活を強いられている人々や弱い立場に置かれている人々の存在を忘れず、気持ちを寄せ、あるいは志を同じくする人々とつながりあってこうした人々を守ろうとする人々の存在に勇気づけられる場面が、業務やボランティア活動でのつながりの中で少なからずありました。社会を支えるのは、そうしたつながりや共感だと再認識している昨今です。

更生保護観官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

そしてその作品に触れるたびに、私自身が、金融機関で働いていたこと、そして行内の監査や金融庁の聞き取りを受けたことなど思い出し、金融庁の監査を経験した児童福祉司であることを、なんとなく自慢したくなる。(うらやましくはないか)金融機関で働き、様々な職種を知れたことはこの仕事に多いに役に立っている。このマガジンでも様々な職種の方のナマのお話に触れることが出来る。無知は罪であることを自覚しながら情報を取り入れる毎日である。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-

P235～

迫 共

今回書かせて頂いた『ひだまり保育園おとな組』にはゲイの保育士が登場します。私は保育園長の職を経て保育者養成校の教員をしていますが、その昔、LGBT当事者の生きづらさについて調べていたという変わり種。保育現場ではジェンダーやセクシュアリティに関する話題がほとんど通じず、苦労しました。

先日、ネット調査で最初の質問が「あなたの性別(性自認)を教えてください(必須項目)」というものを見ました。時代は変わったものですが、違和感も。

性差でのフィルタリングを「性自認」にするだけでLGBT配慮だと考えているのであれば、その認識は違うと思います。

「性自認」は個人の内面のことなので、他人から踏み込んで質問されるべきものではないからです。たとえば「生まれ持った性別に適應して社会生活を送っているが、性自認としては違う」という場合など、「答えたくない」と思う人が出ておかしくありません。LGBTに配慮しているように見えて、正反対のことになりかねないので。

『ひだまり保育園おとな組』では、保育士が子どもたちに性自認を聞く場面がありますが、男女以外の答えも用意しているところがいいなと思いました。男女でのグループ分けが当たり前のようにされる中、違和感を言語化しづらい子どもたちが、居心地を悪くしない配慮がほしいものです。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P231～

が覚める・・・という趣向である。

「罪と罰を読まない会」という本に出会って真似したのだが、「罪と罰・・・」の参加者の豊富な知識とこちらのでは雲泥の差はあるものの、なかなか刺激的な半日ではありました。もしよければ、皆さんも試してみませんか。

休載

私の出会った人々

黒田 長宏

マイナンバーカードからの特別定額給付金支給の方法で、私もパスワードをどこに控えておいたかで危ないところだった。役所まで行った人のニュースが流れたが、私は思い出して特別定額給付金までオンラインで通過したため、5月中には通帳にいただいたと思う。国内でもかなり早い方だったのではないかな。

今回の新型コロナの経済政策で一番かつ唯一の成功はこの給付方法だけではないかと思う。しかも最初は一部の従来は経済的に有利になっていた、そしてコロナ騒動が終わればお金は貰える立場の人たちへの支給でやる予定だったのだが、国民の反対で全体支給になったのだった。

その後はまた一部の業界ばかりにおもねたために混乱続きだが、特別定額給付金を繰り返せばシンプルなのにと、有識者懇談会には出られる立場ではないので此処に書いておく。

そして、今度はマイナポイントという、多分最大5000円分貰えるような国の対人援助の申し込みをし始めた。

ところが、スマホからすぐに申請できると思ったら、スマホが古くて該当してなくて、そこで詰まった。ネットで調べるとパソコンから『マイキープラットフォーム』というサイトから予約できるらしかった。

そこでも、某前払いカードだとある点で詰まり、某後払いカードでは某暗証番号まで到達するのに少々とまどり、それ以前にカードリーダーがなかなかマイナンバーカードを読み取らず、繰り返し抜き差ししたりと1時間くらいかかってしまったか。それでも予約が完了した。

しかし何事も壁が現れるような仕組み

にしてあるのは、なりすまし予防にはいいのかも知れないが、本当は援助したくないからなのではないか。などと陰謀を予想してしまうが、そうではないのだろう。

出来る人はそもそも最新のスマホに乗り換え続けているはずだろう。だがこうした末端ユーザーとしての個人的試行錯誤において、良い道具や装置で簡単に通過してしまう人との違いから何か思考できる大事なことがあるようにも思う。だが、それが何かはわからないままだ。

これではお年寄りや機械が苦手な人は結局申請は郵送になるだろう。知識を理解できる人とできない人との差が人生の差になってしまう構造が現代だと思わされる。生まれてこの方ずっとそうだったのだけれど。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P202~

山下桂永子

町家合宿を始めてから今年で14年経ち、昨年と今年は諸事情で開催することができませんでした。だからというだけでもないのですが、町家合宿 in 京都のお話は前回まででいったんおしまいとさせていただきます。町家合宿自体をやめるつもりではないので、また何かの機会がございましたら、お会いした時にでも話を聞いてやってください。これまでの拙い連載をお読みいただきありがとうございました。団先生から「で、次はどうするんや？」というお言葉をいただき次は新しいテーマで書こうと思っています。

さて最近の話です。扱いが悪いのか、同じものばかり履かせいか、靴は結構履きつぶすタイプです。職場での上履きもしかり。気に入って買った1年もたないと結構悲しく、だからといって適当に買ったそれなりに履きなれてくれば、薄汚れて破れていく様はやはり悲しい。試行錯誤の末、行きついた結果がこのような仕様となりました。そう。学校のうわぐつです。この一切の無駄がなく、汚れても破れても味のでるデザイン、指一本で着脱可能、くつべら？いらんそんなもん。場所を選ばず追いかけるも逃げるも瞬時にトップスピードまで持っていける機能性、全てが完璧。

もうこれしかない。履いてみてとてもしっくり。私、教育現場にいるんだなあとしみじみ思いました。

次回からは教育現場の心理職のお話を書かせて頂く予定です。教育系でこんな仕事もあるんだなあとお読みいただければ幸いです。



尾上明代

8月の酷暑の中、近所の道端で蟬の抜け殻がよろよろ歩いている光景が目にとまった。思わず二度見すると、それは抜け殻ではなく「中身」が入ったもの—幼虫であった。それまで私は成虫か抜け殻しか見たことがなく、生まれて初めての出会いだったが、そのような姿を(しかも真昼間に)人間にさらすとは、尋常ではない事態なのだったと思った。何年も地中でこのときを待って、やっと出てきたら目が眩むような高温で、一度も鳴くこともなくアスファルトの熱で焼死するか車にひかれてしまうのは気の毒すぎる。近くの木まで送ってあげることにした。直接触る勇気がないので持っていた袋に乗せて、木の根元に行って背伸びしたとき私がぐらついてしまい、落っこしてしまったり、いろいろ格闘して何とかその木につかまらせてあげることができた。

ふらふらしていたところを見ると、きっと喉が渇いているに違いないと、人間的な発想で急いで家に帰って水を持っていき、やっとの思いで木につかまっている幼虫に、水を少しだけかけてみた。「水分とらないと熱中症で死んじゃうから、飲んでね」という気持ちで。すると彼は、天敵でも降ってきたかと思えるような態度(?)で、キャッ!(もちろん声を出したわけではない)と動いて水を避け、一生懸命に一歩一歩、すべらないように注意しながら木の肌に

足をひっかけひっかけ、ゆっくりと上へ上へと登っていった。もともとあんなに熱いアスファルトでハアハアしていたので心配だったが、見えなくなるところまで到達した様子だったので一安心して帰宅した。

彼がめでたく成虫になれたかどうかは、わからない。後日、近所で鳴く蟬の声を、彼(彼女?)だといいなと思いつつ聞き入った。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P87～

松村奈奈子

コロナコロナの毎日。

京都の真ん中で生活しています。2～3年程前から近隣の古いビルが次々と壊されて新しいホテル建築の工事が始まる・・・という光景を目にします。お気に入りのイタリア料理店も古いビルから追い出されてしまいました。コロナ禍で建築が止まるかという、とりえず完成まではいくようで、近くのコンビニは建築現場のお兄さん達で賑わっています。ホテルは続々と完成していきますが、玄関には「開店延期のお知らせ」が貼られています。夜のお散歩で、料理店のあった場所にできた電灯の灯らないホテルを見ると、いろいろと考えてしまう今日この頃です。

精神科医の思うこと
P174～

鷓野祐介

コロナ禍に酷暑と、今年の夏はたいへんでしたが、それでもツクツクボウシの鳴く声に、心が澄んでいくのを感じる今日この頃です。

うたとかたりの対人援助学
P198～

柳 たかを

子供の頃、僕はせっかちだった。5ミリ角の細長い角材を胴体にし、翼の骨組みの竹ヒゴをロウソクの炎であぶってU字型に曲げる。そうやって主翼・水平尾翼・垂直尾翼を作り、胴体の角材の所定の位置にキリで穴をあけ飛行機の形になるよう各翼の竹ヒゴを組み立てていく。模型飛行機キットの袋には障子紙に似た薄紙も入っているので障子の木枠に障子紙を貼っていく要領で刷毛で糊を翼の竹ヒ

ゴに塗り、薄紙を破らないよう慎重に貼っていく。公園でゴム動力の模型飛行機が悠然と飛翔するのを見て魅了された。ゴム動力だがプロペラ機なのでは平らな地面があれば滑走して揚力を生み出し、フワリと浮き上がりそのまま離陸上昇し飛行できる。紙で折った折り紙飛行機の飛行とは浮揚感の醍醐味に雲泥の差がある。ただ小さな子供が障子貼りの慎重さとロウソクの炎で竹ヒゴを焦がさないよう微調節して完成させるのは至難のことだった。長兄は、作業を少しずつ積み重ね数日かけてあせらず作品やモノを完成させるのが得意だった。建築士だった次兄も複雑な製図を何日もかけて完成させる根気があった。2人の兄は、ともに模型飛行機作りは得意だった。次兄は自分好みのオリジナル塗装など工夫し遊び心のある機体に仕上げた。一昨年に次兄が逝き(76歳)、今年3月、長兄が腎不全で人工透析が欠かせない身体となった。週に3回病院に通い3～4時間かけて透析を受ける。腕にシャントという動脈と静脈をつなぐ手術を受けた3月、病室に見舞いに行った。マスクをしての短い面会「もう歳やからな」と80歳の兄、「うん、まあジタバタしてもしやあないか、、、」と私、そんな季節(歳)になったのかと思う。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ
P179～

小林茂

昨年度は、大学教員1年目ということで慌ただしく過ごし、今年度はというところと新型コロナウィルス騒動があり、一カ月遅れで前期の授業が始まりました。それも今まで利用したこともない遠隔授業を大学指定のソフトを駆使して行うようになりました。ようやく前期も終わることになるのですが、ここでも“安定した”“ふつうの”日常と縁がない自分の歩みを実感しております。なかなか鍛えられる思いをしております。

ところで、最近、この『対人援助学マガジン』の自分の活用の仕方を考え直さないといけないと思うことがある。もともとは、支援で感じた雑感を徒然なるままに研究ノートのように残す位置づけであったが、やはりテーマを明確にした方が良いのではないかと考えるようになった。どこかの段階でリニューアルをしようと思う。

対人支援 点描
P170～

中島弘美

対人援助学会の会員には、立命館大学、大学院の関係者の方が多くおられます。

私は、産業社会学部で授業を担当させていただいています。「人間コミュニケーション論」です。受講学生さんは四回生以上の人も多いです。

学生さんたちは卒業後、研修会や勉強会で学びたいと考える人はどれくらいいるでしょうか？学会に関心がある人はどうでしょうか？もしかして、年次大会に参加してみたいと思う人は少しでもいるのでしょうか？

10月からスタートする秋学期の授業で、学部生と学会がどうしたらつながるのか考えながら、案内をしていきたいと思っています！

カウンセリングのお作法
P36～

藤 信子

蝉、特に蝿が鳴くと、夏が行くのに出来ていないことがあるような気分、これまではなっていたけれど、今年は何かに追われる思いもなく、単に「夏が行くなあ・・・」と季節を味わう感じだった。

ただ、8月が終わろうという今になって、毎年長崎に帰っていたのができなかったことが実感され、夏の大事な行事が無くなったので、一夏損したような気もしてきた。

4月以来、こんなに家に籠っていて良いのだろうかとは、あまり思わずに過ごしていた。本当は出かけたくない、ものぐさな性格だったのだと確認していた。それなのに、一夏損したような気分になるのは、やはり夏には何か動きたくるようにさせるものがあるのかもしれない、と思っている。

集団精神療法について
P42～

団遊

8月12日に母が亡くなった。胃癌だった。コロナ禍のゴールデンウィークに、痛みに耐えきれず病院に行き病気が発覚、そこ

からわずか3カ月で天に召された。

現実を受け止めてはいるが、一方で未だに信じられない気持ちもある。今回短信を書くにあたり、これまで書いてきたものを見返していると、19年の5月、病気が発覚する1年前のゴールウィークには、団家揃って、琵琶湖疎水クルーズをしていた。さらに1年前の18年5月には、父の教授職退官お疲れ様会を、これまた団家揃って催していた。いずれの会においても、母はとても元気だった。

しかし、ドクターによると、少なくとも1年前には癌はそこそこの大きさであったろうという。あの時、1年後にこんなことになるうとは、思いもしなかった。ただ、不思議に思うこともある。

20年のお正月、実家で母と話した際に、なんとなく聞いておかないといけない気がして、厚労省のガイドラインに沿って、介護や看取りに関するヒアリングをした。その時は、「毎年正月に聞くから、更新していこう」と話したのだが、結局その書面が更新されることはなく、記載された事項が、8月のその時に、少し役に立ったりした。

様態が急変したのは8月11日の夕方なのだが、前々日の9日と、前日の10日、いつものび太のように即寝・グッスリ型の自分が、いつまでも寝付けず、眠れても夜中に何度も目が覚めてしまい、そのことを「歳かなあ」などと妻に喋っていた。因果は証明できないが、それでもどこかで「もしかしたら」などと思う。

「こんなことになるのなら……」、大切な人の死に際し、そんな風に思うこともあるのだと思うが、不思議と母に対して、そんな風に思うことはほとんど何もない。母は本当に良くしてくれた。私が幸せでいることが、何よりの親孝行なのだ、心から思わせてくれた。これを母の愛と言わずして、何と言おうか。

**人を育てる会社の社長が、
今考えていること**
P33~

村本邦子

この夏はバルト三国に行こうと企てていたのに、無理になって、珍しく仕事に邁進している。チェルノブイリのミュージアムについてまとめようとしているが、勉強するなかで、いろいろなことを学んでいる。とく

に、ティモシー・スナイダーの『ブラッドランド』(筑摩書房)は衝撃的だ。ブラッドランドとは、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランド、バルト三国で、1933年から1945年の間に、ナチスとスターリンによって、1400万人が虐殺されたというのである。一昨年は、ナチスと旧東ドイツ関連の地を巡ったのだけど、旧ソ連下を生き抜いた人々にすごく惹かれるし、もっと知りたいと思う。これまで断片的には映画で見知ってきたような気がするけど、全体像がもうひとつつかめないでいたものが、少しずつ明らかになる感じ。世界はますます狂っていくけれど、そんななかで正気を保つ人々の可能性を見つけない。

周辺からの記憶 一東日本大震災

家族応援プロジェクト(22)
P144~

國友万裕

久しぶりにスポーツクラブで30分ほどウォーキングした。しばらくやっていなかったの、目一杯緩いペースで歩いた。その後お風呂に入った家に帰った。これくらいは平気だと思っていたら、次の日の体が痛いなんのって!!!

早速マッサージの人に来てもらった。やはり歳なのだ。「30分であつてもいきなりだとしんどいんですよ。15分くらいから始めればいいんですよ」とマッサージの人からは言われた。最低でもあと10年から15年は仕事をしなくてはならないので、体力は保っておかなくてはならない。これから少しずつ体力を取り戻さなくては!と思っている。

思えば、同じようなことばかり連載に書いて、いよいよ10年近くの日々が過ぎようしている。でも確実に老けてはいるんだなあ!

今一番イライラしているのは、コロナのせいでアメリカ映画の公開や製作が遅れていて、見たい映画がないこと笑。こんなのが悩みなんだから幸せな初老のおじさんです笑笑

男は痛い!
P100~

古川秀明

新型コロナウイルスの影響で令和2年2月以降の講演会&ライブはすべて中止の状態なので、5月に引き続き、今回もいつもの「講演会&ライブな日々」ではありません。いったいいつになれば講演会&ライブな日々が再開されるのでしょうか…。

講演会&ライブな日々
P121~

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。その他社会福祉士養成などにもちよつと携わらせていただいています。

職場の短大は引き続きコロナ対応。出来るだけの感染症対策をとつたうえで、実習もスタート。こんな時だというのに、実習先様の多くは、実習生の受け入れをものすごく前向きに考えてくださいます。

保護者の方全員に文書を出して実習生を受け入れる意義を伝えてくださる園。半年以上先の実習について、今のうちから、どのように対応しようかと一緒に計画を立ててくださる施設。

大学のためにお手数かけてすみません、などと遠慮しているヒマはありません。「どうしたらしっかり勉強してもらえるかな」「どうしたらいい先輩を現場に送り出せるかな」と頭を寄せて、うんうんいいながら、実習という教育環境を作り上げている感じ。「大学はこうしますね!」「オッケー、じゃあ園ではこうするね!」と、意図せず強力な共同体制が整っていきます。まさにピンチはチャンス。これを非常時の気分だけに終わらせずに、継続的な連携に育てることが、ここからの課題です。

福祉系対人援助職養成の現場から
p73~

坂口伊都

コロナ渦中で、なかなか友人とも気軽に会えない中、短大時代の友達からオンラインお茶会のお誘いを受けました。今までは考えもつかなかった事ですが、オンラインだと離れていても気軽に会えます。そ

れこそ 30 年ぶりぐらいに話をしました。短大を卒業した後、社会人入試で大学生になり院に行ったので、短大時代のことを思い出そうとすると、頭の奥の方の記録を手繰り寄せる感じでした。亡くなっている友達もいます。疎遠になっていた友人と、こうして自宅にいながらまた話をする日が来るなんて感慨深いものがあります。

友人の呼びあひ方は、当時のままで旧姓も飛び交っていました。私は、だいたい伊都ちゃんと呼ばれているので苗字が変わっていてもあまり影響がありません。自分では、長い年月で変わったと思っていたのですが、「伊都ちゃん変わらないね」と声を揃えて言われ、そうなんだと意外に感じました。どの辺りが変わらないのでしょうか、私にはピンときていません。でも、こうして皆と再会できるのは、世話役がいるから実現できるのですよね。遠く離れた場所に行って、同窓会にも行っていなかった私を忘れずにいてくれて、声をかけてくれる友人に感謝です。

家族と家族幻想

P139～

河岸由里子(臨床心理士)

【心のよりどころ】

コロナの影響で、多くの方が不安に襲われ、ストレスを抱え、不調になっている。相談に訪れる方も増えた。

古来より、疫病が流行ったり、不作や天災が続いたりすると、人々は必ず神や仏にすがった。神社仏閣を建て、精進することでご利益をいただき、今の困難を乗り越えられると思って、手を合わせてきた。人智を超えた問題に対して、人は為す術を持たない。だからと言って無かったことにもできない。信心深いわけではなくても、「困った時の神頼み」で神社に願かけに行ったり、厄除けに行ったりする人は科学が発達した現代でも多い。人の心のよりどころとして、今も神社仏閣がある。

ところが今回のコロナ騒ぎで、多くのお寺さんがその門を閉めた。私の友人に、お寺の和尚さんがいる。彼は、かなり高位の和尚さんだが、このことに対しても怒っていた。築地本願寺では、法事をオンラインで行っているとテレビでその様子を放映していた。オンラインでの相談は、私の相談室でも行っているの、否定はしない。

しかし、対面であっても、きちんと予防しながら、三蜜を防げば、クラスターが発生する可能性は低い。どんなことも100%はあり得ないのだから、そこまで恐れてお寺の門を閉め、門下さんを締め出すことが本当に必要なのだろうか？

不安に駆られたときは何かよりどころが欲しいものである。それが薬物や、ギャンブルやお酒ではなく、信心である方が、なほか健康的ではなからうか。仏像を眺めてお経をあげ、神社で手を叩いてお祈りするくらいのことで、安心できるのであれば、誰もがそれを出来るようにしてあげればと思う。

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P79～

先人の知恵から

P194～

岡崎正明

7月に人生2回目の手術をした。全身麻酔である。命に関わるようなものではないが、それでも万が一のことがないとは誰にも言えない。自分が亡き後のことを考えて少し準備したり、貴重な体験だった。手術はおかげさまで大成功で順調なのだが、それでも術後数日いくつかの管で繋がれていたときは正直しんどく、あつという間に弱音を吐いていた。逃げ出したい、誰かに助けて欲しい…。他人を気安く励ましていた自分が何も分かっていなかったことに気付いた。改めて自分のヘタレぶりを痛感するとともに、次第に回復してくると現金なもんでアレコレ余計なことをしたり、エラそうなことを考えたりする。単純というか分かりやすいというか。半分呆れて、半分笑ってしまった。

よく「自分を信じて」「自己肯定感が大事」などというが、私はあまりピンとこない。自分は正直疑わしくてフラフラしてて信用ならない存在なのだ。それでもいじらしいというか、放っておけないというか。どっちかという、出来の悪い息子を持ったようなというのが、偽らざる感覚だ。

入院をきっかけに出会った人や本があり、結果的に良かったと思う面もあれば、2度としたくないような経験もありで。それもこれも含めて、自分の人生に起こることを今後とも面白がっていければと思う。

役場の対人援助論

P107～

大谷多加志

今年の4月から、新型コロナの感染拡大とともに始まった新生活。いまだ、これまでの日常は戻らず、オンライン会議やオンライン研修など、新しい展開もあちこちにみられる中で日々を過ごしています。オンライン授業では、Web カメラの不調により私だけ画面が固まって声も届かなくなるという事態が生じ(PCは無事なので、学生たちの声は聞こえる)、「…先生!?…先生!」「固まっている!」と騒めく学生さんたちを前に、「聞こえてるよ!」「ちょっと待って!」と届くことのない声をあげながら、復旧に四苦八苦するという経験もしました(“突然死した自分を、幽体離脱して見ている自分”を疑似体験しました)。

まだ色々な業務が止まっていて、若干の余裕があるからかもしれませんが、目の前にある仕事をひとつひとつ丁寧に上げていこうと心がけている自分に気がきました。ひとつひとつの仕事と誠実に向き合えるのはとても気持ちがよく、うまくいったこともそうでなかったことも、丁寧に振り返り、気持ちも収めてから次の仕事に向かえています。

コロナによって失われたものがある一方で、否応なく変化が求められた日常の中で新しく体験することも様々あって、その中にはもちろん、プラスのものも多く含まれていました。まだまだコロナの終息が見通せない中、相変わらず不安だけではありませんが、今だからこそその自由さを満喫してみようと思っています。

対人援助学と発達検査

P116～

馬渡徳子

七月第一週に、実家が三度目の水害に遭った。前回、家屋をかさ上げしていたので、被害は、庭と果樹園と畑とお墓に留まった。

同じく県外に暮らす弟と、日時を合わせて帰省した。片付けと今後の対応策を講じる目的だった。

このような時期にてと、母が固く訪問を拒んだことから、行政担当者さんとは、オ

ンライン上で懇談し、対応策を助言頂くこととなった。

担当の方が、「他に、何か気掛かりなことは、ありますか?」と訊ねて下さり、母は「来月は、お盆なので、一番心配なのは、お墓です。あっ、でもそれはあなた方の担当ではないですね。」と応えた。

第二人と顔を合わせて、「私有地の山の中腹にある、母の実家のお墓のことだな」と気づき、それから車で現地に向かった。

現地は、六月から三度続いた大雨で、泥や木くず等で、酷く荒れていた。

皆で、片付けとお参りをした帰り道に母から「ああ。スッキリした。ありがとう。今、ご先祖様にも伝えたいけれど、今回三度目の被害に遭ったことで、思い切って、ケアマネジャーさんから紹介してもらった書式で、エンディングノートを書いた。姉弟皆んな揃っているの、私の意思を確認して欲しい。頼んだよ。」と言われた。

それは、母らしい達筆な毛筆で、丁寧に、何故そのように実行して欲しいのか、その根拠も記載がされていた。

弟たちと、「人生これからは、どんなことが待ち受けているかわからないけれど、ここに書かれている母の意向を必ず通そうね」と母に誓った。

馬渡の眼
P177~

団士郎

わが家の緊急事態(2)

前号短信から三ヶ月経った。たいていの人にはことさら数える月日でもない。しかし私には、カウントダウンの刻々と進む日々だった。

GW中の妻の緊急入院から退院後、点滴抗がん剤治療に入って、三週間毎の通院に同行した。時には、診察を受けたところで発熱のため、点滴が延期になり、一日かけて何の治療もなく帰宅する日があった。そんな時は患者のみならず、私にも疲れがどっと出た。

余命一年と厳しいことを言われていたが食欲もあり、体重も復活してきていた。食べられそうなものを見繕って買って帰り、服薬時間に合わせて夕飯をとらせるのが私の日課になっていた。

なんか、大丈夫そうじゃないか、なんて楽観的期待が2人ともにあった気がする。

そんな矢先、3ヶ月目の7月31日夕刻、病気が牙をむいた。

私の帰宅早々、吐血で意識を失って倒れたのだ。大量下血もあった。大慌てで病院の指示を仰ぎ、救急車に初めて同乗した。

ER前の待合室ソファで、喧噪の中で救急対応を受けるのを待ち、その後、医師の説明を受けた。輸血や手術の承諾書にサインをして、万一も覚悟しておいてくれと言われ、止血のための内視鏡手術に向かうのを見送った。

結果、最悪の事態は回避でき、再度入院になった。だが、今後については在宅看護かホスピスを、本人の希望も含めて話し合っておいてくださいと主治医に言われた。

余命一年と言われて驚いてから僅か三ヶ月である。小康状態の今、毎日病室を覗いて話している(スマホ時代だから簡単に録音だって出来るので8月5日に話し合った声もある)が、今では余命1~2ヶ月と言われている。

次のマガジン43号の発行作業の時、もう妻はいないのかもと思うと、癌という病気の凄まじさに言葉がない。

*

こう書いたとき、まさかこの42号発行を待たずに妻が亡くなるなど思いもしなかった。余命宣告をされていても、意外に長く居られたね、なんて幸運が起きてくれそうな気がしていた。

しかし実際は甘いものではなかった。医師の言う余命一年も、一、二ヶ月も、あと一、二週間かと…のすべてを尻目に駆け抜けて逝ってしまった。8月12日、23時38分、息と鼓動が止まった。

* 印以降の文を書いているのは告別式8月15日の深夜である。12時間ほど前、火葬場で妻のお骨を拾った。こんな事が自分に起きるのかと、分かっていたことだと言えそうなのだけれど、驚きの中で過ごしている。

「Family history」(1)

P52~

鶴谷 主一

約2ヶ月のコロナ休園から園を再開して3ヶ月が経ちました。再開に際しての方針決めから、変更する行事活動の計画など

「再開後」の幼稚園は、感染対策も相まって忙しさは変わりませんね。

追い打ちをかけるように、「長い長い梅雨」のおかげで室内や、絵本の棚がカビだらけになって大掃除…。終わったと思ったら「猛暑の夏」へと切り替わって、エアコンかけても換気しなくちゃいけないから熱風地獄。マスクが苦しい中で熱中症にも神経をとがらせなければならず、コロナ禍の保育は保育者にとってなかなか過酷です。

頑張っているみんなに何か楽しいことをしたいなあ、と思っていましたが1学期末の打ち上げ飲み会も自粛して全員でワイワイ食することもできません。それで係の職員が「広いホールでゲームしましょう!」という提案でソーシャルディスタンスを保って、景品争奪ゲームをやることができました。伝言ゲームやジェスチャーゲームなど、みんなで遊んで気分転換もできました。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P65~

水野スウ

エアコンなしで比較的涼しい造りのわが家ですが、この夏の酷暑はさすがに厳しい。ヒグラシが鳴いて、鈴虫が鳴いて、夕暮れの風がはいってきて、やっとうふ〜と深呼吸。ちかごろ呼吸が浅いのは、かならずしもマスクのせいだけじゃなかったか。もちろん家でマスクはしないけど、熱をもった空気を深く吸い込むのにはからだ抵抗するんでしょう、つい浅い息になっている自分に気づきます。今号は、コロナ下の紅茶の時間のことと、生とりモートに関してのリポート。パソコンに向かう時は極力、意識して深呼吸してから書きだすようにしていました。

直近のうれしかったできごと。栃木県のある市の子ども・子育て総合センターあて、1000冊の「ほめ言葉のシャワー」を発送しました。来春、その市の小学校に入学するお子さんが1000人。秋の就学時健診の際に一冊ずつプレゼントするのだそうです。

行政にこんな粹なこと思いつく方がいるなんて！びっくりすると同時に感動しました。

この冊子をつくってからもう12年たちます。「ほめ言葉のシャワー」の数年間のワークショップで、参加した方たちが書いてくださった言葉を、あずかったのは私。こんなかたちにデザイン、構成、編集したのは娘。文章を書いたのはほぼ私だけど、それに娘がいちいち、あーだこーだ、こーだあーだと、なんと注文の多い編集者。親子初の協働作業による本づくりは、それまでほんとに知らなかったお互いを発見しあうことの連続で、違いを認めてリスペクトすることの練習でした。その過程とその時の経験は、今でも私たち親子のたからものです。

そんなたからもの本を、新一年生とその保護者さんが受けとってくれることの、しあわせ。ありがとうのきもちをぎゅっとこめて、行ってらっしゃーい！と本たちを送り出しました。写真は、旅立ちを待ってスタンバイしている、1000冊の「ほめ言葉のシャワー」。



きもちは言葉をさがしている
P92～

荒木晃子

奈良県北葛城郡に転居して11ヶ月。部屋を見回せば、まだ段ボール箱が其処此処に残っている。中身は、豊中のマンションから持ってきた食器、美術品など日常に必要としないものばかりである。

生前、両親が暮らした戸建てには、転居前から生活必需品が全て揃っていて、私にとってはその全てが思い出の品。茶碗を手取るたび、壁に掛かった絵画を見上げるたび、懐かしさと安堵感を覚える。

本来、私があるべきところへ戻ってきた時間と空間を確信し今日の安らぎにつな

がっているのだと感じる。忙しい日常でも、時折アルバムを広げ、幼い頃の私を抱いた父・母を眺めてみることを忘れない。写真の中の(まだ30台代であろう)父と、若く美しい母が、幼い私に向けるまなざしに、今も包まれているようで心地よい。こんなに愛されていたのだとの思いが、冷えきった私のからだところを暖める。このぬくもりがあるからこそ、今、このときに何があるかと生き抜いてみせるぞと思えるのが不思議だ。

生殖医療と家族援助 P84～

中村 周平

実は、回復しつつあった首の調子をまた崩してしまいました。前回、お休みさせて頂き、次回に納得した文章をと意気込んで始めたものの、原稿の作成に十分な時間を充てることが出来ませんでした。

連続のお休みで本当に申し訳ないのですが、今回もお休みさせていただきます。

*

6月ごろに父親から突然、「昼頃から微熱がある」との連絡を受けました。普段はあまり顔を合わせていなかったのですが、偶然2日前に身の回りのことを手伝ってもらうため短い時間ではありましたが、同じ空間に滞在していました。

時期が時期だっただけに、私のサポートをしてくださっているヘルパー事業所から、父親の体調の変化や、顔を合わせた時間、そこに居合わせた人間など様々な質問を受けることになりました。

呼吸に疾患を持たれている方にもサポートを行われている事業所ですので、私や父親から感染していた場合、大惨事になります。そのため、何度も質問を受けることは当たり前のことだと思います。

ただ同時に、何も悪いことをしたわけではないのに、悪いことをしてしまったという感覚も感じずにはいられませんでした。感染対策、そして感染しないことはもちろん重要なことですが、そのうえで罹ってしまった場合は、誰の責任でもないのではないか。そのことを一言でも相手に伝えることが大切であるということを強く感じさせてくれる出来事でした。ちなみに、父親は感染していませんでした。

ノーサイド

山口洋典

この3ヶ月、週5コマ、学期を横断する実習型のサービスラーニング科目で時間割に固定されていない土日を中心にした変則開講1クラス、それぞれの授業運営にてんてこまいでした。最初は学生の通信環境が定まらないだろうということで授業管理システム(CMS、立命館大学では朝日ネットのmanabaを使用)で文字を中心にした解説と課題の提示で、その後は通信容量を圧迫しない音声ファイルによるラジオ講座方式に、そして5月中旬以降はZoomを用いたライブ授業とその内容をアーカイブしたオンデマンド学習へ、という具合に受講規模や到達目標などを加味して工夫を重ねました。これに加えて非常勤先での大学院のクラスでは、当初はLINEで、その後はZoomで対話を重ねることにしました。



(写真、8月26日13:55の立命館大学
大阪いばらきキャンパスの風景)

そして8月下旬、学期を横断するサービスラーニング科目の中間ふりかえりを、対面とオンラインとの併用で行ったのですが、これがなかなか大変であることを身をもって実感しました。特に苦労したのは、対面授業を行っている教室の内容、中でもグループワークでの議論をどのようにオンライン参加者と共有するか、でした。ハンドマイクの使い回しで新型コロナウイルスへの感染リスクが高まる、といったことなどを鑑みると、圧倒的にパーソナルな環境で受講できるZoom参加者に安心感が高いということ、その一方で対面での参加者には身振りやしぐさや表情や間合いなどのノンバーバルなコミュニケーションによって、一体感や連帯感が高まったようで、対面とオンライン、この2つの空間をどのようにして混交できるか、新たな思考と試行と実践が求められそうです。

PBLの風と土 P206～

見野 大介

工房に導入する予定がなかったアレクサが、とある縁で工房に来ました。親以上に息子がハマリ、毎日保育園の行き帰りの際にアレクサへ挨拶をしたり、仮面ライダーやキラメイジャーの歌を流して踊ったりしています。こんな育児で良いんだか、良くないんだか(笑)

ハチドリ器 P4

千葉晃央

コロナ対策をして、満蒙開拓平和記念館に行きました。朝10時には到着。館のある長野県は開拓団への参加人数も、満州義勇軍への少年兵の参加？もずば抜けて多い。2位にダブルスコアになるぐらいの数字が残っている。背景に自治体が奨励し、なおかつ「この地域から何人出すように」とノルマ主義で進めた過去がある。冬は雪深く、山が連なる地形はその苦勞が多かったことも実感。記念館は、当事者の語りを動画として、文章としてふんだんに用意して来館者を迎えていました。当事者からの発信の重要性はどの分野も共通。昨年訪れた戦没画学生慰霊美術館「無言館」も長野県。こうした後世に伝える活動が活発なのも、その特徴。今回の旅友の長女も退館時に感想を書き掲示するスタイルに乗っかって、壁に掲示。「情報操作、住民の分断、貧困。これが再び整いつつあります。2度と繰り返さない」と私も書いた。

そして、これも行きたかった「杉浦千畝記念館」へ。隣の岐阜県。こちらも山深く、そして古い学校もあり、川も印象的。展示は千畝が書いた通行許可を得られたユダヤ人のその後と、得られなかったユダヤ人のその後の出来事が並列で展示。生い立ちを見ても、後の行動の萌芽ともいえる岐路での選択が見て取れる。マイノリティの選択ができるという事実は、その次の選択可能性を広げることも実感。戦後、外務省から解雇され、それどころかその存在すら隠蔽された事実にも閉口。千畝さんのことは学校で私は習わなかったけど、今の子どもたちは学校でも触れると娘にきく。いいことだ！帰宅は18時というシンプル

行程で、日帰り完了。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

援助職の未来

P17~

脇野 千恵

コロナ禍とはいえ、季節や自然は、普通に私たちの生活の中を通り過ぎていきます。気がつけば夏の終わりに近づき、裏の田んぼの稲穂も垂れ始めました。夜は虫の音も。

日々の生活は、不登校生の支援員として関わり、時々、元同僚が経営する塾の応援に行っています。長い休校の影響か、塾は流行っているようです。来年は少し働き方を変え、自分のしたかったことを優先させようと思います。

さて、「性と生」の情報発信と交流の場として「まちの保健室ちむちむ」を立ち上げて2か月。コロナ禍の中だからこそ、人と人が集う場も大切にしなければと思っています。

若者向けにと慣れないツイッターも始めました。すぐには、若者は来ないだろうけれど、続けることが大事。将来的に若者同士が悩みなどを共有し合い、ピアな関係になっていく場所になればいいなと考えています。



こころ日記「ぼちぼち」part II

P258~

竹中 尚文

私が寺院住職であることはご存じかと思う。浄土真宗の住職の妻を坊守(ぼうもり)という。浄土真宗は開祖の親鸞聖人が結婚をしたというので、住職が結婚をする場合が多い。そして住職と坊守がお寺の要職とされる。◆この夏もそうであったが、とてつもなく忙しい時にお葬式ができる。坊守は「あとは任して」といって私を送り出す。彼女が日程を調整して、私がお参りをする予定になっていたお宅へお参りに行く。お参り先である門徒さんのお宅では、住職がお参りをするより歓迎されているようでもある。◆彼女はお寺の生まれでもなく、仏教の勉強をしたわけでもない。私と結婚したのが機会に僧侶になったのである。僧侶になるための基本的知識は、たぶん私から得たものが多いように思う。儀式についての作法なども私からの知識が多いかもしれない。それに、彼女が僧侶になるためにずいぶんの多くのお坊さんが力をかしてくれ、知恵を授けてくれた。今では、私が彼女から教わることも多いし、相談相手でもある。何より、仏さまとの間合いがいい。私など、意識をしてもっと近づかねばと思ったりする。◆彼女との出会いは思いも掛けないものであった。私には離婚歴がある。結婚に関して、苦しい思いがほとんどである。二度と結婚などするまいと思っていた頃に出会った。そこから結婚を決意するまでは、かなり大きな迷いと決心があった。あの時、私の生涯を懸けてもいいと思った。それを黙って見守ってくれたのが団二郎さんと団典子さんであった。それが何よりも大きな応援であった。この夏、その恩人である団典子さんが亡くなった。心より合掌

『盆踊り漫遊』

P98~

中村正

コロナ禍で大学はまだ厳しい管理下にあり、秋学期も講義系科目はオンラインで実施することになる。対面式の場合もコロナ対策が前提なので密を避けることが要請される。マスクをして話をするのは大変だ。孤立しているので、動き回りたい元気な学生たちはメンタルヘルスが悪化しているようだ。Zoomでオンライン授業する際

にパワポを提示するが良かれと思って文字列に色をつけると色覚過敏な学生がいて白黒にして欲しいと言われる。BGMを入れると音楽だけが大きく聞こえてしまう聴覚過敏な学生もいる。Zoomの向こうにはいろんな学生たちがいる。パソコンのカメラの向こうには多様性の海が横たわることと理解する。それは世界に開かれていることへ想像力がある。こうして大学と「夜の街」はなお厳しい状況が続く。こうしたなか、対人援助学会の年次大会をどうするのかも悩ましい。オンラインでの開催となる予定だ。全体企画はコロナ禍での対人援助というテーマになりそうだ。社会的なつながりの再構成をしつつ対人援助の現場からの知恵の交流をしてみたいと思う。こうした時代にふさわしい話題での企画を計画することにした。オンライン面談、ソーシャルコネクション、シェアリングエコノミー、Stay Home できない人のサードプレイスや居場所等がキーワードとして浮上する。対人援助学にできることはたくさんありそうだ

臨床社会学の方法 P21～

乾 明紀

42号も休載とさせていただきます。
8月は成績評価と科研費研究などで手が回りませんでした。2019年も8月(9月15日発行分)は投稿できませんでしたが、この時期は書ける心身になりにくいようです。
私は、いわゆる“対人援助職”ではないので、ある意味場違いなことを周旋家日記という表題でエクスキューズしながら、その場その場で書けることを書いてきたのですが、そろそろこのやり方を見なした方がよいかもしれませんね。

周旋家日記 休載

寺田 弘志

今回は締め切りに2日遅れてしまいました。編集部の皆様、ご迷惑をおかけして済みません。
暑いですね。
新型コロナも怖いですが、温暖化で年々巨大化する台風が怖いです。

残暑お見舞い申し上げます。皆様、どうぞご無事で！

接骨院に心理学を入れてみた P212～

浦田 雅夫

滋賀長浜の武田倫江さんのお話をうかがった。私の親と同じ世代。絵を描くのが好きだったという武田さん。忠君、聖戦。戦意高揚。それを信じて疑わなかった子ども時代に書いた絵について語っていただいた。「戦争を知らない子どもたち」だった私が、「戦争を知らない子どもたち」という歌も知らない子どもたちと武田さんの絵について語り合いたい。

社会的養護の新展開 P63～

小池英梨子

えっ！？もう前回のマガジン発行から3ヵ月も経つのか！？って毎回思ってしまう。



そうだ、猫に聞いてみよう P188～

援助職の未来

2: ソーシャルワーカーのジレンマ

千葉 晃央

あの人は

何をしているのだろう？

平日の昼間に街を歩くことは、何十年も基本的にはなかった。よって、銀行や郵便局に行く経験も限られていたため、そのあたりの経験が極端に少なかった。これまでも、利用者さんが仕上げた製品を運搬するためにドライバーとして眺めたり、事業所で社会体験、行事で利用者の皆さんと出かけたりするときには平日の街を少しは感じた。「平日の街」は私にとっては日常にはないものだった。仕事の傍らに見えたり、のぞいたりした感覚のものだった。それが4月以降は、平日も土日も祝日も基本的にはなくなった。四半世紀馴染んだ曜日のリズムからは一定離れた。平日に街を歩くと働く人々の姿が目によく入るようになった。平日を歩く自分への違和感は消えないし、若いころにできたリズムは一生消えないということもきく。

どこどこの、誰誰から

青年期、学生の立場を終えると多くの人々がどこかに勤める。そこには、既存の組織があり、その組織の目的があり、組織にはルールがある。そこに適応していくことが、個人としてはその時期の主題となる。それは、その組織の何かを担っている誰誰さんになるところから始まる。そして、仕事で経験と成果を重ねると、誰誰さんあてに様々なことがもたらされる。その人がそこで担うことは組織の目的、組織のルールによって限定される。つまり、それ以上のことに、どう向き合うのか？は、その援助職次第でもあるし、その組織や職場次第でもある。「必ず～できます」は、そこにはない。その権限は一人の援助職にはないことが多い。それが組織で働くことである。一方で組織というところで社会的に守られている部分も同時の存在する。

私とこれまで一緒に働いた方々の中には、退職し、個人で起業する人もいた。事業所

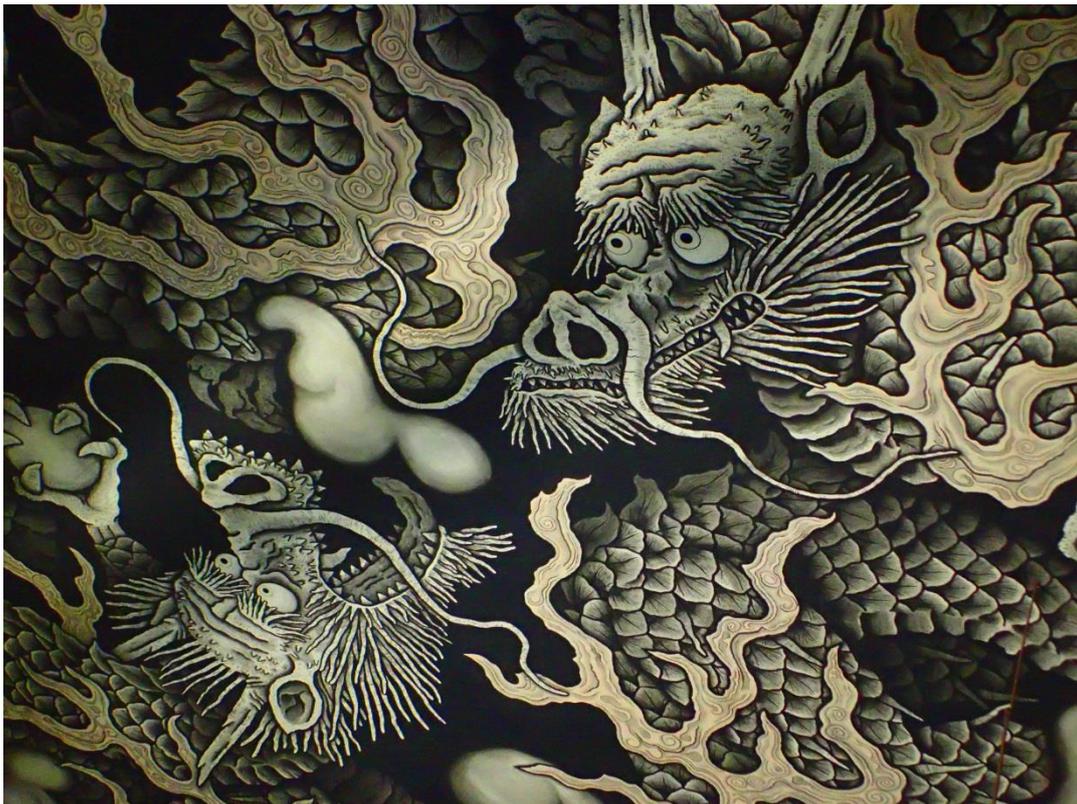
の長として組織を作る人もいた。また、他組織からヘッドハントされた人もいた。ある程度仕事を経験するとそうした分岐点もある。私の場合は47歳での分岐点なので、周囲の例に比べると少し遅いかもしいない。また、同じ分岐点の意味ではない、ということも言えるかもしれない。

また、これまでは時代的な背景もあった。現在は、多くのベーシックな支援的な社会資源がそろい、むしろ既存の組織が現代的状況にどう適応するかが多くのところで問われている。制度的に労働力不足必然なのに過剰供給で種類や数だけ増えた社会資源、事業所、一方でマンパワー不足という局面で、何をするかである。私がこれから何をするか？を自分に問うと、既存の制度にのっとった種別の何かだけではないだろう。それは社会に何かをプラスすることにはならない。社会の今までの流れをそのまま進

めることになる。私の好みである、今までの事態に何かを加える円環的な流れには当てはまらない。今あるものがよりうまく回ればということを試みたい。もちろんそれだけでなくでもいい。今ある流れにも取り組み、大切にしながら、新しい流れを実践する。これはソーシャルワーク的視点そのものである。私はプラスになるものを、自分が培う時間をきちんと持つことが、自分の今後のために今必要だと判断したのである。その課題を自分に突きつけたのである。

ソーシャルワーカーの矛盾

映画「60歳のラブレター」では、主人公演じる中村正俊が巨大企業を定年後、いいポジションで小規模組織に迎えられ、勤



めるところから始まる。そして、中村が現役時代取引していた会社と対峙する場面が巡ってくる。「御社と私はこれまでのたくさんの重要な案件を共に取り組んできた」という主人公中村に対し、以前の取引先の担当者は「勘違いされては困る。あなたと仕事をしたのではない。あなたのいた〇〇会社さんとの取り引きです！」と返す。これは人生後期によくある「葛藤」を表現している。

援助職といわれる仕事をしている人の多くは、ほとんどが組織に属している。その多くの組織は何らかの法律に基づき、行政からお金を得ている。つまり制度に左右されるのである。それが現在の援助職という職業の多くの状況である。安定でもあるが、一方でそのルール以上のことは起こらない。また、起こさなければ現状維持として、そこに居続けることができるというメリットもある。しかし、社会は「現状維持」とはいかない。刻々と対象者の状況も時代背景も変化し続けている。それなのに…である。

援助職、特にソーシャルワーカーはソーシャルアクションや、ソーシャルワークの開発的機能が任務といわれている。古くは「社会改良家」(まさにソーシャルをワークする)といわれたのであるが、その気風は様々な経過で薄くなった。その背景の一つには、政治的体制の維持を願い、社会体制の変化を嫌う権力者側の恐怖もあった。住民の連帯、社員の連帯などは恐れの一つである。グループを組み機能させることを得意とするグループワーク、グループワーカーが今後養成されないことは既得権者には好都合である。ソーシャルワークの一つの手段である集団援助技術、グループワーク

論といわれ長く培われてきたその科目は、福祉単独科目から撤廃もされた。

ある時期以降、集団や連帯こそが既得権者には恐怖なのである。現在のコロナ禍では、さらに既得権者には恩恵がある。関所のある幕藩体制に戻ったような住民の分断を起こし、同調圧力による相互監視、自発的な行動自粛もとてもよく機能している。これほど既得権者にとって都合のいいことはない。三蜜回避では、デモや国会前に集結も簡単にはしにくい。手をつないで基地を取り囲む、人間の鎖もしにくい(人形を間に入れて実施していたが!)。シュプレヒコールも上げにくい。理由は「ウィルスのせい」。誰も悪くない。行動の監視を進めるのもウィルス追跡のためで、誰も悪くない。集団を学んだ立場、システムを学んだ立場からそういう側面がどうしても見える。

そこで、これまで見てきた社会の場所から少し離れてみる。離れて別のところからみたら、新たに見えることもあるだろう。これまで見てきた世の中を違うところから見る。これからより複眼的に見ることもできるだろう。そんな思いも私の変化にはあった。

若い?!

最近直面したのは寝る時間に関するものがひとつあった。これまでは翌日の出勤時間に合わせていた。しかし、一定のものがないと、前日の寝るきっかけにならない。私は割と起きていてしまう方で、翌日起るのが遅いと頭がすっきりしない。そこに



関しては、今も工夫を様々試みている。

シェアオフィスへの出勤は、自転車か市バスである。電動自転車が威力を発揮している。車にはめっきり乗らなくなった。毎日の運転での緊張と気苦労があったことが自覚できた。実際に24年間の通勤及び業務上で何回か事故を経験した。幸い軽微で、多くは事故をもらった。ガソリンスタンドにはめっきりいかなくなった。京都ぐらいの広さと京都の公共交通網整備状況だとある程度公共交通機関利用のみで暮らすことができる。これまでは、そんなことを感じることなく過ごしてきた。

以前より自分が時間のコントロールができるようになったので、これまで時間がさけなかった様々なことにも取り組んだ。様々なコストの見直しも行った。携帯のプラン変更、固定電話の見直し、そして断捨離である。特に不用品の処理である。捨てることも結構手間もエネルギーもお金も必要になる。これまで10年単位で週6.5日以上働いていたら、そこに時間をかけることができなかった。フリーになり、居住地という選択も含めて考えるようにもなった。

今後、いつでも動くことができるように、とにかく身軽にしておく。それは選択の幅を広げるだろう。可能性広げるかもしれない。

これまでは時間もなく、お金がないわけではないという状況だった。処理しなくてはならない不要なものがあるという結果は、これまで不要なものも手に入れ続けてきたともいえる。ストレスによる買い物依存とまではいかなくても、つい買うことでの何らかの発散である。そこにはネットショッピングが拍車をかける。つまり「もの」で何かを埋めようとした。でも、「もの」では埋まらなかった。「これをあなたのこれからの人生、新しい人生に持っていきたいかどうか？」と断捨離の創始者？のやましたひでこがよく言う。そう思うと何を残し、何を処分するか明確になる。お金に限られている状況を楽しむようにもなった。こうした飢餓的実感から、歩むのはまさにリスタートである。自転車に乗り、現場にも立ち、超質素な生活をする。「千葉さん、この頃、若いから…」そんなことを言われているのは悪くないなあと思う。

臨床社会学の方法

(30) 自由に生きるための知

—オートエスノグラフィ・当事者研究・リベラルアーツと「私」—

中村 正*

*Ritsumeikan University

I. 自由に生きるための知を求めて

現在、立命館大学の教養教育センターの責任者をしている。私は比較的長い間、この対人援助学会創設の契機となった大学院の応用人間科学研究科開設（2000年度開設。2018年度より人間科学研究科に改組転換）をはじめとして大学の教務部門で仕事をしてきた。学びについてのマネジメント部門ともいえる部署である（そのマネジメントの実践経過をまとめた。『“教育から学習への転換”のその先へ』文理閣、2019年、景井充・杉野幹人と共著）。その延長線上でこの仕事をしている。

立命館大学は約 32,000 名の学生がいて、4 年制の学部だと 120 単位強の要卒単位となっており、そのなかで教養教育はおおよそ 20 単位程度を占めている。立命館大学には教養学部の独自の部署はなく、全学で教養教育を担っている。教養教育は 1・2 回生が多く受講するが 3 回生以上も登録するので 22,000 名程度の学生を想定して 100 科目（800 クラス）程度を用意している。かなり体系的な科目群となっている。以前は「ばんきょう」と言われ、とくに大規模講

義が多いこともあり、学生には軽視されがちであった。そうしたことも考慮し、講義の規模を下げる努力をし、それでも多いが平均で 200 人前後の受講者となってきた。

「教養ゼミナール」という 20 名前後の科目や英語で開講する科目、アクティブラーニング系の科目も置き、教養教育を重視している。そうした科目をコーディネートする担当者が 100 名近くいる。すべて専任教員である。最近の社会問題、科学技術、芸術文化の動向、そして未来社会の創造を考えると、本来のリベラルアーツの基本に立ち返る必要がある、教養教育への期待や役割は大きいと感じている。就職の際にも教養教育についてどんな力を身につけているのか関心を示す企業は多く、先日も教養教育センターの方針についてある大手企業からインタビューを受けた。

そこでリベラルアーツの原点に立ち返ることとした。リベラルアーツは「自由に生きるための知性」と定義される。この趣旨を実現させるべく改革をおこなってきた。2020 年度よりいざ新展開という時に、コロナ禍でオンライン授業全面展開となり、今

年の春学期は相当に苦労を強いられた。しかしそのオンライン授業だからこそできることもあるのではないかと思い、この春学期にいろいろな企画を並行して展開した。

2020年5月24日には大規模なオンライン企画を開催した。Zoomで関係者をつなぎ、後日、映像編集をして立命館大学からYouTubeで流した。企画それ自体は末尾添付のチラシのようである。当事者研究こそリベラルアーツの原点ではないかと考え、熊谷晋一郎さん(東京大学)に基調となる話をお願いし、その後各大学のリベラルアーツの取り組みについて意見交換をした。それは学生自身が「自由に生きているのか」という問いと、自由に生きるためにこそ学びの当事者として自己理解と自己覚知をして欲しいという意味をこめたテーマと講師の配置だった。この企画の趣旨はこうだった。

目まぐるしく変化を遂げる時代のなかで、わたしたち人間は、置いてきぼりにあっていないか。これまで信じてきた価値—たとえば、科学技術、経済成長、民主主義—がゆらいでいる現代社会。新型コロナウイルスのパンデミックは、世界規模でわたしたちの創り上げてきたシステムの弱点をあらわにし、人々は日々さまざまな決断を迫られている。ともすれば、立ちすくんでしまいそうな現実を前にして、多様で個別・具体のわたしやあなたがどう生きるのかが問われている。この時代・社会を自由に生きるために、どのような知性が必要か、東西の研究者の知を集結させ、あなたの価値観を解きほぐす。2020年5月24日(日)に立命館創始150年・学園創立120周年記念シンポジウム「自由に生きるための知性とはなにか?」にご参加ください。

大学時代、私は法学部にいた。教養科目が好きだった。法学を学ぶ必要をドストエフスキーの『罪と罰』、森鷗外の『高瀬舟』、

井上靖の『氷壁』等から学び、「文学」という科目が好きになった。「自然科学概論」という科目からはクーンの「パラダイム」という概念を教わった。マルクスの『資本論』は「経済学入門」から教わった。「近代史」という科目でファシズムの精緻な研究を知った。なかでも「パラダイム」という考えそれ自体が、アメリカのUCバークレーという研究大学で理論物理学者だったクーンが文学部で教養科目を担当したときにつくりだした概念だったと聴いて、教養科目として異なる分野の学生に話をするものの創造性にワクワクしたものだ(トーマス・クーン著/中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房、1971年)。

当時はリベラルアーツという言葉ではなく、「教養」という言葉で理解をしていたが、その言葉の語感に、憧れに近いものがあり、幼い頃から意識のなかにあったように覚えている。幼い頃といっても中学の頃だろうか。当時、「教養小説」というジャンルに惹かれており、そうした書物を好んだ。ドイツ語ではBildungsroman(ビルドゥングスロマン)という。主人公が体験を通して成長していく過程を描く小説の総称である。「自己形成小説」と訳されるだろう。この種の話題が好きだったこともあり、「教養」という言葉に惹かれていた思春期青年期だった。

私が大学に入学したのは1977年4月のこと。しかしその後、1991年に、一種の規制緩和がおこなわれた。すでに立命館大学で教壇に立っていたが、大学ではこの改革を受けて教育をどうすべきなのか議論が盛んになっていた。「大学設置基準の大綱化」という。これが全国の大学における教養教育を大きく変えた。

この結果、教養教育は縮小にむかうことになる。したがって、大学を卒業した人は思い出して欲しい話であるが、この年度以前の大学にいた人はかなり厳しい設置基準時代の教養教育を受けていたことになる。では何が緩和化されたのか。それまでおおむね36単位くらいだった教養教育が20単位前後に減少した。設置基準は教養教育を減らせとっておらず大学の自主的運営に委ねたので「大綱化」というが、実際は教養教育の単位が減っていくことになる。現在およそ50歳以下の方々はこの大綱化以降の教育である。それ以前の教養教育では、第二外国語や保健体育も必修であった。第一外国語の英語の単位も多かったし、講義系の科目の必修の縛りも強かった。

もちろん単位が多ければいいということではないので、本来のリベラルアーツとは何かを確認しながら現在のカリキュラムを編んでいる。この再確認は絶えず必要であり、予測できない時代、予定調和がくずれ時代、専門知がいつまでも通用せず、柔軟に現実を生きていくために、危機が常態化していく時代のリベラルアーツを絶えず再編しつつも、普遍的な知としての側面もあり、教養教育をリベラルアーツとして再編していくことを試みつつある。立命館大学での教養教育改革の視点をこう記した。

教養教育は、多くの問いは解がひとつではないことを教えてくれます。人間形成の基盤として、人間的知性(知識は学べば身につけられますが知性は知的能力を不断に磨いて身につけるもの)と人間的態度(倫理観・正義)を培うことを、立命館大学の教養教育は目指しています。こうした知性を身につけるためには、友人や教員と協働すること、ときには経験したことない未解決の課題に失敗を恐れずチャレンジしようとする学びの意欲と態度も

求められるでしょう。自ら学びたくて選んだ学部の専門科目は、学びを深く掘り下げていきます。立命館科目をはじめとした教養教育はみなさんの学びの視野を広げます。みなさんには「深まりと広がり」のなかで地球市民としてグローバルな視野とローカルな視点を身につけ、成長することが期待されています。

5月の企画が1000名近いオンライン参加者だったこともあり、本年7月以降にも多様なリベラルアーツにかかわる企画を開催した。第一弾として、「SERIES リベラルアーツ:『自由に生きるための知性とはなにか』」を実施した。社会に山積している問題について、専門を超えて理解し、いまを生きるために大切な課題を取り上げていくこととした。第一回目は「ブラック・ライブズ・マター」とした。この趣旨は次のようなものだった。

コロナ禍で社会の脆弱さが露出しています。格差と不平等が顕わになっているといえるでしょう。コロナ禍それ自体をどう乗り越えるのかは当面の課題ですが、予想できない事態に遭遇する未知なる時代を生き抜くための知が求められるといえます。専門知だけではなく、領域を越境する教養知(リベラルアーツ)の存在が問われているといえるでしょう。教養知(リベラルアーツ)は社会と自己を自由にするための知であるはずですが、いま改めてこうした知性に関心が集まります。この世界は、答えない問い、答えがひとつではない問いに溢れています。大学は、そうした問いと遭遇し、向き合う場です。問いを問い直す知として教養知(リベラルアーツ)があります。高校までの勉強との違いにとまどうこともあるでしょう。だから、私たち教養教育センターは「ようこそ、立命館大学へ!」の気持ちを込めて、2020年度から「立命館科目群」を新設しました。コロナ禍でいまだにキャンパスで逢えずにいますが、オンラインを活用して今までとは異なるかたちで他者と出会っているはずですが、これは私たちを自由にするための機会となりうると考えました。教員た

ちもオンライン授業を開発しています。そこで展開されている知を万人に拓いていくべきだと考えました。コロナ禍対策だけではなく本来、教養知(リベラルアーツ)が取り組むべき社会問題と格闘するための場として「SERIES リベラル・アーツ:自由に生きるための知性とはなにか」を開催します。シリーズ第一弾のテーマは「ブラックライブズマター」です。

リベラルアーツという言葉はギリシャ・ローマ時代の「自由七科」(文法、修辞、弁証、算術、幾何、天文、音楽)に由来する。市民は、奴隷とは異なる自由人として生きるために学問を必要とした。それがリベラルアーツの根本にあるので、そもそも奴隷制度を前提にしており、起源どおりの意味では継承することはできない。その語彙の意味だけを引き継ぎ、人間を自由にするアートということで広く理解する。

こう考えると、現代社会は実に不自由であることがわかる。生きづらさ、不自由さをなんと多くの人を感じていることか。学生たちも自由な学びは少ない。教育が学生たちを不自由にしてきた。そのなかから大学に来るので、学びが自由ではない。自らの人生や学問をとおして自己を自由に解放する必要が日本の大学生に強くある。まさに本来の意味でのリベラルアーツが必要なのだ。そうした当事者であることとリベラルアーツを結びつける機会を設けることとした。リベラルアーツの基本に立ち返るとのことだ。この世には、自由に生きることを阻害しているものがたくさんある。そのことを目の前にして、大学の知に何ができるのかを考えることは自由に生きるための知としてのリベラルアーツそのものの課題となる。現代こそリベラルアーツが要請されている時代だと思う。ましてやこのコ

ロナ禍である。不自由きわまりない。そこでせっかくオンラインとなったので、不自由さを自由に転換し、いまこそリベラルアーツが大切と考えた。社会に広く大学の講義を開放することとした。

第一回目に当事者研究の基本と重ねてリベラルアーツを再考することにしたのは教養教育が自己成長と不可分だからである。自己成長物語を自ら描くことは当事者研究の主要なテーマである。自己の理解と覚知が基本となるだろう。それは第一人称のナラティブであるはずだ。それを社会、文化、政治のコンテキストで生きてきた過程と重ねていく。自己をフィルターにしてこうしたコンテキストを透視する。まさに当事者研究から学ぶべきことだろう。そして質的な研究としてみるとオートエスノグラフィという(後述)。自由に生きることを阻害しているもの、それは自己と社会のなかにある幻影や思い込みだろう。それを知的に理解し、取り除いていくことになる。

どんな学問を志すにしろ、生き方と不可分に関わる知でありたいと思う。だからリベラルアーツはどうしても必要なものとなるはずだ。以下に紹介するのは、社会問題の社会学や社会福祉学を学ぶ一回生のために仲間と作成しているテキストの最初の文章である。私は「社会問題と家族」について学ぶという冒頭に置かれた章を担当している。当事者研究の視点も加味しながら、自らを自由にするために社会問題や社会福祉をいかに学ぶとよいのかについてリベラルアーツ風に学びを動機づけたいと考えた。まだ完成はしていないが、以下はその序章にあたる部分である。自己を起点に学びを誘うこととした。

II. 対人援助の課題を発見するための家族問題

1. 生まれ出ること

どんなかたちの家族であれ、私たちはそのもとに生を受ける。個人としてまず家族という社会に出会う。そこでの体験をとおして考えてみる。

必ず私を産んでくれた母がいる。そこから私の人生が始まる。父もいるので妊娠・出産は生物学的な事象としてあるが、生まれ出ざる過程をよくみると社会的に構築された諸関係の網の目の中の出来事だとわかる。なんといっても出生は、医療の現状に左右される。健康をめぐる社会的格差という社会構造がある。5歳未満の乳幼児死亡率をみると日本社会のなかでも地域差がある。

続いて「出生届」が提出され、社会的存在としての私が法的に誕生する。誰が提出したのだろうか。そこには私の名前が書かれている。名前は女らしいだろうか男らしいだろうか、中性的だろうか。後に述べるジェンダー作用が浮かびあがる。私の親はその時どんな婚姻形態にあったのだろうか。ちなみに筆者は家族を成しているが、婚姻届を提出していない。事実婚という。したがって子どもの父親として任意の認知届を提出した。子どもは非嫡出子扱いである。名字は母の姓だ。法律婚ではこうならない。

「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫または妻の氏を称する」と民法は定めている。これを「夫婦同姓主義」という。筆者は日本国憲法第14条の定める平等の考え方に基づきこれに賛成できないので、「選択的夫婦別氏制度」がよいと考えている。何

事につけ社会制度としては選択肢が複数あった方がよいと思うからだ。事実婚を俗に内縁関係ともいう。表現が二つある。虐待やDVの事件報道では「内縁の夫」が加害者としてよく登場する。その事実婚と内縁関係はどう違い、どうして使い分けるのだろうか。非嫡出子と嫡出子、事実婚・内縁関係と法律婚、シングル家族(母子家庭が多い)、子どもの認知、養子縁組・特別養子縁組、里親里子関係、乳児院での生育等、出生の過程にはたくさんの社会制度が織り込まれていることがわかる。

私には兄弟姉妹はいるのだろうか。数は減り続けている。1958年頃からだいたい二人になったが一貫して少子化家族である。また親が離婚することもある。そうすると私の姓はどうなるのだろうか。離婚後、約80%は母親が親権を得るがどうしてだろうか。母子家庭になると生活が心配だ。離婚した父はきちんと養育費を支払うだろうか。50年前は父親が親権を得る家族の方が多かった。どうして逆転したのだろうか。

2. 出生をめぐる社会的事情

出生をめぐる社会的事情はまだある。例えば、予期せぬ妊娠と望まない妊娠で棄児となることもある。場合によっては嬰兒殺害もある。これは犯罪だ。子どもを愛することができない母(産褥期のうつ等の精神疾患もある)の場合もあれば、父が不在もしくは不明のこともある。出生届が無い「無戸籍者」が1万人程とされているがその子どもはその後どうなるのだろうか。

さらに不妊治療も進展している。第三者の卵子もしくは精子の提供により産まれた子どももいる。遺伝子上の父母が存在する。それは原則、匿名である。この場合、「子ど

もが自らの出自を知る権利」はどうなるのだろうか。こうした場合、親はその真実の告知をどのようにすべきなのだろうか。

また、後に性別違和感を覚えるかも知れないが外性器の形状にもとづき性別が決定される。もし私が性別に違和感をもった場合はどうすればいいのだろうか。日本は性別変更が困難な国で、国際基準に合わない。日本の「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(2003年制定)における戸籍の性別変更要件は非人権的なのだ。20歳以上という年齢、非婚であること、未成年の子がいないこと、望む性別に似た外観に変えることや生殖機能がないことという要件がある。不妊手術を含む性別適合手術が必要なのだ。

そして、親の社会的経済的事業、皮膚の色や生まれた地域の特性、在日外国人である場合等、それらがもたらす私の社会的な属性はまた別の社会的不利や差別をもたらすことがある。さらに生まれる前に、どのような病気を持っているかを調べる出生前検査もあり、なかには優生思想につながるものもある。これは何のためにあるのだろうか。私は生まれる前に検査されていたのだろうか。

3. 家族の多様さ

さらに憲法では、「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立する」とされているが、同性同士の場合は婚姻できないのだろうか。同性カップルで子どもが持てないわけでもない。パートナーシップを結んだ者同士が異性愛夫婦のように、公営住宅に入居できる、手術の同意をおこなうことができる等とする日本の自治体は80近くあり、また国の制度にしているところもある。これはど

ういう考えのもとに採用されたのだろうか。さらにゲイのカップルが里親認定されている自治体もある。セクシャリティという点ではLGBTsのテーマも関係してくる。

4. コロナ禍の家族—Stay Homeの内側で

そして現在。コロナ禍時代である。Stay Homeといわれている。仮に、留まりたくない家庭だったらどうすればいいのかという想像力は大切だ。DVや虐待がある家庭の被害者にそれでも留まれといえるのか。家を出た方がいい家庭もあり、ネットカフェに寝泊まりしていた人々はどうしているのだろうか。コロナ対策と家族について考えるべきことは多い。たとえばコロナ対策の10万円特定定額給付金政策があった。DVや虐待で家族から逃れている女性や子どもは現住所以外に住んでいるはずなのできちんと本人に渡っただろうかと思いを馳せることが必要だ。マスクの配布もそうだったが、これらはすべて「世帯単位」だった。その世帯に暴力等の生きづらさが含まれている人たちはどうなるのだろうかと考えてみる。生活保護も家族相互の扶養が原則である。福祉の仕組みが「世帯単位」で動いていることをどうすればよいのだろうか。

さらにコロナ禍でテレワークが推奨され、学校にいけずにオンライン学習となると、Homeは生活まるごとを抱え込む。そこをいったい誰が面倒みているのだろうか。性別役割分担とジェンダー問題という家族と社会の構造がみえてくる。家事や育児を担当するのが女性役割として存在している社会に生きていることがクリアになる。Stay Homeの新しい生活様式は古くからある家族主義へとコロナ対策を丸投げした感がある。

5. 家族は舞台

こうして、個人の生は、家族をとおして開始されるが、そこには社会が埋め込まれている。ここには社会問題、生活問題、人権問題があり、社会福祉の課題となるものも多く含まれている。家族は所与の現実ではなく、出生をめぐる事項だけでもこれだけ多様な顔を見せる。家族という領域は、ひとりひとり異なる環境ではあるがその社会の主流の生き方(マジョリティという)に即して生が構築されていく場として機能する。個々人の生を支える社会福祉であって欲しいと思う。そのせめぎ合いの場としての家族があり、そこには数多くの社会問題を見いだすことができる。

家族をめぐる、政治、経済、法律、心理、教育、看護、宗教、医療等、あらゆる領域が交差しているともいえるだろう。「私の体験」とおして社会構造がみえてくる、そうした場としての家族を考えることは社会福祉の学びにとって刺激的なテーマを含んでいる。

もちろんこれらはすべてプライベートな事項なので本書を読みながら自らの体験を自問自答して学習の動機とし、普遍的な社会福祉の課題として位置づけ直しながら学習を持続させて欲しい。

こうして、家族という領域が自明なものとしてあるのではなく、歴史的社会的な存在であることへの理解をすすめていく。福祉は人々の安寧と幸福のための社会を実現するものなので、そうした現代のないいくつかの特徴を描写して、社会福祉の学びに役立てていければと考える。家族というフレーム(窓)をとおして社会福祉の諸課題が生成し、見えてくる。ここで重要なことは、社

会学的現実として「私」のあらゆる面に家族が関わっている点である。

こうして「出生する」ということを焦点にすると、いかにそれが社会的なことであるのかがわかる。そのことを考えるために社会問題を整序して考えることが大学の知になるのだろう。個人の生と死をめぐる諸問題はかっこのリベラルアーツの課題となる。「私」の成り立ちについて社会的位相を交差させて考えることをとおして、自己を自由にするための知的営みははじまる。

III. オートエスノグラフィとして

「私」を介して社会を理解するやり方は部分的にはすでに多様に取り組みされている。たとえば教育学では自らの学校体験をもとに教育と学習の営みを記述することで教育学に接近する試みがある。犯罪や非行の研究分野でも可能だ。薬物使用の体験を語る手法もある。マイノリティの研究もこれに近い。被差別体験や被暴力・虐待の体験のナラティブも同じだろう。臨床の諸学による事例研究も同じようなものがある。この方法はオートエスノグラフィと呼ばれているものに近い。キャロリン・エリス、アーサー・ボクナー「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性:研究対象としての研究者」という論文から紹介しておきたい(この論文は、『質的研究ハンドブック 三巻』(N.K・デンジン、Y.S・リンカン著平山満義監訳、2006年、北大路書房に掲載されている)。

エリスは、学術的だとされる研究は「三人称の受動態で書かれている」(130頁。以下、この翻訳書の頁)という批判から始める。

科学論文でよくある「〇〇の結果は・・・と示唆される。」という類いの実証研究である。主語はない。研究データ、エビデンスがそのような意味をもつというのだが、真実はもっと大きなものであり、その一部を実証しただけだということだ。真実はわからず、神のみぞ知るということになる。だから学術書では、個人としての立場がまったくふれられず、「三人称受動態」が基準とされ、個人が実際に見たものを一人称で語ることで、抽象的でカテゴリー化された知識を示すことが重んじられているという(130頁)。「ほとんどの書き手は一人称で書くことを選ぶことさえできない。自分を操る支配的規範に見合った学問的表現によって、自縄自縛にあっている。そして、いったん、匿名的表現が規範となると、一個人として自己を語るような物語は、逸脱した表現とされてしまう」(130頁)のだと批判する。

こうして科学的研究は、主体性や個人の経験を消し去る。しかし、現実はそうではない。「多面的視点、固定的でない意味、複数の声、理論の単一性、要求に違背する知識のローカル性や不規則性をとおして、テキストに関する読み手の解釈の余地は、かなり広範なものであることを教えられた」

(131)。これを掬い取るのは「自己エスノグラフィー」だというわけだ。オートエスノグラフィーは「自分自身の個人的な生を重視する」、そして「自分の身体感覚や思考や感情に注意を払う」ことになり、「自分の生きられた経験を理解するために、体系的な社会的内省と感情的想起と私が呼ぶものを使いながらね。最後は、物語として自分の経験を記述する。たいていの社会学者は、うまく書けないでしょうね。というの

は、彼らは、自分の感情や経験した矛盾を、きちんと内省しようとはしないから。皮肉っぽくいえば、彼らは、自分がかかわる世界をちゃんと観察していないわけ。自己エスノグラフィーが求める自分への問いかけというのは、やっぱりむずかしいのよね」

(134頁)と皮肉を込め三人称受動態を批判する。

オートエスノグラフィーは、「バルネラブルな自己というものを開示することになる」

(136)。エリスはオートエスノグラフィーのなかでも「再帰的エスノグラフィー」との関連を重視し、フェミニズムは自叙伝における「声」の存在を正統化することに、著しい貢献をしてきたと評価する。また、オートエスノグラフィーは「観察者を観察すること」できる。参加者の相互行為を含む過程を、研究対象の中心と見なす。再帰的エスノグラフィーの実践者にとって、「自らの感覚全体、身体、動作、感情、自己の存在そのものを活用すること」が目指され、これは「すなわち他者を知るために『自己』を用いることが理想なのである」という(138頁)。

「物語はどんな類いの真実を訴えているのか」とエリスはよく問われると言う。「しばしば、この質問は、懐疑や疑問、時には敵意さえも含んだ感じで、投げかけられる。・・・物語というものは、本来はない構造を生に与えるのだから、物語はしょせんフィクションだということになります。つまり、語りが基づく経験は、曖昧で不確かなものだから、語りが生み出す物語が、決定的であったり完全であったりすることはあり得ない、というのです。ゆがみのある記憶が言葉に媒介されるということを考えれば、語

りは過去についての物語を生み出すが、その物語は過去そのものではない、というわけです」と応答している。

また、オートエスノグラフィへの批判の一つに「個人の語りはロマンティックな構築か」という問いがあるという。「物語は、再編成であり、再論であり、創出であり、削除であり、修正なのです」、「物語は、人の生の事実をそのまま映し出しという中立的な試みではないからです。また、物語は、すでに構成されてしまった意味を元に戻そうともしません」(145頁)、「生きることは、語ることに先立っており、かつ生きることによって、語りから意味が導き出されるのです」(144頁)、「語りとは、生きることについて何事か語ることであり、かつそれは、生きることの一部なのです」とまとめる。

オートエスノグラフィを支えている知識論がある。それは、知識は人間の心とは関係なく存在するというはあり得ないということである。「あらゆる真理は、人間の表現するという活動に依存している」。「アーサー・フランク (Frank) が『傷ついた物語の語り手 (Wounded Storyteller)』で言ってるけど、重要なのは物語によって考えることであって、物語について考えることではない」、「物語によって考えるとは、物語と共鳴し、そこに自分を投影し、自分を物語の一部にしていくこと」なのだという。実証主義の研究者たちは、「バイアス、妥当性、適格性基準、操作性、統制変数、攪乱要因、モデル構成、再現可能性、客観性」という視点からオートエスノグラフィを批判する。そこで、エリサは「文学、文学的許容、想起的、バルネラビリティ、語りの真実、本当らしさ、相互行為、癒し」等の言葉を連発しな

がら、反論をしたという (162頁)。

オートエスノグラフィという描写を本格的に展開しなくても、「私」を介して社会を理解することは必要だと思い、先のような文章を書いたが、その意図はこうしたオートエスノグラフィというものの見方に根ざしている。量的研究と対比した質的研究のひとつともいえないと考える。社会構築主義的なパラダイムに立つと、たとえば「実証主義的な私」が成立することを指摘することができる。これを「数理統計学的な私」という。近代の生き方それ事態が科学技術によって支配的な物語となっていく様を描く、アイロニカルな表現である。フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、人々の生き方を画一的・効率的に管理することを目標とする政治の在り方を、「生政治」と定義した。人々によりよく生きよと命令する権力作用のことである。そこでは年齢構成、職業、収入、家族構成、健康状態等が数理統計的に把握され、その偏差を計り、ある範囲での数値として一定水準に保つことを目指して、医療・教育・労働や臨床等が実践されていく。そのための「生権力」が機能しているとする。統計学や社会調査による実証的研究が活躍する。オートエスノグラフィはこうした社会での自己のあり方をも視野に収めることができるので、単に量的研究と対比して存在しているだけではない。支配的な物語がそうであることをも包摂して記述する。観察者や観察の仕方を記述する。

IV. さらに大きなコンテキストのなかにある「私」

さらに、先の文章に続けて、もっと大きな

コンテキストで「私」が社会と出会うテーマ群がたくさんある。「私」が大きな不自由に出会うこともある。貧困や差別、暴力と虐待にまみれていくことだ。今の「私」は、偶然にもそうした人生を歩んでいないだけでも知れないと考えてみるには他者理解へとつながるリベラルアーツ的な想像力がある。この想像力は多元的な現実や羅生門的現実に生きている「私」の理解を要請する。多元的な現実・羅生門的現実とは、つまりパラレルワールドという社会的現実の存在である。この世界は複数の声から成り立つということだ。「私」のありようがこうした現実のなかで理解されるべきこと、つまり社会の学びには、他者への想像力が不可欠であることについて、「私」を起点と考えていくことが重要だろう。

なかでも紹介しておきたい「出生をめぐる社会問題」の様相がある。それは子ども問題そのものに社会が表現される事例である。たとえば中国の一人っ子政策についてのドキュメント映画「一人っ子の国」(原題は、One Child Nation、2019年アメリカ作品、監督は二人。ナンファー・ワン、ジアリン・チャン)を紹介しておきたい。

1979年に導入され2015年に廃止された一人っ子政策の内実を追う映像ドキュメントであるが、監督自身の同時代の中国人女性としてのパラレルワールドの描写である。中国系アメリカ人の監督自身(1985年生まれのナンファー・ワン)の同時代の出来事を探る物語であり、セルフドキュメントのようでもある。映像が追うのは一人っ子政策が実践されている現場である。登場する村人たちは衝撃的な実態を伝える。監督自身も「一人っ子政策」で生まれた中国人であ

り、アメリカで生活しながら自分の出生に関心を持ち、どうしてアメリカに移住したか、「私」をもっと大きなコンテキストで捉え直すこととした。

自分と同じような年代の人々の人生を追う。一人っ子政策に従わない人々には罰が与えられる。実力行使で、国の役人が女性を拉致して、強制的に不妊手術や中絶手術を受けさせたことも語られる。それでも生まれた女の子は捨てられる。「一人っ子政策」のダークな面そのものが描かれる。登場する人物はよくインタビューに応じたものだと思う。

村の助産師(84歳)が話す。何人の赤ちゃんを取り上げたか監督が聞く。「5~6万人。不妊手術と中絶手術をした」と。「不妊手術は1日20件以上した」「豚のようにひきずられてくる女性をたくさん見た」とも。村の家族計画委員は「中絶した赤ん坊は8~9か月で、取り出したときは生きていた」と話す。となると中絶はずいぶんと時間が経ってからのものだ。そうして殺された赤ん坊はどうなるのか。ある芸術家が登場する。その場面を絵にして残しているという。医療廃棄物用の黄色い袋に雑に押し込まれてゴミ捨て場に放置された赤ん坊の遺体をもとに描いているという。

男子が欲しい村民たちは、もし女の子が生まれてしまったらどうするかと問われる。捨てるしかないと語る。すると赤ん坊を捨てる人が現れる。何のために。売るためである。常態化した人身売買となる。この「業者」もインタビューに応じている。「一万人を売った」と話す。彼にとっては、殺される赤ちゃんを助け、子どもが欲しい人へと仲介しているだけで、それは「人助け」である。赤

ん坊は商品となる。外国へと国際養子として売られていく。多くは裕福な白人の養親である。養親たちはこうした経過の子どもであることは知らない。巧みに組織された中国の養子ビジネスが浮かびあがる。自身も中国から養子をもらっていた親が問題に感じて「リサーチ・チャイナ」という団体を組織した。

多くの村人がこれに関与している様子がわかる。「組織の命令だ、仕方なかった、静かにしておいてくれ」と対話を拒否する人が多い。監督自身の家族にもインタビューがなされているが、映画づくりをとおして溝が出来ていく。母親、祖父は言い訳をする。「国益のため」だったと。監督自身が家族から批判される映画づくりだ。しかしそれでもインタビューに応じる人がいるのは自責の念や罪の意識があるからだ。助産師は不妊の患者を専門に扱い、殺めてしまった命の償いをしているという。

人身売買で生き別れとなったアメリカのどこかに住む双子の姉を探すエピソードが描かれている。どのように二人は出会い、過去と向き合っていけばいいのか、言葉にできない。養子は人身売買と同じであることを知る白人の養親もつらい。制度としての「一人っ子政策」は終了したが、その負の遺産はまだ終わらないと映画は訴える。「私」とのパラレルワールドが劈開されていく。監督は同時代の移民女性たちの生を記していく。こうして「私」のパラレルワールドを描くことで世界が立体的にみえてくる。

出生をとおしてみる社会と家族。「私」の立ち位置が俯瞰されていく。この種のテーマはどの社会でもある。本マガジンで連載してきたテーマと重ねると、オーストラリ

アやイギリスの児童強制移民政策やアボリジニの子どもを強制的に白人化しようとした政策がある。「忘れられた世代」と「盗まれた世代」のことを本マガジンで紹介した。「私」が歴史と国家の政策でさらに翻弄されていく。

第1は、アボリジニ親子分離政策である。いわゆる白豪主義政策 **White Australian Policy** の典型的政策である。英語やキリスト教等白人社会に同化させるための教育を施す収容所にアボリジニの子どもたちが送られた。強制移住であり、有無を言わせない暴力そのものの政策であった。この白豪主義の政策は1910年から1971年まで続いていた。遠い過去のことではない。この子どもたちは、「盗まれた世代」 **stolen generation** と呼ばれている。この政策の犠牲や白人文化への融合政策、根強い人種差別等、負の歴史を傷あととしてもつオーストラリア社会にしばらく暮らしたことがあるが、その際にはこの問題の深刻さを実感した。

第2は、イギリスから強制された組織的な児童強制移民政策のことである。映画の『オレンジと太陽』も紹介した。「失われた世代」 **lost generation** である。最近まで、「大英帝国時代」の負の遺産が児童福祉をめぐって存在しており、その後遺症もまだ消えてはいない。第一の犠牲者であるアボリジニの子どもたちを「盗まれた世代」と位置づけ謝罪を行ったのは2008年だった。最近のことである。当時のケビン・ラッド首相 **Kevin Rudd** は「忘れられたオーストラリア人 **Forgotten Australians**」として謝罪した。2009年11月15日のことである。これらの詳細は当該のマガジンを読んでい

ただくとして、同じようなことはどこの社会にもある。

子どもをめぐる社会問題は、日本でも同じだ。アメラジアン／アメラシアン(Amerasian)と名付けられた人たちがいる。アメリカ人軍人の父とアジア人の母の間に生まれた子どものことを広く意味する言葉である。第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争で数千数万のアメリア系アジア人の子供がアジア諸国や太平洋の島国等、各地に誕生し、「混血児」として生きていくことになる。マイノリティとなり、時には差別の対象になった。日本でもその子供たちを受け入れた児童養護施設(神奈川県にあるエリザベスサンダースホーム)を訪問し、卒業生に話を伺ったことがある。日本、韓国、タイ、ベトナム、フィリピンには多数のアメラジアンが暮らしている。在日米軍の米兵と地元女性との間に生まれた子どもたちの生育過程は過酷でもあり児童養護施設のなかに学校が必要な程に差別を受けてきたとその卒業生は語っていた。

「私」が当事者でないとしたらその隣にあるパラレルワールドへの気づきが求められる。「私」が生きる家族とは異なる育ちを経験してきた人たちがいる。「私」の出生が社会的な網の目のなかの出来事だったと気づく。もちろんその当事者だった人も読者のなかにはいる。その隣人は他者として「私」に理解を迫る。他者への想像力がある。自己理解、他者理解、社会理解はループを成している。



参考：立命館大学教養教育センター企画案内

2020年8月30日受理

なかむら ただし

(社会病理学・臨床社会学・社会臨床論)

人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 7

アソブロックは 100 年企業を目指す!?

私が経営する会社のひとつ、アソブロック株式会社は、人の成長支援プラットフォームをビジョン（存在価値）とし、兼業必須、年俸宣言制、出社義務なしなど、独自性の高いルールで運営をしている。

アソブロックは9月が期末だが、所属員にとって「成長支援プラットフォーム」として機能していなければ存在価値がないとして、毎年夏前から、「来年も会社を続けるか？」という話し合いを始める。それはつまり、個々人がそれぞれの「今」と「これから」にキャリア構築の面から向き合う時間の創出にもつながっている。

今年はその話し合いに先立ち、アソブロック的に大きな出来事があった。9月末を持って、長年会社を支えてきたY氏が退任することになったのだ。なぜ大きな出来事なのか？ それは、Y氏が持つ影響力が大きいこととともに、多額の寄付者でもあったためである。

アソブロックも会社である。当然売上・利益がないと存続ができない。通常はそれを担保するために、事業を定め、皆で取り組んでいく。そのため、ビジョンも事業に紐づいていることが多い。しかしアソブロックは、所属員および関係者の成長支援プラットフォームであることを何より優先し、絶対価値だと考えるため、固定の事業を持たないという主義を貫いている。収益性の高い事業ができてしまうと、それを維持するためのオペレーティブな仕事が発生し、それがともすれば誰かの成長阻害要因になりかねない。もとい、個々人が「やりたいことを・全力で」やるのが、最も成長につながるの考えからだ。

そのため、会社存続に必要な運営費は、所属員の寄付でまかなわれている。寄付額はある程度、経験や年次で期待値が示されるが、いくら寄付するかも最終的には自分で決める。「個々人が会社名義でやりたいことを事業にし、そこで出した売上・利益から寄付をするわけだから、普通の会社と一緒にじゃないか」と言われることもあるが、概念的には全然違う。その証拠として、所属員は自らが作った事業を持ち出し独立、転職することもできるし、所属員が退社すれば紐づいていた事業も同時に消えてしまうことが多い。経営的にはリスクでしかないが、アソブロックの存在価値に照らせば、思考錯誤の末にたどり着いた、個々人の成長に最も資する仕組みなのである。

Y氏はアソブロックに参加して15年以上の古参で、あらゆる面で影響力の大きな存在だった。その退任である。Y氏の退任で具体的に検討が必要な事柄には以下のようなものがあった。

- 1：寄付額の大幅減少により、所属員で分配できる原資が減る
- 2：指導的立場で振る舞える頭数が減ることにより、若手の教育機会が減る可能性がある
- 3：影響力の大きなY氏の退社により、考え・行動両面において多様性が欠ける可能性がある

これらのマイナス面を補う方法を考え会社を続けるのか、あるいは会社を畳むのか、緊張感のある中で意見交換が続いたが、まず最初に全員で合意をしたのが「アソブロックの在り方は、今日的な社会における会社の在り方に一石を投じるものであり、無くしてはならない」ということだった。そして、先のマイナス面については、以下のような方針で回避していくことになった。

- 1：各自が年俸宣言時に状況を考慮し、宣言額をライフとバランスの取れる範囲で下げる
- 2：新しく若手4人で社内に「アソブラボ」という独立組織を立ち上げ、若手同士で研鑽し合える場をつくる
- 3：自社メディア【あ総研】を活用し、所属員各々が取材という形で様々な価値観に触れられる機会を創出し、会社はそれを支援する

アソブロックが改めてユニークだと思うのは、このような状況に応じた変容を、全員が主体的に提案し、行動に移せる点だ。例えば1の「報酬を、会社決定・指示による一律減額ではなく、自己判断により下げる」というのは、簡単にできることではない。なぜそれができるかと言えば、兼業必須により、収入がアソブロックのワンポケットではないことと、損得を超えて付き合いたい、維持したい組織になっているからだと思う。

思えばコロナが起き、プロスポーツ選手の中には報酬の自主返納を申し出た人が複数いた。報酬額が大きいからできることだろうと思いがちだが、アソブロックを見ていると、決してそうとも言い切れないと思う。

此度のコロナ禍は、人にさまざまな価値観の変容を促している。それに対し我々は、意固地にならず、譲れるところ、譲れないところを見極め、柔軟に対応していかなければならないと思う。私は当初、正直に言えば、「これで終わってもいいかな」と思っていた。それもまた、アソブロックらしいかと思ったのだ。しかし、文字通り全員が経営者感覚を持ち運営している全社会議を通じて、「この場所を絶やすのは罪である」「極限まで、どうすればこの考え方で組織が維持できるのかを追求し続けることに意味がある」と思い直すことができた。ピンチはチャンス、逆境から人は学ぶのだと、改めて思った。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な8つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。

団遊の組織論 ; <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論 ; <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに ; <https://goo.gl/bFQdpC>

カウンセリングのお作法

第二十四回

CONカウンセリングオフィス中島 中島(水島)弘美



子どもの不安に対する支援の姿勢

新型コロナウイルスの影響で、子どもたちの生活は大きく変わりました。

前回に続き、子どもの不安についてどう対応するかをとりあげます。

基本姿勢

カウンセリングの基本姿勢は、支援を必要としている人を理解して、受けとめることが重要視されます。

もしも、何かの心配事を抱えている人や子どもがいたら、それは、どのようなことについて、どのように気にしている、どんな気持ちになって、どう困っているのかを明確にしていきます。

周りにいる大人や支援をする人は、気にしていることを理解して、子どもを受けとめる

態度が求められます。

もちろん、それ程、たやすく子どもを理解することはできません。できる限り理解しようとする姿勢で臨みます。

今回の場合、コロナウイルスに感染したらどうしようということに気にしている子どもの例をあげて、考えてみましょう。

前提

そのまえに、前提として、人の行動特性において把握しておきたいことがあります。

人は、何か気にすることをなかなかやめられません。

あれこれ考えていることについて

「ハイ気にするのは終了！」

と自分でコントロールすることはできないのです。

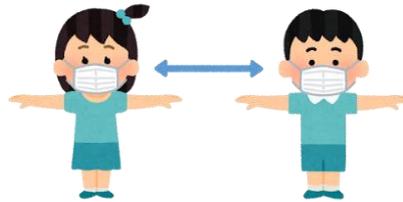
自分でなんとかできないから気になることが継続します。

気にするのは、本人の気質がもともと繊細だとか、神経質だとか、考えすぎだとか、気にすることの素因を追及したり、生活環境などの要因を探ったりして、明確にしたい気持ちになります。

それよりもまずは、人の行動パターンとして、自分の意志で何かをストップすることはかなり難しいことを確認します。そして、何かの行動を新たに始める方が容易に行動できるといふことも把握しておきましょう。

基本姿勢

気にしていることを理解し受けとめる



気になる～

ソーシャルディスタンス取っていない人が多い
コロナウイルスに感染したらどうしよう



「気になるのですね」



人は気にすることをストップするのは難しい
何か新しい行動を始める方がしやすい

★子どもの不安に対する支援の姿勢

「気になるのですね」 自然に不安が消えることも

神経症

心の病とか、神経症という言葉を目にした方も多いと思います。気にするということは、一般的にいわれている神経症の素地になっているとも考えられます。

(ノイローゼとは、ドイツ語で神経症という意味です。ただし、近年、神経症という言葉は使われることが減りました)

どう対応するか

「自分の顔や体形が変なので気になる、いやで仕方がない」

と話す子どもに対して、あなたはどのような態度で接しますか？

「そんなことないよ」

「変じゃないよ、気にしすぎだよ」

「心配しなくていいから、大丈夫だよ」

元気になってもらいたいと、つい、子どもを励まして、気にしないでいいよと、伝えてしまいがちです。

信頼している人から、大丈夫と言われることで、安心する子どももいます。

しかしながら、気にしなくていいといわれて、自分のことを理解してもらえないことがわかると、疎外感を感じる子どももいます。心配事がより深刻な場合ほど、そう感じる子どもは多い傾向にあります。

気にしている事柄に対して、受けとめる対応は、

「自分の顔や体形が気になるのですね」

が基本の姿勢です

ウイルスの話に戻します。

ウイルス感染を気にしている子どもへの対応は、

「ウイルスに感染したらどうしようと気になるのですね」

という態度です。

なんで気になるの？なんか言われたの？

追加で質問をするのも異なります。

たずねたいことがある場合でも、まず、あなたの話を確かに聴きましたよ、そのことが気になっているのですねと、受けたうえで、もう少し様子をきかせてくれますか？と、次の段階にうつっていきます。

健康とそうではない境界はどこ？

手洗いに費やす時間は？

洗わない	20～30秒	1分	3分	15分
感染を気にしない	時々手洗いを忘れる	丁寧に洗う	感染が気になる	

あいまい



感染が気になって外出できない
学校に行きたいと思っているけれど、
手洗いをしていると登校時間に間に合わない



★子どもの不安に対する支援の姿勢

生活に支障が出ているかどうかを見極める

健康との境界線

ところで、皆さん、ウイルス感染拡大予防のため、手洗い時間はどれぐらいですか？

一般的に二、三十秒が推奨されています。

丁寧に洗うと一分ぐらい、かなり几帳面に洗うと三分ぐらいかかるでしょうか。

あるいは、一度洗って、何かに触れたら再び洗う場合もあるでしょう。

手洗いを気にすると、費やす時間や回数が増加します。

例えば、不安な状態に陥っている子どもがいるとします。

一回の手洗いの時間が十五分以上かかる
と、朝なら、登校時間に間に合わなくなる
かもしれません。

帰宅後、長い時間手洗いをして、そのあと手指にものが触れないように、ラップシートを巻く、入浴時間が二時間以上になったなど、感染を気にする行動が増えるようであれば、注意深く子どもの行動を見ておく必要があります。

どこからが健康でどこからが健康でないのか境界はあいまいです。

ひとつの目安は、生活に影響が出るほど何かを気にすることが続いているかどうかです。

生活に支障がでるようであれば、専門機関を訪ねると良いと考えます。しかし、多くの子どもの場合、気にしなげらもなんとか登校したり、遊んだり、これまでの生活を継続し、自然に気になることが減少していきま

まわりの大人の配慮すべき点は、子どもが気にして繰り返している行動を無理に止めさせないことです。

たとえば、十五分手洗いをしているときに「いつまで手を洗っているの、いい加減にやめなさい、学校に行けなくなるよ」

などという対応は、かえって手洗いの時間が長くなると考えられています。

子どもは子どもなりのルールで手洗いをはじめ、納得するまで洗って、終了します。

その一連の行動を把握しながら待ちの姿勢で見守っていると、手洗い時間が少しずつ減少してくることがよくあります。子どもが本来持っている復元する力が出てきます。



「手洗いが 15 分もかかってしまう！」



納得するまで手洗いする



無理やりやめさせないこと



CON 子さん 心理カウンセラー

生活に支障がでるとは、例えば
手洗いをしていて登校に行くことができなくなる
家から出られなくなるなど
→その場合は専門相談機関へ

集団精神療法を

振り返る

藤 信子

5

前回の原稿を執筆した後、オンラインでのグループ体験やシンポジウム、大小の会議等に合計 11 回参加した。継続して PC の前に座っていた時間は、(間に休憩が入る場合も含め) 3 時間が上限だった。グループ体験や会議など内容は異なるし、グループ体験でもコンダクター (セラピスト) か、メンバーの違いは少しあるが、現在の時点での印象は、「オンラインのグループ (研修会・会議も含め) は疲れる」という印象である。これは私だけの印象ではないようで、秋にグループ体験の研修を予定しているが、講師との打ち合わせで、その講師もそう言われてい

た。この疲れは単にテクノロジーに馴染めないためだけではないのではないのか、そのことを考える時に、私たちのコミュニケーションについて考えることが出来るのではないかと思う。

オンラインでのコミュニケーションでは、五感のうち視覚と聴覚だけで状況を理解しようとする。前回オンラインの特徴をまず「気配と感じない」と書いたように、触覚、嗅覚などが伴わないのだ。スクリーン上に見えるものとスピーカーから聞こえる音から何が起きているのか、伝えられているのかを判断しなければならない。触覚、

味覚の近感覚、嗅覚の近傍感覚が働いていないと言える。視覚と聴覚という遠感覚しか働かないということについて、三星（2010）は「遠感覚は・・・その事物の空間における定位および認識を行っているのである・・・したがって「見ること」は「考える」ことである」（p76）と言う。触覚や嗅覚が効かないので、その点に関して見たり、聞いたりすることで認識して状況を把握しようとしているから、オンライン・グループは思考の部分がスペース・グループより忙しくなるということだろうか。それでオンライン・グループはより強く疲労を感じるのではないだろうか。成長の過程での触覚を通して安心感を得ることを体験してきていることは多いので、その感覚を急に視覚や聴覚で確かめたりするのは、そう簡単ではないだろうと思う。会議や研修会は一応おくとして、グループ体験はメンバーがそのグループへの安心感・安全感を持たなければ、自己開示は起こりにくく、そうすると、治療効果（トレーニングの場合も同様）は得にくいと言える。そのため、オンライン・グループのセラピストは、その環境—インターネットとかの—が参加メンバーにとって安心の持てるものであることに十分気を使わなければならない。

ここで集団精神療法（グループ）の構造に関して、振り返ってみる。グループがセラピーとして成り立つためには、この「集団精神療法を振り返る

（1）」に書いたように、グループの場でのコミュニケーションを重ねることを可能にするように、セラピストはグループの構造を作る。コミュニケーションが進むようにグループという「容れ物」を作る。容れ物だから内と外があり、それを分けるのがバウンダリーである。これは時間がちゃんと守られ、メンバーは決まっておき、それ以外の人グループの場にはいてこないことを保証しなければならない。これはグループセラピストにとって、まずしなければならない仕事となる。ところがオンライン上では、セッティングに関して、セラピストはコントロールすることはできない。時間はセラピストが一応オンラインをつなぎ、（という表現で良いのかどうか分からない）メンバーを確認し、入室許可を行う、ということはある。しかし各メンバーがどのような部屋から参加するのかは、コントロールできない。オンライン・グループを始める時に、セラピストは「他の人に話が聞かれないような個室」で、「公共のWI-FIはセキュリティ上、使用しないで」などという案内に書いている、しかし、スペース・グループのように同じ部屋に集まるのと違い、それ以上のコントロールができていく。

オンライン・グループを体験し始めて、生じた経験の中で、スペース・グループと比較して、困惑した目立ったことについておもいつくままあげてみた。少ない体験の中で、良かった思

うことは、距離を超えて参加できることである。7月に私たちの研究会主催のオンライン・グループを実施した時、遠隔地からの参加者が増え、いつもよりメンバーも多くなった。これはオンライン・グループだからこそ可能になったと言える。遠隔地ともオンラインで結ばれグループができるのは良いけれど、地球は丸いので、時差があるということも実感している。9月の初めに開催される Group Analytic Society のカンファレンスは、主催地がバルセロナであったが、COVID-19のために、オンラインでの開催となった。そこでのグループ体験の種類と時間帯を選ぶことになり、7時間の時差を計算しなければならなくなった。主催者としては、世界各地から参加者があるので、参加しやすい時を選べるように、2種類の時間帯を用意してあった。バルセロナの朝10時は、日本の夕方17時になる。グループ体験の時間は良いとして、それから講演を聴いたりしていると、23時とかになり、

私は眠ってしまうだろうと思った。家族とそういう話をしていたら、現地に行っている、時差ボケで眠くなることもあるじゃない、と言われた。行って時差ボケで眠くなるのは仕方ないとして、家のPCの前で眠くなるのは、なぜか損したような気になる、と思っている。

オンライン・グループをせざるを得なくなって、改めて知覚の特性や身体性の問題などを考えたけれど、オンライン上に適した感じ方などを獲得していくのだろうかと思いながら、セラピストを務める秋からのグループの準備をしている。

文献：

三星宗雄（2010）遠感覚・近感覚再考．
神奈川大学人文研究． 73-88.

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

九 子どもとのやりとり



家族援助あれこれ

「もしも、子どもからこんなことを聞かれたら」シリーズ、思春期編。

この種の問いに正解などあるはずもなく、これらは一つの例です。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許可をもらって木陰の物語と家族の練習問題から転載しています（ツッコミのイラストはフォトショップで作成）。

(6) 投げやり

もうダメ、無理！
どうせ頑張っても・・・



「でも、〇〇のところ
はうまくいっているよ、当分このま
までやってみよう」



今のままで
と言う選択！



(7) 無視

“無視”が怖い。どうすれば仲間に入れてもらえるだろう

この世で最強の特技を知ってる？それは、一人でやっていけるってこと。自分にしかできないことを淡々とやって、その特技に磨きをかけよう

同調力不要の潔さ！



(8) 怒り

先生の言い方が超ムカつく。いまからナシつけてくる！！



① 腹が立っている間は何もアクションを起こさないこと。怒りだけ伝わって肝心の言葉は届かない。② 落ち着いたら、まず前振り。“こんなことを言ったら笑われるかもしれないけど”、“こんなこと言うときっと怒られるだろうけど”など。③ 腹が立った、頭にきたという表現は避けて、へこんだ、落ち込んだ、哀しかったという言葉で伝える。④ ちょっと練習しよう



練習が
キモ！

(9) 学校ぎらい

学校に行きたくない。
学校と聞いただけで
胸が苦しくなる！



学校では**①** 規則的な登校、**②** 競争しながらの学習、**③** 協調的な付き合いの3Kが必須だと思ってない？（ウン）3つともやる必要なんてないんだ（ウン）そのうち一つだけで充分だって、知らなかっただろ？

（ウン）じゃあどれか一つ、選べる？

（ウン）**①** 日中の規則正しい生活リズムを実行する、**②** ほかの方法で学習する、**③** 学校以外の人と交わる場にでかける。

“ウン”の
リズム！



(10) 孤独

誰かに聞いて欲しいときがあるけど、実際、話するとイライラして自分を傷つけたくなる



一緒に悲しんだり、根ほり聞きたがったり、説得や束縛したがる人は避けるべきだと思う。さらっと薄く付合える同性は、どうだろう？

話す相手を選ぶこと！

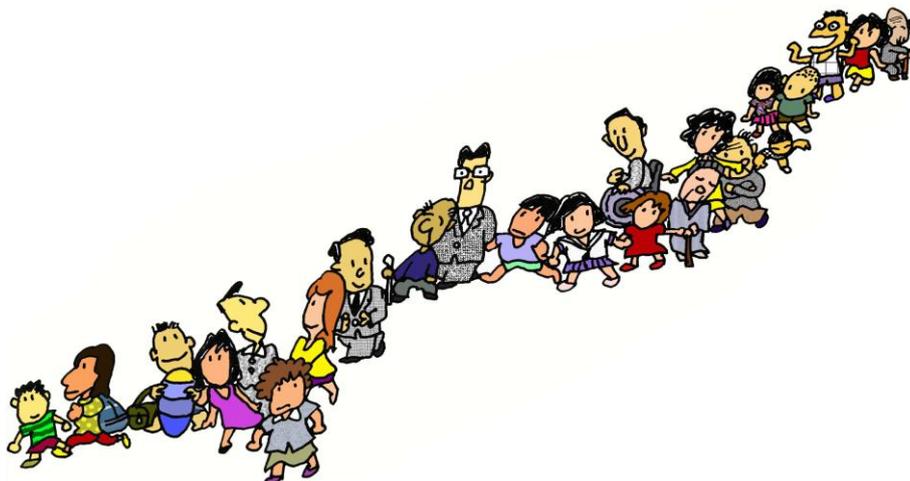


Family

History

(1)

団士郎（執筆）／団いどむ（調査）



私の家族にフィールドワークの得意な者がいた。次男のいどむだ。現在43歳、二人の子どもの父親で、妻と四人で芦屋市に住んでいる。大学を卒業する時、選択して証券マンになった。彼の就活は山一証券が破綻した年で、「この時期になぜ証券を希望するのか？」と面接でも聞かれたらしい。「こういう時期には、業界の様々な問題が洗い出されて、改革に動くだろうから、そこに興味がある」と言ったとか、言わなかったとか。いずれにせよ、大卒新入社員の7割以上が退職すると言われ、たくさん就職して離職する業界に自らの選択で進んだ。

その決断に至るとき、もう一つ取れていた内定の話が聞かされた。どう考えても大手が倒産したばかりの業界より、まさに成長の一途をたどるであろう業種の大手。意見を聞かれればそちらを薦めただろうが、私は何も言わなかった。

そして大手証券会社に身を置いて、水が合ったというのか、めざましい活躍ぶりは、その企業のOGにあたる、私の友人の妻から、「社内報の記事で見たけど、息子さんご活躍やね」と伝聞で初めて聞かされた。そして10年経って退職した。どうするのかなとは思ったが、所帯も持っていた息子に何か言う筋もなかった。その後、外資系の証券会社で働くことになった。

退職にいたる経過はいろいろ聞いたが、基本的に本人の選択が第一に尊重されるモノだという私のスタンスは変

わらない。そして住まいも関東に移り、日本橋のオフィスで勤め始め、東京ディズニーランドの花火が毎日見えるマンションで家族4人暮らしていた。その後、異動で関西在住になって今に至っている。

いどむが高校生の頃のことだ。誕生日プレゼントの希望が「三國志人物事典」と聞かされたとき、「エッ？事典を読むのか？」と驚いた。いろいろ調べるのだと聞いたとき、私の物事へのかかわり方とは大いに異なった接方法の子なのだと思った。

團家先祖代々

父や祖母が團家の事について、誇らしそうに語るのが私は嫌だった。どう考えても、自分は大きなことをしているわけではない普通の人達だ。その口から、「團の家は士族の出やからな・・・」のフレーズが、私が子どもの頃しばしば飛び出した。活発なおばあちゃんだったし、面白い親父だったが、團家の話題は鬱陶しかった。

そういう出自、身分的なものに優越感を感じる人を私は毛嫌いしていた。根拠のない優位性を自慢するような在り方がうっとうしかった。今だって世間にはそういう感覚の人が少なくない。だからこの歳になっても、私の中には相変わらずそんな感覚がある。

考えてみるとこれは多分に、戦後民主教育を受けた産物でもあったと思う。人は皆平等、チャンスは公平に開かれているべきだという、やや過剰かとも思うが、基本的に間違っていない感覚に今もとらえられているのだろう。

しかし一方、それが理由で我が家の過去、歴史につながるものに全く関心を向けてこなかったのは、大した主張とも言えない。知らないだけだし、面倒くさがりなのだと言われればそうだ。

祖父母が亡くなっても、父母が亡くなっても、私はこの部分にあまり関心が持てなかった。

生前は不義理ばかりしておいて、亡くなったとたんに関心あることを言い出す下世話さを嫌悪している。「そんな気があるのなら、生きている内に工夫すれば良い！」と思うのだ。相手が死んでから、センチメンタルに自分のことを言いたいように意味づけている人を見るとウンザリする。

それは仏事にまで及んでいて、私世代の世間並みの法事と称される事への関与も我が家は少ない。自宅には昔からのそこそこのサイズの仏壇があり、位牌がいくつも収まっている。両親、祖父母、他にも誰か、あったかどうか、じっくり中を見たことがないので承知していない。

私が子どもの頃には年中行事だったお盆のお寺からのお参りも、途絶えて久しい。同じ大津市内に墓のある寺への寄進は口座振り込みできちんと済ませているが、訪れることも、経を読みに来て貰うことも少なくなった。

この青龍寺という曹洞宗の寺、実は私が幼い頃、育った場所だ。浜大津の湖岸沿いにあった自宅(父は召集されて不在で、祖父母と私の母の三人暮らし。私はまだ生まれていない)から、強制疎開で一家は、戦後しばらくこの寺の一室で暮らした。戦地からここに帰って、私を授かった両親と祖父母と暮らした。

その後、妹も生まれ、私の確かな記憶が生ずる前、その後の生活の場になる神出車路町の長屋に引っ越す事になった。

現在の我が家の不信心は、私達夫婦の合意の結果なのだが、とにかくそういう習慣に変更になって久しい。だからそもそも團家について、知らないことが多すぎる。それは團家に留まらず、私の母の出身家族である藤竹家に対してもそうだった。

早い時期に職業軍人を退役して銀行勤務だった(らしい)母方祖父。私の名付け親だと聞かされている祖父の葬儀に出たとき、私はまだ学齢前だった。とはいえ母方おじいちゃんの名前を、今回思い出そうとしても正確には知らなかったと

いうのは、いささか奇妙だが実際にそうなのだ。

両親も亡くなり、子ども達も皆独立して、今では妻と二人になったが、この家に引っ越してきたのは三〇年以上前。

大阪・高槻の、その後商店街と化した住宅地の古家から現住地に引っ越す時、一時的な仮住まい期間があったせいもあって、母はずいぶんたくさんものを捨てたようだ。もし、なんでも鑑定団のような発想があったら、押し入れにあったのをチラッと見た記憶のある箱に入った揃った焼物や、木箱入りの塗物の揃いは取り置いたかもしれない。しかし母はそういうことに執着がなかった。だから不要なもの、場所を占めそうなものはどんどん捨てた。

そしてごく一部残してあったのは、ちょっと捨てるわけにはいくまいというようなものだけだった。その中に、今はもう預けてしまったが、日本刀があった。私が子どもの頃、端午の節句には必ず金太郎の武者掛軸とこの刀が飾られた。

私の息子、特に次男(いどむ)がそれらに強い関心を持った。それまでも物置と化した我が家の一室に残されている小さな古道具の裏書きを見て関心を示したりしていた。

そんなわけで私のファミリーヒストリーは、NHKスタッフではなく、次男を調査員に長い旅に出ることになった。それは予想以上の時間と空間の旅になった。

ファミリーヒストリーの探し方

「家族カウンセリング」を主業務に長年、家族と関わってきた。家系図・ジェノグラムを扱うことも多く、私自身のそれも、聞き及ぶ範囲では知っていた。しかしそれ以上の、TV番組で有名人のルーツを探るような調査は、専門家がそれなりのノウハウを持って、様々な事実、出来事にたどり着いているのだろうと思っていた。

自分で探ろうなどとは思わなかった、その可能

性や、大変さに想像が及ばなかった。私は昔から宝探しが嫌いだ。潮干狩り程度の可能性があれば参加するが、それより曖昧な捜し物はしない。落とし物だって、私はなくした段階でほぼあきらめる。だから、そもそもこんな調査はしない。

そこでまず、どうしてこんな調査をする気になったのか？どんな道筋で事実遭遇するのか、掘り起こされた膨大な資料をどう探し当てていったのかを調査員いどむに聞いてみた。

いどむへの聞き取り 第一回

「そのそも、なぜこんな事を始めたの？」

「興味本位に最近、初めて参加した伊吹の家(妻の実家／いどむには、母方祖父母)の集まり(若葉会という名の伊吹一族親類縁者の会)で、家系図なんかが好きの人が、家族史を書き残しているのを間近で見た。

その会で参加者からの近況挨拶の際に、伊吹文明(国会議員)さんの弟さんが、「我が家の歴史をいろいろ調べようとしたが、上世代の人にはもう聞こうにも聴けない。だから自分一人では限界がある。もし我が家のことでご存知のことがあったら、話して欲しいと語るのを聴いた。

その時は、こういう関心もありなのだなと思って聞いていた(この方も、それから二年も経たずに先日亡くなってしまった)。これらを通して、書き残しておかないと、聴けば分かる話も、他の者が調べようとする大変になるのだと思った。

團の家は、團というのも変わった名前前で、若狭國小浜藩の武士で、お殿様から拝領の刀があるとは聞いていた。だが、我が家にはそういうことに関心を持っている人は誰もいない。誰も調べたことがない。「よおーし！」と思った。

キーワード「きたしおやのせいがんじ」

地元大津の青龍寺の前に、福井県小浜市に先祖の墓があって、残したままになっていた墓じまいにおじいちゃんに行った話は「土郎さん」(私を子ども達は皆、こう呼んでいる)の思い出話として聞いた事があった。そこでいつも語られるのが「きたしおやのせいがんじ」。

寺の名前が分かっているのなら、今も変わらず同じ場所にあるだろうと思ってネットで調査した。もう一つはっきりしないところもあるが、ぶっつけで行ってみるかと思って、小浜の近所に用事があったときに「せいがんじ」を探しに行った。

しかしざ行ってみると、一地方都市であっても想像以上に寺の数が多く、しかも「せいがんじ」の漢字も不明で、もっと簡単に分かるやろうと思っていたのは外れた。

この時、探して、尋ね着いた「せいがんじ」は、誓う願う寺の誓願寺。ざっと市内の寺リストを二三回眺めたところ、「せいがんじ」と読めそうなのはここだけだった。この寺はネット検索でも出てきたのでそこに行った

「そこは、きたしおや ではないのか？」

「ちがう、小浜市内だけだ。」

そこで、「他にせいがんじという名前の寺は小浜にないですか？」と尋ねたら、誓願寺自体、住職はおらず、他の寺と兼務の住職さんで、同じ浄土宗の寺だから、昔からの資料も引き継いだ、ここまで過去のことは詳しくない。

同じ小浜市内なら、そう広いところでもないが、「せいがんじ？」聞かないなあと言われたので、ないのかなあと思った。

それで2018年の春、京都の「ぼむ漫画展」期間中に会場に出かけて、土郎さんに確認をしたわけ。

ところが「きたしおやのせいがんじ」は間違いのないという。ならば漢字を教えてくださいと言うと、「漢字は知らん」。でも、「きたしおやのせいがんじ」は間違っていないと言う。

こっちとしては、現地に行っても該当する寺はなかったから、勘違いしてるんじゃないかとかと思っていたが、そうではないと断言するので、結論としては、廃寺になっていたから、ネット検索しても出てこず、地元の人もなくなった寺などそんなに知らないのかなあと。

「その時さ、浄土宗だと言ったでしょう。ウチは禅宗、曹洞宗やんか」

「そうそう」

「それはなにかなかったん？」

「その事は、お寺さんにも聞いた」

すると、「それはおかしい。ウチじゃないんじゃないか？墓を移すときに、宗派を変えることはない」と。

でも、寺自体がないので、自分の中で、寺がなくなっているという想定がなかったので、どう調べようかなあ、もう少し手がかりがないと・・・

そこで考えたのが、移してきた大津／長等の青龍寺。こちらに記録があって、どこから来たかが分るんじゃないかと。

そこで、大津／青龍寺に行った。

「いったのか！」

「そこで今の住職の奥さんに、『団です。お世話になっています』と訪問主旨を告げた。

お墓を移されたのは三代上の住職の時になります。上世代なら記録の記憶も当たりがつくが、その上のお祖父さんの代のことは、私も見当がつかない。残ってる可能性はあるけれど、膨大な記録なので見つけられる自信はない。住職にも聞いてみますが・・・、と言われた。

「一応お願いします」と依頼して終えた。

その後、電話連絡で、やっぱり分からなかったと返答があった。ああ、そういうものですかと電話を終えかけた時、向こうから、お宅のお仏壇に過去帳というのがあるはずだと言われた。

仏壇の中など探ったことがなかったのも、そういうものがあるのも知らなかった。そこには誰そ

れの死亡や、お寺の記録などがあつたりするから、一度調べてみられたらといわれた。

そこで「そんなことらしいわ！」と典ちゃん(いどむの母親／私の妻)に、仏壇あさってみても良いかと尋ねると、私も一緒に見ると言うので二人で探してみたら過去帳が出てきた。

そこには明治、大正とか、もっと前、天保とか書いてあって。知らない名前がいっぱい書いてある。

「私も知らん」

そこで清巖寺の漢字が分かった。

「せいがんじで合ってた？」

「合ってた！」

で、あるのは分かったので、ネット検索してみるが、名前は出てくるが、情報が何もない。電話番号もない。住所と市内お寺一覧に名前だけ。

ネットマップで調べても、清巖寺が書いてある地図と、書いてない地図がある。

小浜市内で漢字も同じだから、おそらくここだろう。しかし一〇〇%ではない。場所も小浜市北塩谷でもある。

この後どう当たりを付けようか、行くにしても確認してから行きたいと思った。そこで小浜市役所に電話した。

「我が家の墓のあつたお寺、北塩屋の清巖寺に連絡が取りたいが、ネットに電話番号もないので、状況を知りたいのですが」

すると係に回します、と繋いでくれて、「その寺は廃寺になっていて、住職はいらっしゃらない。近所の曹洞宗のお寺が管理している。連絡されるなら、そちらにされるのが良いと思いますと、寺の電話番号を教えてください。

そこで電話をして、清巖寺の件ですがと尋ねた。すると、「はあはあ、任されてます。詳しくはないですが。小浜藩士の寺だったので、どんどん檀家さんが減って行って、だいぶ前に本堂が耐震基準の関係で危ない、何とかせなあかん。しかし改修費を出せるような檀家さんがもういない。建物を

放置しておくのは危険ということで、取り壊して更地にすることになって。今も、お墓はいくつか残っているけれど、お墓参りに見えているのも十戸くらいですかね。ほとんどいらっしゃらない。

昔、我が家の墓がそこにあつたんですが、その場所に立ち入るのはかまいませんか？

ああ、何もありませんけど、どうぞということ。

では、そこに今度行かせて貰おうと思います、ということになった。そんな感じで、ほぼ間違いなからうと。

ファミリーヒストリー ツアー

この調査報告会ツアーに、みんなを連れて行くのに、空振りではなんなので、他に調べられることはないかと思い、小浜藩士だったならと、ネットで調べていたら、藩士の調べ方というのがあつた。

そこには、小浜藩は長く酒井家が治めていたので、全八巻の小浜市史の中に、昔の武家について書かれたものがある。そこに藩士の名前一覧などがあるので調べたらよろしい。

そういう調べ方をネットに書いている人がある。なるほど、こういう関心で検索する人のために、書いてくれている方があるのだなあと思った。

それで見てみたら、名前が載っていた。

「え、團の？」

それが家にあつた家系図に登場する名前と一致。和暦で書かれたものを西暦に治して、一覧をつくってみると、おおむね一致する。

下の名前まで書いていなくて、役職名で書かれたりもしているが合致する。

そこから家の歴史探索が始まった。

「こんなものがあつたのか？」

「家の仏壇にあつた」

これに関して以前、土郎さんは、明治の頃には家系図付きで家柄を売買したりがあつた。由緒あ

る家柄とか家系図なんて、たいがい嘘じゃと言っていた。確かにあの頃にはそういう話もあって、可能性はある。結論はわからんけど。

ただ、そういううさんくさい商売モノの家系図だったら、こんなに小浜藩史に出てくる細かい事実と、きっちり合ってなくても良いだろうと思った。だから一定信頼できるのではないかと思う。他から出てくる事実のと符合度も高い。

小浜市史に載っているものだけだと、それを作った時に、各家に資料提供を求めた可能性はあるから、それで出したら一致するのは当たり前という可能性もある。

清厳寺、仏壇の過去帳、家系図、そして小浜市史が現在の到達点。

ちなみに、家にある家系図をどうやってつくったのかを見てみると、その前の家系図がある。

それがこれ。一〇〇年前につくっているが読めない。ぼろぼろになっていて、それを作り直してくれている。それは團雄二郎さんというひとが作っている。そこに、五士郎(士郎の父)が付け加えている。そこからあたりまでは、関心を持っていたと言うこと。

それが誰も関心を持たなくなって、ほったらかしだったのを今、掘げて見ていることになる。そこから明らかにしたのがこれ。

「そうかあ。なるほどなあ。モノを調べるのって、何を調べるのかが分かっている資料をあたるのは出来るけど、行ってみて名前が違うとか、ないのかなと、そこでお前は、粘れるんやね。

私はあかんは、なんや、ないのかと思ってあきらめてしまうなあ。宝探して、一番苦手や」
「確かに宝探しやけど、そこになんか分かったら、無駄やったと思うんじゃなくて、その事が分かったと思うから。他を探せば良いんだと思う。徳川埋蔵金みたいなもんや」

「なるほどなあ。信じられんは、絶対、私はようやらん。体質の問題か？」

「過去帳が大きいな。これがなかったら、先の展

開が見えにくかったやろうな。一緒に家の由緒書きが残っていたのも大きいな。それに、家に残ってなくても、探せるのは、名前が珍しいとか、何かそれなりの有名なモノが含まれていることやね。藤竹(士郎の母の実家)の家は、陸軍関係で検索できる。ネットで紳士録が明治の頭くらいから定期的に出ている。

兵籍簿

次男の調査がきっかけではあるが、同時並行的に私の中に潜在していた関心が動き始めた。それは兵籍簿というものの存在だ。

私の父は中国で終戦を迎え、帰国するのに一年以上待って戻ってきたとは聞いていた。そこは中国内陸部の都市で、敗戦後の軍隊の食料調達はなかなか大変だったと聞いた記憶があった。

太平洋戦争末期に召集され、出征した父の軍隊話を、まとめて聞いたことはなかった。私が聞こうとしなかった記憶もないが、関心を持って聞こうとしたこともなかった。だから話さなかったのかもしれない。

同世代の叔父や叔母達とは、面白昔話風に当時の事を語りあっていたが、あまりの笑い話にどこまで本当のことなのか？と疑っていた。

どんな昔話も丸ごと信じられることはなく、人には語ること、語らないことがあるだろうと思っていた。歴史を個人が語る時に起きる記憶違いや、無意識的修正なども承知している。

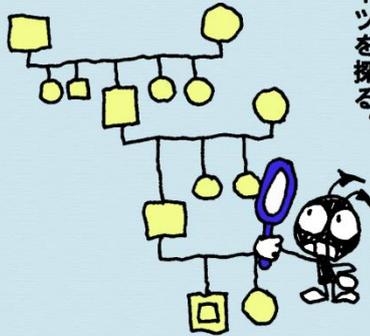
そんな父の軍隊生活に関心を向けることになったのは、兵籍簿というものの存在を知ったところからだ。そしてその時、父はもう亡くなっていた。父自身もみたことはなかったに違いない兵籍簿。今にして思うが、これを見ながら話が聞けたら、どんな昔語りになったのだろうか。

木陰の物語「Family History(兵籍簿)」

NHKのテレビ番組が話題だ。

家族のルーツを探る。

本人も知らなかった、
家族の歴史をさかのぼる。



様々な歴史的事実之初めて
ご本人が触れることになる。



団 士郎

「知らなかった、
そんな話は
誰も教えて
くれなかった」

苦しくも、ときに感動的な
物語が発掘されることがある。

これは、たまたま日本だけで、
のことではない。



数年前、ある調査でロンドンに行った時のことだ。国立公文書館を訪ねた。



そこでは多くの一般の市民が、自分のルーツを探して古文書をひもといていた。



移民の多い国である。



教会などに保管された自分の出生記録を、系統的に家系図に書き起こすことがブームになっていた。



私は最近、ちょっとしたきっかけで、兵籍簿というものを知った。



記録?

最近のものはすぐありません!n?云々

先の戦争の時、軍務についた者の記録が、各都道府県庁に保管されている。



配偶者、子、孫などの身近な人間が、自分の父親や祖父の戦争中の動きについて資料提供を受けることができる。



子どもの頃、昔話として戦争のことを少しは聞いたことがある。



しかし日本史の1ページとして、軍隊の行動のことなど知らない。



一市民の父が、兵隊として
どう動くことになったのか、
知りたいと思った。



県のHPをみて
電話で問い合わせ、
兵籍簿の閲覧
申請手続きをした。



私の兵籍簿
の存在を
Telで確認



海軍は
厚生省が
管轄なの？

三週間ほどで返信が届いた。

昭和19年の
応召から入隊、
朝鮮半島への移動、
そして満州を経て
中国への進軍。



長江沿いの
街で迎えた終戦。

1年後、浦賀港に戻って
来るまでの行動記録。

20	3	22	一等兵	武昌陸軍病院入院
5	6	同日		退院
9	14			江蘇省隊入隊
21	6	15		停戦協定公布
7	6	7		上海撤退
7	12			浦賀

体が弱く、
丙種合格で
終戦間近の
召集だったと
言っていた通り、
配属早々の入院。



そして退院。
転属、また入院。



父から聞いていた通りの、
病院生活の繰り返しで、
終戦を迎えている。



そこから帰還船に
乗るまで一年間、
敗戦地での生活。



昭和21年7月6日、
上海港を出て、
13日に
浦賀港上陸。



昭和21年7月15日、
召集解除とある。



私の誕生日は、ベビーブームと
呼ばれた昭和22年5月20日。

父が帰国して
10ヶ月と
7日後で
あることを、
初めて知った。



団塊世代の
同級生達は
みんなこんな
日本史を
背負っている。



あなたのお父さん、あるいは
お祖父さんの兵籍簿も多分、
保管されている。



こんな時代である。
我が子のことを
思いながら、
父や祖父の
生きた歴史に
目を向けてみるのも
興味深いのでは
ないだろうか？



まずは県のホームページで
兵籍簿についての検索から、



我が家のFamily Historyをー



おわりに

終戦後、地理的關係だろう、シベリア抑留はされなかったが、中国内陸部に残され、戻ってくるのに1年近くかかった父の中国での足跡が兵籍簿を照会する事で明らかになった。

召集を受けて日本陸軍に属したことがある者は、基本的にその応召以降の足跡が、時系列で記録され、除隊に至るまでの経過が記録として残されている。記録の緻密さたるや、本人の記憶よりも正確なのでは？と思うほどである。

兵籍簿は資料請求手続きによって、本人、子、孫など親族に開示される。陸軍所属は各都道府県庁が、海軍所属は厚生労働省が保管していると聞いた。(私の親族に海軍はいない)

赤紙で召集された日本人の多くが陸軍に属していたから、その子孫である私たちは、召集されたときの本人の本籍地都道府県庁所管部署に問い合わせれば、先ずその記録の存在有無を確認できる。

私の場合、滋賀県庁の代表番号に電話した。用向きを話すとすぐ、該当係に繋いでくれた。多くはないがコンスタントにある照会のようで、丁寧に事情を聞いて説明してくれた。

父の名前、当時の本籍地、私との続柄などを問われるままに電話で話した。当時の父の本籍はうろ覚えだったが、おそらくそこだろうという話し方をした。最近、NHKTV番組「ファミリーヒストリー」の影響もあってか、対応も手馴れたものだった。

そして、いくつかのやりとりで、父の兵籍簿が存在することが確認できた。後はそれを踏まえて、正式に資料請求手続きをすれば良い。滋賀県のホームページには、その請求用紙がアップされている。ダウンロードして記入し、明示された宛先に郵送すれば、二、三週間で届くとあった。わざわざ出向いて手続きすることもないのである。

わかれば簡単だ。すぐに請求すれば良いのだ

が、まだ少し躊躇う気持ちが消えなかった。

理由を考えてみるに、このようなものを開示請求すると、そこにどのようなことが書かれているのか。ひょっとして父が明らかにはしたくなかったこととか、話したくなかったような記録に遭遇する可能性も否定できない。それは息子である自分にとっても脅威である。

だからパンドラの箱なのだ。実は兵籍簿そのものの存在を知ったのも、関心を持ったのも、最近のことではない。だが、なかなか取り寄せてみるという行動に移すには時間がかかっていた。

戦後日本の学校教育が、日本史で聖徳太子の時代や、豊臣秀吉の話ばかりしている内に、近代史に突入直前で学年末になってしまうのは、義務教育の未必の故意的なものだろうと、ずいぶん後になってから思うようになった。

もし、近代史をきちんと教えるつもりなら、新しいところから歴史を遡ってゆけば良い。授業時間の関係で大和朝廷や弥生以前は自習して置いてくださいになってかまわない。

明治以降を司馬遼太郎、等の小説家まかせなのは、いかがなものか。坂本龍馬の武勇伝を楽しんでいる分には、自分の歴史とはつながってこない。

兵籍簿には私に直結する近代史が記録されていることになる。日本の近代に目を向けるという事は、自分の家族史を抜きにはできないのだろう。

社会的養護の新展開 11

—戦争と子どもたち—

浦田 雅夫
京都芸術大学

戦争が終わって75年。戦争体験者から話を伺う機会も限られている。そう思っていたとき、中日新聞（2020年8月14日付）に掲載されていた武田倫江さんの記事に心を奪われた。そこで、早速、武田に連絡をし、無理なお願いをして、滋賀県長浜市のご自宅を訪ねた。

小学校時代、無意識に戦争は正しいと思っていたという武田さん。授業のときに書いたという絵や作文を拝見しながらお話をうかがった。



「子どもだからね、やっぱり先生に褒められたいというのもあるし、褒められるのよね。日丸をしっかりと書いて、戦っている絵を描いたら。」

絵の裏からたまたま見つかった作文には、こんなことが書いてあった。小学2年生のときに書かれたものだ。

いまは、だいとうあせんそうです。だいとうあせんそうは、だんだんはげしくなります。そして、日本がますます、かちます。工兵たちは、冬でも春でも夏でも、秋でも、海や川へはまって橋をかけたり、とうちかをこしらへたりして、はたらいてくださいます。き兵は馬にのって、せんそうをして、くださいます。ほんとうに、ありがたいことです。私は、小さいときから、兵たいさんが大すきです。

「子どもはね、純粹だからね。言われたら、それが正しいと思ってね、従うのよ。」
「だって、みんな、お国のためにがんばっているんだから。そんなふうに思っていたの。」



「戦争中はね、食べるものがほんとうになかったの。お弁当を持って行くのだけど、粗末なもの。週に何日かは、日の丸弁当の日もあったわ。そういえば、いま、思い出したけど、お弁当の時間になったら運動場へ走って出て行く子がいたわ。きっと、お弁当を持ってこられなかったのだろうね。ひもじい思いをしたのだね。」

私が、現代の社会的養護のお話を少しさせていただくと、武田さんは、長浜駅に集まっていた戦災孤児たちについて語られた。

「戦争が終わってね、負けるわけがないと思っていたのに、負けてね。何もかもがひっくりかえってね。親を亡くした子どもたちもいっぱいいたの。ぼろぼろの服を着てね、駅に集まっていたね、それはそれはかわいそうな格好をしていたの。昔は野犬狩りというてね、そんな孤児たちをトラックに乗せて施設に連れて行ってね、でも、また逃げて駅に帰ってくる子どもいたみたいよ。孤児の子どもには何にも責任もない。ほんとうにかわいそうだった。」

もう 75 年も昔の話。まだ 75 年前の話。物心ある当時の子どもたちは、もう 80 歳以上。記憶を記録にとどめて、次に伝えないといけないという思いが強くなった。

42・コロナ休園から再開へ

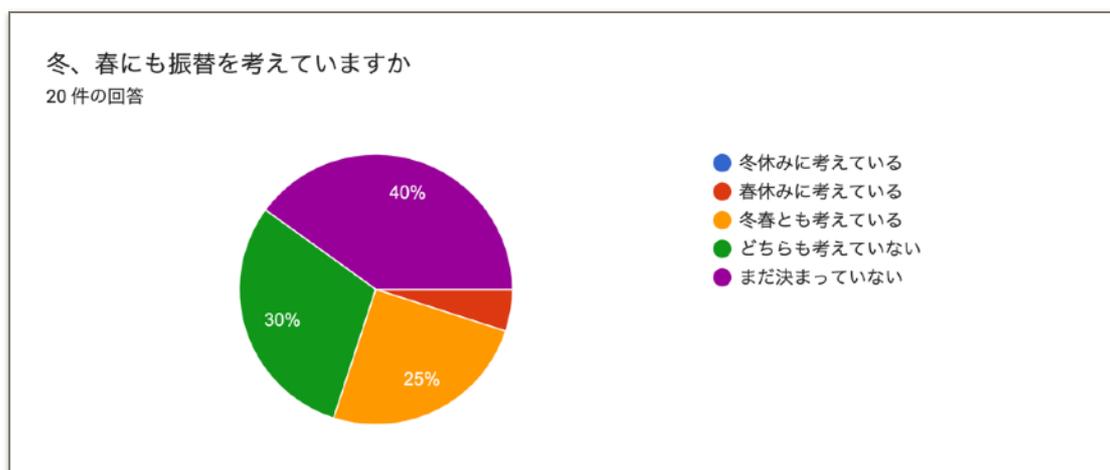
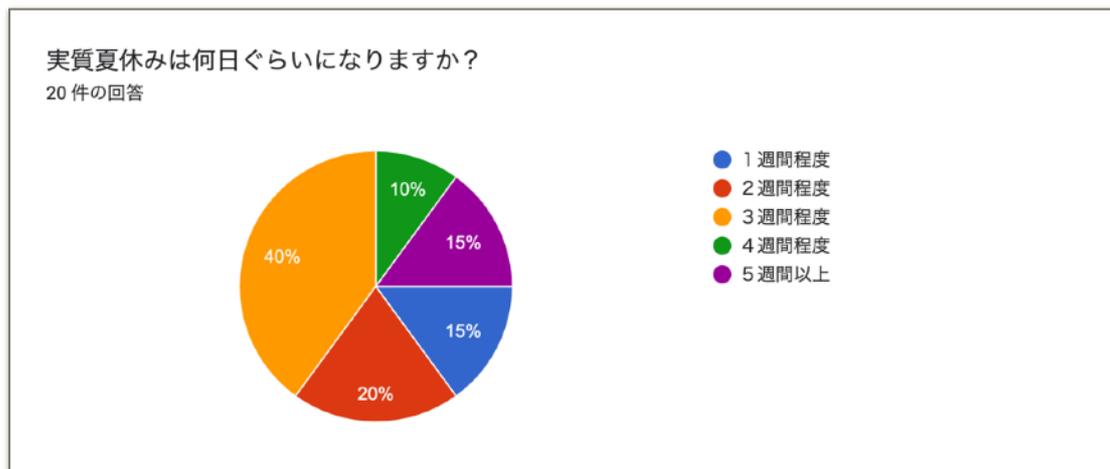
原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

前回は、コロナ休園までの経緯と休園中に
行ってきたホームカリキュラムについて
レポートしました。今回はその続編になりま
す。前回の原稿が5月末〆切でしたので、送信
した翌日（6/1）から平常保育が再開されたの
でした。

前回は書きましたように、私立の幼稚園・こ
ども園は行政からの要請はあっても強制力は無
く、基本的には各法人で対応を決めるため、再
開時期や方法、夏休み期間の扱い（教育日数）
などは文科省から発出されるコロナ対応の文書
に沿って決めていきます。

ちなみに、幼稚園の教育日数は、年間で39
週を下回ってはいけないという規程がありま
すが、「柔軟に考えて良い」という通知が出され
たため、どの園も同様に約2ヶ月休園したけど
振替についてはかなりバラツキがあります。教
育日数確保にウエイトを置くか、感染予防にウ
エイトを置くか、各園の考え方が見えてきま
すね。逆に「市からの文書は毎回判断を委ねら
れて困惑している」との意見も園長から出て
いて、保護者や教職員と板挟みになって、園長一
人でコロナ対応を決めていかなければならぬ
重圧も感じていたようでした。

◆沼津市内20園の夏休み期間アンケート



◆より詳しく結果を知りたい方はこちら <https://forms.gle/NXgxG1M3kq4TnVmc7>

以上のことを踏まえて、一例として原町幼稚園の対応をレポートしていきます。

登園再開のお知らせ

2020.5.18.原町幼稚園 園長 鶴谷圭一

分散登園で段階的にはじめます

やっと幼稚園を再開できる目処が立ちました。まだまだ状況によって変更はあると思いますが今の段階で再開についてお知らせできることを嬉しく思います。自宅で我慢の多かった子どもたちですから、再開したらとにかくいっぱい遊んでもらいます！子どもにとって遊ぶことは食べることと同じくらい心身の発達にとって必要不可欠なものです。だから、約2ヶ月のブランクを経た子どもたちの発達も心配です。

ここから新学期が始まるので、私たちも子どもたちの成長をしっかり見ながら急ぎすぎずに…でも3月までには例年通りの子どもたちの発達を保障すべく、工夫をしながら園生活をスタートさせていきたいと考えています。前向きに考えましょう！今までにない新しい一年の始まりです！

園での感染予防は後半に記載してありますので、通園に不安を感じたときは保護者の判断で出席停止を続けて頂いても結構です。6月にお休みする方は5/22までに連絡アプリの「幼稚園への連絡」をお願いします。月単位の出席中は給食費、バス代はかかりません。

休 園中は、入園式、始業式以来会えていない子どもたちとの繋がりをどう作っていくか試行錯誤とできることを探す毎日でした。その中でテレタイムやYouTube、キッズリーナーでの担任との時間を持って頂きありがとうございます。もともと保育がしたくてこの仕事に就いた先生たちですから、子どもたちに会えないつらさを抱えながらも皆様からのレスポンスを励みにしながら続けていました。皆さんの家庭でもご苦労された面があったと思いますし、逆にたっぷりの“おやこんぼ”時間を過ごせて家族の絆が深まったという話もあると思います。〔げんきっこ〕の活用もありがとうございました。「タイヘンだったねー、でも楽しいこともあったヨ♡」なんて話をワイワイ喋れる時が早く来てほしいと心から願います!!

さ て、園再開にあたって保護者の皆さんと共有しておかなければならないことがあります。緊急事態宣言が解除されたとはいえまだ感染リスクは残っています。『**幼稚園に登園させるということは感染リスクもある**』という事実です。

幼児にとって信頼できる大人や友だちとふれ合い、実体験によって経験値を重ねていくことが発達につながるの、学校のオンライン授業のような形は年齢からいって無理なのは皆さんもご承知のところ。たとえば「なかよくしましょう」と先生に言われて知識をインプットしたとしても実際はわかっておらず、実際に友だちとケンカをして仲直りしたとき、みんなの気持ちが同じ方向に一致したときに感じる「これが仲良くするってことなんだ」と理解したときにほんとうの経験値になり得るのです。それが幼児の発達の仕方です。

な ので、幼児を家に閉じ込めておくことは発達機会を逃すことになり、登園すればある程度の接触が発生することは避けられません。そこをご承知頂いた上で、通園させて頂きたいと思ったり、お互いに感染させないために家庭での感染防止もとても重要になります。残念ながら100%の予防はあり得ません。もし発生した場合でも誰かのせいにするのではなく、冷静に受け止めて適切な処置にエネルギーを注いでいきたいと思ったり、対すべきは人ではなくウイルスなのですから。

再 開当初の園生活は、まずはクラスと担任の先生と顔合わせして、クラスの友だちを再確認するところから始めていきます。

★年少組：ウォーミングアップをもう一度やる気持ちでスタートします。担任の顔を覚えてもらって、クラスの持ち物の位置の把握や、園生活のリズムを定着させていきます。

★年中組：同じように、新学期が始まる段取りを踏んで、新しい友だち関係や先生との関係を構築していくことに力を入れていきます。

★年長組：エネルギーが有り余っていること、運動不足も心配ですので、その解消を心がけながらお泊まり保育への活動なども少しずつ入れていきます。

4. 5月できなかったカリキュラムの実施

- ・こいのぼり製作→6月に実施予定です。
- ・母の日・父の日プレゼント製作→1学期末に持ち帰れるように取り組みます。

具体的な計画

5月中は午前保育、AB分散登園を実施します

A登園日=つき・ゆり・いちご・うさぎ組			B登園日=ほし・ばら・めろん	
月	火	水	木	金
5/18 休園→	19	20	21 午前保育 A登園日	22 午前保育 B登園日
25 午前保育 A登園日	26 午前保育 B登園日	27 午前保育 A登園日	28 午前保育 B登園日	29 午前保育 全員登園
6/1 平常保育 給食開始	2	3 弁当日	4	5 4,5月誕生会

《服装について》

- ・分散登園の服装は、全園児遊び着、体操ズボン+カラー帽子で登園して下さい。
- ・6月から、キャラTorポロ、体操ズボン、麦わら帽子で登園になります。
(年少さんは麦わら帽子納品次第カラー帽子から切り替えます)

《送迎と園バスについて》

- ・保護者送迎は今までと同様ですが、園庭・駐車場での密な立ち話は避けて下さい。
- ・保護者は園内には入らないようお願い致します。
- ・バスの運行は平常のコースを走ります。乗る人数が少ないので若干早く着くこともありま
- す。
- ・バスに乗るときは基本的にマスク着用をお願いします。
- ・感染予防でバスをキャンセルされる方は、各自送迎して下さい→バス不要連絡必要
(バス代は5月分はいただきません)
- ・6月にバス通園をキャンセルされる方は、登録内容変更届が必要になります。
5/26までにご連絡ください。

《預かり保育・あそびっこについて》

- ・あそびっこは仕事を休めない方、医療・社会インフラに従事している方を優先に、家庭の事情で必要な方のみご利用下さい。利用される方はお弁当持参

- ・登園日で無い日にあそびっこを利用の園児は、クラスとは別に朝からお預かりします。園バス利用者は乗車可能です。あそびっこの申込と同時にその旨もご連絡ください。（連絡が無いとバス停を飛ばしますので注意下さい！）

《感染予防について》

■家庭での対策

- ・検温カード&門での手指消毒を今まで通り実施。
- ・平熱が高い子どもは37.5度、低い人は37度を目安にお休みをお願いします。
- ・熱がなくても咳や鼻水がいつもより多い場合、だるそうにしている、腹痛など体調不良がある場合は登園を控えてください。
- ・家族にも、発熱や体調不良がないかご確認ください。
- ・家族の行動履歴を把握しておいて下さい。（行動履歴カードをご活用ください）
- ・子どものマスク着用は、咳や鼻水が出ているときは必須。それ以外は任意です。
- ・外で遊ぶとき、運動するとき、暑いときはマスクは外すように促します。マスク着用する場合は記名をしっかりとして下さい。
- ・職員も同様に予防対策を行います。マスクは表情を見せる必要があるときや、外での活動時は外すこともあります。

■園での予防対策

- ・保育園との交流はお泊まり保育以外は行いません。（とりあえず1学期中）
- ・活動や行事は極力3密を避けて行います。
- ・保育室は開放を基本とし、換気をしつつ、ドアや窓を閉める必要があるときは次亜塩素酸水・アルコールでの噴霧、消毒をまめに行います。
- ・子どもに、うがい手洗いの習慣をつけていきます。
- ・過度にこども同士の接触が見られる場合は距離をとるように促します。
- ・フリー職員が定期的に接触場所の消毒&拭き取りをしていくとともに、保育後の保育室、おもちゃなどは次亜塩素酸水もしくはオゾンにの一定時間の噴霧により殺菌を実施します。（保育室には光触媒を施工してありますので+紫外線電球活用なども行います）

◎園で感染者、濃厚感染が発生したときは、当事者のプライバシーを尊重しつつ必要な情報を迅速にお伝えします。慌てて噂や不確かな情報を拡散しないようご注意ください。（園の閉鎖、公表については保健所や市の対策課と相談の上ケースバイケースで行います。）

《給食について》

◎給食のスタイルは大きく変わります！

数クラスでサンカフェに出向くことをやめ、各クラスで間隔を開けて昼食をとります。幼稚園に食器を洗浄保管する設備がないことと、他の人の食器に触る機会を減らすために準備をお願いします。

▶給食の日は、空のお弁当箱、お箸セット、コップおしぼりを持たせてください。

- ・ごはん、おかずを各々のお弁当箱に職員が配膳しますので弁当箱にごはんとおかずが3～4品入るように13cm×18cm×5cm以上が理想です。できれば細長いものは避け、四角いものをお願いしたいです。タッパでも構いません。
- ・記名は弁当箱のフタと本体の両方、お箸などにもお願いします。
- ・汁物は園のおわんを使います。

※以降「今後の予定」は省きます。

6 月からの園再開後は、上の園便りでお知らせしたことを、さほど変更せずに8月末迄の3ヶ月間順調に活動を進めることができました。沼津市自体に感染が広がっていないという幸運や、教職員や保護者の皆さんの健康管理にも支えられたことは言うまでもありません。

- ・毎日の検温カードの提出
- ・入園の際の手指の消毒、日々の手洗い
- ・教職員の体調チェックと検温
- ・バス車内のマスク必須と指定席
- ・外来者、保護者の入園制限
- ・毎朝、放課後の除菌作業・・・などなど

□ コロナ前と比べてやる作業が増えました。感染予防はもちろんですが、園内でコロナ感染が発生したときの誹謗中傷や風評被害がおこることも恐怖なのです。これはどの園もどの施設も同じだと思いますが、職員も園から感染を発生させてはいけないとプライベートでの生活もかなり気をつけて過ごしています。

再 開してからの、子どもたちの様子をおつかいで報告しますと、年少児は体力のついていない子どもが目立ち、すぐに疲れたり集中力が無くなったりする様子が見られました。園庭で遊ぶ時間をとりつつ（長雨でなかなか取れない状況もありました）室内でも身体を動かす時間を意図的に設けて体力をつけてもらいました。

年中、年長児については休園の影響はそれほど見られず、再開を喜んで普通に友だちや先生とふれ合っていましたので、カリキュラムを予定通り進めることができました。

ただ、保護者の方がコロナに神経質になっているごく数人の子どもについては、登園時にしくしく泣いたり登園を渋ったりというような様子が最初の頃見られました。

子どもたちの運動不足による体力の低下などは7月後半には解消してきて、1ヶ月遅れの音楽会なども催すことができました。

子どもたちの日々も、手洗いや感染予防が定着したけれど、コロナに関して必要以上にピリピリした様子が無く、子ども同士のふれあいも新しい生活様式に適應してきたという印象です。

1 学期の活動中でいちばん緊張して綿密に計画を立てたのは、年長組の「お泊まり保育」でした。1泊2日で、バスに乗って90分ほどの朝霧高原へ行っての様々な野外活動と宿泊。「じぶんのことはじぶんでやる！」という目標のお泊まり保育は、子どもたちの経験として貴重で、この活動を通して自立心が高まる様子を何年も見てきただけに中止にはしたくありませんでした。宿泊する県立朝霧野外活動センターとのコロナ対策ガイドラインなどを盛り込んでの話し合いや、活動する養鱒場や牧場との調整を経て、なんとか実施の運びとなったのです。一週間以内に熱が出たら一発アウト！という職員も年長児の家庭も緊張の中、全員がクリアして行くことができました。しかも体調管理が良いものですから誰も体調を崩しません。こんなことははじめてのことでした。

2 学期からは、少し制限を緩和して保護者の参観や、外部講師のレッスンを再開したりして次の段階に移行したいと考えています。

参考になったのは、朝日新聞8月25日朝刊23面に掲載されていたウイルス学の専門家・西村秀一さんのインタビュー記事です。西村さんは「学校の感染対策、ずれてないか」と提言されており、感染予防に明け暮れて疲弊している教育現場や、子どもたちへの活動制限へ疑問を呈されました。

ゼロリスクを目指すより、リスクをどこまで許容しながらウイルスのことをよく知って、疲弊しない程度に効率良く感染対策に努め、子どもたちの学びのほうにちゃんと力を注ぎましょう。という内容で、まさに今必要なことだと共感しました。

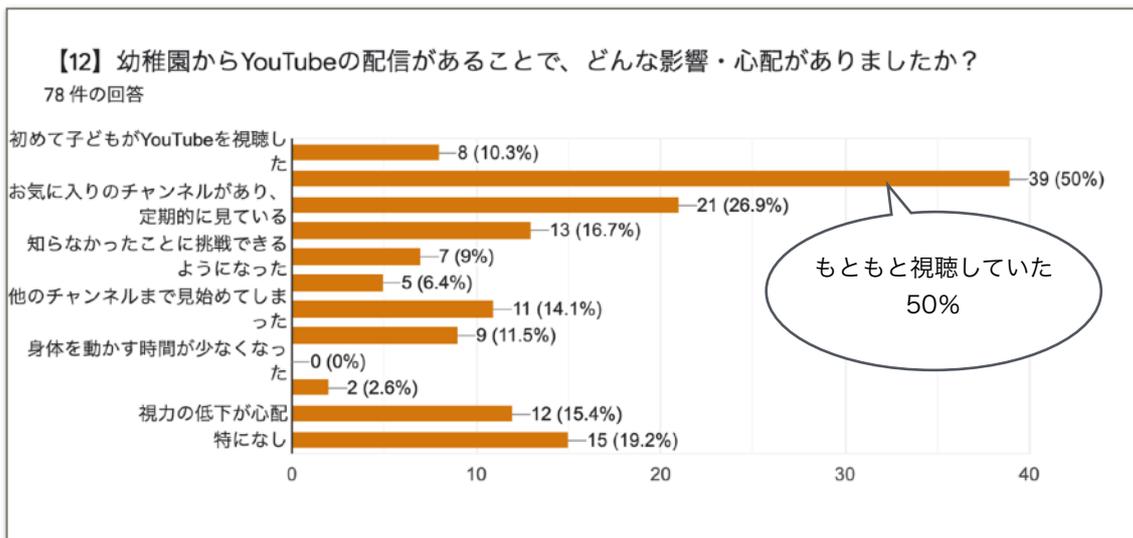
<https://digital.asahi.com/articles/DA3S14597410.html>

（有料会員記事）

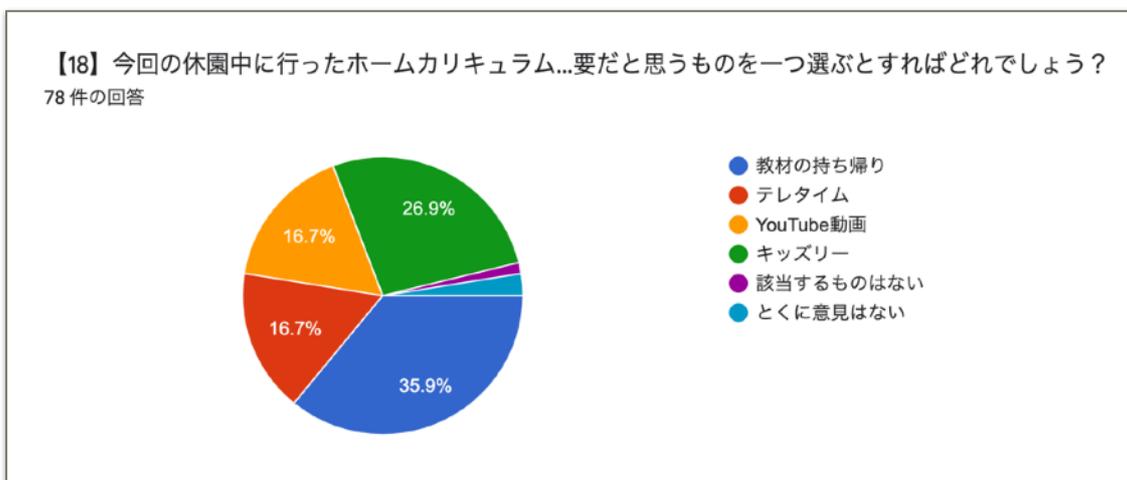
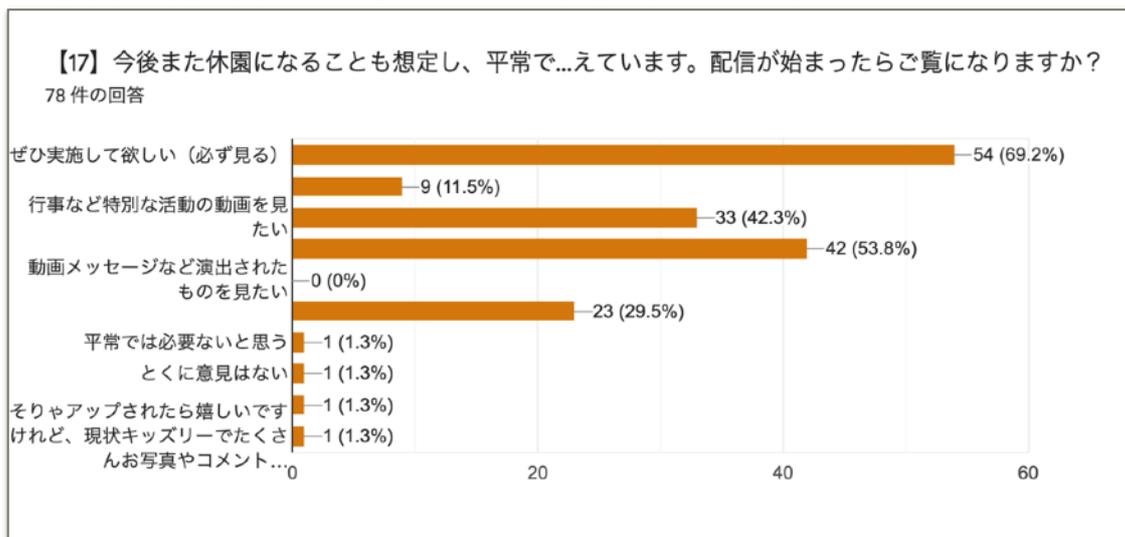
有料会員記事にはより詳しいインタビューが掲載されています。（転載できませんのでご了承下さい。）

再 度休園となったときの参考のために、休園について園の保護者にアンケートをとりました。問17では今後の動画活用について質問してみました、わりと期待値が高いですね。

問18では休園中に実施した内容について評価していただきました。オンラインでの一方的なコンテンツの配信より、双方向のやりとりができる教材が若干高かったようです。



【17】 今後また休園になることも想定し、平常保育でも参観ができない状況になっていますので補助的に動画を使えればと考えています。配信が始まったらご覧になりますか？



◆詳しい回答はこちらからご覧頂けます。 <https://forms.gle/MYSLkNM4NBnobiLAA>

前 回ご紹介した園で使えるICT環境について、追加でご紹介します。

6月以降の3ヶ月にもいくつか増えて、園でも動画配信のための撮影機材や編集ソフトのスキルアップはグーンと進みました。類似するアプリはたくさんあって、ここでの紹介は僕らが使っているほんの一部です。園の子どもたちに直接使って教育活動を行うことはほとんどありませんが、業務としては多くの通信系のアプリも今後活用していきたいと思えます。

①	 https://www.buscatch.com/	有料	<p>幼稚園でいちばんベースに使っているソフト。 毎日の出欠やバス利用、バスの到着メール、預かり保育の申込、園からのお知らせやアンケートなど、アプリやメールを使っての通信手段が多機能で、重要な連絡でも手紙を添付してお知らせできるので、保護者へのほとんどの通知はこのアプリを使って行き、職員も内容を共有します。</p>
②	 https://kidsly.jp/index.html	無料	<p>無料バージョンの一部機能を使用しています。プリントで発行していた「クラス便り」を廃止し、各担任のブログ形式でその日の活動の様子を写真とコメントでお知らせし連絡事項も発信しています。そのほか園便りや学年だよりなどのプリントをPDFで配信しています。 父母だけでなく祖父母や親戚も申請すればどなたも閲覧できるようにしています。連絡帳機能を使用して保護者からのリアクションもできるようにしました。有料版は①バスキャッチと同様の機能があります。</p>
③	 http://www.nanotybp.jp/	有料	<p>園日誌、保育日誌、研修や業務の連絡など、職員間の連絡に使います。時差勤務の職員もこのツールで連絡事項を共有します。ちょっとした連絡を素早く伝えたいときは、職員LINEを使用します。</p>
④	 https://tenorino.app/ 沼津市私立幼稚園協会（一般公開可）の動画を見るにはインストール後に施設コード [865368583] を入れて下さい	無料 スマホ用なのでPC不可	<p>YouTubeでの動画配信をこちらに移行しています。園生活の様子を配信したり、絵本の読み聞かせ、歌、運動会の踊りなど、いろんなコンテンツを配信します。9月には敬老の日のイベントに祖父母を呼べないので、学年別に動画メッセージを配信する予定です。 メリットは簡単に動画をアップできることと、施設コードを発行するので限定した保護者など、限定グループを設定できることです。YouTubeにも限定公開がありますが、URLをいちいち知らせなければならぬ手間がかかります。てのりのはアプリさえインストールすれば、アップの通知もいきますのでとても便利です。無料で使えるのもとても良いので、園だけでなく沼津市私立幼稚園協会でもイベントで使っています。</p>
⑤	 https://twitcasting.tv/	無料	<p>保護者が園に来園できない状況で今までどおり行事活動を行いたい、その様子を見せたい！というときにいちばん適しているアプリを探したところツイキャストでした。もともとTwitter、Instagram、Facebook、LINEといった主要SNSは、園の情報発信に使っていますので検討したのですが「限定公開と長時間のライブ配信」が目的なら見る方のスマホにアプリがインストールされていて「合い言葉」を入れるだけで簡単にログインできるということで、8月の盆踊り会で使ってみました。結果は上々、2時間弱の子どもだけの夜の盆踊り会の様子を中継できました。今後も保護者会の様子など一方向から配信する場合は便利です。双方向のコミュニケーションが必要なときはZOOMでしょうか。</p>
⑥	 https://go.chatwork.com/ja/	無料	<p>幼稚園の職員間は③のnanotyを使っていますが、沼津市私立幼稚園協会や、プロジェクトチームと一緒に仕事をする場合のメールに変わる連絡方法として便利に使っています。 グループ分けができるので、それぞれの団体、チームごとに連絡の履歴をまとめて読むことができるのがメリットです。ファイルの添付もBOXという無料ソフトを使うとより便利にできます。</p>



原町幼稚園 園長 鶴谷圭一 (59)
HP : <http://www.haramachi-ki.ed.jp/>
MAIL : office@haramachi-ki.jp
Twitter : @haramachikinder
Instagram : haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら

気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | | | |
|------|------------------------|------|-------------------------------|
| 第1号 | エピソード (2010.06) | 第22号 | 〔休載〕 |
| 第2号 | 園児募集の時期 (2010.10) | 第23号 | 大量に焼き芋を焼く (2015.12) 2019 |
| 第3号 | 幼保一体化第 (2010.12) | 第24号 | お話あそび会その1 (発表会の意味) |
| 第4号 | 障害児の入園について (2011.03) | 第25号 | お話あそび会その2 (取り組み実践) |
| 第5号 | 幼稚園の求活 (2011.06) | 第26号 | お話あそび会その3 (保護者へ伝える) |
| 第6号 | 幼稚園の夏休み (2011.09) | 第27号 | おもちゃのかえっこ (2016.12) |
| 第7号 | 怪我の対応 (2011.12) | 第28号 | 月刊園便り「はらっぱ」 (2017.03) |
| 第8号 | どうする保護者会? (2012.03) | 第29号 | 石ころギャラリー (2017.06) |
| 第9号 | おやこんぼ (2012.06) | 第30号 | 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 |
| 第10号 | これは、いじめ? (2012.09) | 第31号 | 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12 |
| 第11号 | イブニング保育 (2012.12) | 第32号 | 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03 |
| 第12号 | ことばのカリキュラム (2013.03) | 第33号 | 〔休載〕 (2018.06) |
| 第13号 | 日除けの作り方 (2013.06) | 第34号 | 働き方改革・一つの指針 (2018.09) |
| 第14号 | 避難訓練 (2013.09) | 第35号 | 働き方改革って難しい (2018.12) |
| 第15号 | 子ども子育て支援新制度を考える | 第36号 | 満3歳児保育について (2019.03) |
| 第16号 | 教育実習について (2014.03) | 第37号 | 満3歳児保育・その2 (2019.06) |
| 第17号 | 自由参観 (2014.06) | 第38号 | プールができなくなる!? (2019.09) |
| 第18号 | 保護者アナログゲーム大会 (2014.09) | 第39号 | 跳び箱 (2019.12) |
| 第19号 | こんな誕生会はいかが? (2014.12) | 第40号 | 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03) |
| 第20号 | ITと幼児教育 (2015.03) | 第41号 | コロナ休園 (2020.06) |
| 第21号 | 楽しく運動能力アップ (2015.06) | 第42号 | コロナ休園から再開へ (2020.09) |

福祉系 対人援助職養成の 現場から^④

西川 友理

元気になったA君

「先生！」

「わぁ、お久しぶり！元気だった？」

夏休みに入ったキャンパスに、不意に数年前の卒業生A君が訪ねてきました。彼については、1年ほど前に、職場で自分らしく動くことが出来ず、行き詰まり、仕事を辞めたい等と言っているらしいという噂は聞いていました。ところが今日はなんだか朗らかな様子。彼いわく、今でも上手くいっているとは言い難いけれど、なんとかスランプを抜け出し、やっと前を向けるようになりつつあるとの事。

短大時代の思い出話やコロナ禍での園の対応、大学の対応、他の卒業生についての近況など、マスク越しのソーシャルディスタンスを保ったおしゃべりは尽きません。

「…で、結局、学生の時にいつもつるんでいた男子仲間のうち、僕以外は皆、保

育から離れちゃいましたよ。」

ちょっと残念そうなA君です。毎年何人かは男子学生が保育士として就職します。そして、何人かは保育の現場から離れていきます。

そんな話を聞いたたびに、

「ああそうだよねえ、保育園ってやっぱり女性が多い社会だからねえ…男性っただけで、やっていきにくいところもあるんだろうねえ…。」

とっていました。

保育現場の男性の扱い

しかし、ハタと振り返ってみると、女性が多い社会であるゆえに何がマズかったのかという具体的な話や、男性が少なく女性ばかりだからという事が直接的な原因で退職したという話を、卒業生本人から聞くことはないように感じています。「女性社会だから、大変なんで

すよ」という話をする男子卒業生も少しはいるのですが、じっくり聞いていくと、人間関係や個人の適性など、「それ男性だから、というわけじゃないよね…？」という理由を話す卒業生が多いのです。

一方で、就職活動に際しては、実は結構具体的な男性差別の話聞くのです。さすがに露骨に「うちの園では男性は採用しません」と言うようなところはありませんが、ここ数年だけでもそれを匂わせるようなことを言われたというエピソードは、就職活動中の学生からちらほら聞いています。

「うーん、うちは、今まで男性しか雇ったことないのよね…あ、別に男子がダメってことじゃないのよ、ただ、今まではね、ないのよねえ…。」

「うちの園、男性の更衣室ないのよ。園内は大人の男性が働くことを想定せず作ってあるから…。」

「保護者さんの中には、うちが女性ばかりだから安心とおっしゃる人もいて…男性職員が入ってきたら、またそれ用のマニュアルみたいなのも、作らなきゃなあ…。」

これに対して学生曰く、

「いや、それ、今オレの目の前で言う？！っていうようなこと、平気で言うんですよ！」

それを横で聞いていた友人たちも、

「何その“わかるでしょ、察して！”みたいな対応！」

「行く必要ないない、行かんでええ行かんでええ、そんなとこ！！」

とブーイングです。

10年ほど前には、実習ですら男子学生

お断りという保育園もあったという話も聞いたことがあります。

もちろん、男性保育士を積極的に採用している園もあります。男性保育士の割合が比較的多い園には、女子会ならぬ男子会を作っているところもあるようです。そんな園では「やはり父性と母性両方ある事が大事」「男性は、力仕事やダイナミックな遊び方という分野で威力を発揮してくれるし、ありがたい」と、大変重宝される様子。

かくして、もともと男性保育士を受け入れている所は、より男子学生が入りやすくなっていき、そうでない園はますます受け入れが難しくなる、ということになります。

ですから、男子学生が就職活動をする時には、「自分の保育観にあった保育をしている園か」「法人規模はどれくらいか」「給与や休日はどうなっているか」などという事よりもまず、「男性保育士を歓迎してくれる園か」「男性保育士が全職員中何%在職しているか」という事をチェックすることになります。

就職試験前の園見学から帰ってきた男子学生はよく「男の子なんだからいざれ園長、副園長になってもらいたい。そのつもりで採用するからね」と言われてきた、と興奮気味に報告に来ます。

「スゴイ、俺、ビックリしました。頑張ります！」

そうかそうか、受け入れてもらえるところでよかったね、と思いつつも「男性は男性らしく力仕事やダイナミックな

遊びを」とか「男性なんだから、いずれは園長候補になってほしい」といった言葉の端々に、強いジェンダーステレオタイプ（人格、特性、能力、社会的役割、行動などについて、その社会でその性別に対して“当たり前”と考えられている画一的な思い込み）を感じます。女子学生が就職試験前後に「いずれ園長候補に」などと言われた、という話は聞いたことがありません。正直、なんとも座りの悪い思いはあります。

保育士の中で男性が占める割合

厚生労働省が出している賃金構造基本統計調査によれば、平成30年の時点で、保育士のうち、女性が21万6220人であるのに対し男性が1万3400人のことです¹⁾。つまり、保育士全体のうち、男性は約5.8%しかいません。20人に1人くらい、実感として確かにそれくらいだと思います。

ここでふと、そういえば現場職員だけでなく、園長先生も女性が多いけれど、男性の園長先生ってもう少しいたんじゃかしら、と気付きました。園の管理職的な立場の方が集まる会合に時々参加しますが、そんなに男性が少ないということはない印象があります。

そこで、保育園の一覧が園長名付きでインターネットに公表されている自治体を探しますと、わずかに見つかりました。これをもとにおそらく男性だと思われる方の名前をピックアップし、各自治体での男性の園長先生の割合を計算してみました。中には名前では性別が判別

できない方も2～3名いらっしゃったので、正確ではありませんが、ざっと把握してみようと思い、やってみました。

すると、ある都道府県（都道府県ランキングで見ると、人口数は半分より少し上、人口密度で言うと下から3分の1くらいのところにある県です）にある保育園の園長先生は、41%が男性でした。また、ある都市（人口40万人ちょっとの市です）では、36%が男性でした。園長名付きの保育園一覧は私がざっと探した限りこの2つの自治体でしか見つかりませんでした。厚生労働省の発表している男性保育士率とははるかな格差があり、大変驚きました。でも確かに、体感的にはそれくらいの割合かなあという印象があります。

ある園の先生にこの話をしたところ、「そりゃあ、同族経営で長男が継ぐ、ということがあるんじゃない？経営や運営についてもやっていかないといけないし、現場の運営は保育をずっとやってきた女性でOKだとしても、経営の方はそういうわけにはいかないでしょ。」

と言われました、いやいや、確かに保育園の園長は保育士でなくても資格としては問題ないのですが、このご時世に、経営は男性の役割だといわんばかりのその考え方もかなりアナクロです。

管理職的な立場には男性を、ということところにも、ジェンダーステレオタイプを感じます。

男性の相談しにくさ

職場でのトラブルや退職後の進路の

あり方など、就職してからも相談に乗ってほしいという卒業生が時々学校に来ます。ところがこれについても、圧倒的に女子が多いように感じています。

この文章の冒頭に「女性社会だからそのしんどさをあまり具体的に聞いたことがない」と書きましたが、もしかすると、出身校の教職員に対してしんどさを口に出すこと自体が恥ずかしいという思いがあるのかもしれない。また、「保育園の男性保育士というのは、そういうものだから」と飲み込んで、問題にすることではないと考えているのかもしれない。あるいは、私が女性だから、女性社会がしんどいということを男性として言いにくいなのかもしれない。

男性の卒業生は、どちらかというところ「あの時しんどかったんですよ」としんどい時期が終わってから、話に来ます。それは保育分野を離れた場合でも、また自分の働ける場所を見つけて、なんとか呼吸ができる様になり、朗らかな顔になってから、ようやく学校に顔を見せに来ます。そういえば、冒頭のA君もそうでした。

男が弱音を吐くこと、相談することは、恥ずかしいこと。なぜなら、男だから。

学生の中にもまた、ジェンダーステレオタイプがあるように見受けられます。

男性と保育士のお給料

保育士をめざす彼らにとって、ジェンダーステレオタイプからくるしんどさの最も大きなものは、給与にまつわる事ではないでしょうか。

保育士の給与は、世間でも言われているように、それほど高額ではありません。かといって、ものすごく低いというわけでもなく、普通に生活していくぶんには、十分な収入が得られます。しかし結婚するとなると、ちょっと考え込んでしまう、という男子学生が時々います。

「僕は、奥さんが家において家を守ってほしい、って思うんです。あの、自分がそうだったから。」

「やっぱり奥さんが家において、家事してくれる家っていうのに憧れがあって…いや、自分は家事しないってわけじゃないんですけど、でも、やっぱりそういうのがしっくりくるっていうか。」

「いや、もちろん親と同じ生活を出来る時代ではないとはわかってるんですよ。1世帯2馬力じゃないとやっていけないということは当然だと、頭ではわかっているんだけど…」

むにやむにやししながら、最後にボソッと一言。

「…だって、それが男の甲斐性ってものでしょ。」

そうなってくると、同世代の、別仕事に就いている友達の給料と比較してしまう。でも、保育の仕事には就きたい。

「だから、少しでもお給料のいい保育園をさがさない。」

否定はしませんが、「そっかあ…」としか言えない私です。

保護者から寄せられる 性にまつわる心配

それから男性保育士については、女兒

のオムツを替えや、着替えの補助をする場面で保護者が拒否反応を示す、という話がよく聞かれます。今はずいぶん少なくなりましたが、それでもやはり何かの拍子に、性的な不安を理由に男性保育士に対する拒否感を示される親御さんがいるようです。とくに男性保育士やベビーシッターによる事件がテレビに出た直後は、敏感に反応したり、不安を表したりする親御さんも出てきます。

（ところでこれについても、女性が男児のオムツを変えることについての批判を聞いたことがないですね…。）

ツイッターの投稿が面白くて有名になった男性保育士で、現在は現場で働きながらも顧問保育士として活躍中の「てい先生」という方がいらっしゃいます。この方が、あるインタビューで、男性保育士に性的な不快感を表す保護者の話題になった時に、このように答えていらっしゃいました。

「仮に保護者の方から『うちの娘のオムツ替えをするのはやめてください』って言われたのが自分だったとしても、『分かりました』って言うだけかなという感じですが。その後、子どもや親御さんとの信頼関係をしっかり築いていけば、状況が変わっていくこともあると思います。」 2)

保護者が性的な意味での不安や戸惑い、拒否を感じてしまうというのはしょうがないことです。しょうがない、というのは、男性保育士にそれをあきらめて受け入れろと言っているわけではありません。人の親として、それが不安にな

るという事を否定することはできない、という意味です。

だから、保護者がそのような不安を訴えた時に、「それは差別的な見方です、うちの保育士はそんな職員ではありません、考えを改めてください」と伝えて、状況が好転するとは思えません。また、そのような事を言いきれる客観的な証拠も用意のしようがありません。

それに子どもに対する性教育という視点で考えた場合、単純に「男性も女性もちゃんと資格のある保育士なんだから、どの子どもにも同じ対応でいいでしょう」と、割り切れる話ではないと思います。男性保育士個人のあり方だけではなく、その園自体が子どもに性をどう伝えるかという話でもあるのです。

一方で、そもそも保育園は子どもの養育・保護を行うと共に、保護者の方々の安心も確保するための場所です。ですから、上記のてい先生のような話があった場合、可能であれば「そうですか、では男性保育士××は、〇〇ちゃんのオムツ替えやトイレ介助からはいったん外しますね。」と伝えて、まずは安心してもらおう。これは決して、保護者の言いなりになるということではありません。その上で、その後のかかわりのあり方を、園も保護者も、男性保育士本人も模索していくという方法が一番現実的なのではないかと思います。

ピンチはチャンス、とはよく言いますが、このことをきっかけに、ジェンダーについて、また性教育について、保護者と園の職員と一緒に学んでいく機会にする。それが子どもにとっても、大きな生活の学びになるのではないでしょう

か。今日話し合っただけで明日すぐに何かが変わる、というものではありませんが、まずは誠実に対応することで、一人一人の偏見、差別、配慮などにまつわる想像力とバランス感覚がしなやかに鍛えられていくのではないのでしょうか。

話しあって、理解しあっていく

性的な問題だけでなく、それ以外のあらゆる男性保育士の働きづらさに対しても、同じようにひとつひとつ、話し合い、信頼関係を築く中で、お互いに理解を深めていくしかないと感じます。

そのプロセスの中で、例えば園内に男性用更衣室やロッカーを設置するなど、男性保育士が働きやすいシステムを整えるように組織に動きかけたり、女性保育士が考えを変える必要が出て来たり、逆に男性保育士の方が認識を改めることがあったり、あるいは保護者の認識が変わっていったりというように、様々に関係性が変化することと思われま

す。男性保育士に関して、職場にも、本人にも、男性というジェンダーステレオタイプがもとで息苦しさやしんどさが生じがちです。まるで昭和の時代に一般企業のOLが、オフィスでの女性差別に悩みつつ、日々の信頼を積み重ねつつ、おおよけにも声をあげ、徐々に状況を変化させていこうとしていた頃を見るようです。女性に対するそれは今でも場所によっては根強く残っています。数十年の時を経て、今度は保育の現場で男性保育士が、同じように悩みつつ、どのように

生きていこうか模索しています。これも単純な問題ではなく、長年かけて対応方法を育てていかねばならないものだと思います。

近年、園で初めての男性保育士として就職する卒業生も増えてきました。新入職員も慣れていなければ、職場も初めてのことばかり。様々にとまどいながら、お互いに「いいやり方」を探っていく、そのプロセスが大切なのだと思います。結局話し合っただけで、理解しあっていくという事しかないと思います。それはもう、男性だろうが、女性だろうが、同じ事です。

養成校の教員としては、卒業生が来るか来ないかはわかりませんが、「なにかあったらいつでも話を聞くよ」という体制で待ち続けるしかありません。

とはいえ、何かもう少し積極的な行動も可能かもしれない、とも思います。卒業生にとっての、また地域の園にとっての社会資源の一つとして、どんなあり方がいいのか、私もまた卒業生や地域の園の先生方と話し合いながら、模索しています。

1) 厚生労働省「平成30年度 賃金構造基本統計調査」

2) マイナビニュース 「てい先生に聞く、保育士の本当の気持ち 第9回 『男性保育士としての苦労』」2017年12月4日

<https://news.mynavi.jp/article/happyboy-9/>

ああ、相談業務

～有希さんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

有希さん家族

有希さんと出会ったのは、彼女が中学校1年生の時である。

当時は、父、母、兄、妹、第二人の7人家族であった。父は当時42歳、母は38歳、兄は中学3年生、妹は小学校3年生、弟たちは4歳と2歳であった。

相談が始まる

相談が始まったのは、有希さん（以下本児）の不登校が理由である。

学校から、「本児が弟たちの面倒を見るために

学校に来られない様だ。保護者を呼び出そうにも、中々連絡は取れないし、取れたとしても『忙しいから』と言って来てくれない。母親の弟の所も緊急時の連絡先になっているが、そちらも連絡が付きづらいという。兄の方も登校できていない。どうしたらよいか？」という相談であった。

小学校からの情報でも、休むことが多かったそう。理由は家庭の事情や体調不良で、その割には、公園で本児が弟たちと遊んでいる所を見かけることもあったという。本児の学力は低めだが、特に問題はないレベル。妹は登校できているようで、学力は低いということであった。学習の準備も十分ではないが、宿題などは何とかやってくるとのこと。

まだ2歳、4歳の幼児もいるので、保健師からの情報を得た。小さい子のいる家庭の場合、保健師は多くの情報を持っている。

ここで初めて家族の様子がもっと詳しくわかってくる。

父親は母親の第三番目の夫で、本児と兄は第一夫の子でもう一人上に19歳の男の子がいる。妹は第二夫の子、そして下二人が今の夫の子であるという。直ぐ近くに住む母方叔父は父子家庭。母方祖父母は既に他界している。

母親が一番下の子を産むときは、自宅分娩であったこと、健診や予防接種は殆ど受けていない事など、保健師の方でも要注意で見ている家庭だということも分かった。ただ、本児については年齢が高く、また、5年前に転入しており、その前の情報は無かった。養父の仕事は建設業、母親はパートとなっているが、下の子たちは保育所を活用しておらず、職業不詳と思われるとの事。本児の叔父の所の子二人は小学校2年生と保育園活用中の5歳とのことで、この子たちの母親は離婚して遠方にいるようだ。

更に地域の民生・児童委員の方にも聞いてみると、やはりこの家庭のことは気になっていたとの情報で、子どもたちだけにいることが多く、一番上の子もふらふらして学校に行っていないのではと心配していたという。

はてさて、これは結構ヘビーなケースだと情報収集の過程で思った。どうしたらこの家庭に介入していけるのだろうか？

学校に行けていないということから、本人との面談や保護者との面談をまず考えた。本人にいきなり関わろうとしても、大抵の場合は会ってもらえない。例えば、家庭訪問をしても、玄関はしっかり締まっていて、ピンポンしても誰も出てこないのが普通である。保護者が仕事に行っている間、玄関対応はしなくてよいと言われているからもあるし、不登校の子どもが多くが、人見知りが強いか、対人恐怖の傾向を持っているからでもある。学校には来ていないので、学校で会うわけにも行

かない。

小学校の情報では時々公園で弟たちを遊ばせているというので、公園をはってみるか？それともいきなり家庭訪問をしてみるか？保健師に同行させてもらうか？迷った挙句、とりあえず家を見に行ってみようかと午後早い時間に家庭訪問をした。

二階建てのアパートが二棟あり、そのうちの棟の1階の一つが本児の住まいであった。

行ってみるとなんとドアが開いている。初夏の天気の良い日だったせいもあるのかもしれない。ピンポンをする音が鳴らない。玄関の三和土には、大きさの異なる靴がところ狭しと脱ぎ散らかされていた。耳を澄ますと子どもの声も聞こえずひっそりとしているので、誰もいないのかと思いつつも、玄関から「こんにちは」と声を掛けてみた。

中から小さい子を抱えて出てきた女の子は、何も言わずに怪訝そうな顔を向けてきた。細くてちょっと色黒な、大人しそうな女の子。これが本児であった。

いきなり会えて、びっくりしたのはこちらも同様だったが、そこは気持ちを抑えて、穏やかに「こんにちは。市の家庭児童相談員の河岸由里子と言います。初めまして。有希さんかな？」と尋ねた。本児はコックリと頷いてくれたので、「少しお話ししてもいいかな？」と玄関の靴を少し除けながら玄関に入ってみた。

玄関からは居間というか、10畳くらいの部屋が全て見渡せた。家の中には、小さい子のおもちゃが少し床に転がってはいたが、家具らしきものは殆どなく、段ボールにお菓子が山のように入っていてパチンコの景品かなと感じた。

本児に、お父さんやお母さんのことなどを尋ねると「お父さんもお母さんも仕事に行っている。」とのこと。そして、父母の帰宅はまちまちだが夜7時ごろに帰ってくることで、本児が子どもたちの面倒を見ていて、ご飯も結構作っていること、学校には行きたくないわけではないが、子守もある

ので行けないこと、そして兄は学校に行ったふりをして物置に隠れたりしていることなど聴くことが出来た。

そこにもう一人上の弟が昼寝から起きてきた風に出てきた。本児の大変さを思い、「忙しいだろうから、今日はこれで帰るね」と伝え、母親とも一度お話ししたいからと名刺を渡して帰ってきた。

本児は日中の家事・育児を一人で担っている。父母は一体何をしているのか？もしかしたらパチンコに明け暮れているのではないだろうか？何としても母親と会わなければならない。次回は夜7時頃を目指していこうと心に決めた。

その後10日ほどして、再度訪問した。きっと母親からは冷たく対応されるのではと思いつつも、今回は父母が居そうな時間帯でと思い午後7時頃にうかがった。アパートについてみると、玄関は半分戸が開いたままで、相変わらずの状態。玄関から声を掛けてみた。

出てきたのは、ふくよかなお母さんであった。「先日お邪魔した市の家庭児童相談員の河岸と言いますが、ちょっとお話しさせていただいてもよろしいでしょうか？」というと、「あ、娘から聞いてます。この間はいなくてすみません。」とやけに愛想がよく、こちらがびっくりした。ニコッと笑うと前歯がない。奥を見るとお父さんと思しき人もうろうろしている。

母親に「奥にいるのはお父さんですか？」と聞くと、父親（以下養父）がそれを聞いて会釈してくれた。養父は、細身で、日焼けしているのか色黒な方である。こちらも「こんばんは」とあいさつを返した。

ここで母親に今日訪問した理由をお話する。私「先日お邪魔させていただいたときに有希さんとお話ししましたが、小さいお子さんの面倒を見ていて、しっかりしていますね。ただ、学校に行く年齢ですので、出来れば下のお子さんたちは保

育所を活用するなど考えていらっしゃるのかなと、お母さんやお父さんのお考えを聞きたくて訪問させていただきました。何かお困りのことがありましたら、出来ることお手伝いさせていただきますが。」

母親「保育所も考えたけど、朝早く出るものだから、送っていくことが出来ない。娘も学校にあまり気持ちが向いていないし、だったら見てもらおうということになって、そのままずるずるとして、申し訳ないとは思うけど……。最近では本人も学校に行きたいとは言わないし。兄の方には行くように言っているけど、行きたくないらしく、学校の時間帯に私が帰ってきたりすると行っていないことがばれると思って逃げ隠れする。」私「お母さんたちの仕事の勤務時間はどんな感じですか？」

母親「私は朝7時から大体午後3時ごろまでで、父親も私も出かけるのは朝6時頃だけと帰ってくるのは夜7時くらいかな。父親は現場なので帰りはまちまち。」

（この母親は午後3時に終わってから夜まで一体何をしているのか？やはりどうもパチンコくさい。）

私「朝早いんですね。お母さんは何のお仕事ですか？」

母親「工場です。」

私「早出遅出のある工場なのでしょうか？随分早いですね。」

母親「そうなんです。」

私「遅出に替えることとかはできないのでしょうか？」

母親「それだと、夜結構遅くなってしまうので。」

私「なるほど。朝のお出かけ時間がそれでは中々保育所への送迎ができませんね。保育所は申し込んであるんですか？」

母親「いいえ。待機が多いと聞いているし。」

私「それでも申し込んでみませんか？もし近くの保育所に入れたら、朝の送りだけ誰かに頼むとかできないでしょうか？」

母親「弟に頼むかな？隣にいるけど、父子で、自分の子だけでも大変だから余り頼みたくはないけど。」

（本当に頼めるのかな？）

私「有希さんやお兄さんが学校に行けるかどうかは別として、下のお子さんたちはやはり保育所を使わないと大変では？とりあえず入れるかどうか、市の方でも確認してみますか？」

母親「お願いします。」

私「ではその結果をまたお知らせに来ますね。」と次回の訪問の約束を取り付けて、今回は早々に引き上げた。あまり長居をすると面倒くさがられることも多いし、あれこれ言うと、これまたうるさがられるので、保育所に入れない、諦めている、という話から、困っているかどうかは分からないが、困りごとに対処すると言う体で関わられるようになっただけで良しとした。

転機

翌朝、役所に行くと、昨晚の状況を上司に報告し、保育所に子どもたちを何とか入れられないかということになり、保育課に確認したところ、事情も事情なので、近くの保育所に入れてくれることになった。こんなにトントンと上手く進むことはまずないが、たまたま空きがあった。

その情報を持って早速その晩訪問し、保育所に入れることを伝えた。手続きのこと、保育料のこと等を説明し、母親か父親のどちらかが手続きできるかどうか確認した。母親の仕事が終わってからも手続きには行ける。収入は二人合わせてもそれほど多くないので、保育料は大したことはない。手続きをお願いしたが、こういう人は大抵手続きが中々できないことが多い。そこで手続きにも同伴してお手伝いしますよと伝え、役所で明日夕方4時という約束まで取り付けた。約束を守ってくれるかは不安だったが、準備するものなども一応伝え、母親はまあ何とかなるだろうと言っていた。

翌日夕方4時に役所で待っていたが、中々来ない。電話をしても繋がらない。結局その日はすっぱかされた。仕事帰りに再び家に寄ってみるが、母親の姿は無い。いたのは結局有希さんと子どもたちだけ。

その後保育所の手続きまでに、1週間ほどかかった。それでも本当に手続きが出来て良かった。近くの保育所なので歩いていける距離。両親がしっかり送迎してくれるかどうか、保育所と確認していった。本来中学生が送迎することは認められていない。本児が迎えに行っても引き取れないことは伝えていたので、何とか遅れながらも叔父が送って行ったり母親が迎えに来たりと言うことが定着していった。そしてこの間、母親の了解の元、たびたび訪問し、本児や下の子たちと話したり遊んだりして本児との関係を深めて行った。

小さい子がいなければ、本児は学校に行けるはず。しかし、長いこと学校に行っていなかったために、いざ行ける状況になっても足が向かない。当時はまだ、不登校のための適応指導教室などは出来ていなかったため、まずは担任の先生との面談を設定し、付き添った。初めて学校に行った日は、緊張のあまり泣き出してしまった。ハンカチを渡し、大丈夫だよと声を掛けながら、担任や校長先生とあいさつをして帰ってきた。担任がまたとても優しい先生で、個別に対応して下さったこともあり、少しずつ学校に慣れていった。一方兄についても同様に進めて行きたかったが、兄は筆者との面談も拒み、逃げ回っていて、関われずにいた。

結末

ようやく本児が少し学校に行き始めたころ、兄が家出をし、補導されるという事態が起こった。養父に学校に行かないことを叱責され、殴られたことが原因だった。母親も兄の扱いには困っていて、養父が殴っても仕方がないとの捉

え方であった。虐待も今ほど重視されておらず、躰の一環としての体罰が普通に行われていた時代である。それでも殴るのは問題ではということで、児童相談所も巻き込み、兄の一時保護と発達検査を行うことが出来た。兄も家に居たくない状況だったし、養父も母親も対応に困っていたことがこの機会を設けることに繋がった。検査の結果、兄の方は軽度の知的障害がわかり、手帳を申請し、その流れの中で、施設活用へと進んでいった。良く話をきくと、兄は度々養父にも母親にも叩かれていて、本児はそういう兄や両親を見て、率先して子どもたちの面倒を見ていたことが分かった。

こうして、本児は中学に少しずつ通うようになり、兄は施設活用、弟たちは保育所活用と言うことで、子どもたちの見守りがしっかり出来るようになって終結した。

その後この家族は別の地域に引っ越してしまった。叔父さんから情報を得ていて、本児は定時制高校に進学し、卒業して働いているとのことだった。更に数年ほど経った頃、叔父さんから連絡があり、有希さんが遊びに来ていて会いたがっているとのこと。仕事帰りに寄る約束をして訪問した。9年ぶりに会った有希さんは結婚し、赤ちゃんも生まれて、素敵なお母さんになっていた。引っ越した後どのような生活だったかは聞かなかったが、今幸せだということを引き安堵した。彼女は最後に、筆者が以前涙をふくために貸したハンカチをその時律儀にも返してくれたのだった。

まとめ

本ケースの様に、次々と離婚再婚を繰り返し、そのたびに子どもが増えていく家族に度々出会う。パチンコで出会いを作っている人も多い。一方で、離婚再婚を繰り返さないまでも多産の家もある。

子どもたちが沢山いても、一人一人をそこそ

こ育てているのならケースとしてあがってくることはない。我々支援者の元が上がってくるケースは、今で言うネグレクトなどで、一人一人を丁寧に育ててはいない。本児の様に学校にも行かせず、弟や妹の面倒を見させているのは問題となる。本ケースでは、上手く本児や保護者と関わることが出来たが、こんなに上手く行くことは少ない。大抵は何度も拒否に逢う。それでも他機関と連携しつつ、根気よく、粘り強く、かつ役に立つ形で介入して行けば、どこかで関わるチャンスが生まれる。余計なお世話かもしれないが、子どもたちを支援するためには諦めるわけには行かない。

もう一点、思ったことがある。それは、「時代」である。昭和の初めであれば、このケースの様に、小学生でも学校に行かず、下の子を負ぶって家事を手伝ったりしている子ども達もいた。そのころであれば、このケースも特に問題とはされなかつただろう。「時代」と共に、何が問題視されるかは変わっていく。我々支援者は、その時代の流れに沿って、変っていく社会の情報を正確に持ち、相談者に的確に伝え、子どもたちが困らないように支援内容を吟味していかなければならない。そして、子どもたちが、次の世代に伝えていくものが、次の世代にとっての親子関係の支障にならないように見て行くことが必要である。。

生殖・医療・家族・援助

～セクシュアリティと家族関係～

荒木晃子

セクシュアリティと子どもの不利益

カップル関係に子どもが生まれるための「生殖の条件」は、子どもの親となる2者関係にいかなるマイノリティがあろうとも同じであることは過去に記述した。親となる2者関係に「卵子・精子・子宮」の3条件が備わっており、母体が妊娠・出産の可能な状態であれば、子どもが生まれる可能性は極めて高い。さらに、その2者間に法的な婚姻関係があれば、生まれた子どもは、戸籍に二人の親の実子として記載される。ただし、現行法では、親となる2者は、“性別が異なる”異性関係でなければ婚姻は成立しない。法律上の解釈でいうところの「異性」とは、男性・女性といった、戸籍の性別が異なることを云い、二択以外の選択肢はない。女性と女性、男性と男性といった、“2つの同じ性”の関係ではないとの解釈である。果たして、「異なる性」の解釈は、家族関係にどういった意味付けを持つのだろうか。現行法では、人の「性別」が婚姻を伴う家族形成に大きく影響することは確かであろう。

近年の判例をみると、遺産相続の手続きにおいて、両親に婚姻関係が有るか否かで子どもに不利益が生じることのないよう、実子と同等に婚外子の権利を認めるという決定がなされた。かつて、婚

姻関係にある両親に生まれた実子と、婚外子として生まれた子との間で生じていた、子の不平等を是正したといえる判決である。親の法的関係が子どもに不利益をもたらさぬようにと、以前より、子どもの最善の利益を守る上で重要とされていた課題であった。この判例には、親や子どもの「性の問題」の関与はない。しかし、子どもの利益を守るためには、法の解釈の変更が必要であるという視点で見ると、あらたに「婚姻や性別の決定にみる家族関係の課題」が浮かび上がってくるのではないだろうか。

うえの課題におけるLGBTQ当事者やDSDs（性分化疾患を含む）当事者は、パートナーと家族になる、子どもの親になる、のいずれの/いずれかの課程においても、容易とはいえない実際がある。誕生時に「自身に与えられた性別」とは異なる「戸籍上の性別」を持つパートナーとでなければ、法的婚姻関係は結べない。例え、自分は男性だと確信し自覚があっても、出生時の判定が「女性」であれば「戸籍上は女性である」ため、パートナーは「戸籍上の男性」でなければ婚姻関係が結べない。その当事者が、人生の伴侶と決めた女性と婚姻し、家族になりたいと願うのであれば、特例法の条件である性別変更手術により「健康な身体にメ

スを入れ、子宮・卵巣・膣等女性の生殖器を摘出し、男性の（身体に似せた）生殖器を形成する」などの手術を受け、「戸籍上の男性」となることが法的に要請されるという、厳しい現実と直面することとなる。男性として、大切な女性と婚姻関係を結ぶことも、その女性との間に子どもが生まれることも期待できない。当然ではあるが、その後の人生に何らかの事情が生じ、自ら妊娠・出産することにチャレンジすることもかなわない。これが、ある当事者が直面する現実の問題であり、当事者の家族形成を支援する援助者の課題のひとつでもある。

性別は見た目で決まる？

我々の戸籍の性別は、出産に立ち会う産科医、助産師の判断に委ねられ、決定されているという現状をご存じだろうか。新生児の性別は、誕生した児の性器によって判別されることが主流であり、特別な場合を除き、性別の決定に、子宮の有無、卵子・精子の有無など、生殖に係わる身体機能の検査が行われることは希有であるという。人の性別の大半は、新生児の性器を目視することによって、“見た目”で判断し、決定されるという事実がある。かねてより引き継がれてきた「産科医療による子どもの性別の決定」の現状に、近年、疑問を呈する声が上がりがちである。医療者によって決められた性別により、思春期以降、心身に問題を抱えることになった当事者とその家族、当事者の問題を「我々にも責任がある問題」として再考を検討するべきとする医療者・援助者たちである。

性と生殖に関する身体の構造に特徴を持つ当事者達（DSDs）は、世界中に存在する。出産時に決められた「性別」と、性自認や身体の構造のほかにも、成長と共に確立する「自分とは何者か」と呼べる自己との乖離が明確になるにつれ、彼らの苦悩は深まるという。成長すると大半の青年に芽生える「性に関する問題」は、医学書により医学的な対応が散見されるものの、当事者が抱える課題、例えば、自分らしく生きていく、誰かを愛し子どもを迎え共に暮らす家庭をつくる、といった“特別ではないはずの願い”をかなえるための支援は構築されておらず、未開拓の分野の状況が続いている。

筆者は、法学の専門家でもなく、医師でも助産師でもない。医療者による「新生児の性別の決定」や、「異性」に対する法の解釈に異を唱える立場にはないが、「人の性に関する医療と法の現状」には疑問を感じざるを得ない。

同性婚を認めることにはおおいに賛同し、常に同性婚の法制化を求め活動する方々を支援している。子どものいる家庭を持ちたいと願う、あらゆるカップルの家族形成を支援する援助者であるとの自負もある。そこには、例えパートナーとの出会いがあってもなくても、子どもを生みたい/育てたいと願う当事者への支援も含まれる。要は、子どもを産む/育てるために必要な医療・心理・社会・法的支援とその保障が、それを望む方々に分け隔てなく、平等に行き渡る体制の構築を求めているのだ。異性関係、同性関係、性別違和をもつ/持たない、性自認が戸籍とは異なる/性自認できない・揺らぎがあ

る、身体の性の構造に問題がある、ダブルマイノリティであるなど、当事者のこころ・身体・性に向き合い、当事者の語りから共に必要な支援を模索することの大切さを、これからも伝えていきたいと考えている。以上が、LGBTQ、DSDs等のセクシュアルマイノリティを支援するアライ、そして家族援助担い手としての基本スタンスである。性的な課題・問題を抱える当事者とその家族の支援には、援助者自身の偏見や差別意識、当事者の心理、当事者家族への理解度などが重要になる。LGBTQ当事者から相談を受けたとき、その苦しみや怒りに対峙する場面で、援助者自身にある偏見や差別意識、“家族とはこうあるべき”といった凝り固まった家族観や家族形成のあり方に関する常識や既成概念が、如何に支援の妨げになるか、それ以上に、対面する当事者を傷つける言動につながるかの自覚と反省を、今、済ませておくべきであろう。

*本稿の最後に、先に登場した『医療者によって決められた性別により、思春期以降、心身に問題を抱えることになった当事者とその家族、当事者の問題を「我々にも責任がある問題」として再考を検討するべきとする医療者・援助者たち』の言葉を紹介したい。

ある助産師はいう、「新生児の性別を決めるのは、出産に立ち会った助産師、赤ちゃんを取り上げた産科医です。性器の形状やサイズに基準はありますが、ほとんどは性器の“見た目”で判断されます。私は、取り上げた児が成長と共に、性別に違和感を持つようになった事例や、DSDs当事者の苦しみを知り、本当にこの

ままで良いのかと、疑問を持つようになりました。私たち助産師は、誕生からその児が15歳に成長するまで関わりを持ちます。小・中学校に出向き、性教育やLGBTについて話すことも私たちの仕事です。だから、今まで以上に性に関する悩みを持つ当事者から学ばなければならないと感じています。それは、医療者を養成する教育課程で学ぶことができないことからです」。

以上

ドラマセラピーの実践・研究・手法

質的研究者やサイコセラピストの「人間理解」の方法として

尾上 明代

私は、大学・大学院や自身が主宰するトレーニングの場で、ドラマセラピーの授業を長年実施してきたが、それには、ドラマセラピーそのものの学びだけではなく、人間科学領域の質的研究者、対人援助（職）者やサイコセラピスト（の卵）に役立ててもらおう目的があり、その側面を非常に重要視しながら提供してきた。さまざまな人の立場をその役を演じるという実体験から理解することは、誰にとっても役立つものだが、深い人間理解を必要とする職業人にとっては、非常に有効なソース（汎用できる力）になる。

TESOL の研究者で演劇活動にも携わるマクバガン（Kathleen R. McGovern）は、「俳優が行う演技訓練は、様々な自己の有り様と他者の意図や存在、相互関係への理解を深めることである。そしてこの訓練は、質的研究者が自己の立ち位置や研究対象を多方面から理解しようとするときに必要な訓練と同質のものといえる。」という。ゆえに「俳優を訓練するために使われるテクニックは、データ収集や分析から発表までの質的研究プロセスを高める」ことにも使えるというのである。演劇やドラマで役を演じるという、質的研究には一見、関係ないように思えることが、実は本質的に同じであるということがよく説明されている。

そこで今号では、マクガバンの A Researcher Prepares という論文を紹介したい。演劇の訓練を受けた人であれば、世界中知らぬ人はいないスタニスラフスキーの著書、An Actor Prepares（邦訳は「俳優修業」）をもじったことがすぐにわかる。「研究者修業」というわけだ。以下の解説の中に出てくる「研究者」とは、教育分野、人間科学分野の質的研究者のことである。そして、その「研究者」をすべて「対人援助（職）者」や「セラピスト」に置き換えても同じことが言えると思う。

俳優が受ける訓練とその効果（マクバガンの解説より）

訓練で培うのは、自己覚知と他者理解、観察力、テキストの分析力、登場人物の分析を通してそのキャラクターを発展させる能力である。これらの能力を発達させた後のみ、俳優はうまく演技の中で登場人物を描き出すことができる。

1. 自己覚知と他者理解

俳優は自分自身を基礎的な素材として使いながら、他者を知り、他者を表現するにはどうしたらいいか、という知的な活動を行う。自己研究のプロセスは、研究者にとっても同じように重要だ。スタニスラフスキーも「自己研究がどれほど大事かということを知っておくべきだ！」という訓戒を述べている。シャスターマンは、身体的な気づきを開発することも研究者にとって有益であると言う。なぜならば「身体、マインドそして文化は深く共依存的である」からである。そして自分たち自身と、周りの人たちの身体化ができると、人間の経験の一面的な物の見方を軽減することが可能になる。

自己覚知は他者を知る事を促進させ、信頼関係を作り上げる助けになる。俳優にとって登場人物になるには、別の登場人物を演じている共演者との信頼関係を作ることが必要で、これは、研究者と研究参加者とのそれと同じである。

スタニスラフスキーは、鏡のような無生物にセリフを言うのは辞めて、その瞬間、共演者に集中するように言った。俳優たちは常にその瞬間に入るようにということを言われ続け、「演じることは反応すること」を思い出せと言われていた。研究者も、研究対象者との真の親密な関係性において、研究者として、また人間として、フィールドワークの瞬間瞬間に「演技力と反応力」を高めなければいけない。

2. 観察力

研究者と同じように俳優は、人々や自分を取り巻く世界に鋭い観察力を発達させなければいけない。スタニスラフスキーの「魔法のもしも」は台本に書いてない状況において登場人物がどのように行動するかを想像する助けになるが、これは研究者においても然りである。現実の中でわからないところのギャップを埋めるのに私たちはいつも想像力を使っている。データの逐語録を作ろうとした人は皆わかると思うが、耳で聞いた事というよりも頭で想像したことを書いてしまうことがよくあるものだ。演劇トレーニングはそのような、経験で立証できる想像力への気づきを開發する。

3. テクストの分析力（字面だけでなくその背景を分析する力）

スタニスラフスキーは「魔法のもしも」は眠っている想像力に一撃を加えるのだという。彼は「役を時代、時、国、人生状況、背景、文学、心理学、魂、生き方、社会的地位、外見などからの見地から研究しなさい。さらにその登場人物を研究するにあたり、習慣、マナー、動き、声、スピーチやイントネーションを研究する。このような研究すべてをすることで、心身に自分自身の感情が染み渡ることを助ける。これがなければ芸術にはならない。」と俳優たちに語った。スタニスラフスキーにとっては、登場人物のどの言動にもすべて目的があるのだ。登場人物の目的はそれぞれの行動の動機になる。この概念は、研究者が研究対象者の言動を分析する、または研究レポートを書くとき上でも役に立つ。

4. 登場人物の分析力

俳優はリハーサルで、以下のような質問に答えられるように奨励される。登場人物はこの場面に出てくる前にどこにいたのか。他の登場人物との関係性はどうか。何の力でこの人はこの画面に出てきてしゃべったり、この時にこの行動をしたのか。この登場の前には何が起きたのか。他の登場人物はあなたの人物についてどう言っているか。あなたの役は何を一番恐れ、何を一番希望しているか。あなたの役は何を一番大事にしているのか。あなたの役は他者から何を隠そうとしているのか。研究者にとっても役立つ質問である。これらの質問への答えは、台本には書いてないかもしれないが、これらを考えることで俳優または研究者は、もっとしっかりとした意図が得られる。

俳優修業のいくつかの原理を実践に取り入れることにより、研究者が調査するときの観察力や想像力、そして研究をより芸術的に表現する能力を増加させることができるだろう。

やはりソシオドラマ！

以上、マクガバンも解説しているように、自らの身体を通してさまざまな場面や人物を演じることで、人間理解を深められるということを改めて示した。他者の立場になることを「その人の身になる」と表現するが、役を演じることはまさにそれである。つまり、人間理解が必須である質的研究者やセラピストにとってドラマがいかに役立つことかがわかる。

ドラマが役立つ・・・と書いてきたが、上記のようなさまざまな力を高めるためには、単なる劇活動より、やはりドラマセラピーが良いと強く実感する。それは、人間を深く理解

できるように、そして演者の内省が多角的に進むように、明確な意図をもって導くたくさんの手法を使うからだ。

特に、モレノが開発したソシオドラマ（ドラマセラピーの手法の一つ）は、その代表格である。8月初めに立命館の大学院で実施したソシオドラマの集中授業（4日間）でも、人間理解という点では、他の方法ではできにくい豊かな体験と学びをしていただいたと思っている。

テーマは、コロナに罹患した（かも知れない）人への偏見や差別、医療従事者や病院への差別、または差別を超えたいじめ、ALSの患者さんが、自死を助けてほしいと頼んで亡くなった事件、などなどタイムリーな社会問題を扱い、ほとんどすべての立場の視点を「体感・体験」してもらった。差別される人だけでなく、差別する人の中にあるさまざまな感情、集団でいじめるに至るプロセス、自死したくなる人の心身の状況、それを「助けない」人の気持ちと事情、など一つの出来事から多視点のストーリーを考察した。

基本的に、誰が悪いとか正しいということではなく、複数の立場とそれぞれの身体、感情、考えがあるということ、みんなで共有することが重要なのだ。

ソシオドラマにおいてドラマセラピストは、決して一つの解釈で一つの結論に導かない。一つの視点や一つの価値観にとらわれなくて、様々な場合・状況を念頭におき、社会に向けて提示しなければならない。

上記のようなできごとを、想像したり頭で考えるだけでなく「実際に演じることでわかった！」ということが、ドラマが何よりも強力なツールであることを示している。ある人物、ある出来事を理解するとき、認知的理解だけでなく感情的理解（共感や反発）をしつかり省察する。（実は感情的な理解が、知的理解の源泉ともいえる。）そして、演じることで、ほぼ、実体験と同じ効果を心身に与えることがしばしば起きる。ドラマセラピーの参加者は、演じるなかで内省し、反照し、変容をしていく。参加者は、これまでの現実の再考察を「体験」する。質的研究者も、「データを考えるだけでなくそれを身体的、感情的に体験することが求められている」とマクガバンも述べている。

ソシオドラマの集中授業に話を戻すと、そこで扱った事件の数々を、院生たちが考える真剣さの度合い、活発で自発的な多くのディスカッションは、他の方法では得難いプロセスを創り出した。常に、参加者の視点、行動や社会関係の変化を促すことを意識しながら進めていくので、授業後にそのような変化を報告してもらうことが励みになっている。

集団凝集性と楽しさ

ドラマセラピーでは、グループの凝集性を高め、参加者の多側面の表現を通して相互交流を発展させていくので、他者を多角的、全人的に理解することが可能になる。このよう

な場でこそ、自己覚知や自己理解も進むのである。スタニスラフスキーもマクガバンも、自己研究が必要だと言うが、自分を知ることは、実はそう簡単にできるものではない。ここにおいて、グループの多重なリフレクション作用で自分を見つめることができるドラマが有効なのである。

ただし、参加者が緊張することなく自己表現できる場が創られていることが、重要な必要条件の一つだ。そのために、信頼と協力関係を創るワークを漸次的に実施する。これが成功した上で、さまざまな役や場面を体験してもらえると、表現力や即興力、そして創造性が高められる。「架空」のドラマで培われたそれらの力は、次の段階として、「現実」の対人援助場面での力になっていく。より柔軟で創造的に対象者に関わることが可能になるし、即興力は、日々の人生の対処の中で生きてくる。

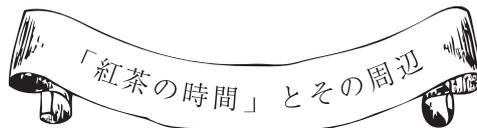
今回の授業では、大変重い社会問題が多かったのであるが、4日間のいろいろなところに、プレイフルなワークを散りばめたので、たくさんの楽しさと笑いにより、受講生の絆も深まった。

ソシオドラマをすることで、扱う題材の総合的な理解が深まることは、ある程度、当然である。今回は、質的研究者や対人援助職にとってもっとも大事な「人間理解」の力が、どのようにして身につくことが可能であるかを「俳優修業」と「研究者修業」を対比させながら示した。

文 献

McGovern, K. R. (2018). A Researcher Prepares: The Art of Acting for the Qualitative Researcher. In Cahnmann-Taylor, M & Siegesmund, R. (Eds.), *Arts-Based Research in Education*. Routledge.

きもちは、 言葉を さがしている



第41話

水野 スウ

コロナ下の紅茶の時間

いつもと違う春を過ごして、いつもと違う夏を過ごす。季節がどんな表情をしていようと、確実に時は過ぎていく。それを切なく感じながら、今号は、コロナ下の紅茶の時間の日常と、その中で考えた、生で会うのとリモートは何が違うんだろう、という問いに対するささやかなリポートです。

「紅茶の時間」はコロナの緊急事態宣言下も今も、静かにお寺のように毎週開いています。一度閉めるといつ再開したらいいか判断に悩みそうだったのと、こんな場を必要とする人がもしか1人でもいるかもしれない、という2つの理由で、ずっと開けていました。

毎水曜日午後1時になると、紅茶が開いているとわかる看板をドアの外に出しに行きます。ドアには「外からいらしてご心配な方は、どうぞ洗面所で手を洗ってくださいね」に加えて、「本日、二人とも熱なし、だるさなし、元気です。ようこそ」と私た

ち夫婦の体調を記した紙も貼りだしてあります。

4月から5月にかけては、さすがに誰も来ない週が3回続きましたが、その後また少しずつ、ぽつりぽつりと誰かしら訪ねてきます。

本当に開いてるのね！行ってもいいのね？と、電話で念を押してから来る人。こんにちわあ、いいですかあ～、といいながら遠慮がちに入ってくる人。家にあがるなり、会いたかった会いたかった！と、何度もエアハグする人。開いててよかった、行けるところがあるってこんなにうれしいことなんだね！と部屋中見回しながら言う人。話したいこと山ほど溜まってるの！とダム決壊したみたいに一気に話します人。逆に、妙に口数が少ないから、ん？どうかした？と聞いたら、あまりにも長く人と会わないでいたら言葉がすぐには出てこなくなっちゃったの、という人もいます。

それぞれ反応は違えど、人に会う、ということにみんな、私も含めて、こんなにも飢えていたのか！と驚かされます。

石川県の緊急事態宣言が解かれた直後の6月はじめの日はたまたま、昔なじみの顔ぶれが遠くから近くからやってきて、何人かの時間がめずらしく紅茶で重なりあいました。

出かけるの久しぶり！あれ以来はじめて出たわ、と口々に言いながら、互いに離れて座って生身のからだをそこに置き、じかに顔をあわせて、数人で同じ時間をわかちあう。クーラーのない我が家で、開け放した窓から、一人ひとりの間を風が吹きわたっていく。これまでだったら当たり前すぎる、ただそれだけのことがとくべつ新鮮に思える紅茶の時間が流れました。

生で会えるってやっぱりいいねえ、Zoomの画面で会うのとはどっか違うね、という言葉が口々に。確かにそうだよね。顔を見て話せるという意味では同じなのに、どうしてだろう？ この問いはその後の紅茶で、何度も繰り返されることになりました。

紅茶にぽつぽつと人が来てくれるようになってあらためて、紅茶の時間って器だけあっても紅茶の時間じゃない、そこにひとが集い、顔あわせて語りあう、そういう中味があって初めて、紅茶の時間になるのだなあ、と実感しました。

とはいえ、毎週の紅茶に来る人数はコロナ前よりさらに少なくなったので、その分、相対する人との距離はゆったりと。そしてその間を埋めるかのよう、これまでよりじっくりたっぷり、濃密な時間を過ごせるようになりました。場がにぎやかな時はついおろそかになりがちで、一人ひとりをていねいに聴く、受けとめる、という紅茶の^{かんじんかなめ}肝心要に、コロナのおかげで立ち戻れた、そんな気もするのです。目の前の人が何か話したいと思っているのなら、その人ができるだけ安心して、等身大の言葉を探しだせるよう、こちらは前よりいっそうゆっくり、その人が言葉を紡ぎだすのを待っています。

知りたい、というきもち

コロナで世間が騒がしくなるまでの3年半に渡って、紅茶では、毎週1時間を、その時々^のの社会や政治の話をしあう「草かふえ」にあてていました。2016年の参院選で改憲派の議席数が3分の2越えと

なり、これからは紅茶でもっと当たり前前に憲法や政治の話をしていかなくちゃ！という危機感からはじめたこと。この草かふえも、春以降は紅茶に来る人が減って開店休業状態が続いています。

そんな状態のある日の紅茶の時間、隣町に住むKさんが2ヶ月ぶりくらいにやってきて、座布団に座るなり「今ね、沖縄のこと、青い海と空だけじゃない沖縄のことが、すごく知りたいんです！」とすごい勢いで言いました。

Kさんは、小学生と中学生3人の子を持つ若いお母さん。今年はじめから紅茶によく来るようになって、とりわけ草かふえで社会を知ること、語りあうことを毎回とても楽しんでいるのを見ていてよくわかります。「私、本当に何にも知らなくて。気にはなっても知ろうとしてこなかったし、こういう話をほかの人とするってこともあんまりなかった」と正直にまっすぐ話すところが、なんともきもちのいいお母さんです。

そんな彼女がどうしてこのタイミングで沖縄のことを知りたくなったのかはわからなかったけど、彼女の勢いに応えるように、そこから話は一気に、沖縄戦のこと、米軍基地のことへ。

国内で唯一の地上戦があった沖縄。アメリカの爆撃で亡くなった人も大勢いたけど、日本軍に殺された沖縄の人たちもいた、スパイと疑われた人もいた、ガマの中で集団自決もあった。アメリカによる日本の占領が終わっても、その後20年、沖縄はずっと占領されたままだった。その間に日本国内の米軍基地が次々沖縄に移されていって、沖縄の占領が解かれた今もなお、その状態が続いていること、などなど。

え、どうして？ なんで！ それって何？ どういうこと？ Kさんからの質問ボールが次々飛んできて、話はあっち飛びこっち飛び。思っても見なかったところから彼女のボールが飛んでくるたび、ジャンプして懸命にボールを捕まえる私。取れないボールももちろんいっぱい。だけどそれもふくめて、このキャッチボールがなんと刺激的なことだろう。私たちの真剣なキャッチボールは小一時間も続きま

した。

Kさんは、知りたい、のかたまり。それってなんですてきなきもち！と私が胸を熱くさせていると、Kさんが目をキラキラさせてこう言いました。「ああ、やっぱり生でこうして話せるって、生でいろんなこと訊けるって、うれしい！」

知らないことは、恥ずかしいことじゃない。わからないことはすぐに訊く。どんな意見も否定されない。どれもみな、草かふえを始める時に、仲間たちと話しあって決めた「お約束」です。この日のキャッチボールは、その約束が実行されていることの証明みたい、と思えてなおさらうれしい私。何よりこの約束は、一人ひとりを個人として尊重し、認めることの13条を実践するための約束でもあったのだ、と感じます。

その日、何杯もお茶をおかわりしながらひさしぶりにゆっくり過ごしたKさんとの時間は、一期一会の至福のひとつ。紅茶という器があっても、そこに人がいないと紅茶の時間にならないと先に書いたけれど、この日はまさに、紅茶の器が言葉ときもちで満ちた豊かな時間でした。

「中抜き」の話

7月半ば。熊本で、大分で、また大雨による大変な被害が出ていました。そんな時に、Go to キャンペーンだなんて、とんでもない。そのお金を医療に、被災地にまわせばいいのに、というようなことをFacebookにかいたら、即、「そうすると中抜きができなくなっちゃうわけで」と皮肉たっぷりの、妙に説得力あるコメントをもらいました。う～む、確かにそうとも言える……ねえ。

その日がちょうど水曜日だったこともあって、紅茶に来たKさんがいの一歩に訊いてきました。「今日のFacebookに書いてあった、“中抜き”って何のこと？」

そこで話は、Go to キャンペーンの前に問題になった、持続化給付金のことに。コロナの影響で収入が減ってしまった事業者が国に申請して受け取ることのできる持続可給付金、その手続きを国に代わって行うのが、電通と関係のある社団法人。国の委託

を受けたこの事業を、電通にそのまま再委託して、さらに電通はそれを下請け、孫うけ、ひ孫うけ、というふうに分の関連会社におろしていく。そうやって委託先の子会社が多ければ多いほど、仲介した親会社の電通に中間手数料？がはいる仕組み。それを「中抜き」という言葉で呼ぶらしい。つまり、お金を必要とするところに直にお金が渡ってしまえば、その中抜きができない分、電通にしたら儲けが少なくなる、ということなんだろうね。

戦争プロパガンダのこと

電通って？というKさん。大きな広告代理店だよ、と答えると、え？なんで広告の会社がそんなことするの？とKさんから鋭いつっこみが入る。そうだよ、ごもつとも。この疑問に対しては、80年くらい過去にさかのぼって、戦争プロパガンダの話をしていられないわけにはいきません。プロパガンダというのは、政治的な意図をもった広報のこと。

テレビでCMを見たらついその商品を買いたくなることあるよね。宣伝の力をよくわかっていた戦前の政府は、広告業界の人たちとチームを組んで、「贅沢は敵だ」「1億火の玉」「壁に耳あり障子に目あり」などの、今でいうキャッチコピーをはじめ、ポスターやちらし、壁新聞を次々につくって、当時の人々のきもちをコントロールするのに、大きな力を発揮したんだって。お国の役に立ちたい、戦争に協力したいって、国民が率先して思うように。そこに関わっていた会社の一つが電通。

戦争が終わってからもこの会社は政府とかかわり、今や日本最大の広告代理店で、現在の与党政権としっかり手をつないでいる。つまり電通からすれば、政府は最大のお得意様、という特別な関係。だから、今回の給付金だけでなく、ほかの事業もいっぱい委託されてるんだよね。

それに電通はたくさんのビッグデータを持っていて、今も選挙の時にはそれを最大限に活かして与党を魅力的に宣伝することで、国民が誰に投票するかに大きな影響を与えている。

宣伝の影響力を考えて、お金持ち与党が有利になっちゃうはずいということ、選挙の時は宣伝にある程度の縛りがかかっている。だけど、憲法改正国民

投票の時には、なぜかその縛りがゆるいんだよ。ってことは、国民投票運動の期間中には、電通が制作したかっこいい改憲コマーシャルがばんばん流されるだろうってこと。そんなことも今のうちから意識していないと、つい宣伝に流されてしまいそうだよね。

中抜き、という一つのキーワードからはじまって、戦争の話が出てきたと思ったら、ラストで国民投票に着地、だなんてKさんのみならず、私までびっくりしたキャッチボールの顛末でしたよ。

あ、といっても、これはその日の紅茶のほんの一部。それ以上に、その日はそこに居合わせた人たちの、子ども時代の暮らしや家族の話、心にしみるKさんの兄弟の話、Kさんとは30歳くらい年齢差のある紅茶仲間の、本人もずっと忘れていた、親と幼かった自分の大事な一場面、などなどいっぱい聴かせてもらいました。

その時、その瞬間、知りたいこと、話したいこと、時には遠い日の思い出を、記憶の糸を手繰り寄せては語っていく。話す側、聴く側、どれだけ年齢が離れていても、そこに共通する家族の普遍を見つけて、共感するよろこびや悲しみ。この日の紅茶にも、一期一会のきもちと言葉が満ちていました。

差別はどこから

つい先日の紅茶ではKさんから、どうして沖縄は差別されているの？という、またまた直球ボールが投げられました。

琉球国の話からはじまり、独自の文化と歴史、中国との交流や貿易があったこと、薩摩藩が琉球を攻めたこと、日本によって沖縄県にさせられたこと、沖縄戦のこと、基地が今もたくさんあること、支配するものとされるものの関係、自分や自分たちの方が相手より上ですぐれていると思いたがる人間の心理、などなど、行ったり来たりかたがたの答えのないキャッチボールがこの日も長く続きました。

どうして差別は生まれるのだろうか、なぜ人は人を差別するのだろうか。なぜ人は人を支配したがるのだろうか。こういう問いに対するたった一つの正解はどこにもなくて、問われて考え、話しながら考え、聴

いてまた考える。差別について話している自分は、果たして誰も差別していないか？と問いの矢印は最終的に自分に向かってきます。

この日は大人たちの会話の横で、Kさんの2人の子どもたちがずっと遊んでいました。おとなたちの、差別をめぐる真剣な会話はきくと彼らの耳にも入っている。こんな時間もまた、一期一会の、得難い紅茶の時間です。

透過光と反射光

8月半ば、用事で金沢まで来たという能登のYさんが、その帰りに紅茶に寄ってくれました。輪島で子育て支援のリーダー的な役をしている彼女、コロナの影響で、大勢集まっていた親子活動が難しくなったけれど、それでも規模を小さくしてなんとか親子一緒に活動が生でできないものか、いろいろトライしているようです。そんなYさんと、話題はたちまち生とリモートのことになりました。

Yさんからこの日、「とうかこう」という言葉をはじめて聞きました。漢字で書くと、透過光。パソコンやテレビは、透過光で見ている、生でこうして会うその人のことは、反射光で見ている。透過光を通して見るのと反射光で見るとでは、どうやら脳の認識が違うらしい、という話です。

その話にとっても納得したのは、彼女も私も同様に感じていたことがあったから。パソコンで書いた原稿、何度も何度も読み返して、これでよし！と思って、それでも念のためにプリントアウトして読んでみると、同じ文章なのにどこか違和感があって、また手を入れて文章や語句を直すことになる。それって何故なんだろうといつも思っていたけど、なるほど、脳が違った認識をしている、ということだったのか。

Zoomに限らず、パソコンやスマホ画面で顔を見ながらリモートで話す、聞くことが、コロナの影響もあって最近は多くの人の日常になってきました。遠くに住んでいて、今は会いに行けない親と子、祖父母と孫、病院に見舞いにいけない家族、恋人同士が、互いの表情を動画で見ながらリアルタイムで話

せるって、全然会えないより、声だけより、ずっとずっといいです。

私もそうやって誰かと話したり、複数の人と画面を共有しながら数時間話しあったりしています。打ち合わせに出かけなくていいし、めったに聞けない方の講演も家にいながらにして聞くことができ、なんてありがたいことかと思う。思うと同時に、生とリモートの違いや、そもそも人が人に会うってどういうことなんだろう、という問いが、ずっと私の中でぐるぐるまわり続けていたのです。

透過光の話を聞くと、リモートの相手と話すのと、生でじかに会って話すのとが、完全に同じじゃない、と感じていたこともやっぱり、と腑に落ちます。リモートのよさも必要性ももちろんあるし、これから先はもっとオンラインの使い方が発展していくでしょう。それであっても、生との違いはあるのだ、ということをも自分できちんと認識したいと思いました。

生とリモート

Yさんと話しながら、ここ数ヶ月の紅茶で何度も繰り返された、生とリモートは何が、どこが、違うのだろう、という問いに対して、いろんな人がそのつど出してくれた言葉が思い返されました。

同じ場所にいる時って、パソコンの画面に映るその人だけに集中しているわけじゃなくて、全体で感じている、全体を受け取っている。話している人以外の人がいることも、その周りも、視野には入っている。

風が葉っぱを揺らす音や、鳥のさえずりも何気に共有しながら、誰かの話に耳を澄ましている。小さなうなずきも、首かしげの動作も、ことさら意識しては見えないけど、なんとなく見えている。

手ぶり身ぶりなど手の動き、変化する表情、しぐさ、声のトーンや態度。そういった身体的な言葉もあわせて感じている。その人の出してる熱量も、雰囲気も、感じとっている。言葉って、音だけで聞いているんじゃないんだ、もっといろんなものがからだの中には入ってきて、共振したり、共鳴したりしている。そういう場の中で反応する自分がある。

もしもその日、話したくなければ、ただ聴いてるってだけでいい。いや、何もしないでただそこに居て、いい。そこに居る、ということで、その場全体をつくる一人になっていると思うから、などなど。

最後に出てきた、「何もしないでただそこに居て、いい」という言葉が、いかにも紅茶らしいなあと思います。Zoomで自分の顔が画面に写っている時って、ただいる、というだけの態度はなかなかとりにくくて、積極的に参加しているように見えるよう、ちょっとかっこつけている自分にも気づきます。

紅茶にきた人が、風の吹き渡る空間で、緑の木々を視野にいれ、鳥の声、蝉の声を聴きながら、その人が今、話したいと心に沸いてきたことを言葉にして出していく。私は聴き、うなづきながら呼応して、こっちからもまた話し返す。その人が、今が今、話したいことを話しているな＝放しているな、という時は、表情を見ているとわかります。どんどん表情が生き生きしてきて、その人が美しくなってくるから。この数ヶ月間、そういう美しい人を、人数は多くないけど割合的にはたくさん、毎週の紅茶で見てきた。それは私にとっても、一回きりのライブゆえの、幸せな瞬間です。ここにあげた言葉を聞かせてもらっている時の私も、まさにその瞬間を味わっていたのです。

言葉だけに依存しない

長年、ゴリラを研究しておられる京大総長の山極寿一さんがNHKの番組「コロナ新時代への提言」(*)の中で、こんなことをおっしゃっていました。

——我々は進化の過程で、信頼をつくるのに言葉だけに依存しなくなった。むしろ身体と身体が共鳴し合う中で信頼をかたちづけてきた。しかし今、からだの共鳴が失われて言葉だけでつながる社会に放り出された時、人間はいったいどうなるのか。

また、こうもおっしゃっています。

——言葉以前のコミュニケーションの手段である音楽は、人と人との間を共鳴させる一番いい装置。そういうものを多用して、情報社会であっても人と人が共鳴し合うようなことを。音の組み合わせである言葉で、意味を伝えるのではなく、きもちを伝える、そんなコミュニケーションを。

うん、うん、と深くうなづきました。確かに、音の組み合わせだけの言葉やからだに共鳴しない言葉では、心に響かない、信頼だって育めないと、私も常々思っていたからです。人は言葉だけでコミュニケーションしているのではないことを、山際さんの言葉から、あらためて突きつけられました。私自身、前々から「言葉だけ」で伝えられることなんて本当にごくわずかだよ、と人に言ってきたけれど、それでもいつのまに、言葉に過剰に依存しすぎていたかもしれない、と山際さんの言葉にどきんとしたのです。

はからずも今、コロナで前みたいに気軽に人に会えなくなった分、逆に、そもそも人と会って話すと、どういうことだろう、どんな意味があるんだろう、直接に会わない人と人の間で、私たちはどうやったら安心できる信頼関係を築いていけるのだろう、そういったことを考えること自体に、新たな意味があるようにも思えます。

これから先はますます、リモートで話す機会が増えていくでしょう。その必要性も、いいところも、勿論たくさんあります。だとしても、音の組み合わせだけの言葉には安易に頼るまい、とよくよく心していよう。リモートであっても、身体的な言葉や、共鳴しあうコミュニケーションの方法を、それぞれがどう工夫して発明していくか。それは互いの確かな信頼を培っていくのに、この先、もっと欠かせない努力になっていくのでしょうか。

五感トレーニング

また、こうも思います。リモートの会話ばかりずっとして、それがすっかり当たり前になったら、野生をふくめた五感というものが、どこか鈍くなってしまうのではないだろうか。五感を働かせる、感性を磨く、という言葉があるように、足腰動かさないと

筋肉が衰えるという事実があるように、人間の五感だってしょっちゅう使っていないと、衰えて細ってしまうのじゃないかなあ。

筋トレならぬ、五感トレは、何気ない会話の中でもきっとできるし、自然の中の散歩中だってできること。誰かと話す中味は何でもいいのです。自分が本当に思っているきもちをもう少しすなおに言葉にしてみる。相手の目を見たり、うなづき返したり、手を叩いたり、口と耳だけでなく、からだを使って話してみよう、聴いてみよう。言葉で意味を伝えるのではなく、きもちを伝えるコミュニケーションを、もっともっと大事にしていこう。そうすることでからだとかからだ共鳴したり、響きあったりする会話がふえていくかもしれません。こんな五感トレーニング、コロナの時代の私たちにとって、この先ますます必要なことだと思えてならないのです。

*NHKBS1スペシャル「コロナ新時代への提言～変容する人間・社会・倫理」2020年5月23日放送

盆踊り漫遊

竹中尚文

第9回 第1部の終わりに

20年ほど前に私は、カリフォルニアのお寺で盆踊りを体験しました。その熱意と行動力に驚きました。日本ではお寺で盆踊りは一般的ではありません。「アメリカでは、なぜお寺で盆踊りが一般的なのか?」と思いました。この疑問については、第2回(『対人援助学マガジン』第33号)で、アメリカでの盆踊りがお寺で始まったことを説明しました。1931年(昭和6年)のことでした。この時代は、日系1世・2世の過ごした頃でした。

本稿の第3回から第8回までは、この1・2世の時代を説明しました。日系2世というのは1910年代から20年代に生まれた人たちです。2000年の頃に私はアメリカで資料を集めるのと共に、2世の人たちに話を聞きました。当時、2世の人たちの年齢が80代や90代でした。

本稿第8回までに、第2次世界大戦までの話を書きました。アメリカでの聞き取りにおいて第2次世界大戦の時の話が中心で、1950年代から60年代の話を十分に聞け

ませんでした。私は数年後にもう一度、戦後の話をじっくりと聞くつもりでした。私事ながら、急に私がお寺の住職になることになって、渡米調査の機会を失いました。

1950年代から60年代にかけてのアメリカの歴史は公民権運動という大きな転換期でした。この運動はアフリカ系アメリカ人の運動と考えられていますが、アメリカの有色人種にも大きな転換期であったようです。この運動に対する意識をそれぞれの日系アメリカ人に尋ねてみたいと思っていました。2000年頃の聞き取りで、公民権運動について少し触れた時、日系2世の見解は一応ではないと知りました。また、3世にも聞き取りをしてみたいと思いました。

また、1990年代のロサンゼルス暴動の時のアジア系アメリカ人の意識を聞いてみたいと思いました。有色人種としてのアジア系の人たちがアフリカ系の人たちと共通の意識を持つのかどうかも知りたいところです。そうして21世紀を迎えたアメリカ社会

は新たな社会を作ろうとしていると思います。私見ではありますが、アメリカ社会を形成する要素として、「人種」よりも「経済力」とか「教育水準」とかを重視するようになってきたと思います。それは、結婚で「人種」を重視するとは限らないことです。そうすることによって、同じ人種の家族ではなくなります。同じ人種の地域社会でなくなります。こうした動きは、日系アメリカ人社会といわれてきたところにも、確実に変化をもたらしています。本稿第1回(『対人援助学マガジン』第32号)で示したクリスマスよりお正月を大切にしている社会が異人種間で共有されるのです。アメリカの浄土真宗においても、

クリスチャンから真宗門徒に変わる方がずいぶんと増えました。こうした動きが今世紀初頭、20年ほど前に始まっていたのです。

アメリカ社会全体では、このような変化はわずかなものです。しかし、このわずかな変化を「人種」が重要な要素と考える人々には許容できないのかも知れません。こうした人々がトランプ大統領を支持してきたようにも思います。私は、アメリカ社会の外にいる人間であります。しかし、このアメリカ社会の変化にはとても興味があります。

また、いつか第2部のための調査と執筆の機会を作れることを望んでいます。



1. コロナの日々

今、この原稿を書いている時点、「第二波（？）コロナ」の真っ只中である。4月ほどの深刻味はないが、毎日感染者が増えていて、これからどうなるのか先が読めない。この原稿がアップされる頃には減っているのか増えているのか、それも全く読めないという状況が続いている。

俺の周りでは、コロナに対する反応は二通りに分かれる。

俺が仲の良いある先生は、コロナのことを極度に怯えていて、後期もオンライン授業であってくれんことを期待しているようだった。彼はお母さんと同居しているので70歳以上の人が感染すると命に関わることになるため、余計に神経質になるらしい。彼自身も4月ごろ体調が悪くなって、コロナかと心配していた時期があった。医者に行ったらコロナではないと言われて、どうにか安心したみたいだが、死を意識したりもしたようだ。そういう人たちからすると、街でマスクをつけていない人を見ただけで腹が立ってくるらしい。

俺はというと、普段が人と接する機会がないので、コロナ前は大学で人と接することができるのが貴重な気晴らしになっていた。大学の近所で行きつけのお店で、店の人と語りながら、昼飯を食べるのもリラックスの時間だった。しかし、この4ヶ月は、ひたすら自宅でコンピューターの画面に向かう生活だった。授業も会議も学会も全てオンライン。オンライン上で接していてもそれなりに楽しい面もあるのだが、外に出ないので、体重は5キロ以上増えた。何よりも体力が落ちてしまったみたいで、ちょっと外に出るのもつらくなってしまった。今は映画館、スポーツクラブ、飲食店、全て解禁になったのでまだマシだが、4月ごろは緊急事態宣言でほとんどのところが閉まっていたため、本当に閉塞感でノイローゼになりそうだった。

やっと少し和らいできたと思っていたら、第二波である。本当にひどいものだ。コロナは第三次

世界大戦だという人もいるが、まさしく戦時下とはこんなものなのかと思うことも度々だった。他の人たちも皆俺と同じ事態の中にいるわけだから耐えなきゃいけない。だけど、イライラは募る。一体、いつになったら通常の生活に戻れるのか。もうコロナ以前の生活に戻ることはないのだろうか。

俺の行きつけの飲食店は年配の人がやっているところが多いので、これがきっかけで店を止める人も出るかもしれない。再び対面授業が始まって、大学に行く頃には閉店になっているお店もたくさんあるに違いない。もう年金をもらえる年の人たちだし、この機会に辞めるかという流れになりそうな気がするのだ。こんな形でお世話になった人たちと別れるのは悲しいけども、考えようによっては、仰々しい別れに比べればいいかもしれない。俺は大袈裟なことが何よりも嫌いなのだ。さりげなく、コロナと共に去りぬである。

そんな中で不登校の子にとっては、「学校は素晴らしい」という大合唱になるのは重荷だという記事も読んだ。俺は元祖不登校なのでその気持ちもよくわかる。コロナとなって、学校に行かなくなったことで、学校で得るものが得られないということを痛切に感じ始めた子たちの叫びが飛び交っていくため、不登校の子たちは、「じゃあ、俺たちは大切なものをえない生活をずっとしているのだ」ということを常に思い知らされることとなる。いたたまれなくなるのだろう。

その一方で、不登校とまでは行かないけど、学校が嫌いだという子たちはむしろ楽だというふうにも思っているらしい。大学生の場合は遠方から通う子が多いため、大阪から京都まで通うのは面倒くさい。朝も早く起きなきゃいけない。でもオンライン授業だったら5分前に起きればいい。オンライン授業の場合は学生のプライバシーや通信量のことを配慮して、無理には顔を出させないでくれと言われてるので、学生の方はほとんど顔を出そうとはしない。パジャマ姿で授業を聞いていることもあるみたいだし、寝っ転がって聞いている子もいるみたいだ。それでも聞いてくれるの

だったらマシな方で、自分が当たっていないときには席を外してしまっている子もいるだろう。

オンライン授業も必ずしも悪いとばかりとは言えない面もあることには気付かされた。オンラインの方が学生たちは自分の意見や感想をきちっと話してくれる。対面授業だと照れ臭がって発言を求めても話そうとはしないのだが、オンラインとなると顔が見えないから言いやすいらしい。確実にたくさん話してくれる。

それに、この4ヶ月間で、オンライン技術を習得できた。かつては使ったこともないような機能をどんどん使うことになったため、様々なことがわかっていった。70歳過ぎて、教壇に立てなくなったら、パソコンを使って何か仕事を始めようかとも思うようになった。

文部科学省は対面を復活させたいと思っているらしい。今年の1年生は確かに特殊だ。遠方から入学した子の中には、下宿代だけ払って、実家からオンライン授業を受けている子もたくさんいる。入学式もなかったのも、大学にはまだきたことすら無いという学生もいる。推薦で入った学生もいるので本当に一度も大学を見たこともないという子もいるのだ。

大学の方は、大学によって対応は分かれている。前期から対面授業を復活させたところもあるが、大抵のところはオンラインだ。問題なのは後期である。もう早々とオンラインに決めてしまったところもあるが、大抵のところはまだ今のところ微妙である。おそらく、理系の科目は実習があるので対面をしないわけにはいかない。一方で、大講義を担当する先生たちは、後期もオンラインだという通知が早々と来たと聞いている。

しかし、俺たちのような語学教師は微妙な状況である。一応、今の流れだと英語のような少人数クラスは対面、大講義はオンラインと考えている大学が多いようだが、東京の方では来年も対面と早くに決めてしまった大学もあると聞いている。

対面授業を再開するということになる問題が山積される。大学に登校して、語学の授業を体面

で受けた後、学生たちがどこでオンライン授業を受けるのか。もし、大学で自分のクラスで感染者が出たりしたら大変なことになる。きちっと感染防止対策をした上で、授業することになるのであれこれ神経をすり減らすことになるだろう。

政府の発表では、第二波は感染者が多くても4月とは訳が違う。まず何よりも検査数を大幅に増やしているし、感染者の大半は若い人たちだから軽症である。人工呼吸器をつけている人は少ない。死者数もインフルエンザで死ぬ人よりも少ないらしい。

むしろ経済を回さなかったら、自殺者、倒産、リストラなどが続いて、デメリットの方がはるかに大きい。結果的にコロナよりもはるかに多くの人々が死ぬということになるのかもしれない。とは言っても、コロナに感染したら死ぬ可能性の高齢者たちを蔑ろにするわけにはいかないだろう。目の前に死という恐怖がぶら下がるということになるため、慎重に考えるしかないのだ。

個人的には俺は56歳と半年だからまだコロナで死ぬ人が多い年ではない。しかし、コロナのおかげで体重はどんどん増えていく。自宅ですべて仕事をしていたので、夏の暑さは感じずに済んだ。いつも6月から7月にかけては暑い中をバスや電車で行ったり来たりだったのだ。しかし、おかげで体力が相当落ちたことを痛感する。俺はこのところコロナを言い訳にして、スポーツクラブや運動もサボってきたのだ。

学生たちもオンラインの方が自分のペースでやれるのでむしろ勉強できるという学生もいるし、逆にやはり気合が入らないという学生もいて、賛否両論のようである。

無理に始めることはないのだろうが、始まったから始まったでそれに対応するしかない。俺の教えていると大学はもうすでにオンラインに決めたところもあるのだが、まだ対面することを予定している大学もある。とりあえず、後期もオンラインになるということ的前提にして生きようと思う。もう成り行きに任せて、なるようになるさ！とい

う気持ちで生きるしかないのだ。

何よりも怖いのは、先生も学生もだんだんとオンラインに慣らされてきているので、極端にこれが進んでいけば、大学のキャンパスだって要らなくなる。それこそ、大学のプラットホームみたいなものを作れば、海外の大学の授業だって日本から受講できることになる。

その方がお金がはるかにかからないし、合理化である。しかし、そうなってくるとこれまで慣れ親しんだ象牙の塔・レンガの建物が世の中から消えていくことになるのだ。そこまで極端なことは起きないだろうけど、今大学は不景気なので、絶対にそうならないとは限らないのだった。

2. 公正世界仮説！？

ついに義理の叔父が亡くなった。母より11歳年上なので93歳である。大往生だし、しかも最近まで健康だったので、天寿を全うした雰囲気である。大病にかかることもなく、これだけ長く生きることができたのは幸せだったと思う。

母方の叔母は最近になってボケが始まって、病院に入院しているらしい。まだ70代で、体は健康なのだが、変な幻覚を抱いてしまい、娘の職場にまで迷惑をかけ始めたので強制入院させるしかなかったらしいのだ。

身近にコロナ感染者も出た。普段注意して生活していたのに、思わぬところから病気や不幸は入り込んでくる。一方で、俺はコロナを舐めていたが、全然かからずここまできた。人間は理不尽なのだ。

俺もあと20年かなあと考える。この10年間くらいは本当に幸せだった。本を2冊出せた。友達も山のようにできた。

俺のFBの友達は現時点で339人である。先輩や同僚の先生たち、大学の元教え子たち、出版社の人たち、プロテスタントの牧師さんたち、アメリカで知り合った人たち、映画関連の仕事をしている人たち、行きつけのカフェで知り合った人た

ち、そして身内が数人、もう満杯状況で誰か入る余地がない。これ以上、人間関係が広がれば頭が回らなくなって、パンクしてしまうだろう。

したがって、もう新しい友人を開拓しようとも思わなくなってしまっている。

その一方で、一番の親友が九州の友達のところ遊びに行くという話を聞くとなんとなく羨ましいし、恋人を取られるような気持ちになる。いくら友達が増えたとは言っても、親友と呼べる人は彼しかいない。彼とは 20 年も友情を保っているし、彼との関係が壊れたら相当凹むだろう。

しかし、人間の人生はいつ何が起きるかわからないのだ。

コロナの時代になって、公正世界仮説という言葉を知った。何事も本人次第だという考え方である。コロナに感染した有名人たちが、「すいません。ご迷惑をおかけしました」と頭を下げる。これはどう考えたって変な話だ。コロナの被害にあった上に多くの人に謝罪する！？ この頃はコロナハラスメントも起きていて、コロナの感染者の中には自分の家に住めなくなって、自殺した人もいるという話である。

これは公正世界仮説のせいなのだ。人間は正しい行いをしていれば、災難には見舞われない。何か自分に落ち度があったからこんなことになるのだという考えである。

俺は、こういう考え方が死ぬほど嫌いだ。俺が大学を目指していた頃のことだ。当時、受験生向けの雑誌を買っていたのだが、そこに悩みの相談のコーナーがあって、そこで悩みの相談役になっている女性がまさしく公正世界仮説支持というか、いい子ぶりっこというか、酷いことをされても、自分に何か至らない点があるからだと思えようという返事ばかりする人だった。

俺はこの雑誌を買うたびにこのページを破り捨てていたものだ。この人はよほど幸せな人生を歩んできたに違いなかった。誰にも理解してもらえないような苦しみを経験した人だったら、社会を公正だなんて思うことは到底できないだろう。

学歴マイノリティでいろいろなところで白眼視をされ続けていた俺は、こういう人を見ると怒りを覚えていた。何の悪いこともしていない人を白眼視する社会。何が起きても、私が悪いんだと思いましょうという社会。

そういう社会では、結局その時点でいじめやすい、弱者の人がいじめの的になってしまう。

今は不登校に対しての理解も深まっているが、あの当時不登校はまだ悪い子というイメージがあって、だからいじめてもいいのだという発想だった。LGBT にしてもそうだ。今は理解が深まっているが、昔はそんなやつ変態なのだからいじめて構わないという発想だった。今度はコロナ。コロナになるやつは悪いやつだからいじめて構わないという発想！

時代は流れて、いじめの対象がどんどん変わっていきただけのことで、世の中のいじめの構造は変わらない。大人がこうなのだから、子供のいじめが解決しないのも仕方がない。

こんな社会のどこが公正なの???

3. 翔ぶのが怖い！

映画関連の仕事をなさっている知り合いの男性が、今度短編映画を作るので出演してくれる人を探していると SNS に書かれていた。40 代の男性を募集しているとのことで、「僕は年齢的に無理ですね」とコメントしたところ、「國友さんだったらアリです」という返事。その人は台本を俺のメールに送ってきた。

俺は数年前に学生が制作する映画に先生役で出たことがある。ちょい役なのだが、映画の撮影ってこんなものなのかと思ったものだった。映画の場合はカメラを回し続けるのではなく、細かくカットを重ねてつなげていくので、小さな場面を何回もやらされる。その間、役のままの気持ちを保っているのが大変である。役者さんも楽じゃないなあと思ったものだった。

今回話をもちかけてきた人は、メジャーな人で

はないがこれまでたくさんの映画を手掛けてきたプロなので、学生が作る映画とはわけが違う。ちょっと出てみたいという自己顕示欲もあった。しかし、台本を見てみるとなんと濃厚なベッドシーンが最後に用意されている笑。ということは、裸にならなきゃいけないんだなあ、映画で見せられるような身体じゃなしなあ、というわけでお断りすることになった。

この間『ぐらんぶる』という映画を見た。これ原作は漫画なのだそうだが、とりあえず男の子の裸を見せるのが目的のような映画である。裸になるのが大好きな若い男たちの裸演技をたっぷりと見せてくれるが、ストーリーの方はどうなっているのかよく理解できない笑。彼らの裸が楽しければ、それはそれでいいということなのだろうか。

俺は若い頃も裸が似合うような男じゃなかった。自分の殻を破るためには、映画で裸になるという、大きなことにチャレンジしたりするのもいいのかもと思ったものだ。この年になってくると日々の生活に新鮮味を感じる事がなくなってくるのだ。

とは言いながらも、気の小さい俺はその仕事を引き受けることはできないのだった笑笑。翔ぶのが怖い！である。

4. エトセトラ

この4ヶ月間は本当に早かった。家で仕事していてあまり事件が起きないせいなのだろうが、例年よりもさらに早く感じて、あっという間に期末になってしまった。

何がこの4ヶ月間に起きたのか？

あるお店でアップルパイを食べた。そのお店、お洒落なお店でカレーとケーキとドリンクのセットで2000円くらいである。俺は行くたびにケーキはアップルパイをと頼んでいたのだが、いつだって売り切れいたり、今日は焼いていないと言われてたりで、代わりにチーズケーキを頼んでいた。このチーズケーキもなんとも言えないくらい美味しいし、カレーも辛めだけどすごく美味しい。で

も、アップルパイ食べてみたいなあと思っていたものだ。

店の若い女性は俺の顔を覚えていて、「いつもきていただいているのに申し訳ありません。今度土曜日にアップルパイ焼きますから」と前もって教えてくれた。そして、その日、待望のアップルパイを食べたのだった。アップルパイにアイスクリームが添えられているのだが、たまらないくらいの美味しさ。思わず、幸せがこみ上げてきたものだ。

しかし、それにしても店の中は若い女性ばかりだった。コロナが減っている時期だったので、皆向かい合ってぺちゃくちゃ喋っている。ほんの1、2人彼女と思しき女性ときている若い男性もいたが、初老のおじさんは俺だけだ。なんとなく罰が悪い。俺たちの年になったら、こういうお店じゃなくて居酒屋に行くのだろう。だけど、俺は酒を飲むのが好きじゃない。

5月の終わり頃、一番の親友が尼崎に住んでいるので、お好み焼きを食べて、温泉に行った。これは何度もしてきたことだ。彼とは毎日ラインのやりとりもしている。

7月からレジ袋が有料となった。で、500円のエコバッグを買ったのだが、これがなかなか面倒臭い。俺は毎日コンビニに何度も行くのだが、レジに並ぶたびにバッグを取り出して、買ったものを入れなきゃいけない。時間がかかる。後ろにお客さんが待っているのに……。こんなコロナの最中にレジ袋の有料化を決めなくてもと思ったものだ。5円出せばレジ袋に店員さんが入れてくれる。それだったら、もうエコバッグなんてもって行かなくてもいいかもしれんと思ったものだ。エコロジーの点から考えても大して効果はないのだという人だっているし。とにかく、コロナのせいで、レジで並ぶことすら苛立っているのだった。

マッサージに来てくれている友人は、結婚して子供ができてからがなかなか遊んでくれない。その彼がこの8月に妻さんと一緒に店を出すことになった。これはコロナのおかげである。これまで店を出すのは大変だからとなかなか踏ん切りがつか

かなかったみたいなのだが、コロナでしばらく暇が続いて、生活費も福祉に借りに行かなきゃいけないような状況になって、それでもう店をするしかないと覚悟を決めたみたいだった。

店を開いても、俺の家には変わらずきてくれると言っているから、店には行かない方がいいだろう。彼の妻さんには会わないままの方がいいと俺はずっと思っている。彼の話だと、彼の妻さん、俺と性格が似ているらしい。人の好き嫌いが激しくて、嫌いなものは徹底的に受け入れない。常にごちゃごちゃ文句を言っている。ちょっとしたことで憂鬱になる。俺のことだって、きっと嫌いだろうなあ笑。

「そんな妻さんじゃ、子供育てたりできないんじゃないの」と俺がいうと、「いや、一生懸命する人なんですよ。一生懸命だからちょっと上手くいかないことがあるとイライラする人なんですよ笑」と彼。「じゃあ、俺と本当に似ているよね笑笑」と俺。「僕の周りって、そういう性格の人ばかりなんですよね。僕は『イライラしない』というのが座右の銘なんだけど。」と彼は言った。

彼は本当に偏見や気負いが無い人で付き合いしているとのんびりした気持ちになる人だ。俺みたいな性格の人を受け入れてくれる人だ。そういう人も世の中にいるのだから、もっと自信を持った方がいいのかもしれないのだった。

近所のパスタ屋さんではすっかり常連になった。第一波のコロナが落ち着いてやっとお客さんが少し戻ってきたと思っていたら、第二波でまた再び来なくなったとおっしゃっていた。「國友さんみたいに常連さんがくると元気付けられるんですよ」と言ってくれた。俺も結構感謝してもらっているみたいだ。

『劇場』を Amazon プライムで見た。行定勲監督の映画は最初の『Go』が最高に良くて、いきなりキネマ旬報1位のデビューだったはずだが、その後の映画はいまいちだった。だけど今度はいい。こんな殊勝な女が世の中にはいるのかと思ったものだ。相手の男はダメ男なのだけど、彼女はそれ

を受け入れようとする。しかし、結局最後には彼女の方から別れることになる。女性のリアリズムである。

渡哲也が亡くなった。この人、重病で入院したことが何度かあったはずで、78歳まで生きていらしたことが不思議なくらいである。淡路島生まれで、昔気質のお父さんから相当なスパルタ教育を受けて、毎日ビンタされていた、だから息子にもそういう教育をしたのだということがスポーツ新聞では美談みたいに書かれている。男は男らしく、殴られてもへこたれるなというメッセージを送っているのはスポーツ新聞である。おー、右翼。身の毛がよだつ。本当にそうなの？おそらく、相当話を盛っているのだと思われる。この人、お父さんから離れた後ぐれた経験もある人なので、スパルタ教育が全面的に良いとは思っていないだろう。メディアは物事を単純に伝えてしまうのである。そう言えば、渡さんの『誘拐』はとても良かった。息子思いのお父さん役だった。ご冥福をお祈りしたい。

先日、映画を見に行った後、自転車を出そうとしたら、自転車置き場がぎゅうぎゅうに詰まっていた、出れない。通りかかった若い女性が手伝ってくれた。「なかなか難しいですよ」と流暢な日本語だったが、おそらく南欧系の女性である。欧米の女性の方がこせこせしていない。正々堂々と親切で好感が持てる。やはりクリスチャンだなあ。

俺の日常はこんなものなのだ。特別変わった経験はなく過ぎていく。結局、誰からも理解されることなく、女性と付き合うこともなく、一生は終わっていくのだろうか。それはそれで構わない。でも、なんとなく味気ない毎日である。だけど、それなりに幸せ。

5. 『アルプススタンドのはしの方』

(城定秀夫監督)

今回のおすすめ映画はこれである。

低予算映画で何と高校野球の野球場のベンチの

一角が映画の主たる舞台で、そこで試合を観戦している高校生たちを描いていく。試合の風景すら映さない映画だ。

とりあえず、若い子たちが生き生きと描かれているので、そこに感動する人は多いだろう。今年公開になった日本映画の中でも最も評価は高い。

しかし、俺はこういう映画を見るとまた自分の高校の頃を思って悲しくなる。この連載をずっと読んでくれている人はわかってくれるだろう。俺にはこういう時代がなかったのだった。

今年はコロナのせいで、社会全体が曇り空である。こういう時だと尚更明るくできないし、下手にケラケラしていると、三密になると怒られるだろう。

俺はいつそのことコロナが大きく社会を変えてくれることを祈っている。今大変な思いをしている人はたくさんいるけども、ここで社会の膿を全て出して、第三次大戦の終戦から再スタート。

そういう日が来れば良いなあ。俺の脳味噌の中も全てリニューアルである。

役場の対人援助論

(3 4)

岡崎 正明

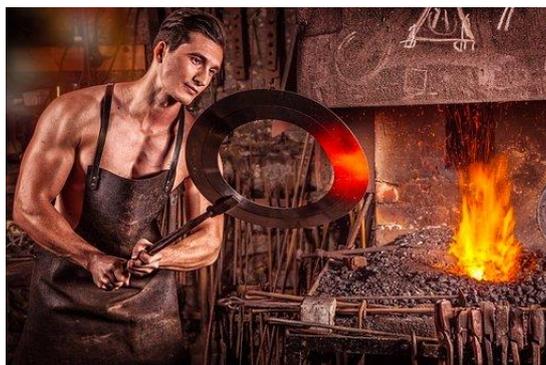
(広島市)

人生色々。疲れも色々。

労働も色々

世の中の仕事を「肉体労働」と「頭脳労働」に分けて論じることがあったりする。

個人的にはできないための憧れか、己の体と感覚を武器に職業的に自立している肉体労働者を「スゲーなあ」と思う傾向がある。農家さんや大工さん、職人さんや漁師さんなど、引き締まった身体で汗水流しながら手ごたえのあるものを生み出したり、捕まえたりする姿に、羨望の眼差しを向けてしまう。



対して頭脳労働は一般的には「スマート」「賢い」みたいなイメージがあるかもしれないが、どこか一抹のズルさを感じてしまう。右から左にモノを動かすだけで儲けを生み出す（私の偏見です）ような、金融とか商社みたいな仕事がやたらと社会的に評価されると「どうなん？」とってしまう（あくまで個人の感想ですのでご容赦ください）。

これはおそらく小中学校の歴史の授業と、大好きで見ていた時代劇の影響ではないだ

ろうかと思う。徳川幕府の政治体制で重要とされている土農工商。武士の次にエライのは米を作るお百姓さん。その次が物を作る職人さんで、商売人は1番下という建前になっていた。そして時代劇に出てくるお百姓さんはいつも貧しいけど正直者で、反対に出てくる商人の越後屋はろくでもない腹黒で、最後は正義にやられて「ハハーッ。どうかお許しを！」なんて情けなく土下座するパターン。

そんな体験が少年時代の私になんとなく「体を動かして、汗水流して働くこと」＝素晴らしく、「動かずに口先と書類で儲けを得る」＝あまり褒められない…みたいな価値観を植え付けたのかもしれない。



振り返っておのれの仕事（自治体ソーシャルワーカー）を考えてみると、どちらかといわなくても頭脳労働の方に分類されることが明白である（スマートなイメージとはかけ離れているが）。確かに主に使用するアイテムは口先と書類だ。

「悩み」とか「関係性」などというフワフワした実体のないものを扱うこの仕事に、もちろんやりがいは感じているが、時にふと「こんなことだけして給料もらっていいのかしら？」と、多少の後ろめたさを感じることもあるのも事実である。

とはいえさすがの私も中学以降の学習や経験を通して「職業に貴賤なし」「社会的分業」などという言葉の意味もそれなりに理解し、様々な仕事がそれぞれ社会に求められて成り立ち、誰かの役に立っていると思える大人になった。

だから今では基本的に肉体労働と頭脳労働のどちらが良いとか悪いとか、上とか下とか、そういうことじゃないことも理解しているつもりだ。

脳と心にくる仕事

頭脳労働系を経験してみると、直接汗水こそあまり流さないし筋肉痛になることもないが、肉体労働とは別の苦労や疲労があるように思う。

それは瞬時にあーでもない、こーでもないと頭を回転させる疲れだったり、様々な立場に気を遣っての消耗だったり。

もちろん肉体労働にだってお客さんや同僚への気疲れはあるだろうし、頭脳労働と呼ばれる仕事にも体力が必要になる部分もある。世の中の多種多様な仕事を単純に2つに分けられるものではなく、どんな仕事にも肉体労働的な面と、頭脳労働的な面があるだろう。ただ、どちらのパーセンテージが多いか、どんなタイプの疲労が起こりやすいか、それぞれの仕事で傾向はあるはずで、それを知っておくことは仕事を続ける上での参考になるのではないかとも思う。

頭脳労働の疲れや苦勞というと、様々に思考・判断することの消耗、アイデアの枯渇による焦りや苛立ち、ストレスからの頭痛、肩こり、倦怠感、胃潰瘍…なんてイメージがまず出てくる。ナントカVとかナンチャラαとかの栄養剤のCMで、目頭を押さえるスーツ姿の男性が浮かんでくる感じだ。

ただ、私のしている「相談を通して人への支援をする仕事」は、頭脳労働の中でもちょっとまた違う疲れがある気がする。確かに思考や判断も回転させるが、それと同等、いやそれ以上に感情や情緒といった部分の活用が迫られる仕事なのだ。言い方を変えれば「ブレイン（脳）」にもくるが、「ハート（心）」にも負担がくる仕事というか。

家庭内暴力、鬱、リストカット、アルコール依存、虐待。時に相談の現場では、当事者や家族の壮絶な体験が語られる。支援者としてはそれを受容的・共感的態度を示して受け止め、相手の立場に立ってその苦勞を想像し、ねぎらうことが求められる。でなければ、当事者からの信頼など得られない。

しかし気持ちを当事者の方に寄せていくことは、相手の体験を疑似体験し、傷つきを追体験することにつながる、なかなかハートにしんどい作業である。若く経験が浅い頃は特にだ。

またそれと同時に、支援者はプロとして、当事者の話を冷静かつ客観的に分析し、どのような解決・改善が提案できるかを検討するという、ブレインのフル活用も求められる。

つまり家族や友人のように親身に寄り添って心を動かすことと、逆に専門家として心的に少し距離を置き、大局に立って助言や支援を見定めるといふ、相反する作業を同時に行うことが求められるのである。



このエネルギーの消費は大きく、結構神経を使うことになる。一見して一本のロープがただピンと横に張った状態のように見えるものが、実は左右からすごい力で引っ張り合っていて、力が均衡しているため止まって見える。例えて言うとそんな感じだ。し

かもそれを引っ張っているのは、どちらも自分自身なのである。

感情との付き合い方

ハートに堪えるという意味では、当事者との関わりの中での葛藤や、感情の揺さぶりが起こりやすい部分も大きいように思う。

若い頃は特に「こんなことでイライラしてはいかん！」「まだまだ未熟だ」と思って、湧き出る感情をなんとか抑え込もうとしたりした。当事者に対してはいつも冷静に、理性的にあらねばならない。それが理想の支援者だと思い、何度も目指しては、ほど遠い自分がかっかりすることを繰り返してきた。

ただ様々な経験を積み、その傾向は変わってきた。いつの頃からか忘れたが、感情を無理に抑え込む努力をやめたのだ。当然感情のために仕事に悪影響が出ることは避けるが、無理して「いつも冷静で理性的に！」とまでは考えない。すると不思議なことに、ひとつひとつの仕事に少し余裕が持てるようになり、消耗や動揺も減ったように思う。

私たちのお客さんはその相談内容ともども多様性に富んでいる。困っている人だからみんなが、かわいげがあって助けたくなるような健気に見える人達かということ、当然そんな私に都合のいいようにはできていない。こちらに無理難題を言う人もいれば、理不尽に暴言を吐く人、感情的に理屈の通らないことをいう人、無責任な態度に終始する人、何度約束しても守らない人など、実に様々だ。

もちろんそれは、当事者の置かれた環境やシステムのなせるワザだったり、怒りや不安の発露だったりするので、単純に当人を批難しても意味がないことは百も承知だ。

だが支援者だって人間だ。嘘をつかれたり、訳もなく怒られたりすれば悲しくなるし腹も立つ。それは当然のことだ。熱いものに触れば熱い、冷たいものに触れば冷たいと感じる感覚が止められないのと同じように、人間の感情は自然に共鳴・反応するようになっている。

だからその感情自体は抑え込んだり否定したりしない。感情の言い分をちゃんと聞く。「カチンとくるのもしよーがないよね」「俺も人間だもの（相田み〇を風？）」と一旦は認める。それはとても大事な作業だと思う。もし無理に抑え込んだりすれば、感情はくすぶり、行き場を失い、その場で化膿して、ますますこじれる原因となってしまうかねない。

ピクサー製作のアニメ映画「インサイドヘッド」という作品がある。個人的には子ども向けというより、どちらかということ「昔子どもだった方向け」の良作ではないかと思っている。

物語はとある少女の中にいる、ヨロコビ・カナシミ・イカリ・ムカムカ・ビビリという、5つの擬人化された感情たちの活躍が中心。そこではどんな感情も大切な自分の一部であり、己が生きていく上で欠かせない役割を担っていることが描かれている。確かにネガティブに捉えられがちな悲しみや怒りといった感情も、受け入れがたい現実立ち止まって向き合うための時間を確保したり、自分を守るために現状に反発するエネルギーを生んだりする効果を持っている。それはあたかも「痛み」が体に緊急事態を伝えて対応を促し、命を守る役割を果たしているのと似ているように思う。

痛みは確かにやっかいだが、無くしてしまうと様々な不都合が体に起きる。それは感情

についても同じなのではないだろうか。

無論感情に任せて仕事をしていいということではない。湧き出た感情はしっかり認めつつ、その上でプロとして今どうふるまうべきか。その感情にどう対処してあげればよいか。そういう思考と判断がセットだ。もし仮に怒りを使って対応することに戦略や効果の見込みがあるなら、時と場合によってはそれもアリかもしれない（半沢直樹はここを押さえているから上手くいってるのだろう）。でもそうでないなら、感情的に対応することは役に立たないどころか弊害の方が大きいだろう。

回復も色々

肉体労働の疲労回復というと、十分な休養や栄養補給、あとはマッサージなどでの身体的ケアがすぐに思いつく。対して感情や思考、情緒へエネルギーを注ぐことでの心的な疲労には、どんな回復方法があるだろうか。

いわゆるストレス解消法として世間で言われているものがあてはまるのだろうが、人によって好みはいろいろだろう。

体を動かす、大声を出す、自然を見る、音楽を聴く、芸術に触れる、自分へのご褒美と称して甘いものを食べる、よく寝る、よく笑う。定番だが取り扱い注意の、飲酒・ギャンブル・爆買いなんてのもある。

私も自分へのご褒美は与え過ぎるほうだし、旅行やバカ笑いも大好物だ。最近はコロナのせいでカラオケで大声出せないのが残念だが…。

ただその中でも、とても大事なケアの要素と感じているものがある。

それは「人とのつながり」と「時薬」である。

難しいケースや忙殺される業務の中で救われる瞬間。それはやはり、同志や仲間の存在が大きかったりする。

守秘義務を押さえた上での相談や語り合い、愚痴り合いは、自らの考えを整理するのに役立ったり、意外な視点からのアドバイスがもらえたりする大事な機会だ。もちろんそれは当事者への悪口であってならないが「こんな風にしてしまう」「こんな陰性感情を持ってしまう」といった告白も含め、迷いや葛藤など、支援者自身が抱える偽らざる荷物を、安全な場で開陳出来ることは、自分の心にたまった澱（オリ）を吐き出し、改めて己がケースと冷静に向き合うためにとっても重要だと思う。

また最近では SNS など、普段なかなか会えない同業者や、すぐには知り合えなかった遠方の近接領域の方とも繋がれるようになった。様々な情報交換の中で「こんな風に頑張ってる人がいるんだ」「大変なのは自分だけじゃない」と勇気づけられることも、心の回復に大いに役立つだろう。

そして時薬は俗にいう「時間が解決してくれる」というやつ。それはけして「忘れる」とか「あいまいにする」ということではなく、自分がすぐには受け止めきれなかったことを少しずつ受け止め、自分の中で馴染ませていくプロセスだ。そのためにも時間を味方につけるとするのは、とても大事な要素だと思う。

お釈迦様のこんな逸話を紹介したい。

幼い子どもを亡くしたばかりの女が、遺体を抱えたまま「子どもに薬を下さい」と、狂乱したように町中を歩き回っていた。周囲はすでに子どもが死んでいると分かっていたが、必死にすぎる女は何を言っても聞く耳を持たず、どうすることもできなかった。女は偉いお坊さんがいるとの噂を聞きつけ、お釈迦様のもとに行き「お願いします。子どもを助けてください」と薬を求めた。

するとお釈迦様は「分かりました。ではどこかの家からケシの実をもらって来なさい。ただし、いまだかつて死人を出したことのない家のケシの実でないといけません」と語った。

女は喜んだ。なぜならケシは、その地域の家にはよくある木だったから。女はさっそうと周囲の家を訪ね、ケシの実を分けてもらえるよう頼んだ。

しかしどの家を訪ねても「すまないね。うちは半年前に祖母が亡くなった」「うちは5年前に父が病気で」「うちも昨年戦争で子どもを亡くした」という調子だった。

次第に女は死の悲しみに直面しているのは己だけではないと気づき、その後お釈迦様に弟子入りして出家し、さとりを得たという。

私は別に熱心な仏教徒ではないが、お釈迦様のこうした逸話が好きである。そこには相談支援や解決に関しての重要なエッセンスが、たくさんちりばめられている気がする。

我が子の死を受け入れる。そんなつらいことを飲み込むには、どうしたって一定の時間が必要だ。それまではどんな慰めの言葉も、正しい助言も、耳を傾けられるものではない。そしてようやく他人の声が心に届くその時が来たとき、人（お釈迦様）との出会い・つながりによって、女は気づきを得て救われる。

心の疲弊や疲労がケアされ、癒されていく過程は、お釈迦様が生きた昔も今も、基本的には変わらないのだと思う。

臨床のきれはし

Sheet10

浅田 英輔

Yes to Life, No to Drugs

○「ダメゼったい」の功罪

先日、松本俊彦さんの講演があった。「ダメ絶対 だけではない」というタイトルの、依存症対応に関する研修会だった。

その中で、『「ダメ絶対」は「Yes to life, No to drugs」だったのに、Yes to lifeはどこにいったのだ』という話があった。「ダメゼったい」は、一次予防（薬物を使う前にやめさせる）にはよいが、二次予防（使った人をやめさせる）、三次予防（使ったけどやめた人の再使用をとめる、回復）にはよくないのではないか、という話だった。

薬物依存対策のキャッチコピーである「ダメ。ゼッタイ。」は、1987年ごろから使われていること。たしかに薬物依存はよくなる。やめたほうがいい。依存が進むとやめるのも大変だし、オカネもかかるし、人間関係も断ち切っていくことになる。重度依存になると、やめたとしても後遺症としての人格荒廃につながったりと、いいことはない。それは確かである。ゼッタイ、やめといたほうがいい。そこに異論はない。使い始める前にいう「ダメ。ゼッタイ。」は必要だと思う。薬物依存のヤバさについて、ある程度の知識があれば、「オレはやめとくよ」ということもできるかもしれない。薬物利用を未然に防ぐ

という意味では、重要な啓発コピーだと思う。

でも、使ってしまった人にとってはどうか。「ゼッタイダメなものを使っている」のは、非難されても仕方ないだろう。ダメなんでもん。ただ、非難していればそれでよいのか。「あいつは薬に”逃げた”ダメなやつ」といっていいのだろうか。「ゼッタイダメ」として、使用者を悪人として「撲滅」していけばよいのだろうか。

児童虐待で考えたほうがわかりやすいだろうか。虐待はないほうがいいし、しないしてほしい。「叩いたりしちゃだめだ」と踏みとどまって、違う方法でしつけするなりといった手立てをとってほしい。死んでしまったり、理不尽に苦しむ子どもはいないほうがいいに決まっている。しかし、「虐待はゼッタイダメ」といっていいれば虐待はなくなるだろうか。ましてや、国や都道府県が「虐待をゼロにしよう」というスローガンを掲げて、虐待はなくなるだろうか。厳しく取り締まれば取り締まるほど、「地下に潜る」というのはこれまでの歴史で繰り返されてきたことなのではないだろうか。虐待が「地下に潜る」というとちょっと語弊がありそうだが、つまり、

「見えないところでやる」ようになるのである。だって、やっていることがわかるととても非難されるから。

虐待でも薬物でも、やってしまう人をお願いしたいのは「助けを求めること」のはずである。早いうちにうまく援助の手が入ることで、悪化せず、そういうことをしなくてすむ生活に戻れるはずである。自分たちだけではコントロールできなくなったので、今の状況にあるわけなのだ。どちらも、エスカレートしてしまうとより「戻って」これなくなってしまう。「こんなことをしてはいけない」という罪悪感を持っていてほしいが、それと同時に「まだ戻ることができる」という思いも持っていてほしい。「あそこに相談すれば力になってもらえる」という窓口も知っていてほしい。

いじめや不登校も同じである。「みんなでいじめゼロを目指します」なんてことを小中学生に唱和させるなんて、同調圧力の強化でしかない。「いじめたやつをみんなでいじめましょう」と言っているようなものである。いつまでその昭和のやりかたを続けるのか。いつまで「いじめられる側にも問題がある」という話をしているのか。いつまで「悪者探し」の話にしているつもりなのか。それは、いじめを隠し、ばれないようにし、より陰湿になっていくことを手助けするだろう。

いじめは、いじめる側が悪いというのはもちろんだが、同時に「いじめる側が課題を持っている」ということも、考えればわかることではないだろうか。「いじめ、だめ、ぜったい」というよりも、「いじめてしまう人は相談を」のほうがよいではないか。「いじめをする人は心理相談の対象である」ということを浸透させたほうが、問題の解決につながるのではないだろうか（最初のうちは「いじ

めをした人はカウンセリングに行ってもらいますからね！」とかいう罰みみたいな使い方がされることが想像されるが、そうではない）。

「普通の子」がいじめを注意するにしても、「いじめ、ダメだよ」だけでなく、「やめなよ、そういうときはカウンセラーに相談しなさいって言われたじゃん、いってこいよ」のほうが、対話的で相手を尊重している感じがするのだが、どうだろう。

「あなたがいじめをするなんて、先生、かなしい」よりも、「自分の問題に向き合う方法を身につけなさい」のほうが教育的ではないだろうか？

不登校だって同じだ。不登校は「悪」なのだろうか？「不登校ゼロの学校を目指す」というのは、何か、とても、気持ち悪い。何を目標にしているのか？？風邪で2日くらい休むと、職員会議に諮られそうである。これもまた「不登校する子どもの問題」としているからであろう。不登校ゼロを目指す学校で不登校を貫き通そうとするのは、なかなか能力なのではないかと思うくらいだが。

○「ダメな人」の排除

ここまで書いていて気づいたのだが、「ダメぜったい」みたいなものが生み出すのは、「ダメな人」を「ふつうの人」から分断することだ。正義と悪を作り出すことによって、「悪」を分断し、「普通の」世界から離し、「普通の」世界に復帰不可能にする方法だ。

クスリをやった芸能人は、全て断絶され、芸能界に復帰することは許されない（最近、少しその傾向が薄れてきているが）。

新型コロナも同じ傾向がある。感染した人が「悪」で、断絶され（隔離は必要だが）、

世の中から排除され、集中非難される。PCR検査数を増やせという声がある一方、陽性が判明すると身の回りが大変になるため、検査を受けたがらない人もいるという話もある。

これらは、小中学校からの「ダメ、ぜったい」教育の影響が強く感じられる。「いい人」と「悪い人」がいて、悪い人は排除されなければならない、「正義」によって裁かれなければならない、といった思想があるのではないだろうか。

言うまでもないが、「犯罪を容認しろ」ということではない。「犯罪者」＝「悪人」ではないよね？ということ、もう少し大事に扱う必要があるのではないだろうかということだ。

それは、罪を犯した人が復帰することを受け容れていくという意味だけでなく、「ふつうの人」が生きやすくなるためにとても大事なことに思えるのだ。

ギャンブル依存の人の復帰施設を地域が受け入れないという報道があったが、罪を犯した人の復帰施設はもちろん、いろいろな障害に関する施設や保育園の建設なども関係してくるだろう。これらを受け容れていくことは、寛容さを示すだけでなく、社会の構造をよりよいものにしていくことに関係しているに違いないのだ。

○ふつうの人

最初に書いた研修会の中では、高知東生さんも登壇した。薬物依存から復帰した人という立場である。あたり前のことだが、「ちょっとかっこいいふつうのおっちゃん」である。とてつもない悪人ではないし、素晴らしい善人でもない。ちょっとかっこいいけど。回復した人は、悪いやつでもないし、特別にいいやつでもない。「ふつうの人」である。

「ノルウェイの森」を読んだのはかなり前のことになる。村上春樹さんの小説は、いつも「ぼく」が「スゴいセックス」をしてよくわからないで終わる、っていうパターンであり、好き嫌いがかなりあるものと思う。（ちゃんと理解しているファンの方ごめんなさい）

ただ、ノルウェイの森に出てくる、レイコさんの「回復するのよ」っていうセリフが好きだ。

「治る」でも「治療する」でも「よくなる」でも「もとに戻る」でもない。回復するのだ。

「治る」ことにもこだわりすぎなところがあるかもしれない。脳損傷など、身体機能の変容は「治す」という面もあるかもしれないが、そうでなければ、「病気になるまえ」（依存症になるまえ）の自分と、そのあとの自分はそこまで違うものだろうか？「薬にさえ手を出さなかったらいい自分でいられた」のだろうか？

当然だが、「依存症」と呼ばれる状態になりたいわけではない。ならず済むならそれに越したことはない。犯罪もしなくてすむならそのほうがよい。

しかし、依存症になったからといって、それは「治す」ものなのだろうか？と疑問がある。「病気＝治す」という医学モデルが浸透しすぎたのだろうか。自分や周りに大きな迷惑がかからず、それなりに生きていけるのなら、病気があってもいいのではないだろうか。

最後にいいたいのは、タバコはまだやめないということだ。依存じゃないし！！

発達検査と対人援助学

① 発達検査は何をなしてきたのか

大谷 多加志

初めて読んでくださっている方には“何のこと？”という話ですが、前号までの連載を一区切りにして、今号から新連載の第1回目をスタートしました。どうぞよろしくお願いたします。

2012年の第10号から、31回にわたって「新版K式発達検査をめぐる」というテーマで連載をしてきました。その中では、2020年3月まで勤めていた前職でかかわっていた「発達検査」について、その時々で思ったこと、感じたことを書いてきました。今年4月で所属が変わったことから、それを一つの節目として、連載の装いも少し変えることにしました。

立ち位置が変わったことで、今まで自分が関わってきたものに対して少し距離ができました。関わる深さという面では、少し浅くなったのかもしれません。一方で少し距離ができたことで、客観的に、俯瞰的にみることができるような気もしています。前の連載と重複する部分もあろうかと思えますし、以前とは多少考え方が変わっている部分もあるかもしれませんが、その時々で考えたことを書いていますので、そのようにご理解いただければと思います。

個人的な決意表明

まったく個人的なことですが、大学院を

修了後初めて勤めた職場を退職するというのは、やはり大きな区切りで、不安もありました。

まだ半年ほどですし、不安が消えたりはしておらず、これまでとは違う領域での仕事も経験させてもらう中で、自身の知識や力の不足をまざまざと実感し、『もっと学ばないといけない』という思いに駆られています。一方で、新しい場で、1年目の新人に戻って、一から学びなおすことがたくさんある環境というのはとても活力が出てくるもので、学ぶ意欲も増しています。

これからも学び続け、その中でこれまで向き合ってきた「発達検査」というものについて、改めて捉えなおしていこうと考えています。学び続けることと、発達検査について考え続けること。これを今の自分の決意として記しておこうと思います。今回の内容も、ここ数か月で自分が研修や書籍を通して学び考えたことを整理する形で書いてみようと思います。

発達検査は何をなしてきたのか

今回改めて考えたいと思ったのは、「発達検査」というものが社会の中で果たしてきた役割についてです。

私たちくらいの世代では、生まれた頃から世の中に発達検査というものがありまし

た。もう少し前の世代ですと、集団式の知能検査を学校などで一斉に実施していた、という時期もあったそうです。

1905年、フランスでビネーが作成した知能検査が世界で初めての知能検査だと言われていますが、それから百余年、さまざまな形で知能検査や発達検査が用いられています。今や当たり前になってしまった「知能検査」、「発達検査」について、これはそもそも何なのか、これによって何がなされているのか、ということをもう一度整理して考えてみたいと思いました。

対人援助学から見た発達検査

新しい連載を書こうと思いついても、自分関わってきたテーマは限られています。どう新連載にできるかと考えて、本誌が対人援助学会の定期刊行誌であることに改めて思い至り、「対人援助学」の観点から捉えなおしてみようと考えました。

「対人援助学を拓く」という一冊の本があります。この本の序文は、マガジン執筆者でもある村本邦子先生によるこの一文から始まります。

『「対人援助」という用語は1980年代より社会福祉の領域において現れ、1990年代、看護、医療、心理、教育の領域でも広がりを見せた。その背景には、科学技術の進歩とともに各領域がますます高度に専門細分化していこうとする時代もあって、肝心の人を見失うことへの危機感、また、価値観が多様化し選択肢が増大するなかで、従来のパターンリスティックな援助関係を超越する新しい関係性のパラダイムが求められるようになり、援助する者／される者がかけがえのない唯一無二の人とし

て出会い、個別の関係性の中で共によりよい方向を探るという原点に立ち返ろうという機運が高まったことがあったと考えられる』

(対人援助学を拓く 序文より 晃洋書房)

この一文を見たとき、発達検査が用いられる援助場面は、果たして「対人援助」という観点から十分に振り返られているか、という問いが浮かびました。

「発達検査」は対人援助の一側面を担っていると思いますが、高度に専門細分化された一領域であると言えます。その中で、“人を見失う”ことや、“パターンリスティックな援助関係”が生じてはいないでしょうか。

問い直してみる価値があると思いましたし、対人援助学における発達検査について考えていくことが、将来的な発達評価のあり方や展望を拓くことにつながっていくのではないかと考えました。

今回はまず現在の発達検査のあり方を振り返り、論点の整理を行いたいと思います。

さまざまな場での検査の利用

知能検査と発達検査は、実際には随分違うのですが、利用される場や利用目的が類似している場合も多いので、「発達検査等」として、まとめて整理していこうと思います。発達検査等はさまざまな領域で用いられていますが、ざっと概観しただけでも医療、教育、保健、福祉などで広く用いられています(表1)。

医療機関での利用においては、子どもの知的発達の状態を確認するために発達検査等が利用されています。時には、医師の診断の補助的な資料とされる場合もあります。

また、教育の場では、教育相談や就学相談

で発達検査等が活用されています。就学相談では、子どもに合った就学先を検討するために発達評価を行い、支援学級や支援学校、通級指導教室の利用などが検討されます。教育相談では子どもの知的発達の状態や認知特性を把握して、子どもに対する教育的配慮や支援方法を検討するための情報収集のツールとして活用されています。

保健領域では、とくに母子保健における利用が中心となりますが、乳幼児健診などでの発達評価や経過観察に利用され、子どもの発達の経過を見ながら、フォローアップや療育の紹介などが行われています。

福祉領域では、療育手帳や知的障害者手帳の交付業務において、発達検査等が用いられています。療育手帳などの交付は、対象者の知的発達の水準や生活における支援の必要性を総合的に考慮して行われますが、発達検査等の結果が重視される傾向があります。

また、療育施設では発達の経過観察や発達支援の方向性を探るために発達検査が用いられています。発達検査等の結果をもとに、子どもの発達状態を確認し、家庭養育への助言を行ったり、子どもが通う保育園や幼稚園などとの連携がはかられたりします。

表 1

分野	医療（病院）	教育（学校）	保健	福祉
利用	診断補助	就学相談・教育的支援	乳幼児健診やその後の経過観察	公的機関における判定・療育施設などでの発達評価

近年では、警察や裁判所など、司法に関係する場における利用が生じていたりもして、利用はますます拡大する傾向にあると言えます。

検査の利用と葛藤

検査の利用が広がる一方で、検査の実施にはさまざまな葛藤が伴う場合も少なくありません。

発達検査等に対する社会の認知度は以前と比べると高まってきているとは思いますが、それでも自身や子どもの知的発達の状態を数値化されるという経験は、非日常的なもので、そこに抵抗を覚える人も少なくないでしょう。検査の受検や、療育利用の勧奨に抵抗を示す保護者が、子どもを第一に

考えていないとか、障害受容ができていないと専門職に避難される構図は、今も残っています。検査の数値的な結果だけによって専門職が画一的な判断を下してしまうこともいまだにありますし、検査結果の報告書がどれも似通ってしまう「テンプレート所見」という問題もあります。

援助職にとって、発達検査等のはもろ刃の剣であるように思います。わかりやすく専門性を示す武器と考える人もいますが、単に検査ができれば専門家というわけではありません。“子どもの知的発達に顕著に遅れている可能性がある”などの重い通告を、援助者である“私”が言っているのではなく、“検査結果”がそう示していますと伝え、よく言えば中立的で客観的、悪く言えば他人

事で無責任な使い方になっているケースも散見されます。発達検査等が、対象者の利益ではなく、援助職側の専門性の誇示や、責任の回避に使われていないか、という点は繰り返し自省が必要であるように思います。

家族と「選択」

先日、マガジン編集長である団先生の「団士郎かえってきたトークライブ 2020」に参加しました。2つのテーマについて2時間強のトークライブでしたが、そのテーマの一つが家族の「選択」についてでした。

考えてみると、発達検査を受けるまでの間にも、多くの選択や決断があるはずです。乳幼児健診の際の保健師さんの言葉に耳を傾けるか否か、経過観察に応じるか否か、発達検査の受検や療育利用の勧奨に応じるか否か…、すべては家族の選択ですし、そこにはさまざまな思いや決断が含まれていることでしょう。

「子どもとの上手な遊び方を教えてくれる先生がいるので、行ってみますか？」

「遊びながら子どものいいところを見つけて、もっと成長する方法を教えてくれる先生がいます」

発達検査等を実施する際、どのような説明によって検査を受けることに同意したのかを保護者に確認しています。その際、上記のような勧め方で、検査の場に誘われた方もいました。勧めた方は、保護者になるべく恐怖心や拒否感を生じないように、オブラートに包んで包んで、うまく発達相談になぐることができたと考えていたようです。しかし、誠実な対応とは言えませんし、イン

フォームドコンセントを得るという意味でも、問題があるでしょう。家族に選択を迫るのであれば、まず選択に必要な情報を提供することが必要になりますし、家族がどのような選択をしても、その結果を尊重する姿勢が求められると思います。

抵抗を生むものは何か

SNSの普及により、国民のだれもが情報発信をすることができる時代になりました。乳幼児健診の内容や、その中でスタッフがどのような観点で子どもを見ているかという情報も、子育て世代の保護者のブログやSNS上で見つけることができます。健診のチェックにかからないように、準備をして臨むというご家庭もあるようです。この状況の是非はいったん措きますが、ここでは“チェックにひっかかりたくない”という動機を見出すことができます。

大人が受けている健康診断であれば、もちろん気になる所見が見られないことが一番ですが、異常所見が見つからないように検査をやり過ごすようなことはしないでほしい。異常がないに越したことはありませんが、あるならば早期に発見して対応したいという願いがあるからです。

通常の健診と、乳幼児健診における行動の違いは、何から生じているのでしょうか。おおよそ3つの理由が考えられると思います。

- ①いわゆる完治という概念がない
- ②自分のことではなく、子どものこと
- ③見通しが立たない

①に関して言えば、乳幼児健診と同様、健診で経過観察になった場合にどのような対

応になっていくかは、さまざまな情報が示されています。多くの場合、既存の支援の枠組みを利用しながら子どもの生活や成長を支援していくこととなりますが、“障害”についてはいわゆる“完治”という概念がありません。医学的な病のように発見が早ければ回復の可能性が高いとか、選択肢が増える、というものでもないで、早期発見の動機づけは相対的に高まりにくいと言えます。

②の、自分のことではなく子どものことである、という側面も実は大きいと思います。以前と比べると児童発達支援などのサービス利用の敷居は随分低くなってきました。しかしながら、誰もが利用するサービスではないですから、利用を決めるには家族の判断が必要ですし、決して軽い判断ではないようにも思います。また、現役子育て世代と祖父母世代では子育てに対する考え方もかなり違います。児童発達支援事業を利用することについて、『お前は自分の子どもを障害者にしようとしている』と祖父母世代から責められた、という話も何度も聞かえてきました。

最後は③についてです。①と②についていえば、たとえば家族に完治を期待できない病が宣告された場合などでも、同様のことが生じます。この場合、余命宣告などによって、事態の有限性が暗に示されることが、結果的に今できる最善を探るという方向に意思が働くことを促す側面もあると思います。しかしながら、子どもの成長・発達に関わる問題については、なかなか見通しが立ちにくいところがあります。以前より選択肢が増えてきてはいますが、特別支援学校や特別支援学級に在籍した子どもが、その後も障害福祉サービスを利用しながら生活

していくことがまだ一般的であるように思いますし、福祉サービス事業所の実態というのは、多くの人にはイメージしづらく、縁遠いものであるようにも思います。障害福祉施設について、ニュースで流れるのが障害者虐待事案があった時だけ、ということであれば、利用を躊躇う心理が生じることも無理はないでしょう。

先日、NPO 法人 **Swing** の理事長、木ノ戸氏の講演をオンラインで聴講した。以前、対人援助学会の研究会でも話を聞き、事業での取り組みや理念に感銘を受けた。その中で木ノ戸氏が、「支援-被支援」の関係性をとても慎重に扱っていることが印象に残った。その人に代わって何かを行うということは、その人が何かを行う経験をする機会を奪うことでもある。援助職と利用者として、支援-被支援の関係性が固定化されれば、それはなおさら加速される。もちろん、責任や立場の違いはあるが、一方でみんな「一市民」である、という横並びもあり、だからこそ“できる人ができることをする、できない人もいる、ただそれだけ”というスタンスで支援-被支援を固定化しない姿勢が、とても自然で、必要なことがうまく循環し賄われていると感じた。

口先ではなく、その人らしくあることをサポートする場や関係をどのように構築していけるか、障害児者支援の取り組みが問われているように思う。

講演会 & ライブ な日々 ㊿

古川 秀明

スッポン

私が勤務する中学校で、スッポンが飼われている。

生徒がどこかで捕まえてきたものを、先生が育てて、みんなに公開している。

最初は親指よりちょっと大きいくらいだったのが、今では握りこぶしくらいに成長した。

私はこのスッポンという生き物がたまらなく好きだ。

フォルムが可愛いのもその理由だが、このスッポンは私が子供の頃のラッキーアイテムだったのだ。

こいつを捕まえると小学生の小遣いの数十倍の金額が手に入る。

スーパーマリオブラザーズのスターやコインなど、スッポンに比べればゴミ以下である。

テレビの前でチマチマとコントローラーを操作して、ゴールしてもほんのわずかな、にせものの達成感しか味わえないコンピューターゲームなどでは決して味わえない楽しさがある。

楽しさの秘密は2つある。

①捕獲する楽しみ ②親に依存せず、自分の力でお金が手に入る楽しみ。

スッポンは料亭の板前さんや反社会勢力の人たちが喜んで買ってくれた。

まさにスッポンは京都の下町貧乏クソ坊主達の、一獲千金を実現する夢の生き物だったのだ。

しかし、夢の生き物だけあって、なかなか捕まえない。

スッポンを捕獲する場所は二カ所。

ひとつは二条城のお堀で、もうひとつは神泉苑にある池。

二条城の堀でスッポンを捕まえるには、様々な難関を越えなければならなかった。

まず、基本となる捕獲方法は餌で釣り上げることだ。

餌はでっかいミミズ（ドバミミズ）で、土をひっくり返して捕まえる。

なるべく石垣の近くに餌を落とすのがポイントだ。

石垣は等間隔に積まれており、必ず積まれた石と石の間には隙間がある。

スッポンはそこに潜んでいることが多い。

しかし、スッポン以外のカメもたくさんいる。

いや、むしろスッポン以外のカメの方が圧倒的に多い。

100回くらい餌を落としても、石亀や泥亀、銭亀ばかりで、一匹も捕れないこともしょっちゅうだ。

しかもカメはよく針を丸呑みするので、その針を口の中から外するのが面倒になる。

しかし、そんな苦労よりももっと恐ろしい敵がいる。

それは警備員だ。

一定の間隔で、生け垣を乗り越えて、堀に近づくものがないか見回りに来る。

この警備員に捕まると結構厄介なことになる。

釣り道具を没収され、小学校に通告されるのだ。

通告されることには慣れていたが、釣り道具を没収されるのは何としても避けたいのだ。

この警備員対策には苦労した。

小学生の頭で考えられることなどたかが知れている。

一番簡単なのは見張り役を置くこと。

当時はもちろん携帯電話やスマホなど存在しなかったし、もしあってもそんな高価なものを買ってもらえるとはとても思えない。

そうなるとトランシーバーだ。

しかし、これも小学生の小遣いで買える品物ではない。

最後に残るのは、人力しかない。

警備員は必ず自転車で回って来る。

時間が決まっていればその時間を避ければ良いのだが、これが結構いい加減だった。

一日に何度も回って来る日もあれば、一回も来ない日もある。

となると、最後は見張りとなるが、警備員はなぜか必ず右から回って来る。

だから、竹屋町付近で捕獲するならば、見張りを御池通りに立たせておいて、警備員が回ってきたら大急ぎで自転車で知らせにくる手はずにした。

しかし、見張り役になりたい奴がなかなかいない。

ただ立っているだけなので、とてつもなく退屈な仕事なのだ。

真夏はとくに辛い。

そりゃ夢中になってスッポンを捕まえるほうが何倍も楽しい。

見張り役はじゃんけんで平等に決めるのだが、世の中にはじゃんけんにめっぽう弱い奴がいる。

仮にその人を A 君としよう。

A 君はたいていパーしか出さない。

そのことを見抜いていた僕たちは必ずチョキを出す。

一度や二度なら A 君も納得するが、度重なるとさすがに A 君も異議申し立てをする。

A 君「じゃんけんはやめて交代制にしよう」

誰も見張り役になどなりたくないの、多数決で即、却下。

A 君「それならあみだくじにしよう」

紙と鉛筆を用意するのが面倒だという理由で却下。

その日もじゃんけんに負けた A 君が見張り役をしていた。

そんなある夏の日、炎天下の中、ただ立っているだけに飽きた A 君は見張り役を放棄して家に帰った。

せめて放棄したことを僕たちに言って欲しかったのだが、彼は何も言わずに帰った。

そんな時に限って警備員がやって来る。

見張り役を立ててないときは最大限に注意をしているのだが、A 君にすべてを委ねていたのですっかり油断してしまった。

釣り道具は全部没収され、小学校に通告された。

翌日学校で A 君の行いについて僕たちは話し合った。

確かに何度も見張り役をさせられるのは辛いから、今回は許してあげようという意見でまとまった。

そのことをA君に伝えると、彼はとても喜んでくれた。

A君はお詫びに、今日だけは自分が見張りをやると言い出した。

僕たちはA君に感謝し、放課後にまたスッポンを捕りに行った。

お金に目がくらんでいる京都の下町貧乏ガキどもは、一度や二度の失敗ではくじけない。

この力を勉強に向けたら、きっとみんな同志社や立命館中学に入れたらろう。

約束通り、その日はA君が見張り役をしてくれた。

そしてその日、A君に釣り竿を借りて、念願のスッポンを捕まえた。

しかもかなりの大物だ。

普通サイズで500円くらいで買ってもらえるが、このサイズなら上手くいけば1000円、いや1500円はもらえるかもしれない。

僕たちはすぐにスッポンをバケツに入れて、スッポンを買ってくれる反社会勢力のお兄さんのところへ行った。

彼はいつもカトレアという、パチンコ屋の隣にある喫茶店にいた。

スッポンが捕れたらすぐに持っていく約束になっていた。

彼がいないときは、喫茶店のママさんが代わりに買い取ってくれた。

ママさんは、髪の毛は金髪で、唇は真っ赤で、目の周りは青で、頬っぺたは真っ白だった。

その日はお店にいつものお兄さんはいなかった。

代わりに五色豆を顔にしたようなママさんがいた。

ママさんの名前はマリさんと言った。

このママさんに「マリおばちゃん」と言うと、すごくご機嫌が悪くなるので、必ず「マリのねえちゃん」と言わなければならない。

マリのねえちゃんはスッポンの大きさにびっくりしていた。

僕たちはどうか千円にはなりますようにと祈った。

マリのねえちゃんは僕たちの人数を数えた。

僕たちが3人であることを確認すると、レジをチーンと高らかに鳴らして500円札を一人に1枚ずつくれた。

僕たちは満足した。

しかもその日、マリねえちゃんは僕たちにメニューにある好きな飲み物を飲んで良いと言ってくれた。

僕たちは迷わず、声を合わせて「クリームソーダ」と言った。当たり前である。クリームソーダには飲み物+アイスクリームが付いているのだ。

僕たちは自分たちの成果にととても満足しながらお店を出た。

やっぱりスッポンは幸運の女神なのだ。

上機嫌でお店を出た帰り道、僕たちはとても厄介なことに気が付いた。

すっかり見張り役のA君のことを忘れていたのだ。

僕たちは急いでA君のことについて話し合った。

見張り役も立派な仲間なので、もらった合計1500円は、A君にも分け前をもらう権利がある。

しかし、1500円を4人では分けにくい。

だけどやはりここは平等にしなければならない。

1500円を4人で割ると、一人あたり375円。

500円札が100円玉と10円玉と5円玉になることに、3人とも強い抵抗感があった。

できれば紙のお札を持っていたい。

友情と欲望に挟まれた僕たちは苦しんだあげく、ある事実を思い出した。

A君はついこないだ、見張り役を勝手に放棄した。

そのおかげで僕たちは大切な釣り道具を没収され、おまけに学校に通告されたのだ。

よく考えたらこの罪は決して軽くない。

しかし、一度はその罪を許している。

僕たちはA君を許し、再び友情を取り戻したのだ。

これは素晴らしいことだ。

だけど、それと引き換えに500円札が100円玉と10円玉と5円玉に変えられるのには耐えられない。

炎天下の公園で熱い議論が交わされた。

そしてついに僕たちは名案を思い付き、それを実行した。

僕たちは、とても残念そうな顔をして、A君が見張りをしている所へ行った。

そしてA君に、今日スッポンは捕れなかった。A君には暑い中、見張りをしてもらってとても感謝している。

そのお礼に、今日は駄菓子屋でA君の好きなお菓子を何でもおごってあげるから一緒に行こうよ、と誘った。

A君はとても喜んだ。

駄菓子屋に着くと、A君は塩せんべいとネコガム（フィリックスガム）とウルトラマンジュースを選んだ。

合計で45円だ。

A君はとても恐縮して、3つも買ってもいいの？と僕たちに聞いた。

僕たちは、A君の働きは3つくらいでは足りないから、あと3つ買っていいよと

言った。

A君はさらにとても喜び、僕たちに握手を求めた。

A君はひも付きの飴と、三色ゼリーと串ドーナツを買った。

合計6つ買っても、100円でお釣りが返ってきた。

感激したA君は、これからも僕がずっと見張り役をしてあげると言った。

二条城の大型スッポンに味をしめた僕たちは、もうひとつの捕獲ポイントである「神泉苑」にも遠征した。

神泉苑の池にはカメがたくさんいる。

カメがいるということはスッポンもいる可能性がある。
さすがに神泉苑の池で釣り竿を出すわけにはいかない。

神主さんに叱られるし、何より大型の錦鯉がうじゃうじゃいるので、そんなものが針にかかったら釣り上げるのが大変だ。

そんな手間なことをしなくても、神泉苑のカメは余裕で手づかみできる。

乾物屋で「麩」を買い（これは20円くらい）、それを池にまけば、いくらでもカメがやってくる。

カメと一緒に錦鯉も集まって来るが、こいつらは無視するしかない。

二条城の警備員のように、神主さんやお手伝いみたいな人が、たまに出て来て池を見回ったり、池の奥にある神社で何かの呪文を唱えていた。

狭い神泉苑の中で、見張りは意味をなさない。

そこで僕たちは、20円で買った「麩」をばらまき、集められるだけのカメをあつめ、誰かが来る前にその中からスッポンを選んで捕獲するという、極めて単純なやり方を思い付いて実行した。

この日、スッポンを捕獲したのはA君だった。

こないだのスッポンほど大きくはないが、まずまずの大きさだ。

僕たちはA君をほめたたえた。

A君はちょっと照れながら捕まえたスッポンを入れたバケツの中に手を入れた。

その時、A君に不幸が訪れた。

スッポンを持ち上げようとバケツに手を突っ込んだA君の人差し指に、スッポンが噛みついた。

スッポンに噛みつかれると雷がなるまで放してくれないという言い伝えがある。

それを固く信じるA君は真っ青になり、「痛い～！指が食いちぎられる～」と叫んだ。

僕たちはA君を励ました。

夕方になったら夕立が来て、雷が鳴るかもしれないと言うと、A君はとても夕方まで待てないし、それまでに指が食いちぎられる～と泣きながら訴えた。

スッポンの首をちょん切ればいいのかという意見も出たが、買い取りの値段が下がるかもしれないという意見が採用され、却下された。

そんなやり取りをしている間、A君はパニック状態となり、はよ取って、はよ取って、痛い、痛いと訴え続けた。

僕たちは、以下のような人差し指のないA君の生活を想像し、深く同情した。

- ① 鼻クソをほじる時に不便である。
- ② おしっこをするときにチンチンを出しにくいし、その結果、おしっこを漏らしてしまうかもしれない。
- ③ 銀玉鉄砲の引き金を引けなくなる。
- ④ 自転車のベルを鳴らしにくくなる。
- ⑤ 検便の時に、マッチ箱にうんこを入れるのがとても厄介になる。

この結論を聞いたA君はますますパニックになり、もしスッポンを指から放してくれたら、今後どんな言うことも聞くと聞いた。

僕たちはこの言葉を待っていた。

今後もスッポンを捕獲し続けるには釣り竿は不可欠だ。

その釣り竿が A 君の見張り放棄のおかげで没収されてしまっている。

釣り竿は結構高価なので、なかなか次の釣り竿は買えない。

もちろん親は没収の経緯を知っているので、新しい釣り竿を買ってくれるわけがない。

そこで目を付けたのが A 君のお父さんだ。

A 君のお父さんは魚釣りが趣味で、びっくりするくらい釣り竿を持っている。

もしできることなら、そのうちの 3 本を僕たちに譲ってもらえないか交渉して欲しいと A 君に言うと、そんなことならすぐにできるし、できるだけ上等な釣り竿がもらえるように頼んでみてくれると言ってくれた。

交渉が成立したので、僕たちは A 君とスッポンを連れて池まで行き、スッポンを絶対逃がさないようにしっかりと抑えながら、池の水の中にスッポンを入れた。

すぐにスッポンは A 君の指を放して、池の中に泳いで逃げようと必死でもがいた。

再びスッポンをバケツに入れた僕たちは A 君に、指はまだ手に引っ付いているか？と聞いた。

A 君は涙を拭きながら、人差し指を大事そうに見つめ、僕たちに感謝した。

後日、A 君は僕たちに釣り竿を持ってきてくれた。

よほど感謝していたのか、A 君のお父さんが優しいのか分からないが、とても上等な釣り竿だった。

スッポンは一度喰いついたら雷が鳴るまで放さないという、まことしやかな都市伝説がある。

はっきりと言わせてもらうが、真っ赤なウソである。

確かにスッポンは他のカメに比べて噛みつきやすい。

実際、僕たちも何度も噛みつかれている。

噛みつかれても大して痛くない。

というのも、スッポンには歯がない。

一度噛みついたら放さないイメージがあると、スッポンにはサメのような強力なギザギザの歯があるように錯覚する。

噛みつかれた時にパニックを起こし、スッポンを振り回したり、指を無理に抜こうとしたりするからケガにつながる。

一番簡単なのがスッポンを水につけることだ。

水に入るとなぜかスッポンはくわえているものを放す習性がある。

このことはスッポン捕りの名人と言われていた2歳上の上級生から教わった。彼は僕たちに、スッポンのいる場所、釣り方、餌の付け方、警備員の対策、噛まれた時の対応方法、換金の仕方、値段の交渉の仕方などを伝授し、中学生になると、スッポン捕りのような子供の遊びはもう卒業したと言って、さっさとパチンコとビリヤードに乗り換えた。

このように、スッポンに噛みつかれた時の対応方法を知っていた僕たちは、それをうまく利用し、再びA君の罪を許し、新しい友情を作り上げたのである。

バケツにスッポンを入れて、A君を含めた僕たち四人はまた喫茶店に向かった。

この日も反社会勢力のお兄さんはいなかった。

マリのねえちゃんは今度のスッポンはこの前のよりかなり小さいので、800円だと言って、一人に200円ずつくれた。

A君は大喜びだ。200円でも僕らの小遣いにすれば大きい。

だけど前回の500円札を経験している僕たちにはなんだか物足りなかった。

マリのねえちゃんが、またジュースをごちそうしてくれると言った。

今日もクリームソーダでいいの？と聞かれ、僕たちはうなづいた。

しかし、ここでA君があることに気付いた。

前回のは大きくて……。今日もクリームソーダでいいの？……。

A 君が自分の疑問をマリのねえちゃんにぶつけると、マリのねえちゃんは親切丁寧な事実を話し、瞬く間に一切が露見した。

いくらトロい A 君でも事の顛末が理解できたようだ。

ははあん、それでこないだ僕に駄菓子屋でいろいろおごってくれたんやな。

A 君の目がみるみるうちに吊り上がって行った。

喫茶店を出ると、A 君は僕たちに話があると言った。

そのまなざしには鬼気迫る迫力があつた。

A 君は僕たちに以下の措置を取ることを宣言した。

- ① 今までのすべてを父親に話し、釣り竿を没収する。
- ② 先生やみんなの親にもこのことを話して、厳しく罰してもらう。

僕たちは以下の修正案を提示した。

- ① 前回のスッポンの分け前を A 君にも渡す。(ただし、駄菓子屋で使った 100 円は差し引く)
- ② 今回もらったお金の中から、みんなで 30 円ずつ、合計 90 円を A 君にお詫びとして渡す。
- ③ その代わりに、釣り竿はそのまま頂いて、先生に言うのもなしにする。

A 君は激しく抵抗した。釣り竿はとても高価なものなので、前回のスッポンのお金は全部自分がもらおうと言った。

前回の 500 円をほとんど使ってしまった僕たちは、粘り強く交渉を続けた。

- ① だいたい釣り竿が没収されたのは A 君が見張り役を勝手に放棄したからである。
- ② 親にこのことを話したとしても、自分たちの親はスッポンをお金に変えることについてはむしろ賛成しているので、いまさらそんなことを話しても意味がない。僕たち 3 人の親は、スッポンを換金することではなくて、警備員に見つかるといふ初歩的なミスについてのみ厳しく指導する人たちである。
- ③ もし A 君の宣言通りのことを実行すれば、今後僕たちは A 君と絶交しなければならないし、ドッジボールの時は A 君に集中してボールを顔面に当てなければならない。

- ④ 釣り竿に関して、お父さんに返せというのならそうするが、今までの話をすべてお父さんに話さなければならぬ。(A君のお父さんはとても厳格な人なので、スッポンをお金に変えていることを知ったら、恐らくA君は厳しく叱られるであろう)

A君はドッジボールに強く反応した。

球技全般が苦手なA君は、いつも僕たちのチームに入れてあげて、守ってあげているのだ。

悩んだあげく、A君は一人につき100円ずつと、今後の見張り役の免除を申し入れ、僕たちは了解し、和解が成立した。

僕たちは今貰ったお金の中から100円ずつをA君に渡し、仲直りのお祝いに駄菓子屋に行くことにした。

駄菓子屋に入ると、とんでもない奴がいた。

6年生の熊五郎だ。

身体がとても大きいので熊五郎というあだ名で呼ばれていた。

熊五郎は下級生がいると、必ずお金を巻き上げる。

この日僕たちはスッポンを換金して、結構お金を持っていたので、とてもまずい状況となった。

熊五郎はすぐに僕たちに気付き、ちょっと来いと言った。

ちょっと来いと言われて、素直に行けばどんな目に遭うか分からないので、僕たちは自転車に乗り、すぐに逃げ出した。

無事に逃げ出した僕たちだったが、A君だけがいなかった。

大急ぎで駄菓子屋に戻ると、A君が熊五郎に首根っこをつかまれていた。

金を出せという熊五郎に、A君も必死で抵抗していた。

今日はお金を持っていない、と抵抗するA君。

それならばそこでジャンプしてみろ、とネチコクからんでくる熊五郎。

ジャンプすればポケットの中の小銭がチャランチャランと音を出すので、お金があることがすぐにばれる。

駄菓子屋の外に引っ張り出された A 君はもはや半泣き状態だが、そんなことで許してくれる熊五郎ではない。

僕たちはすぐに作戦会議を開いた。

即座に全員一致で、可哀そうだが A 君は熊五郎の犠牲になるしかないという結論だ。

だいたいまごまごして逃げ遅れた A 君が悪い。

ここは見殺しにするしかない。

熊五郎の言うとおりに A 君がジャンプすると、チャランチャランとお金の音がした。

さっきのスッポンの売り上げも含めて 4 2 0 円が熊五郎に巻き上げられた。

意気揚々と駄菓子屋に戻った熊五郎は、さっそく大好物の黒棒を 3 本も食べていた。

こんな不幸な出来事は、京都の下町貧乏くそ坊主の間ではしょっちゅう起こる。

弱肉強食の世界は厳しいのだ。

A 君は泣く泣く自転車をこいで僕たちのいる公園にやってきた。

A 君は僕たちを見つけて、血相を欠いて、立ちこぎで、全力疾走で、鼻水と涙を垂らしながら、鬼の形相でやってきた。

泣きながらギャーギャーわめいているだけなので、何を言っているのか分からなかったが、たぶん A 君は、

「お前らよくも俺を見殺しにしたな！スッポンの時といい、何回も俺をひどい目に遭わせやがって～～！」

と言っているのだ。

僕たちはお金を出し合い、自動販売機のペプシコーラを A 君におごってあげた。

それを飲んだ A 君は少し落ち着いた。

ボコボコに殴られなかっただけでもめっけものではないか？と言うと、A 君は殴られてもいいから 420 円は取られたくなかったとうつぶいた。

その気持ちはよくわかる。420 円は大金だ。

しかし、熊五郎の腕力には到底かなわない。

ここはあきらめるしかない。

「だいたいお前らが俺を見捨てないで、みんなで力を合わせて俺を助けてくれたらよかったんちゃうんか！」と A 君はまた泣きながら訴えたが、そんなテレビドラマのようなお話にはならない。

何度も上級生に殴られたり、金を巻き上げられたりしている僕たちは、現実をしっかりと認識できるし、さっさと白旗を上げるのが得策であることを身に染みて学んでいた。

そんな現実主義的な僕たちにも、不幸はいきなりやってくる。

夢中で話し合っていた僕たちは、背後に熊五郎が近づいていたことに気が付かなかった。

公園のど真ん中で集まって話をしていたら、そりゃ目立つに決まっている。

いつもなら安全な公衆便所の上に登って話しをするのだが、この日は A 君の勢いに押されて、そんなことを考える余裕がなかった。

熊五郎は僕たちを一行に並ばせて、ジャンプしろと命じた。

スッポンのお金があるので、A 君以外はみんなチャランチャランとポケットから音がした。

熊五郎は残らず回収した。

僕たちがあんなに苦勞して捕まえたスッポンの代金を、熊五郎はあっという間に巻き上げた。

こんな理不尽な話・・・が京都の下町ではしょっちゅう起こっていた。

僕の仮面ライダーカードは、軽く数十枚巻き上げられている。

巻き上げた上級生の中に熊五郎もいた。

僕たちは夢の中で何度熊五郎を八つ裂きにしたか分からない。

それと同じくらい夢の中で熊五郎に追い回されたりもした。

熊五郎はまるで勝ち誇ったゴリラのように僕たちの自転車をけり倒し、僕たちに片っ端からビンタを食らわしたり、突き飛ばしたりした。

上級生の中でもこの熊五郎が一番たちが悪い。

その日の熊五郎は実にしつこかった。

何度も何度も僕たちを殴りつけた。

僕たちを1列に並べて「気を付け！手を後ろに組め！歯を食いしばれ！」と言って何度も笑いながらビンタを食らわした。

噂によると、熊五郎のお父さんが軍隊経験者で、熊五郎もこのやり方で父親に殴られているらしい。

熊五郎の弱い者いじめは、その八つ当たりなのかもしれない。

ビンタを食らわせた後、熊五郎は必ず「ありがとうございました」と言うことを強要した。

とうとう A 君がパニック状態になった。

僕もういやや、何でこんな目に遭わなあかんねん、と泣き叫んだ。

泣き叫びたい気持ちは僕たちも一緒だった。

だけど、どうしようもない。

ちょうどそこに自転車に乗った反社会勢力のお兄さんが通りかかった。

お兄さんは、スッポンのお礼を僕たちに言ってくれた。

お兄さんはここで何をしているのかと聞き、すかさず A 君が泣きながら事の顛末をお兄さんに告げた。

お兄さんは熊五郎からお金を取り上げ、今度この子たちに手を出したら、切り刻んでスッポンの餌にするぞと言った。

お兄さんのシャツの隙間から青い入れ墨が出ていたのを熊五郎も知っていた。

熊五郎は悪びれる様子もなく地面に唾を吐き捨て、自分の父親は土建屋でやくざの知り合いもたくさんいる、という内容の言葉をお兄さんに投げかけた。

その瞬間、お兄さんの平手が熊五郎の右頬をとらえた。

お兄さんは自分の左腕のシャツをまくり上げ入れ墨を見せながら、いつでも誰でも連れて来い、と静かに言った。

熊五郎は大声で泣きながら帰って行った。

何となく僕たちは、熊五郎のことを案外根性なしかもしれないと思った。

あれから何年経ただろう。

今は令和。

A 君は税理士に、B 君は反社会勢力の一員に、C 君はトラックドライバー、私はシンガーソングライター。

A 君だけが堅気な仕事に就いている。

思いがけず、勤務している中学校で飼われているスッポンを見つけ、懐かしい思い出がよみがえってきて、つらつらと長く書いてしまった。

今思えば実に野蛮な小学4年生だ。

松の木にロープを結び、二条城の石垣を下りて、一番下の石垣の間に手を突っ込んでスッポンを引きずり出すこともあった。

気分はテレビのキーハンターやコンバットや忍者部隊月光だった。

これは C 君の発案だったが、石垣の中に手を突っ込むのは、中に何がいるか分からないのでとても気持ち悪かった。

ロープで石垣を下りるのは簡単だったが、上るのが大変だった。

結構高さがあるので、手の皮がむけて、何日もひりひりしたが、赤チンかメンソレータムだけで乗り切った。

蛇がいることもあったが、私はその頃から爬虫類が好きで、蛇やトカゲの存在はとても嬉しかった。

蛇の子供を捕まえて、家で飼おうとしたが、母親がそれを見るなり大きな悲鳴をあげ、「あんさんが家を出ていくか、蛇を放り出すか、今ここで決めなはれ！」とすごい勢いで迫るので、泣く泣く二条城の林に返した。

せっかくこの蛇を子供のうちから飼いならして、大きくなったら、意地悪をする上級生に噛みつくように調教しようと思っていたのに、残念だった。

二条城の堀に転落することもしょっちゅうだった。

外から見てると、とても深く見えるが、案外浅いところが多い。

堀の底は泥なので、転落して怪我をすることはなかったが、ドロドロになった。

今、小学校でもカウンセリングをしているが、子供達は放課後になると、学童か放課後デイか学習塾に向かう。

何もなく家に帰る子は、すぐにスイッチなどのゲーム機で、フォートナイトや荒野行動、集まれ動物の森、スプラトゥーンなどに夢中になる。

どこにもスッポンの入る余地がない。

自然、生き物、友達、協力・・・スッポン捕りほど面白いことはないのになあ。

もしも二条城に行くことがあれば、城ばかり見ないで、ちょっとだけお堀を見て欲しい。

大きなスッポンが水の中から顔を出しているかもしれない。

スッポンを食べると元気になるという。

還暦を前にした今の私はスッポンを丸かじりしたい気分だ。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

家族と家族幻想 3

坂口 伊都



人生の岐路の一つに結婚がある。

私たちは、どのような人に心惹かれて
いるのだろうか。

そして、どのような家族像を思い浮かべて
いくのか。期待と不安を胸に
人は結婚に踏み出してみる。

コロナウイルス感染者の数が減ったかと思っ
たのも束の間、緊急事態宣言の頃よりも日々の感
染者人数は大きくなりました。帰省、旅行を控えて
と知事が言い、国は Go to トラベルキャンペーン
をして、不協和音の中に立たされる私達です。人
が移動すれば感染者は自ずと増えますが、経済を
止めるわけにもいかない、相反することをすれば

摩擦が生まれる。そして、それぞれの立場で何
を見ようとするかで見え方が変わります。コロナウ
イルスはただの風邪だと主張する人々も現れ、そ
の一方で感染防止に躍起になる人々もいます。何
を時代が優先させていくのかで私たちの向かう未
来が変わります。ある程度の見通しを持って一生
が終わられるという時期は終わったのかも知れま
せん。変遷する時代の波の中で、個々人に意思を
持つように迫られてきている時代になり、誰もが
途方に暮れているという感じでしょうか。感染者
が減るような対策を取られていないので、これか
ら増え続けるでしょう。どこで政府が手を打と
うとするのか、その時が手遅れでないことを祈り
ます。

気晴らしに旅行に行きたい気持ちでウズウズ
していますが、夫婦そろって対人援助職をしている
身としては、感染した頃に旅行に行っていたとは
言いにくいです。自宅のある市でも感染者は出
ているのですから、どこにいても感染リスクはあ
るのですが、夏もゴールデンウィーク同様、おと
なしくしています。

当たり前が当たり前でなくなる。そういうことは歴史を振り返っても起こり得ることです。今回のコロナウイルス感染も中国で封じていればと批判している人がいましたが、どこの国でも儘ならないことは変わりなく、自分達ができなかったことをとやかく言っても始まりません。感染者数を抑え込んでも、人が動けば広がるのはという現実を前提にバランスと何ができるのかを考える必要があるのでしょうか。

当たり前でなくなると言えば、三浦春馬さんの自死に少なからず衝撃を受けました。ファンというわけでもありませんし、活躍している俳優と認知をしている程度です。しかし、ドラマ収録中、新曲が発売される中での出来事だったこと。そして、交流があった方たちも多く、趣味もあり、才能もあり、ストイックで真面目な方だったと報じられています。これだけ社会と繋がりがある方でも、死を選択するということが私にとって驚きでした。死の前にはLINEのアカウントが削除されていたと耳にしました。繋がりを切って、逃げ道を封じたのでしょうか。彼に中にどのような気持ちがあるのか、死に至る行動となったのか。もしかしたら長い間、積み重ねられてきた苦しみがあるのかも知れません。真相はわかりませんが、改めて

「死」というものを考えさせられました。

私は、食欲に生きるというより、淡々と今を生きているタイプです。仮に、あなたは今から不死になりましたと言われたら、喜ぶことはなく、死ぬこともできず生き続けなければならないことに絶望する方でしょう。死が隣り合わせに感じる場面になったら、死にたくないと泣き叫ぶかも知れませんが、子どものために今は死ねないと思気込むママ友にそうだよと相槌をうつこともなく、ただ圧倒されたことを思い出します。そんな私でも、自分が納得して生きたいとは思っています。そのためのエネルギーがかなり要りますが、そこだけは曲げられないです。

人生の岐路に立った時、どのような選択をするのか、大きな岐路の一つに結婚があります。結婚は、自分一人がしようと思っただけのものでもありませんが、女性の幸せはいい相手と結婚すること、夫を立てて養ってもらうのが一番と言われてた時代がありましたが、妻も働かないと家計が回らない時代が変わっています。

「嫁」という字は、夫の家のとつぐという意味合いを持ちます。民法上は、結婚でどちらの姓を名乗ってもいいですし、男女の合意の下で決定されるものですが、今も男性の姓を名乗るパターンが大方を占め、「嫁」になるという先入観が続いています。夫婦別姓を政府がなかなか認めようとしないので、事実婚を選んだり、職場で旧姓をそのまま使用している人に良く出会います。

大学生になった娘は、結婚はできたらいい程度に思っても、したいとまでは思わないと言っています。女の幸せはいい人と結婚をすることだと言われていた頃に比べると淡泊になったものです。彼氏



が欲しいかと尋ねると、周りを見てもあまり幸せそうな人を見ないし、行動がいろいろと制限されるから優先順位は低いそうです。娘、大丈夫か？と少々不安になりますが、その内変わるのでしよう、たぶん。

結婚をするとすぐに「子どもはいつ？」という展開になり、ここでも選択を迫られます。自分たちのライフスタイルや年齢を考えながら計画的に産もうとしたり、妊娠がきっかけで結婚を決意したり、子どもを持たない、あるいは養子縁組や里子を受け入れる等の選択肢があります。子どもがいると、生活が一変します。

私も子どもを産み育てながら、働き続けてきました。子どもが小さいのに保育所に入れるなんて可哀そうと言われたこともありました。上の子と下の子と同じ保育所に入れず、朝も晩も走り回る日々で大変でした。その当時の保育所では、仕事が終わったら真っ先に迎えに来るのが当たり前、買い物なんてして来たら非難の的でした。仕事が休みなら保育所に連れて来ず家で子どもをみるものだとされ、保育所内にも母子神話が根付いていました。母親が仕事を続けることにプレッシャーがついてまわりますが、父親が家事育児をすれば称賛され、母親の方は羨ましがられ、楽しいていると思われて終わります。出産の鼻の穴からスイカを出すくらいの痛みを耐え、産んだ後も痛くて座るのも儘ならず、出産で体力を奪われているのに数時間おきに母乳を飲ませと母親ばかりに負担がかかり、夫婦の子どもなのに割が合わないと思われ、夫を恨めしく思いました。母親に育児の重責を背負わせることは、今もあまり変わっていないのでしょうか。

時代が急激に変化しているように見えますが、性別で左右される社会での役割分担はなかなか変わっていかないようです。性別は生まれ持った性質で、物心ついたころには自分は女であり、女の子の振る舞いを暗黙の了解のもと学習していったように思います。生まれ落ちた時から、性の社

会的役割を植え付けられながら成長してきました。

誰もが自分の惹かれる人と「対」になりたいと望み、家族を作るスタート地点に結婚があるのだろう。

ペアになる理由に繁殖があるが、私たちは繁殖以外の時期も一緒に過ごしている。そこには、別の理由があり、それを求めている。

どちらの性に生まれ落ちるかは、誰にも決められません、その性を引き受けて生きることへの努力は、女性、男性の両方にあります。私は女性をしてきたので、男性の苦労はあまりわかっていないところがあると思います。結婚、家庭、進学、就職、職場と女性が不利益を強いられていると感じる場面が数多くあります。

男性と女性のペアには、生物として子孫を残すというシステムがありますが、ただ子孫を残すためだけに対になるのではなく、様々なペアがいて、繁殖以外の期間を共にしています。人間界では単純に強い雄に雌が惹かれるわけではなく、我々の暮らしに根ざす文化や思想、社会的役割等に大きな意味があり、ペアになる相手を求める際に深く関わっているとわかります。その他、経験から何かを学んだり、コンプレックスが影響したりもしているように思います。

己がどのような人に惹かれるのかを思い返すと、家族の影響があることは否定できません。以前に

原家族のワークショップで、若い頃は年上の男性に惹かれてしまうことが多かった、今思えば男性に父親像を求めていたと思うという話で盛り上がった事があります。私の場合は、このような感じの人が父親だったら良かったのに、父親のように甘えてみたいという願望がありました。惹かれる相手には理由があると言われたら、多くの方が頷くでしょう。誰かと「対」になっていくことは、家族を作っていくスタート地点でもあり、原家族の影響を受けやすい部分なのですね。

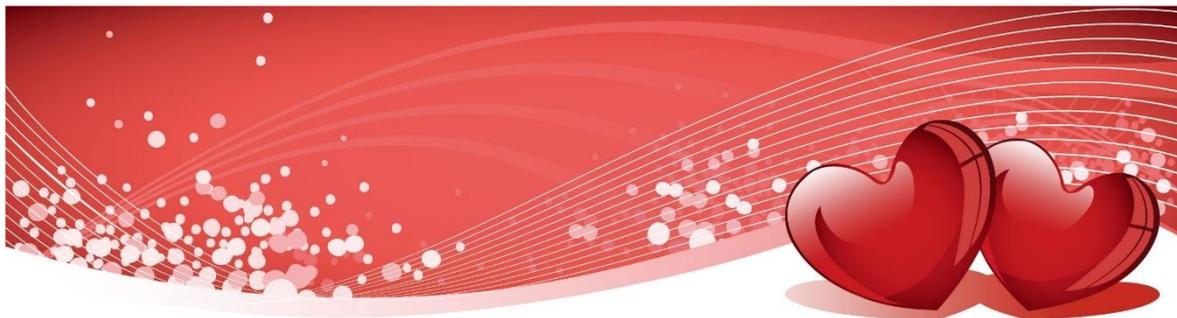
また、異性に惹かれるだけで話が済むわけではありません。同性同士、同性も異性も恋愛対象、どうしても恋愛感情を抱けないという方もいます。自身の容姿についてももともとの生物学的性と自身が認識する性が違い苦しむ人もいます。人の性が多様過ぎて、頭の中がいつも混乱してしましますが、このような多様な性は世界の歴史の中にも出てきますし、日常的にも珍しいものではないのでしょう。高校時代にしぐさや話し方が、女性っぽい男子生徒やゲイなのかなと思われる二人組がいたなと思い出します。ゲイと思われるペアには、周りからいろいろなヤジが飛んでいましたが、いつも自分たちの世界にいて楽しそうに笑っていて、羨ましく思ったことを思い出します。私も家に電話がかかってきて、女の子から告白された経験があります。同じ高校ではないと言われたので、顔もわからないままです。当時の私はショートヘアでガリガリだったので、女性として認識されていたのかどうか怪しいのですが、付き合っただけと言われた記憶が残っています。女性的なフェロモンが全く持てないまま、今に至ってしまいま

した。

恋愛関係になるためには、お互いに惹かれあうことが前提となります。両想いになっても、タイミングや状況が合わないと恋人になれないこともあります。いろいろな障害を乗り越えて恋人同士になると、自分が相手から求められ認められたと思えます。自身の存在意義を感じ、幸せな気持ちになります。その相手を失わないように型にはめるのが結婚制度でしょうか。

経験によって惹かれる要素が変わるという話をしましたが、マイナスの方向に惹かれてしまうことも儘あるようです。ドメスティックバイオレンスとされる夫妻に出会うことがあります。夫側も妻側も子ども時代から暴力を受けて育ったり、間近で暴力を見ながら育っていることが多い印象を受けます。自分の寂しさを埋めて欲しいと相手を求めるが、自分からは与えられないという印象を受けることがあります。相手を失わないように必死になるほど暴力が生活の中に入り込む。妻の方は、やっとの思いで離婚したが、寂しさに耐えられず別の男性を求める。今度こそ、この人なら大丈夫と自身に言い聞かせるが、またDVに出会う。男性も女性も自身の生き様を整理していくことをしないと同じことを繰り返してしまうように見えます。

性被害も大きく作用する経験になります。性虐待や性被害を受けると大きな傷になります。その傷を癒すためには、誰かの手助けが必要ですが、被害者なのにも関わらず、そんな服装をしている方が悪い、誘ったのはお前だ、穢らわしい等の人格否定をされ、傷を癒すどころか傷口に塩を塗ら



れる目にあうこともあります。その苦悩は計り知れません。性加害は、被害者の人生そのものに影響を与える重大な犯罪です。性被害を受け、風俗で身体を売るようになったという話を聞いたことがあります。性被害は、女性だけでなく男性にも起こり、少年が成人男性から性被害を受けることもあります。男性の風俗では、男性からの性被害者の人も働いていると言います。その人が、本当にゲイなのか、あるいはその経験に引っ張られているのかは、本人にもわかりません。

性にまつわる事柄は、深く生活や価値観、自尊心感情にも関わっています。希望にもなるし、絶望にもなる。その一方で、性にまつわることを子どもと向き合っ話そうとする機会は少ないのではないのでしょうか。昔は、性を大らかに語っていたと言います。私の子ども時代と比べても性描写が生活の中から排除されていっているのは間違いないでしょう。何が正解なのかはわかりませんが、性行動以外に結び付きたいという欲求を私たちは所持していること、それと性行動がどう結びつくのか、結びつかない場合もあるのかを語られなさすぎることは、子どもを守っていくことに繋がらないように感じます。

人は一人では生きられない。

人は、守り守られながら生きていくものではないのでしょうか。

それを子どもに伝えていくことは、とても大切なのでしょうか。

家族の原点は、誰かと対になることから始まるのだと考えると人生そのものを左右することに繋がることになります。もちろん、結婚をしない、結婚をしても離婚をする等の選択肢があり、やり直しはききます。しかし、どのような人に惹かれてしまうのかは、子ども時代から馴染んできた原家族や経験してきたことが大きく影響します。私は、相手に無意識の内に何を求めているか。そして、大人として自立できてくるのか。例えば、寂しさを紛らわせるために誰かがいつも傍にいて欲しいとばかり願うと、パートナーは姿を消し、子どもにもたれかかろうとしてしまうことが起こります。子どもも親の期待に応えようと必死になっていたり、どうしたらいいのかわからず戸惑っていたりと子どもらしさを置き去りにしているように見えます。本来、子どもは親を始めとする大人に守られ存在だということを知っていて、その中で気持ちを調整してもらい、感情を知り、どうして対応すればいいかを学べ、さらなるチャレンジをする力を発揮する力を持っています。親のために生きることを求められた子どもは、その力を上手く発揮できません。そして、自身に対する認識も低くなり、社会の中の行動が上手く回らなくなる悪循環にはまっています。

多種多様な人間がいて、価値観もそれぞれ異なることを教えるのは、大人の役割でしょう。そして、性というものをどう捉え、被害にあった時は守ってもらえる信頼を持っていける世界が、家族を肯定的に捉えられる土台になるように感じます。まずは、自分がどのような弱さを持ち、どのような偏見を持ちながら育てているのかを知ろうとすることが大切なのかなと考えています。



2018 年度 むつ・多賀城

村本邦子（立命館大学）

2020 年度は家族応援プロジェクトの最終年になるはずだったが、COVID-19 で延期となり、今年はプロジェクトもリモートで実施することになった。半年前の私だったら嫌がって絶対にできなかつたと思うけれど、連休明けから授業はすべてオンラインとなり、しかも、司法臨床という集中講義では院生たちの議論やロールプレイ演習を取り入れなければならなかつた。工夫を重ねながらやっていくと、だんだんと扱い方がわかってきて、ある側面からは、対面で行うのと違った利点があることもわかってきた。もちろん、共に身を置き、空気を共有しながら行うものには代えがたいものはあるけれど。それで、プロジェクトも、リモートでやれることをやってみようと思えたのだ。危機への柔軟な適応をレジリエンスという。ただし、状況を見極め、危機に適応するのではなく、抵抗、つまりレジスタンスを貫くことも重要だ。

この原稿を書いている 2020 年 8 月 28・29 日、初めてのリモートプロジェクトをむつとやった。事前学習の報告では、院生たちの希望により、六ヶ所村の菊川さんと大間のあさこハウスのことを紹介した。ちょうど、今回書いた内容だ。また、フェイスブックの思い出が、昨年の恐山と共に、一昨年の菊川さんとあさこハウス訪問の記録を見せてくれる。こうやって、状況に合わせてながら、決めたことを十年間、毎年重ねてきたのは、我ながらなかなかのことだと思う。



2018年8月下北

8月28日(火)～29日(水)

六ヶ所村

毎年恒例、むつプロジェクト前のフィールドワーク。8月28日(火)、お昼に青森空港に着いたが、何たること、帰りのJRチケットを忘れてきたことに気づく。レンタカーで、いったん新青森駅まで行き、チケットを再購入。田舎館村の田んぼアートを見て、三沢へ向かう。

寺山修司記念館で中村さんをピックアップし、六ヶ所村の花とハーブの里へ。鎌仲ひとみ監督(2007)『六ヶ所村ラブソディー』の舞台だ。2004年、六ヶ所村に、原発で使った燃料からプルトニウムを取り出す再処理工場ができた。この工場の風下に農業地帯が広がっていた。菊川恵子さんは、毎年、そこでチューリップ祭りを開催し、隣接の農家たちと一緒に、再処理計画への反対運動を続けていた。

菊川恵子さんはDVDと比べるとほっそり痩せていて(病気をされたらしい)、お疲れのようだった。8月というのに、夜には薪ストーブに火を入れなければならないほどの冷え込み。ひじきご飯に味噌汁、サンマ、ほたてといかの刺身、サラダと豊かな土地の恵みを頂く。お風呂は壊れているとのことで、温泉施設「ろっかぼっか」へ行く。立派な建物で、太陽光をどのくらい使っているなど、エコ表示がしてある。なんだか皮肉な感じがする。





翌朝は、フライパンで焼いたパン、サラダ、コーヒー。ルバーブジャムとブルーベリージャムに梨と西瓜。地元で採れた自然のものばかり。青森では、お盆過ぎた西瓜が一番おいしいのだそう。いろいろと話を聞かせて頂く。

子どもの頃、このあたりは原野という感じで、そこを人力で切り拓いて畑にしてきた。自分は県外に出ていたが、核燃のことがあって帰ってきた。最初は周囲から変なことしているという眼で見られていたが、チューリップ祭りを始めてから受け入れてもらえるようになった。でも、2010年が最後。近所の人々がトラクターで耕してくれたりしたが、鼠が出てダメになった。

可能性はいくらでもある土地なのに、選挙のたびに多額の裏金が動くので、どうしようもない。日本だけが世界に逆行して、どう見ても長くは続かない。現在は、WWOOF (World-Wide Opportunities on Organic Farm) という有機農法の農業体験ボランティアの受け入れをしている。

1971年ロンドンで始まったもので、日本の事務所は札幌にあって、「泥だらけのスローライフ」を掲げ、全国何百ヶ所かにホストがいる。もともと、自分で食べるものは自分で作りたいと、畑を借りて、子どもたちと無農薬でやっていた。

世界中からウーファーがやってきて長期滞在する。おもしろい出会いもたくさんある。六ヶ所のことを知らずに来る若者も多い。ここに来れば、壁の周りにたくさんの関連メッセージがあるので、そこで初めて六ヶ所を知る。最近イギリスから来た青年はすごく気が合って関係ができたと思ったところで、急に六ヶ所のことを知って、

慌てふためいて荷物も忘れて逃げて行ったということがあった。

「もともと市民活動などしようと思ったこともなかった。ふつうに自分の暮らしをしたいと思っているだけなのに、こんなことになってしまった。本当は一人の時間が好きなのに、忙しくてなかなか一人になれない。本当はもっと優雅に自分の時間を生きたかった」と、菊川さんは静かにため息をつく。

六ヶ所原燃 PR センターと東通村のトンツウビレッジへ行ってみた。2012年に訪れた時とそれほど大きく変わっていないが、前は安全だという PR だったが、今は事故があるたびに安全の見直しを重ね、何重にも安全を期しているというストーリーが強調されていた。若者グループと老人グループが説明を受けていた。





8月29日(水) 大間あさこハウス

車で2時間程移動し、大間のあさこハウスへ。熊谷あさこさんは、津軽海峡に面した下北半島の突端、大間町で建設中の大間原発の用地買収を拒み、たった一軒で闘い続けた。そこにログハウスを建て、引っ越し準備をしているところで、2006年、急死された。現在は、娘の小笠原厚子さんが、その意思を引き継ぎ、あさこハウスを守っている。厚子さん自身も、2017年、不慮の事故で大怪我をされている。まさに命懸けの抵抗だ。

大間原発のフェンスが続き、入口は非常にわかりにくい。しかも、入り口付近には、守衛がいたり、監視カメラがあったりして、その圧迫感は半端ではない。有刺鉄線に囲まれた細い細い草道を通って、ようやくたどり着いたあさこハウスは、季節の花が咲き乱れ、山羊や犬がいて、とてもメルヘンチックな雰囲気である。風は強めだが、気持ちのいい気候。お庭でコーヒーを頂きながら話を聴く。

大間の街中に母の実家があって、ここと半々、行き来して暮らしている。ふだんは草むしりしたり動物たちの世話をしたりと、自然を大切に生活することがテーマ。運動の部分は少力で、訪ねてくる人もそう多くはない。自分は15歳で大間を出たので、母がやってきたことについてまったく知らなかった。157名の地権者がいたが、「そんな変なものを海に流してはいかん、豊かな大間を守らなければいけない」と母だけが売らなかった。外からも内からも四方から圧力あったが、「どれだけこの海と

自然が大事か。いつかわかるべ」と言っていた。狂言強盗事件があって、刑事事件として裁判になり、大々的に報じられたため、初めて知った。

自分は原発も何もまったく知らなかったが、そこから亡くなるまでの4年、母を助けるようになった。突然亡くなったのでショックは大きかった。函館から週末通っていたが、母はずっと元気だった。健康診断でも何ら問題がなかったのに、ある日、急に危篤だと電話がきて、ツツガムシにやられたという話だった。68歳だった。本人はまだまだ生きるつもりだったろうから、何も聞いていなかった。でも、母ならどうしたかなと考えながらやっている。この家も、支援の人たちも手伝ってくれたが、母と自分で作った。母は何でも自分でする人だった。

娘と決めて、町長選にも出た。反対している人もいるという意味表示をしたかった。葉書（公道を保つために、あさこハウスに葉書を送り、郵便配達をしてもらおうという運動）の方法を考えたのも娘。今、29歳で、今は自分のことをしたいと、東京でフリーターをやっている。



あさこハウスに手紙を出そう

プロジェクト

大間原発の敷地内にあるあさこはうすには道が一本通じている。東電が閉鎖目的でこの道の交通量をはかり始めたところから、郵便配達員がこの道を通る回数を増やすことで撤去を防ごうと始められた。葉書にメッセージを書いて送ろう！

〒039-4601

青森県下北郡大間町大字大間字小奥戸 396 あさこはうす内

小笠原厚子様

こんな状況のなかでも、明るくパワフル、自然体の厚子さんに、「どこからそんな力が湧いてくるんですか」と尋ねると、少し考えて、「守りたいものがある。大間の自然、大事な人。その気持ちが人よりちょっと強いのかもしれない」という答えが返ってきた。六ヶ所村の菊川さんもそうだったが、女性たちは暮らしのなかに思想があり、その延長線にごく自然な行動があるのだ。すごいなあと思う。なにしろ、たった一人の抵抗によって、大間原発は工事がストップしているのだ。一人の力がこんなにも大きいなんて。

お話している途中、何度も原発工事の人たちが近くにやってきた。一日何度か巡回に来るそうだ。車でやってきては、何かを測定している様子（そぶりなのか？）。原発の建屋はすぐそこに見えていて、仕事をしているが、原発工事はストップしたままだ。「あさこハウスに葉書を出そう」の葉書やひじきを買って、あさこハウスを後にする。





8月29日(水)～30日(木)

下風呂温泉

その夜は下風呂温泉に宿を取る。2014年にも来たことがあり、公衆浴場で見た大きな龍の入れ墨の入ったお姉さんのことを思い出す。大湯に行って、後は宿で。お湯は熱く、ぬるめ、あつめとあるが、ぬるめも熱い。茨木から来たという女の子が熱がっていたら、地元のおばあちゃんが水を入れたらいいんだよと、私は熱い方にも挑戦、みなさんに感心された。

宿は貸し切り状態。本当かどうか、前日と翌日は満室だと。お風呂では、旅館の親戚という女性と一緒にいろいろしゃべる。同世代くらいの感じだが、その人は隣の風間村に住んでいるらしい。ここは新島裏が



昔泊まったことから、同志社と交流がある
そう。いろいろ聞いてくるのでプロジェ
クトの概要を伝えると、「凄い人と会った
んですね！」と。沿岸部のことは言うが原
発には触れないので、福島も大変と言うが
スルー。やはりタブーなのだろう

8月30日(木)

むつへ

朝、中村さんをむつの図書館まで連れて
行き、館長である桜井さんのインタビュー
に同席する。サードプレイスとしての図書
館の役目についての話は面白かった。貸し
出し冊数の多い少ない等、いろいろ言われ
るので、図書館の居場所としての機能など
についても、まとめていく必要があると思
っている。ここにはギャラリーがあるので、
地域のグループが展示をしたり、ピアノが
あるので、ギャラリーコンサートがあつた
り、地域の交流の場にもなっている。利用
機関へのアンケートなどやってみたく
おっしゃっていた。

お昼は、名物「おおみなと海自カレー」
を食べるが、“No Curry, No Peace”の広告
になんとか皮肉を感じる。中村さんを見相
に送り、恐山詣でをする。レンタカーの返
却に行き、今回気になっていたことを聞い
てみる。これまで、むつには乗り捨てので
きるレンタカー会社が一軒しかなかった
はずなのに、今年あらたにできたのかどう
かである。この1年で数軒できたそう。観
光客が増えたのか、その理由を聞くと、
東通りや大間の作業員など原発関連が多
いらしい。自衛隊関連施設が増え、最後に

観光客も少し増えたということだった。

院生たちは、フィールドワーク中、車が
溝にはまったということで、3名が遅刻。
懇親会でのプレゼンはさんざんで、夜つか
まえて指導する。思わぬハプニングで、事
前にやるはずだった現地打ち合わせがで
きなかったのだろうと後で思う。





8月31日（金） 支援者支援セミナー

8年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」、協力団体が年々増え、こちらも、院生7名、総勢11名という大人数での参加となった。開始前に市長と懇談。忙しくてお疲れのようで、「子育てする時間がない。イメージだけで、ほとんど家にいない」とぼやいていた。若く人気の高い市長だ。

今年の支援者支援セミナーは、スタッフ参加者も入れると百名近い人数となった。半分が民生委員、下北半島の各市町村で福祉に関わる公務員、福祉施設の職員、看護師、保育士、警察、児童相談所の職員等の

多職種が集まる。いつものように、地元の事例をもとにグループに分かれて検討した。今年の実例は、メンタルヘルスの問題を抱えた母子世帯の子育て。昨今、メンタルな問題を抱え、親族の支援もうまく受けられない母親のケースが増えている。提供者からは、フォーマルな社会資源、インフォーマルな社会資源を有効に機能させるにはどんな支援が考えられるかという問題提起があった。

事例の紹介から、むつにおいて、日頃から、多職種連携で手厚い支援が行われている様子が伺える。それでも困難はつきものなので、皆で知恵を出し合った。半数近くが初参加というにも関わらず、最初から議論が盛り上がるのは、きっとリピーターたちが引っ張ってくれているのだろう。

アンケートでも、「具体的な地元の事例を民生委員や福祉関係、立命館の院生と検討していくなかで、様々な意見を聞くことができ、大変勉強になりました。今後の支援に役立てていきたいと思います。ありがとうございました」「エコマップ、広げる、前を向く等、これからの参考にしたいと思います。たいへんありがとうございました。また来年も参加希望です！」などたくさんの方の声をもらった。困難よりも家族の持つ力に着目し、それを地域で支え合えるよう地域をエンパワーできるといい。

夜の部のお父さん応援セミナーは男性オンリーのため、女性陣は夜のフィールドワークとして、むつを案内してもらい、セミナー終了後に合流して交流会。



9月1日(土)

漫画トーク

翌日は漫画トーク。漫画展の感想には、「漫画展示パネルはいろいろな自分の奥にしまってあった想いがインスパイアされるものでした。直接被災のことを扱わないけれど、過去に経験した何かや、これから起こるかもしれない何かを思い、そのことを少し大事にする、そういう気持ちを引っ張り出してくれます。ガレキ撤去じゃない復興支援、目立たないけれどホッとできる支援をありがたいと思っています」 「毎年参加するようにしています。子どもが不登校から引きこもりになり、もう8年にもなります。小学校、中学校、高校と大事な時期を自宅でじっと過ごしているので、母としては不安でいっぱいです。でも、私の好きなことをして、あまり子どもを追い詰めないで生活していきたいと思います。未来なんてないけど、今を生きています」などの声があった。プロジェクトもあと2年、その後どうしていくのが話題に上るようになっていく。



2018年10月 多賀城

事前勉強会

今年、修士課程に入ってきた増尾香苗さんは、災害看護を専門とする看護師で、災害救援者 DMAT（災害派遣医療チーム）として東日本大震災発災2日後に多賀城に入り、3日間医療救援活動を行った。その時の経験を考えていたところに、本プロジェクトで出版した『臨地の対人援助学-東日本大震災と復興の物語』に出会い、立命館大学に入学してきたというのだ。当然のように、プロジェクトに参加し、多賀城チームのメンバーとなった。私たちが継続的に関わってきた多賀城の被災直後の様子はどうだったのだろうか。貴重な機会なので、プロジェクトに先立って、増尾さんの話を聞かせてもらうことにした。

増尾さんは、救護班の第一班として出動することになり、医師2名、看護師3名、事務職3名の計8名が、3月12日15時に救急車両2台で出動した。出動してまもなく、福島原発事故が報道され、放射能漏れの恐れがあり、南から向かう救護班は撤退するかそのまま待機した方がよいということになった。原子力災害訓練を受け、放射能汚染を想定して放射能探知器を準備していた増尾さんのチームは、車のエアコンを止め、外気をできるだけ遮断し、気象情報をもとに風上になる北側を走行した。北陸自動車道、磐越自動車道、東北自動車道を経由し、1日かかりで、3月13日16時15分に宮城県の霞目駐屯地に到着した。

活動1日目は、高松赤十字病院救護班の仮設診療所に合流し、石巻市民病院からの

ヘリで搬送されてきた130名のうち28名の治療対応、重症な患者から仙台市内の病院に救急搬送した。ほとんどの人が津波に流され、低体温だった。また、海岸の病院が津波に襲われ、屋上に避難した患者がヘリで運ばれてきた。13日から14日午前までは途切れることなく被災者が運ばれ、治療に追われたが、急に被災者が運ばれてこなくなった。無線や災害対策本部の情報は混乱を極め、何が起きているのか全くわからなかった。現状を推察するに、このままここで待機するだけではだめだと車で状況把握に出発した。想像を絶する状況に、二手に分かれ、14日午後より、3名は巡回診療を開始した。

人が見当たらないため避難所に避難していると判断、カーナビで学校へ向かった。報道されている多賀城体育館の前には国境なき医師団や他の救護班の車両があったため、救援車両が停車していない小さな小学校へ行った。100人ほどがいて、2時間ほど診療活動を行い、次の避難所へ向かった。そこには300人前後の避難者がいて、3人で診れるか心配になり、トリアージを行った。大声で自己紹介をし、「診療を望まれる方、歩ける人はこちらに集まってください」と声をかけ、集まった軽症の人たちには看護師一人が血圧測定を行い、増尾さんと医師が動けない人を診て回った。悪化する可能性のある人の対応については、災害対策本部に継続支援を要請した。

巡回診療を終え、霞目の仮設診療所に戻り、状況を報告、翌日も再度巡回診療を行うことにした。2日目のその夜は、夜間の搬送がないと自衛隊から連絡があって、暖房付きの自衛隊のテントで仮眠すること

になった。夜間に震度5の余震があり、本来使っていた医療テントは倒壊していた。

最終日である15日も、支援が届いていない学校や体育館を探した。多賀城小学校には400人以上の避難者がいたが、食べ物は家族でマリービスケット1袋のみの配給。津波で薬が流された人が多く、高血圧、不整脈、発熱、不安を訴える人々の対応に追われた。津波から必死で走って逃げたことを話す子どもたちと、涙をこらえて見守るお母さん。みな我慢強く、気遣いまでしてくれる。すべての診療を終了し、行きと同じルートで帰路に着いた。

増尾さんが体験した被災地の様子、被災者の人々の声にあらためて緊迫感が走った。私たちは長期支援で、初めて多賀城に入ったのは1年半後だった。被災体験もいくらか聞かせて頂いていたが、これまでおつきあいしてきた多賀城の方々の顔を思い浮かべながら、あらためて、その体験の凄まじさに震える思いだった。同時に、そんななかを生き抜いてきた人々や救援活動に身を投じてこられた人々への敬意でいっぱいになった。

10月5日（金）

支援者交流会

チェックインして、17時ロビーに待ち合わせ。院生2名は、13時から3時間、NPOの語り部ツアーに参加したそう。震災を機に東京からUターンし、地域の資源を活かしながらその活動で得た利益を地域活性に還元する市域再生型ビジネス「タガの柵」。タブレットを片手に街中を歩き、それ



それぞれの地点で、震災時の様子を動画や写真で見せながら説明してくれたそうだ。その方の友達は、津波にのまれ、なんとか車外に出たが流されてしまったとのこと、私たちが宿泊するキャッスルプラザホテルの外階段に流れ込んだところでホテルの方に見つけてもらい、低体温で動けない体を支えてホテルのお風呂に入れてもらって助かったそうだ。この辺りでは3階以上にはないと津波にのみこまれてしまった。近隣のマンションの3階に住んでいた別のお友達は、津波襲来時に周辺から助けを求め声が夜通し聞こえていたが、助ける手段がなく身動きができず、その内、声は静まっていったという経験から PTSD のような状態になってしまったとのこと。厳しい話だ。ぜひ、私もこのツアーに参加してみようと思った。

宿に荷物を置いて、会場となる TSUTAYA 図書館へ。駅周辺は復旧復興工事を終え、初めてここに来た頃とはすっかり様変わりしている。薄暮れのなかライトアップされた図書館には、若者を中心に結構な人がいた。

18時から支援者交流会。すっかりお馴染みになった面々との再会を喜ぶ。2年目の館長中島さんとお話したが、実家は石巻、大川小学校の対岸で、10日両親と連絡取れずあきらめかけていたところ、ようやく実家に行ったら、ふつうに新しい洗濯物が干してあったそうだ。どんな思いだったことだろう。昭和8年の大津波で家が流され、流された家が集まって小高いところに家を建てたので、部落は助かった。父は6歳でそれを経験、祖父からもいつも地震が来たら逃げろと言われてきた。もちろんその

時の状況にもよるが、過去の経験が活かされ、伝承が残っているところでは助かっている人が多いのだ。

元図書館長で現在は下水局におられる丸山さんは、相変わらずフレンドリーに院生たちに話を聞かせてくれる。多賀城の災害対策の基本は雨水対策で、下水局の80%の予算はこのために組まれているとのこと。6万人ほどの人口なのに、排水ポンプが6カ所もあるほど、平坦で海拔が低い土地ゆえの災害対策の要となっている。都会で決定的に困るのが水問題であり、とにかく下水・感染防止対策が急務であるそうだ。

震災発生時はたまたま休みだった。被災時に海辺沿いの地帯は工業地帯から流れてきたタールまじりの砂のせいで、自宅はあきらめざるを得なかった。家族の無事を確認し、すぐに避難所の班長としての役割を果たし始めた。当初250人で開設されたが、急遽100人の追加があり、狭い体育館を効率的にかつ安全を確保するために、ビニールテープを張って通路を確保しながら全員で区画整理を行った。ペットと共に避難してきた人たちには、学校長に掛け合って特別に教室を用意してもらった。「公僕は市民のために寝てはいけない、食べてはいけない」と思いがちな職員たちには、食事や休息の必要性を唱えた。どこからともなくやってきて、大きな力を発揮してくれたボランティアの存在にも助けられたとのことだった。

10月6日(土)

民話と絵本と遊びのワークショップ

午前は、鶴野先生のコーディネートのもと、多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんとのコラボによって、「民話と絵本と遊びのワークショップ」が開催された。早くから来て待っていた親子や、たまたま通りがかった子どもたちなど、入れ替わり立ち替わり 40名ほどが参加した。

最初は、多賀城民話の会の皆さんによる「ふるさと民話語り」。多賀城民話の会のみなさんは、子どもたちが喜びそうなおもしろい民話をたくさん準備してくれており、お父さんやお母さんたちをも魅きつけていた。

おおぞら保育園の保護者、2人のお母さんと1人のおばあちゃんが持参してきた絵本を読まれた。日常のやりとりが感じられるアットホームなひとときだった。保育士さんたちは、ウクレレを弾きながら、手遊びしたり、『最後だとわかっていたなら』のす詩を大判の手作り絵本にしたものを読んできた。これは、子どもを亡くした母親が書いた詩で、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロの時に多く読まれたものらしい。

鶴野先生による伝承遊びでは、お手玉やゴム飛びを楽しんだ。事前に練習した「一かけ二かけて」に合わせてのお手玉回しは小さな子どもたちが楽しめ、けん玉やゴム飛びでは、男の子が張り切っていた。少し大きな子が高いゴム飛びに挑戦し、小さいきょうだいを抱えて飛ばせてやるなどほほえましい場面が繰り返された。「最初できなかったのができるようになって嬉





しかった。(10歳以下男性)」「1歳の息子も楽しそうにしていた。(20代女性)」「続けて欲しいです。(30代女性)」「私のような老人でも参加して、生きる力をもらいました。(70代女性)」など、さまざまな世代から反響があった。

今年の漫画展は2階奥のオープンスペースでの開催で、今週から月末までの長期間開催となる。奥まった場所なのでわかりにくいですが、3階のギャラリーより気軽に入りやすい。漫画トークは、午後、1階のオープンスペースで行われた。毎年楽しみに遠方から来て下さる人から、通りがかりにちょっと足を止めて聞いている人まで参加の仕方はいろいろだが、30名ほどが参加してくれた。「いろいろなことに巻き込まれながら、それでも人は生きていける。それが元気の元でしょうか???何かよくわからないけど、楽しい時間でした。(50代女性、2回目)」「団先生のお話と冊子は毎回何度読み返しても心に染み入るものがあり、私たちの日常生活が(家族を思いやり、行動に移すこと)いつも大切なんだ!ということであらためて強く思った。ありがとうございました。(60代女性、4回以上参加)」などの反応を頂いた。



古文書レスキュー

プログラム終了後は、多賀城市立文化センターに移動し、臨床心理士である上山眞知子先生（東北大学災害科学国際研究所 IRIDeS）、パートナーの歴史学者モリス先生（宮城学院女子大学）のお話を聞いた。今回のテーマは、「ふるさとの歴史を救う意味—心理社会的支援としての歴史資料保全の可能性」で、明日訪問する石巻市門脇地区の本間英一さん宅の土蔵とそこに保管されていた古文書や非文献資料を例にとって、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）による保全活動（レスキュー）の意義、このプロジェクトに心理学者が関わっていくことの意味について話された。心理学はマクロ的な視点で人と関わるが、災害復興支援はマクロの視点に時間や歴史的流れを含めて関わる必要があるとのことだった。

古文書レスキューは、元々、阪神淡路大震災後に神戸大学の奥村先生らが歴史資料ネットワークを立ち上げたのがきっかけで全国に広がった。地元の私人が持っている文書が廃棄されるのを、きれいにし、データ化したのち、原本を個人に返却する。歴史的資料を保存し直すことで、①文書内にある災害に関する記載が、今後の対策に大いに役に立つ ②災害によりすべてを失った被災者たちに、自分のルーツやアイデンティティに関わる大切な記録がその中に豊富に残されている ③庶民の識字率が高く、16～19世紀の資料がこれほど残っているのは日本だけ（UNESCO が世界記憶遺産として興味を持っている）とのことである。戦後の農地改革から古文書は廃

棄される傾向が続いており、そこに高齢化による深刻な跡継ぎ問題と大災害が影響し、上記のような価値の高い資料消失の危機となっている。この活動は災害ボランティアとしての側面も大きく、地域の古文書保全運動に大学生や高齢者の方が協力し、参加することで若い人には帰属意識が芽生え、高齢者には効力感につながる。

レジリエンスの高い人の特徴は、被災したことをいつまでもくよくよと悩まず、「これで良かった。ここから自分たちで新しい街づくりをしよう！」と立ち上げられる人、社会生活技能が高い人、様々な環境（人・物・金・情報）をどう使ったらよいのかを知っている人、災害対応ではなく、災害前からのリスクに対応できる人だそう。これが減災そのものに繋がってもいい。院生の、多賀城の人々は行政が悪いなど不満を言わなかったのではとの感想については、各避難所に行政が入って管理できていたことが皆に伝わっていたことと、被害の大きさにも関係しているだろうとのことだった。たとえば被害が大きかった石巻では、行政自体が大きな被害を受けたために、十分に機能し得なかったとのことだった。



10月7日（日）

本間英一さんの土蔵

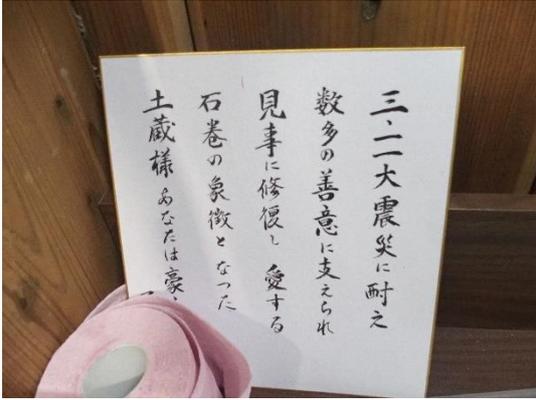
朝、多賀城駅から仙石線で約1時間、石巻駅に到着し、タクシーに分乗して門脇地区の日和山の麓に建つ土蔵の所有者である本間英一さんのお宅を訪れた。本間家は、近世から近代にかけて廻船業、金融業、醸造業を営み、石巻有数の資産家だった武山家の流れを汲む。石巻は北上川河口に位置し、ここから仙台藩の御穀米が江戸に運ばれており、廻船業で財を成した資産家が生まれたという。

本間さんは、写真ファイルを見せながら、震災時の話を聞かせてくれた。強い揺れが3分間続き、津波が来るとアナウンスがあった。本間さんが経営するテニスコートは海拔6メートルで、津波の到来は地震から15分程度とされていたが、実際には1時間後で、まずはその間にテニスコートの事務所に家族9名で避難した。津波の来襲とともに日和山の上って被害を免れたが、日頃から備蓄していた物資は、逃げる時には持ち出せず、流されてしまった。

日頃から訓練していた門脇小学校では、いつもの避難場所である日和山にすぐに避難したことで、在校していた生徒は全員無事だった。すでに帰ってしまっていた7名が残念ながら亡くなった。学校のある地区での津波の高さは6mを超えた。多くの車が流されてぶつかりあい、このあたりはプロパンガスだったこともあって、あちこちで火災が起こり、3日間燃え続けた。近くにある日本製紙のパルプが大量に流されたことにより、足の踏み場もなかった。

本田さんたちは、近くの7世帯で1ヶ月





共同生活をした。避難所にも3日間食べるものがなく、指定避難所でなければ弁当が2ヶ月くらい届かなかった。初日から盗難被害にも遭った。電気が通ったのは70日後、竈で暖をとり、山の中腹で湧水を求め、助かった世帯から食料を持ち寄って生活した。灯油とアルコールは海から大量に流れてきたものを利用した。ボランティアがこの地域に入ってきたのは、2週間ほど経って道路が開通してからだった。

2つあった土蔵の1つは全壊したが、今残っている方は1階のみの浸水であったため、2階に置いてあった古文書や書籍、道具類とともに無事だった。そんな中、4月8日から古文書レスキューのため東北大学のチームがやってきて活動開始。1世紀くらい前の祖父母の時代の持ち物や雑誌の付録地図や、廻船業を営んでいた頃の船荷の記録などが残されており、レスキュー活動の対象となった。当時の紙ベースの原本は、きれいに保存箱に整理されて戻ってきているが、データもきちんと残されているとのこと。

残った土蔵は、建築調査の結果、壊さずにすむことになった。宮城資料ネットのサポートと全国から寄せられた募金370万円と行政からの助成も得て、2年かけて修復した。石巻の震災メモリアルとして保存継承していくことを決め、展示資料パネルなどを作成して2014年から一般公開をスタートさせたという。私たちも見学させてもらったが、土蔵には、江戸時代の出納帳や調度品、昭和初期の世界地図や旅行カバンなど、珍しいものが所狭しと陳列されていた。

本間さんは、飄々と説明・案内してくだ

さった後、テニス仲間と楽しそうにテニスをしに行ってしまった。自然体なその姿に緊急時のしなやかさを重ねて見えた。

その後、私たちは日和山に上ってみた。





東日本震災圏域創生 NPO センターいしのまき寺子屋

その後、石巻駅前のカフェにて、太田美智子さんのお話をうかがった。被災した子どもたちを支援するいしのまき寺子屋の事務局長をされていたが、2017年9月末で活動を終了し、震災後6年半の「小さな物語」を『まよわないように 3.11 石高トレ室避難所物語 1』という報告書にまとめて今年3月に発行したところだった。

この地域の子どもたちは、月1回のさまざまな種類の避難訓練を受けてきており、保育園の子たちも、被災時お昼寝中だったが、起こされても泣きもせず、スムーズに服を着て避難したという。小学生は、日和山に避難する訓練で、最後尾がどこに到達しているかで安全確認し、高学年が低学年の面倒を見る縦の繋がりを大切にした訓練を実施してきたということで、だからこそ、実際に地震と津波が押し寄せてきた時にも、高齢者をしっかりサポートすることができた。もちろん、高齢者は高齢者で、小規模多機能居宅介護施設では通所者に毎日リハビリテーションの名目で、独歩での自動車の昇降訓練を課していたとのことだった。親が迎えに来られない子どもたちは、石巻高校にお願いして避難生活をしたが、地域住民の災害への意識の高さと比べると、行政の対応のまずさがあり、石巻高校の利用許可がなかなか出なかったり、結局トレーニング室以外は使用できなかったりしたようだ。

避難所の運営にあたっては、たまたま阪神淡路大震災で避難所運営を経験してきた人がいたなど、偶然良い人材が揃った。



困ったのは、勘違いボランティアたち。具体的に聞くと、上から目線で「俺に従えば間違いない」と「格好良い自分」に酔っているタイプの人、物資を送りたいと言いつつ、自分の悩み相談や思い出話を語りたがる人、平常時に地元で冴えないことから「一発逆転」的な発想でやってきた人、何が必要か、どう動くか、想像力を働かせられない指示待ちの人、他者に対するリスペクトができない人・・・など、その共通点は、自己中心的であること。なかには変わる場合もあるかもしれないが、往々にして来てもらっても困るだけだったとのことで、太田さんが面接をして、そういう人はきっぱり断ったという。反対に必要とされるボランティアは、上記の逆で、さらに自分が何者なのか、何ができる人間なのかをよく知っている人である。こういった困った出来事や人が押し寄せてきても、他の地区に比べてうまく乗り切れた要因としては、漁業・加工業が中心だったこともあり、普段から男性の少ない町を動かしていたのは女性だったので、現場にいた女性たちが仕切ること慣れていたという文化背景が理由ではないかとおっしゃっていた。

これまで男性中心の避難所運営による問題をたくさん聞いてきたが、女性を中心に安全な避難所運営やボランティア受け入れの判断を行っていたところがあったと知って驚くとともに、それも女性力が持つ浜文化の反映と聞き、やはり日常の在り方が非常時にそのまま映し出されるのだとあらためて思った。また、子どもたちを保護されるべき弱者と見なすのではなく、主体的・能動的に行動すべき生活者と見なすことによって、結果的に子どもたち

の自立心と自信を育てていくことにつながったということだった。納得できる話だ。

どこで聞いてもボランティアに来てくれた人たちの否定的側面は語られにくいですが、明確に教えてもらえたことはありがたかったし、頼もしいと思った。これこそが、いしのまき寺子屋の力の源だったのであろう。



つづく

病児保育奮闘記

(24)

子どもサポート H&K

大石 仁美

コロナ禍のなかで

コロナ禍のなかで、3、4、5月と開店休業状態が続きました。たまに、休校中で一人留守番の小学生が、ポツリと顔を出す程度。実をいうと、感染していると確定した子どもが病児として来ることはありませんが、可能性のある子どもが来ないとも限りません。病児保育室なのですから熱や咳があるから「お断り」というのはおかしな話です。

一般の保育園では、熱、咳、鼻汁などの風邪症状が一つでもあると登園禁止になるらしく、さらに家族に一人でも風邪症状の人がいると、登園を控えてほしいということになっているそうです。それでやりくりできる家庭はいいですが、ただでさえコロナ禍のなかでしんどい仕事を強いられている保護者にはたまったものではありません。

コロナウイルス感染の疑いの可能性がある家族（例えば、コロナ診療を手掛けている病院の職員）の子どもが発熱で来所した場合、「可能性がゼロではないから・・・」

と言って断る？ そんなバカなことはありません！ 病児保育としてはあり得ないことです。不安がないといえばウソになります。だからといって、自ら建てた柱を引き抜くことは出来ません。

実際、数件同じような問い合わせの電話がありました。「そちらの保育室では、預かっていたとき何か条件をつけていますか？例えばこんな場合は預かれないとか・・・」

「いいえ。何も変わりません。いままで通りです。」

「よかった！いえ、今元気にしてるんですけどね。何かあったらどうしようかと思って。よかった!!」

親御さんの不安な気持と安堵した気持ちがひしひしと伝わってきます。

どんな場合も前向きに受け入れること。それは設立理念です。

何をすることも多少のリスクはつきものですが、交通事故が怖いからといって、全く外出しない人がいるのでしょうか。ただ、リスクをしっかりと頭に入れて、どう対応するかが問われるのだと思います。

冷静に情報を整理して、どう対応するか、一番大切なのは、スタッフ間の知識の共有と連携だと思うので、入室時の受け入れからの対応の仕方を箇条書きにして、壁に貼ることにしました。

- ① 入室時、保護者には玄関で手指の消毒をしてから入ってもらうこと
- ② 使用する部屋は 全ての空気清浄機をフル回転させておくこと
- ③ 熱、咳がある子どもが来たとき、兄弟姉妹は同じ部屋にし、他の子と別室にすること
- ④ 二階の保育室に入室時、保育者だけでなく、子どもの手も石鹸と流水で丁寧に洗うこと
- ⑤ マスクも保育者だけでなく、可能な範囲で子どもにもしてもらうこと
- ⑥ ティッシュペーパーで鼻水をふき取った後は、その都度石鹸で手を洗うか、消毒用アルコールで手指消毒をすること
- ⑦ おむつ交換時は使い捨て手袋を着用すること
- ⑧ おもちゃは最低必要限にして、子どもが帰宅後、次亜塩素酸ナトリウム（ミルトン）で消毒すること
- ⑨ 部屋の掃除も戸、机、トイレ等はミルトンまたはアルコール消毒をすること
- ⑩ 仕事を終えた後は、更衣をし、ガウンおよび脱いだ衣類を洗濯してから、うがい、手洗いをして帰宅すること

これらのことは、もともと接触、飛沫感染以外に空気感染もある水疱瘡の時にやっていたことで、隔離して、保育者も専属にすることで、他の子への感染を防げ

ていたのですから、出来ないことはありません。ただ、決定的な違いは、大人である保育者は免疫を持っていたということです。今回の新型コロナは誰も免疫を持っていない。子ども同士の感染は防げても、保育者への感染は防げません。

どうする!!

万が一を考えた時、これはもう一番若い人に犠牲になってもらう他ありません。

息子よ 許せ!

期待して?待っていますが、未だそれらしき人は現れていません。



新型コロナ いやだ〜ワン



ストレス発散だあ〜

対人支援点描 (23)

「～新型コロナウイルス問題が HIV 検査に与えた影響」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

筆者は、2016 年より社会福祉法人はばたき福祉事業団北海道支部に所属して HIV/AIDS 派遣カウンセラーをしている。2020 年度から必要を求められ派遣カウンセラーと北海道の事務局との間でも調整役をすることになった。その打ち合わせの席で新型コロナウイルスの問題が HIV 検査にも影響が出ている問題が話題となった。具体的な実数を示すには、新型コロナウイルスの問題の収束が見えないなか提示することができないが、現状についての雑感を述べたい。

1. 新型コロナウイルスと保健所に課せられた緊急対応

2020 年 4 月 7 日に政府により 7 都道府県に緊急事態宣言が出され、4 月 16 日には対象が全国に拡大した。この過程で問題になったことの一つに PCR 検査の実施が挙げられる。PCR 検査とは、ポリメラーゼ連鎖反応(polymerase chain reaction)検査の略である。PCR 検査自体は新型コロナウイルスのためばかりではなく、感染症の分野で細菌やウイル

スの感染の有無を調べるために用いられている。当然、HIV の罹患がないかの検査にも用いられる。PCR 検査は、ウイルス感染の標準的診断方法として普及している。この PCR 検査を受けるための実施主体になったのが全国の保健所であった。保健所は、急遽、新型コロナウイルスの罹患の有無を調べるための先頭に立たされたのである。

しかし、このような状況のなかで保健所は、殺到する問い合わせや実施対応に追われることとなる。あまり報道されていないが、新型コロナウイルスの治療のため、患者を受け入れる医療機関への偏見差別や心ない嫌がらせも起こっている。保健所が行政側の機関であるために非難や批判は遠慮なく向けられている。その点については、矢面に立つ保健所などの機関に対し、政府や都道府県・政令指定都市の首長は、おおいに配慮があってほしい。

さて、このような事態になり、新型コロナウイルスとともに私たちの社会において PCR 検査というものが日常の言葉として見聞きするようになったわけである。日

本の場合、PCR 検査は対象を絞って実施している。このことに対し、日本のマスメディアは、日本の政府が国民に全検査をしないことを、あたかも怠慢であるかのように報道し、コメンテーターも自身の見解が正しいかのように指摘している。だが、本当に PCR 検査が行われるシステムや、実施する体制などについて情報を得て話題とされているのか、はなはだ怪しい。むしろ、無責任に話題が繰り広げられている。

本来、PCR 検査を行い、即日に検査結果が確かめられるわけではない。即日判定について技術上の問題は克服されているのかもしれないが、検査したものを分析する先は限られていたりする。PCR 検査の精度が高いものであったとしても、十分にウイルスの数が足りていないと検査の感度に引っかからない場合も考えられる。そもそも大規模で検査する体制自体もない。

そのため、気になるから保健所に相談、気になるから保健所で検査を受けたい、と殺到されては、対応しきれないのは当然の事態であるといえる。ただし、社会一般でいえば、世の中の人々は、保健所の体制がどれくらいの規模で、PCR 検査を行うためだけに事業があるわけではないことは知らない。国が保健所を検査機関に指定したために、当然、検査を受けられるだろうと思いき、保健所に殺到したわけである。その結果、検査を受けられなかった、検査を受けられなかったために手遅れになり死亡した、とマスメディアが騒ぎ立て、さらに実際の批判の窓口として保健所が受けることになっている。

2. 新型コロナウイルスの PCR 検査対応に押しやられた HIV 検査

このような保健所の状態のなかで、脇に押しやられたのが HIV 検査である。保健所は HIV の相談業務とウイルスの罹患を調べる検査の最前線の一つを担ってきたわけだが、4 月以降、HIV 検査は中断している。8 月に入り、少しずつ再開してきているのだが、今後の新型コロナウイルスによる状況の変化次第では再中止となる可能性もある。

中止された理由には、いくつかのことが挙げられる。(ただし、現時点で調査を行ったわけではないので、HIV に関しての知識からの推測も含む)

① 新型コロナウイルスへの警戒

HIV のキャリアの人やその予備軍として心配している人が、外出することで、免疫力の低下により新型コロナウイルスにかかるかもしれない、重症化するリスクに不安を感じる、というものである。

② 社会的なバッシングへの警戒

同性愛者の出会いや交流の場であるはってん場に行くことを抑制できず、新型コロナウイルスに罹患する可能性があるとわかっていて、そのような場所に行ってもバッシングをおそれて HIV 検査を受けに来ない、というものがある。はってん場は、類いに漏れず繁華街にあり、自身の性志向も含めておもてにしたい抵抗感を持っている。普段なら、HIV 罹患が心配であれば、検査を受けられる機関に相談・検査に行くのだが、もしも新型コロナウイルス罹患となったら、自分や自分の属性、行った場所、その他、いろいろなことで社会から批判を受け、マスメディアが取り上げる格好の材料とされてしまうこ

とを意識している。同様のことが、韓国で 5 月 12 日に発生したクラスター感染で、感染者が同性愛者であり、感染場所が同性愛者が集うナイトクラブ(たぶん、日本でいうはってん場)であったことが記憶に挙げられるだろう。

③保健所の保健師が新型コロナウイルス対応のため人員が割かれ、HIV 検査対応ができない

この問題は、たぶん全国的な規模で起こっていると推察される。新型コロナウイルスのために HIV 検査体制にどのような影響が生じたのか調査が必要であるが、現状では現場にさらに負担を負わせることになるためできていない。だが、北海道新聞の記者がはばたき福祉事業団北海道支部に取材をし、記者が道内の保健所に聞き取り取材をしたものがある。それによれば、保健所の HIV 検査の実施状況について道内保健所 30 カ所中、8 カ所が休止することになったという(北海道新聞、2020 年 6 月 26 日朝刊)。

北海道内 30 保健所の HIV 検査実施状況 (一部、筆者が改変)

北海道新聞(2020 年 6 月 26 日)

札幌市 平日検査は 9 月末まで、夜間検査は 6 月末まで、休日検査は 6 月末まで休止

江別市 6 月末まで休止

千歳市 9 月末まで休止

滝川市 8 月末まで休止

苫小牧市 6 月末まで休止

【通常通り】旭川市、小樽市、市立函館、渡島、江差、八雲、倶知安、岩内、岩見沢、深川、室蘭、浦河、静内、上川、名寄、富良野、留萌、稚内、北見、網走、紋別、帯

広、釧路、根室、中標津

このように、新型コロナウイルス対応のための PCR 検査が保健所で任されるようになって、HIV 検査に支障が生じているのである。

おわりに.

北海道では、年間 2500~3000 件ほどの HIV 検査を実施する。その内、札幌市では年間 1300 件ほどの検査を実施している。ところが、保健所の新型コロナウイルス対応の影響を受け、HIV 検査が行われずにきている。基幹病院である北海道大学付属病院 HIV 診療支援センターによれば、昨年度 40 人弱の新規患者がいたのだが、今年度はいないという状態になっている。これは、新規患者がいけないということではなく、危惧される当事者が検査を受けられず、医療に結びついていないという重大な問題が生じているといえる。この北海道と同じ問題が全国でも生じていると推察される。

HIV の治療は、早期発見・早期治療の開始が重要である。HIV 罹患からしばらくの間は潜伏期間もあり、治療に至るまでの時間的な猶予はあるが、発症のどの段階で治療に結びつくかは個別の問題である。場合によっては、新型コロナウイルスの騒動で発見が遅れ、治療が遅れてしまうこともあるわけである。

こうしたことから、新型コロナウイルスの問題は、新型コロナウイルスだけの問題ではなく、HIV 検査の実施に影響を与えている。そのため、HIV 支援にあたる支援者は、新型コロナウイルス問題後の対応を迫られている。その際、カウンセラーに

についても被検査者が負ったリスクを考慮しながら、配慮と対応が必要であろう。

<補記>

2020年6月21日、社会福祉法人はばたき福祉事業団の大平勝美前理事長が逝去されました。長年、薬害 AIDS 訴訟の先頭に立って取り組まれてきた大平前理事長のことをいづらかでも知ってほしいと願い、大平前理事長が逝去前の5月19日のインタビューを付しておきたい。

『感染症への差別・偏見をなくすためには過去の失敗の教訓を活かせ』

https://www.videonews.com/interviews/20200519_ohira/

精神科医の思うこと⑱

「マスクはつらいなあ」

松村 奈奈子

コロナコロナの毎日。

20数年前、学生時代に授業で「パンデミック」の事は習っていましたが、何かそれは絵空事のイメージでした。もちろん教科書では、それは「いつ起こるかもしれない事」の様に書かれていましたが、でも私が生きている間には身近な所では起こらない事と、なんとなく思っていました。

それは私だけでなく、同僚や後輩医師も同じ感覚だった様で、コロナの話題になると「ほんと、こんな事が起こるなんてねー」とみんな口にして、その後ため息をつきます。ただ感染症専門の内科医の後輩だけは「いやあ、ちゃんと起こるんですよ」とニヤニヤと落ち着いて話します。なるほど、甘く考えてました。

そんなこんなで、突然の「マスク」生活がスタートして、もうずいぶん経ちました。

4月からの職場の新入スタッフなど、未だマスクをした顔しか見たことが無い人もいて、顔を覚えられません。声をかけられても「えっと、ごめんなさい、誰でしたっけ？」

と謝る事しきりです。人物の記憶、目元だけではなかなか厳しい。そんな毎日なんで、今回のテーマは「マスクはつらいなあ」

実は、過去に「マスク」診察を余儀なくされる時もありました。

十数年前に勤務していた総合病院には感染病棟があって、結核の患者さんの診察が時々ありました。長期入院で孤独でもあるので、眠れないとか不安などで、精神科を希望されます。そこでは、今回コロナで有名になった「N95 マスク」を付けて、2重のドアを開けて入院されているお部屋に診察に行きます。みな個室で入院されているので、シーンと静まり返った病棟の寒々しさは今でもよく覚えています。

ある時、海外で感染したという初老の男性から診察の希望がありました。症状は軽い不眠だけで、毎回「いやー、さみしくて先生待ってたよ」「病棟が静かすぎて」と何気ない会話が中心の診察でした。話し好きの男性で、海外の仕事の話などを楽しく聞かせてもらいました。ただ、「マスク」を通しての会話はもどかしいのか「伝わってるかなあ」「早くマスクなしで会話したいわ」とよく男性はこぼしていました。結核は治療薬もあり治る病気なので、ほどなくマスクを外して病棟から出れる事に。その日、男性は「今日はマスクないよー」と笑って私の診察室に入り、お互い初めてお顔拝見。一瞬見つめあって「こんな顔だったんですねー」と二人で大笑いしてしまいました。マスクで隠れた部分が、顔の印象を大きく左右するんだなあと意識した体験でした。もちろん、その日の診察での男性の話は、「マスク」をしている時よりずっと面白かったです。

そして今回のコロナ禍での精神科の診察。さすがに緊急事態宣言の期間は、電話での診察を中心にしていましたが、その後は患者さんに電話か対面での診察のどちらかを選択してもらう事になっています。ただ、電話は「マスク」以上に相手がよくわかりません。簡単に状態だけ聞いて、短い時間で終わってしまいます。私だけでなく、患者さんも会いたいと思ってくれたのか、今ではほとんどの患者さんが直接診察に来てくれています。

しかし、マスクをしての診察、なかなかしっくりきません。患者さんの顔を見て話をお聞きするのですが、口元がマスクで隠れていると「私、ちゃんと気持ちを汲めているのかな？」と不安になります。

そして、お笑いの好きな大阪生まれの私。診察では、自分も患者さんも笑顔になる会話が好きです。ボケたけど「ちゃんと笑ってくれてるのかな？」とじっと顔を見つめても、目元だけでは確信できなくて「笑えたかな？」なんて言葉にだして確認しちゃうことも。

また、話の内容によっては一緒に悲しんだり、怒ったりもします。声の抑揚で伝わる部分はあるのですが、私も「マスク」の中で笑ったり、困惑したりの表情をしているのですが「ちゃんと伝わっているのかしら？」と悩ましい日々です。

これまで「先生の笑顔を見ると安心するわ」とよく患者さんが言ってくれていました。もちろんお世辞もあるとは思いますが、笑顔は私の自慢です。ただし、目が細い弥生人タイプの顔なので目力弱く、「マスク」を着けて口元が見えないと、のっぺりで表情の変化は弱めです。あー、早く「マスク」をとって、笑顔をお見せしたい私です。

馬渡の眼 3

公平と不公平

馬渡 徳子

間もなく、おそらく戦後日本の義務教育史上、最短期間の夏休みが、終わろうとしている。

県内では、クーラー全教室配置の自治体の小中学校は、夏休みを二週間から三週間程度にして、既に、二学期が始まっている。ということは、『給食も、始まっている』ということ。

ひよんなことから、孫の住む自治体には、小中学校のクーラー設置が、半数しか実施されておらず、また、全ての教室に実現していない学校もあることを、知るところとなった。

第 39 号で、ご紹介したヨシタケシンスケさんの絵本『それしかないわけ

ないでしょう』の付録に、小学校一年生の孫が、こう書いた。

↓

「がっこうに、クーラーがはんぶんしかついてないから、ぜんぶつかわないで、せんぷうきだけって、それはないでしょう」

→〇〇しても、いいじゃない!

「いちねんせいから、ろくねんせいまで、まいにち、きょうしつをじゅんぱんこにして、『クーラーのひ』と『シャワーのひ』を、つくればいいじゃない」

↓

「ほんとやね。ばあばは、市長さんに要望することしか、思いつかんかった

わ。学校には、プールがあるから、シャワーもできるね。クーラーのある教室とない教室と、毎日いろんな教室行けたら、探検みたいで、面白そうやね。ワクワクするねえ。」

と、私は応えた。

↓

「ばあば。『公平って、みんなで、我慢することなん？ 不公平って、工夫できない大人がつくるものなんじゃないか』と思った。先生に、『みんなで、我慢しましょうね』と言われたけど、何かおかしいと思う。」

と、孫が続けた。

↓

「なるほど。もし、『みんなで、知恵を出し合ってみましょう』やったら、大人には思いつかない工夫が、いっぱい出てきて、先生は、びっくりするかもね。そして、先生が他の先生とも相談して、今より気持ちよく学校に行けるようになったらいいね。」

と、私は応えた。

↓

「良い機会やな」と思ったので、岩川直樹(文)木原千春(絵)(2000)『人権の絵本①じぶんを大切に、②ちがいを豊かさに』大月書店を、孫と一緒に読んだ。

「要は、『ヨシタケシンスケさんの絵本と同じことを伝えたい』んやね。『たいへんなみらいしか、ないわけないでしょう』と、同じやね。」

と、孫は応えた。

↓

さて、今年も下半期に、「人権教育講話」として、県内の小中高校や、多様な職場を回る活動が始まる。

生涯学習課、教育委員会の担当者さんと、日程調整や多様な実施方法の検討をしながら、こんな話をされた方がいた。「改めて、コロナ禍は、私たち一人ひとりに、『自分自身の人権意識を問い、日常の言行動をふりかえり、行動変容をする貴重な機会』とも、なりましたね。」

深層に触れる言葉を戴き、私は、姿勢を正した。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

小学1年時の誤解

今回は小学1年生のとき、はじめて集団健康検診を受けた時のシーンのある部分が鮮明に残っているので、それをもとに描いたエピソードです。

子供達は上半身裸になり、カルテを持たされ、看護師の前に名簿順に行列を作って並ばされた。当時は1年生～6年生ともに各学年5クラスずつ、1クラス約45人前後と児童数が多く、行列を乱さず静かに順番待ちを強いられたのが苦痛でした。

1年生の新学期早々で、まだ冗談を言い合える友達もいないため沈黙がさらに窮屈でした。

その時、名簿順でヤナギ(私)の前にムラカワ君という片足・片腕に軽いマヒを持つ子と後にヨシダ君という小柄でギョロ目の子が並びました。

ムラカワ君は立って行列に並び続けるのもツラそうで、フラフラしながらブツブツ何かつぶやき続け、間近で見る彼の唇の色もムラサキ色(?)に近い感じで子供の自分の目にも(半病人)のように見えたのでした。今思い返すと本当に申し訳ないと思うのですが、なるべく前にいる彼との間に距離をとっ

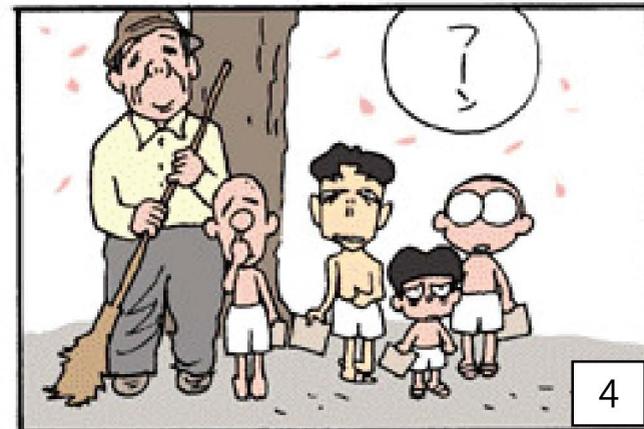
て並んでいたと思います。

すると突然、後ろからヨシダ君の怒声が飛んできたのでした。なんと言われたのか…「ボヤボヤすんな、行列が前に進んだるやないか!」そんな感じで怒鳴られドンと背中を突かれました。

それまで、こんな風に突き飛ばされ怒鳴られたことがなかったのでかなりショック、でも前のムラカワ君と距離をとりたくて進まなかった自分にヨシダ君がイラついたのだなと理解できたので何も言い返せませんでした。

それ以来、「ヨシダは怖いなあ」という先入観が心の隅に残り、クラス委員長にも選ばれた彼に親近感を持つことが出来ませんでした。しかし2年後に夏休みをはさむ約40日間を僕は急性肺炎で死線をさまよい学校を休みました。

その時、心配したクラスのみんなの励ましの手紙をクラス代表として病床の僕に届けてくれたのは級長のヨシダ君だった。まだ熱が下がらなかったので顔をあわすことができず彼が玄関で「はやく元気になってください」と言ってくれた声だけを聞き、自分の彼に対して持っていた先入観(誤解)を恥じたのでした。



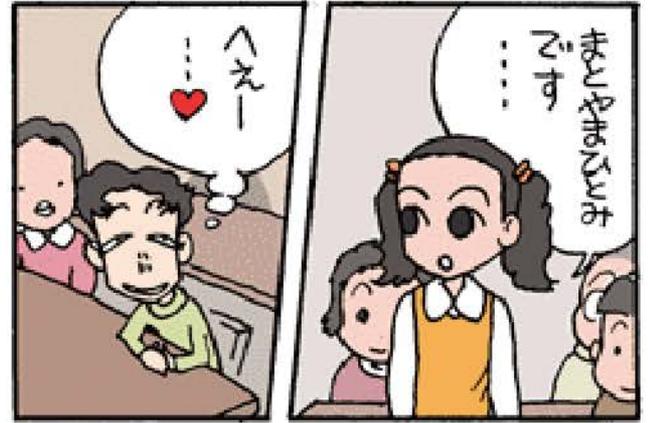
東成区の昭利

(18) 新入生



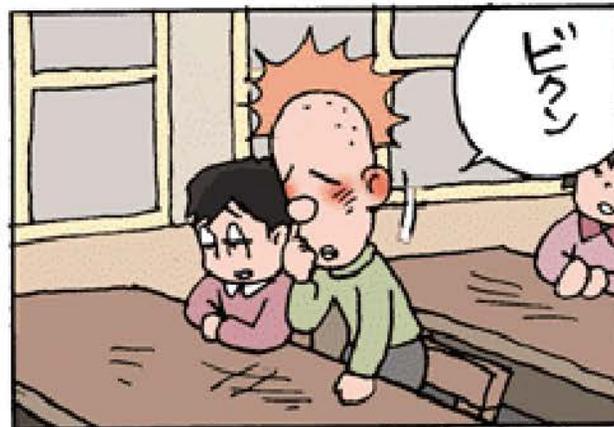
東成区の昭利

(19) 新入生



東成区の沼利

(22) 新入生



東成区の沼利

(23) 新入生



東成区の昭和



(24) 新入生



東成区の昭和



(25) 新入生



東成区の沼利

(26) 新入生



東成区の沼利

(27) 新入生



東成区の昭和



(28) 新入生



東成区の昭和

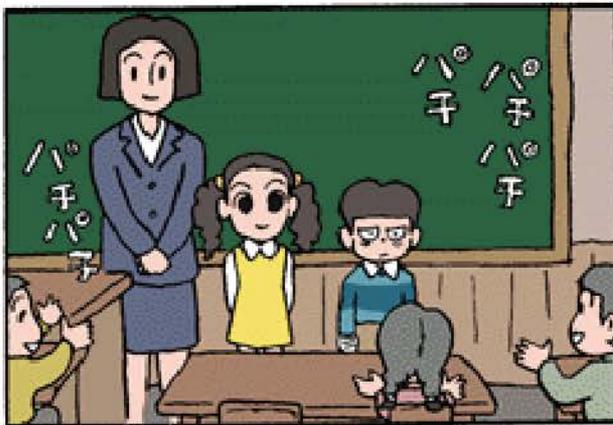


(29) 新入生



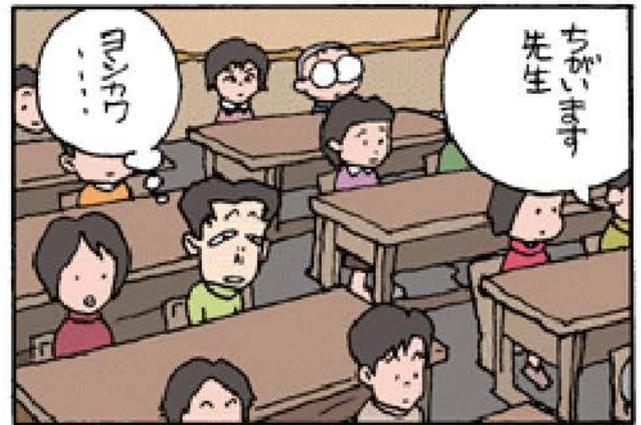
東成区の昭利

(30) 新入生



東成区の昭利

(31) 新入生





ねこから目線。開業2周年

前号の対人援助学マガジンで書いた介入中のケースのその後を期待して下さっていた方には申し訳ないのですが、まだまだ継続中のため（捕獲に苦戦中）今回は、ボランティアとして活動している「人もねこも一緒に支援プロジェクト」についてではなく、私の仕事である「ねこから目線。」について書いていきたいと思えます。

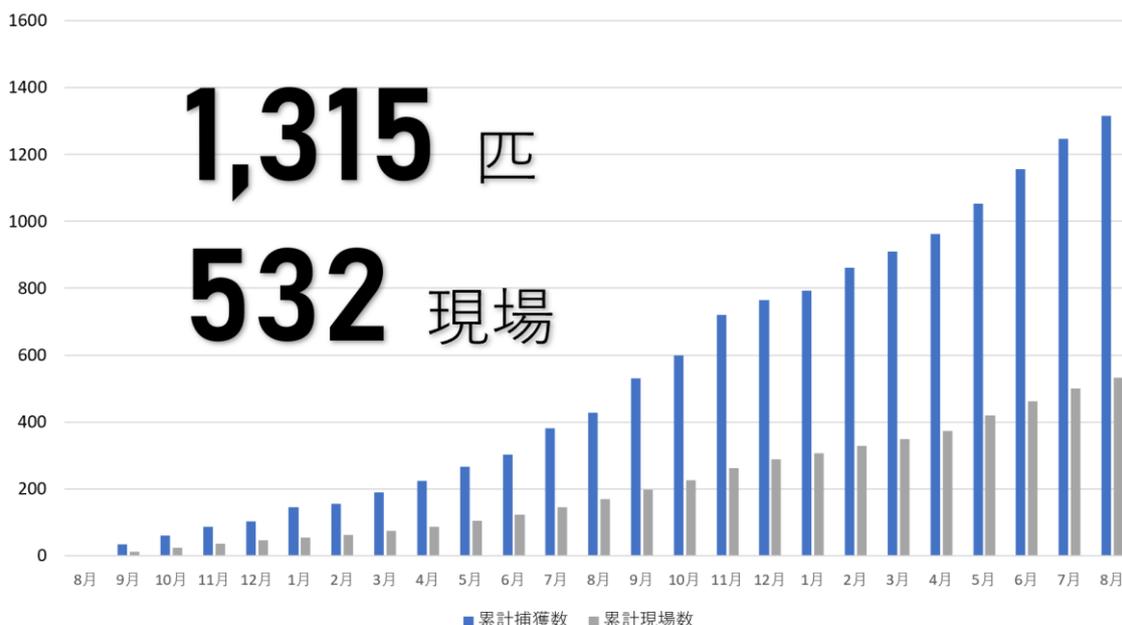
よく混同されるので、整理すると私は完全無料のボランティア活動としてNPO法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワークの中で「人もねこも一緒に支援プロジェクト」をやっています。ここでは、福祉的な支援が必要でかつペット問題を抱える方を対象としています。一方で、完全有料でノラ猫と保護猫のお手伝いを専門とする「ねこから目線。」を開業し、生活費を稼ぎながら自分の時間を猫とその猫と関わる人に活用してもらっています。簡単に対比をすると、下記のような感じでしょうか？

	人ねこケア（NPO）	ねこから目線。（個人事業）
利用料	無料	有料
対象	福祉支援対象者の飼い猫	ノラ猫と保護猫
対象範囲	とても狭い	広い
活動資金の出どころ	自腹+ご寄付	お客さん
安定具合	不安定	安定
位置づけ	ライフワーク	ライスワーク兼ライフワーク
ひと月当たりの稼働日	1～3日程度	25～31日程度
対応時間	仕事の合間	基本24時間対応

マガジンの登場頻度では、人もねこも一緒に支援プロジェクトの方が多いですが、私の生活時間の90%を占めているのは、ねこから目線。の仕事です。

そして、そんな「ねこから目線。～保護猫・ノラ猫専門のお手伝い屋さん～」が開業2周年を迎えました！2年も続くなんで驚きですね（笑）。まだまだ頑張れそうなので、いつも応援してくださる方や利用して下さったお客様に向けて、今回は2年間振り返りと考察をフィードバックしたいと思います。

2年間の捕獲数と現場数 累計



1年目に引き続き、最も多いご依頼であるノラ猫さんの捕獲。捕獲成功頭数はこの2年間で1,315匹になりました。8割がTNRのための捕獲です。残りの2割くらいが保護のための捕獲でした。捕獲成功率は約86%でした。

ねこから目線。の場合は、捕獲して終わりではなく、病院で不妊手術を終えた猫さんを退院日にお迎えに行き、捕獲場所または、保護部屋に戻すところまでのお手伝いになります。沢山のノラ猫さんの捕獲に携わって、残念ですがあまりにもいい加減で軽いノリの「保護」をしようとしている人が多く、それによって猫に大きな負担がかかっている現状を目にしてきました。そこで、お仕事を受ける条件として「どこに連れていかれてしまうのか、どのように扱われるのか分からないため、捕獲器やキャリアでの受け渡しは原則しません。また、保護のための捕獲の場合は、飼育環境を見せていただき、①清潔、②2段以上のケージまたは隔離できる部屋、③脱走防止、この③点を定めました。これが最低確認できない場合はお断りさせていただくことにしました。うん十年ボランティアやっているといくら口頭で説明していただいても、いくらHPが立派でも、実際に中をみせてもらうと多頭崩壊現場レベルなことも数件ありました。

正式譲渡成立 70 匹

トライアル中 7 匹

2 年目に多いご依頼の里親探しのお手伝いは2年間で正式譲渡成立70匹、現在トライアル中が7匹でした。里親探しのご依頼はもっと伸びるかと思っていましたが、そこまで伸びませんでした。ここは3年目にもう少し考察を深めていきたいと思います。

それ以外には、猫の不妊手術専門病院さんのパンフレット作成や、ボランティア団体さんのチラシ作成、小規模、中規模の勉強会講師などのご依頼がありました。夕方と深夜早朝は捕獲、日中は里親探しのお手伝い。そんなタイムスケジュールの毎日でした。

仲間が増える

ねこから目線。2年目の大きな変化として、スタッフが1名増えました。開業から1年が経つ頃から、ご依頼がぐっと増え始め、自分ひとりで対応するには体力の限界がきていました。一緒に働いてくれる人を早急に見つける必要がありましたが、だれでもいいわけではありません。深夜早朝に動くことが多く、生活リズムは不規則、まる1日休みは月に1日か2日くらいなのに給料はそこそこ、ライスワークとライフワークの境界線が曖昧、それでも楽しんで働けるくらい猫と人が好きな人。そのうえで、動物保護や愛護の現場経験がしっかりあって、自分なりの考えをしっかりと持っていて、でも押し付けがましくなくて・・・などなど、そんな人居るんかい！とツッコまれそうな条件で探していたところ、ピタリと合う人に出会え、ねこから目線。はパワーアップしました。

新しい仲間になってくれた梅本さん。通称梅さんはある公益財団法人の動物保護施設に正職員として10年勤務していました。直接的な保護活動のすばらしさも、限界も、身をもって知っている人でした。そして毎日の激務に耐えてきた根性のある人でした。なのに、見た目はほんわかタイプです。



梅さんイメージ

そして3年目に入るにあたり、もう一人素敵なスタッフを捕獲したい！と思っています。2人体制なのに7月は2人とも1日も休みを取ることができませんでした。これはブラック企業すぎます。せめてグレーな会社になるべくひっそりと求人中です。

ねこから目線。スタイルとは？

自分でこの1年を振り返ると、以前の「開業1年を振り返って」の内容と丸被りになってしまいそうなので、客観視の試みとして、スタッフ梅さんにインタビューする形で考察をしてみようと思います。



2019年の9月末あたりから一緒に働いてもらって約1年になりますが、どうですか？（笑）2人体制なのに全然休みが取れなくてすいません。汗
シェルターの頃と比べて忙しいですか？

シェルターの頃と違って、ルーティンワークの忙しさはないですが、毎日新しい現場ですし、ノラ猫さんの捕獲は、その場その場で決断しないとイケないことの連続なので、肉体的より精神的にしんどいですね。あと、捕えてあげたいのに捕まらなかった時は猛烈にしんどいです（笑）。



ねこから目線。ってどんな会社だと思いますか？特徴というか？

依頼者さんのこうしてほしいという気持ちがあって、それを聞きながらも流されちゃいけない。でも気持ちには寄り添ってあげたい。要望を理解しつつもこちらの意見もちゃんと伝える。自分の意見を押し付けるのはあかんと思うんですけど、最低ラインは言わないとイケない。そんな社風でしょうか？



あー！そうそう。“依頼主さんの要望を叶えることを第一にしないこと。”というサービス業らしからぬ特徴がありますね（笑）。例えば、TNRの不妊手術の時に爪を切ってあげたいとか、首輪をつけてあげたいとか。それは外で生きていくノラ猫にとってはデメリットの方が大きいと思うことに関しては、はっきり伝えるようにしていますね。“依頼主さんの要望を聞きつつ、猫にとってメリットがあることを依頼主さんと一緒に相談して、お手伝いする内容を確定していくスタイル”ですね。

どっちがいいかの判断が難しい時もあります。保護がいいのか、TNRがいいのか。人馴れしていないノラ猫を保護して飼いたいという人は、最低限捕獲前に保護する飼育環境を準備するという行動を伴ってほしいと思います。シェルターにいた頃は、ノラ猫を保護した人たちから、やっぱり飼えないからと猫の引取り依頼がたくさん来ていました。





げっそりするような飼育環境を数々目にきて、保護の場合の捕獲は飼育環境をみせてもらい、①清潔 ②2段以上のケージまたは隔離できるひと部屋 ③脱走防止 この3つがクリアされていない場合は断ることで落ち着きましたね。確かに外での生活は明日交通事故で死ぬかもしれないリスクがあります。でもそのリスクと天秤にかけても、ここに一生監禁されるのはちょっと・・・とってしまう。ねこから目線。では無理な保護はすすめないスタンスですね。

無理にこちらの考えを理解してもらえなくてもいい。こちらは無理には理解しない。かぶる部分がないのなら一緒にはできないですね、で終わればいい。



自分たちのポリシーを曲げてまで仕事は受けない。それで依頼が来なくなるなら廃業すればいい。依頼主さんの希望通りに従うことができなくて、お前らなんかただの「上から目線だ!」と「猫だけ目線だ!」って罵倒されたことが1回ずつありましたね。めちゃくちゃ怒っていてもうまいこと言ってやろうとするのはさすが関西だなと思いました。誤解を恐れずに言えば、**重要なのはその依頼を自分がやりたいと思えるか、楽しいと思えるか、だ**と思ってきました。梅さん、印象に残っている現場とか猫さんはいますか？

ケガをしていた子は印象に残っています。ノラ猫のために高額な医療費を出して助けてあげようとしてくれる人が沢山いることも驚きましたし、その人たちと猫さんの役に立てると嬉しい。あとは、人馴れしていないノラ猫でも保護主さんが一生懸命向き合ってデレデレな性格にかわっていく変化がみれるとすごく嬉しくなります。



私がすごく印象に残っている現場は、ねこから目線。はじめた頃の頃にご依頼で、触れない飼い猫さんを室内捕獲して、引っ越し先の家に連れてきてほしい、という老夫婦からのご依頼でした。広い室内を走り回る系の猫さんだったんですけど、なんとか捕獲できて、捕獲に立ち会ってくれていたおじいちゃんと一緒に引っ越し先に向かいました。お家にはおばあちゃんが居るのでインターフォン押したら「ちょっと待ってて!」と言われて、3分くらい外で待ってました。「ええよー!」って玄関の鍵が開く音がしたので、おじいちゃんの中に入ると、なぜか全裸にタオル一枚のおばあちゃんが笑顔で迎えてくれました(笑)。「なんでやねん」っておじいちゃんがちいさな声で呟いて(笑)。ぱっと見、おばあちゃんから湯気がモクモクとしていたので、お風呂上りだと思うんですけど、外で待たされてた3分間じゃあ何してたの?ってなるじゃないですか。そしたら、おばあちゃんはもう一匹の先住猫が玄関からそとに出てしまわないように、一部屋に入れて、扉を閉めたりしていたそうです。それで、猫さんの安全を確保できたことに安

心して、玄関の鍵あけてくれたんです。自分全裸なのに（笑）。ちょっと衝撃でしたけど、猫最優先なところがめちゃくちゃ素敵ですごい印象に残ってます。笑

私は猫を通して、色んな人に会えるのが楽しかったりするんですけど、梅さんは何が仕事のモチベーションになっていますか？

治療や TNR した子が餌場にかえってきてると嬉しいです。それぞれの場所でのんびりできるように、保護できる子は保護、難しい子は TNR、無理なくできる範囲で猫がのびのび暮らせるような助けになれたらうれしいです。もともと性格が世話焼きなんですよね。



ねこの目線にはなりきれない。ということに自覚的であり続ける。

ネットニュースのライターさんから取材を受けた際に「ねこから目線。」に込められた意味を聞かれました。正直あまり深く考えたことがなくて、うーんと考えていたら「やっぱり猫の目線になるってことですか？」と言われて、あっちそれは違うなと思いました。「ねこから目線。」は、“猫の目線にはなりきれない”という意味があると思いました。そのうえで猫にとってメリットのあることは何なのか、を考えていきたいという想いがあるんだと。なので、「ねこから目線。」を長く言うと「ねこからの目線ではどう見えるか考える」という感じですよ。意味って後からついてくるものですね（笑）。

私が、過度にパターナリズムに慣れてしまうことを警戒する姿勢と、猫の目線になろうとする姿勢の原点に近い部分は、「そうだ、ねこに聞いてみよう No.2」を読んでいただくと、謎が解けるかも・・・。

ご意見、質問などは下記メールアドレスへどうぞ。

筆者



小池英梨子

仕事：ねこから目線。～ノラ猫専門のお手伝い屋さん～

ボラ活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ボラ活動：大学ねこ連盟 U-Cats 事務局

お問合せ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

29

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

中々最後が見えないこのシリーズ。何とか少しずつでも先へ進めて行こうと今回は以下の9つについて書いてみた。やっとさ行。

- 子故の闇
- 之を用いればすなわち虎となり
用いざればすなわち鼠となる
- 子を持って知る親の恩
- 桜は花に顕る
- 触らぬ神に祟りなし
- 三歳の翁、百歳の童子
- 山椒は小粒でもびりりと辛い
- 三度の飯も強し柔らかし
- 三度目の正直

<子故の闇>

親はわが子かわいさのあまり、理性を失い分別がつかなくなるということのたとえ。「子故の闇に迷う」「子に迷う闇」「子を思う心の闇」ともいう。

子どもが可愛いのは分かるが、学校現場でモンスターと言われてしまうような保護者に時折会う。そうした保護者の多くは、別にモンスターなのではなく、ただ自分の子が可愛くて、その子を中心に考えてしまっているからだけである。そういう時に、保護者の主張に対しいきなり「そんなことはできません。」とか「他の子とのバランスが・・・。」「お宅のお子さんだけではないので。」などと言ってしまうと、保護者は怒りをあらわにしてしまう。そんな時に、この諺をだして、「昔からこんな諺があります。自分の子が可愛いからこそ闇に飲み込まれてしまうという意味ですが、お子さんが可愛いから、お子さんを大事に思うから、こうして欲しいという希望なんですよ。」とまず、相手の気持ちを受け止めてあげる所から始めると、穏やかに話し合いができる。その上で、出来ること出来ないことをゆっくり伝えて行って、落としどころを探って行けるとよいと思う。校長室で時折、怒鳴ったり、机を蹴ったりしている保護者も人

の親。誰だって自分の子どもは他人の子より可愛いのだから。

<之を用いればすなわち虎となり用いざればすなわち鼠となる>

人が才能を発揮するしないは、これを重く用いるかどうかによることをいう。人は重要な地位を与えられれば、虎の様に勢いづいてその素晴らしい才能を発揮して活躍するが、用いられなければ鼠のようにこせこせと逃げ隠れする人物で終わってしまうという意から。 出典 どうほうきく 東方朔 かくなんにとう 答客難

人の才能というものは、見極めが難しいことも多い。子どもの才能も然りである。発達に偏りのある子では、満遍なく伸ばそうとせず、偏らせた方が良く、虫が好きな子、恐竜が好きな子、電車が好きな子、色々である。その好きさが人並外れて凄ければ、そこを伸ばしていくと将来何かになれる可能性は高い。虎にするか鼠にするか、そこは保護者の対応如何である。そういう意味で、この故事を保護者に時々使う。

<子を持って知る親の恩>

自分が親になり、子育ての大変さを知って、初めて親の愛情の深さや有難さがわかるということ。「親の恩は子をもって知る」ともいう。

この諺は比較的知られていると思う。自分が子どものうちは、親の大変さなどわからない。子どものうちは親に対し文句ばかり言っている。しかし、自分が子を産み、育ててみると、親の大変さや愛情を感じられるのである。親ってすごいなあ。そし

て子を育てながら親も育っていく。そんなことを伝えたくて、よくこの諺を持ち出している。

<桜は花に顕る>

普段は他の人々と変わることなく目立たぬ存在だったものが、何か事があった時、優れた才能を世に現して非凡であることが知れることのたとえ。花が咲かなければ、ほかの木に混じってわからなかったのが、美しい開花で初めて桜であったことが知られるという意から。

毎年桜の季節になると使うことの多いこの諺。桜と言うのは花の時だけその存在を殊更に主張する。葉になってしまうと山のどこにあるのかもわからない。

桜の様に、何かの時にその才能、手腕を発揮できるのは素敵なことである。普段は目立たず、ひっそりとしていて、存在感が無い。その人にとって得意なことは、他の人が見向きもしない事だったり、他の人にはできないことだったり、他の人が苦手なことだったり。それを何の苦もなく、ささっとやってのけたりするのは凄く格好良く、煌めく。時々自己評価が低い子で、とても仕事が丁寧だったり、絵が得意だったり、或いは、掃除が上手だったり、演技が上手かったり、整理整頓が得意だったりという子に会う。そんな子の出番は必ずある。そういう時に物おしせず自分を出せるように得意な所を自分自身で認識してもらうためにも、この諺は使いやすいと思う。

<触らぬ神に祟りなし>

関わり合いを持ちさえしなければ、災い

を受けることはない。余計な手出しはするなという教え。神様と関わり合わなければ、神様の崇りを受けることはないの意から。「触らぬ神に罰あたらず」「知らぬ神に崇りなし」ともいう。

子どもたちと話していると、正義感が人一倍強く、間違っていることをしていると指摘せずにはいられない子に出会う。友達同士で注意するレベルなら問題ないが、相手が大人であろうとかまわず注意してしまう子もいる。正しいことを言って何が悪いということもあり、正しいことを言っても良い時と悪い時があるという区別は付きづらい。相手がどのような人かと言うのが見極められれば問題ないが、こういうお子さんの場合はそれが難しいのである。

色々なお子さんに試してみて、こういう子は比較的諺が好きだったりすることに気づいた。もちろん確認してからではあるが。そこで、この諺を出すことがある。「昔からこんな風に言われているよ。」と説明すると、納得してくれることがある。「あ、その諺知ってる。」などと言ってくれたら大丈夫。諺がそうなら、それに従うというのである。更に「英語でもこんな風に言うんだって。」と、中高生には言ってみる。余計な知識は大好きな子が多い。保護者にも、正義感が人一倍強いお子さんにはこういう諺を伝えてみてはとお話している。

英語では・・・

Far from Jupiter, far from thunder.

(ジュピターから離れていれば、雷に打たれることはない)

<三歳の翁、百歳の童子>

人間の賢さは、年齢には関係がないものだというたとえ。若くても知恵も分別も備えている者もあれば、歳をとっていても思慮分別の無い者もあるということ。

子育ての場面でなくてもこの諺は、いつの世でも「本当にそうだなあ」と思うものではないか？年をとれば社会経験も積み、知識も増え、賢くなるものだと思っても、実際には、幾つになっても社会常識からかけ離れ、利己的で、分別の無い大人に遭う。一方で、十代でも、知識も豊富で、分別もあり、社会常識もある子どもに遭う。人は年齢で測るものではなく、どの様に社会に向き合ってきたか、どの様に知識を蓄積してきたか、どの様に生きてきたかによって全く成長度合いが違う。ただただ知識を詰め込むだけでもいけない。社会に関わって、人と関わって生きて行くことが、とても大事だと思う。そういう意味で、保護者や子どもたちにこの諺を使うことがある。

<山椒は小粒でもぴりりと辛い>

体は小さくても気力が鋭く才能や力量が優れていて、侮れない事のとえ。山椒の実はとても小さいが、非常に辛いことから。

最近のお子さんは体格が良い。小学生でも高学年になると160cmや大きい子では170cmなどという身長の子もいる。どちらが先生かわからないこともあるくらいだ。一方で、背の低い子もいる。その差は大きい。中学や高校、大学に行っても背が低いことがコンプレックスの子は結構いる。い

じめられたり、馬鹿にされたりすることもある。

そんな子にこの諺を伝えている。見た目や体の大きさが人の価値が決まるわけではない。人はみんなそれぞれに良さを持っている。その良さを伸ばすためにも、背が低いことのコンプレックスを吹き飛ばすことはとても大事だと思う。

英語では・・・

Little head great wit. (小頭の大知患者)

Little heads may contain much learning. (小さな頭にも多くの知恵が入る)

<三度の飯も強し柔らかし>

世の中のことは、中々自分の思う通りにはならないものだというたとえ。毎日三度炊いている飯でさえ、固かったり柔らか過ぎたりして思うようにはいかないという意から。

今時は電気炊飯器等を使うので、余りご飯を炊くたびに硬さが異なるということはないだろう。鍋で炊いていたころは、水加減、火加減すべて身体で覚えるので、日によって硬さが変わることも多々あった。この例を分かってもらうには、若者には難しいのかもしれないが、要は、世の中が自分の思い通りには中々行かないということを伝えるための諺なので、世の中が便利になっても、やはり思い通りに行かないことがほとんどだという話に繋げている。

<三度目の正直>

物事は、一度目や二度目はうまく行かなくても、三度目にはうまくいくということ。

また三度目の失敗は許されないということ。

一度失敗すると「もういい」とか「二度としない」とかと言う子が最近結構多い。失敗は成功の基とも言う。エジソンがフィラメントを発明した時、何百回も何千回も失敗した話は有名である。その話も出しながら、一度や二度の失敗でくじけないことの大切さを伝えている。失敗をなんどもすることで、改良や改善がある。テレビドラマの下町ロケットの話でもたくさんの失敗の結果最高のものが出来上がる過程が随分と示されていた。

努力を続けることも段々苦手になりつつある子どもたちに、コツコツと頑張ることのすばらしさを伝えられたらと思う。

英語では・・・

All things thrive at thrice. (物事はみな三度目に首尾よく行く) The third time pays for all. (三度目が全ての埋め合わせをする)

出典説明

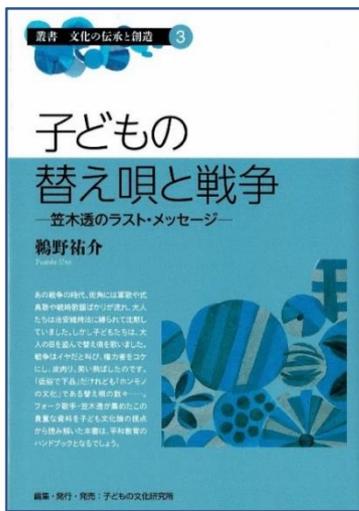
東方朔著「答客難」

東方朔は中国、前漢の文学者。字、曼倩(まんせい)、機知とユーモアで武帝から寵愛された。しかしその後の問題行動から身分が下がったり上がったりした。「答客難」「非有先生之論」をはじめ幾つかの詩文を残した。「答客難」は、朔自身が自分を自嘲して書いたものと言われる。変人と言われている。

うたとかたりの対人援助学

第15回 『子どもの替え唄と戦争』 こぼれ話

鶴野 祐介



今年8月、『子どもの替え唄と戦争 ―笠木透のラスト・メッセージ―』（子どもの文化研究所）を出版しました（2,000円＋税）。本連載の第2回「戦争と替え唄」にご紹介した内容をふくらませたものです。「軍歌」「唱歌・童謡・わらべうた」「大人の流行歌・民謡・外国の歌」の3つにジャンル分けした52曲を元歌とする子どもの替え唄を元歌の歌詞と楽譜付で解説と共に紹介する「第一部 テキスト篇」、〈子どものコスモロジー〉〈音楽社会史〉〈ライブヒストリー〉という三つの視点から、戦時下を生きた子どもたちにとって替え唄を歌うことの意味とは何だったのかを問う「第二部 研究篇」からなっています。「子ども文化論の新たな地平を切り拓く鎮魂の書」（表紙カバー見返し）として、また平和教育のハンドブックとして手に取っていただければ幸いです。今回は、本書の中には盛り込めなかったエピソード

ドをこぼれ話としてご紹介するとともに、この研究の今後の展望を書き留めておきたいと思います。

なお、以下の文章の中では、作者（作詞者・作曲者）が特定されるものを「歌」、作者不詳のものを「唄」、両方の意味を含むものを「うた」として記述します。

「替え唄」という認識はいつ生まれた？

本書の出版にあたって、日本音楽著作権協会に歌詞および楽譜の掲載申請をしたところ、18曲に著作権が発生し、1曲につき原則1,050円、合計約2万円を支払うことになりそうです（金額の確定は数か月先のようなので）。この中には19世紀のアメリカ民謡「ジョージア・マーチ」も含まれており、なんとも不可解ですが、同協会のHPには「編曲や替え唄、訳詞などにより著作物を改変する場合、著作権（財産権）だけでなく、改変の仕方によっては、著作者人格権が問題になることがあります。人格や名誉に関わる部分を保護する著作者人格権は、著作者だけが持つことのできる権利（一身専属）で、他人に譲渡することはできません。著作権（財産権）の権利者と異なる場合があるので、著作者人格権について了解を得る場合には注意が必要です」云々と記載されており、慎重を期すことにしました。

著作権の問題は、ある楽曲を演奏したり改変したりする場合、原作者の許可を得て、使用料を支払わなければならないという認識を共有し、作品の個性（オリジナリティ）や帰属性（アイデンティティ）が尊重される社会に私たちが生きていることの証左

と言えます。

ただ、歴史を遡ってみると、こうした個別性や帰属性が問われるようになったのは近代以降のことにすぎません。それまでは、「これは替え唄だ」「いや、偶然似ているだけで、オリジナルだ」と言い争う必要もなかったのです。「詠み人知らず」という言葉が示すように、誰が詠んだかはわからなくても、「いいものはいい」として歌い継がれてきたのです。

わらべうたと替え唄

例えば、日本の伝承童謡「わらべうた」には原則として「元歌」も「替え唄」もありません。土地によって、また時代によって、少しずつ違っているけれども類似するうたのことを「類歌」と言いますが、わらべうたにあるのは「類歌」だけです。

大学生に「かごめかごめ」「ほたる来い」「花いちもんめ」などのわらべうたを聞いてもらおうと、「どれもよく似たメロディーで、ちょっと不気味」といった感想が多く寄せられます。その理由は、わらべうたの音階の多くが「民謡音階」と呼ばれる「ラ・ド・レ・ミ・ソ・ラ」で構成されているからなのですが、ことばのイントネーションに合わせて、この音階に乗せて唱えれば自然と、よく似た「うた」ができあがるのです。ちなみに「かごめかごめ」と「ほたる来い」の冒頭をドレミで歌ってみましょう。

♪レーレミ レレレ レレレ レドレド ラ…
♪レーレー レドレレ レレレ レミレレ ラ…

今日の子どもたちが聞いたら、どちらかがどちらかの「替え唄？」と思うかもしれません。

唱歌と替え唄

1872（明治5）年に学制が公布され、「唱歌」という科目が誕生しましたが、しばらくの間、教科書はありませんでした。伊沢修二がアメリカへ留学し、音楽教育を学んで帰国した後に作ったのが最初の教科書『小学唱歌集』（1881 - 1884）で、その中には英国やドイツなどの民謡や歌曲を元歌とするもの

が数多く含まれていたことはご存知の通りです。

代表的なものとして「蛍（蛍の光）」を挙げておきましょう。元歌は、旧友との再会と別れをつづった英国スコットランド民謡「過ぎし日（オールド・ラング・サイン）」です。

♪ふるきよき友 忘ることなく 心は永遠に
とどめたし … 過ぎし日のため 友よ
過ぎし日のため 懐かしの グラスを♪

↓

♪ほたるの光 窓の雪 文よむ月日 重ねつつ
いつしか年も 過ぎの戸を
開けてぞ 今朝は 別れ行く

ただし、これを直ちに「替え唄」と呼んでいいかという疑問が残ります。元歌のメロディーを借用しただけで、歌詞については元歌とは関係のないまったく別の内容です。後ほど述べるように、これは文芸的な技巧（レトリック）を用いて元の歌詞を改変し、元歌とのギャップを楽しむ「パロディ・ソング」という意味での「替え唄」ではありません。

軍歌からわらべうたへ

一つのメロディーがテンポやリズムを少しずつ変えながら、そこにいろいろな歌詞が付けられ、またいろいろな場所（状況）で歌われていくということもありました。例えば、フランス人軍楽長シャルル・ルルー作曲、外山正一作詞の「抜刀隊の歌」は、1885年に鹿鳴館で初演された軍歌ですが、当初イ短調だったのが、「ピョンコ節」とも呼ばれる、弾むようなリズムの民謡調に改変されて、お手玉やまりつきのわらべうた「一番はじめは」として、子どもたちの間で広く歌われていきます。

♪われは官軍 わが敵は 天地入れざる 朝敵ぞ

↓

♪一番はじめは 一宮 二は日光の 東照宮
三は佐倉の 宗五郎 四はまた 信濃の善光寺
五つ出雲の おおやしう 六つ村々 鎮守様
七つ成田の 不動さん 八つ八幡の 八幡さん

「一番はじめは」を口ずさむ子どもたちには、「抜刀隊」の替え唄を歌っているという認識はなかったでしょう。ちょうど水面を漕いで進んでいく時の櫓（オール）のように、シンプルでリズムカルなメロディーの繰り返しが、物語を先へ先へと進めていってくれるものと感じられたのではないのでしょうか。

ちなみに、先ほど「わらべうたには原則として元歌はない」と書きましたが、「一番はじめは」は元歌が確認される珍しい例です。ただしこの場合、曲調はかなり改変されているので、「元歌」というよりも「祖型」と呼ぶべきかもしれません。

軍歌⇒社会運動歌・演歌・子ども向け軍歌 etc.

次に、社会性や政治性を帯びた例をご紹介します。1901年または1904年に発表された軍歌「日本海軍」(A)のメロディーは、1904年「社会主義の歌(富の鎖)」(B)に、日露戦争後には演歌師の添田唾然坊が作った演歌「あゝわからない」(C)に、また昭和のはじめには子ども向けの軍歌(水谷まさる作詞)「僕は軍人大好きよ」(D)に、そしてその替え唄「僕は軍人大きらい」(E)になり、さらには韓国・北朝鮮・中国それぞれにおいて愛国や独立などをスローガンとする勇ましい歌詞で歌われました(F、G、H)。

ひとつのメロディーが、ある集団を一つに結びつけ、外へと向かっていく力を持っていること、そしてその力は時として「敵」を打倒する「暴力」にもなることを物語る歴史的事例と言えるでしょう。

A.四面海もて囲まれし わが敷島の秋津洲…

↓

B.富の鎖を解き棄てよ 自由の国に入るは今…

C.人は不景気タタタと 泣き言ばかり繰り返し…

D.僕は軍人大好きよ 今に大きくなったなら…

E.僕は軍人大きらい 今に小さくなったなら…

F.鉄腕石拳 意気衝天 われら少年たたかわん…

G.われらは朝鮮人民革命軍 戦う赤き戦闘員…

H.直隸の歴史を遡れば 最古の戦場 涿鹿がある…

ザ・ドリフターズが歌った替え唄

先ごろ、志村けんさんが亡くなられたのをきっかけにして、ザ・ドリフターズが再び脚光を浴びています。彼らの活動の音楽面にも注目が集まっているようですが、戦後の子どもの替え唄を語る時、ドリフの功績の大きさは計り知れません。

志村さんが歌った、童謡「七つの子」の替え唄「カラス なぜ鳴くの カラスの勝手でしょ」はあまりにも有名ですが、「8時だヨ!全員集合」(1969-1985)の中では他にもたくさんの替え唄が歌われています。例えば、オープニングテーマは民謡「北海盆唄」が元歌です。

♪ハアア 北海名物 (ハア ドウシタ ドウシタ)

かずかず コリヤ あれどヨ (ハア ソレカラドシタ)

おらがナ おらが国さの コーリヤ

ソレサナ 盆踊りヨ

↓

♪ハアア ドリフみたさに

チャンネル コリヤ 回したら

今日もナ 今日もあえたよ コーリヤ

ソレサナ 五人の色男

一方、エンディングテーマの元歌は、永六輔作詞、いずみたく作曲の「いい湯だな」。デューク・エイセスによる日本各地のご当地ソング「にほんのうた」シリーズの一つで、この歌は群馬県のご当地ソングとして1966年2月にリリースされたものです。

♪いい湯だな いい湯だな

湯気が天井から ポタリと背中に

冷てえな 冷てえな

ここは北国 登別の湯

↓

♪笑ったね 歌ったね

あなたの笑顔が 目に浮かぶ

可愛いな 素敵だな

来週も楽しく 笑いましょう

この歌の最後に、加藤茶さんが画面に向かって「風邪引くなよ」「お風呂はいいよ」「歯みがいたか？」

「宿題やったか？」などと呼びかける場面が忘れられないという方も多いでしょう。

本書『子どもの替え唄と戦争』には、「シャンラン節」や「隣組」のドリフ替え唄版を収めています。

⇒ ♪ ツーツーレロレロ ツーレーロ…

僕があの娘を 見染めた時は
高校二年の春の頃 グレた頃…

♪ド・ド・ドリフの大爆笑
チャンネル回せば 顔なじみ
笑ってちょうだい 今日もまた
誰にも遠慮は いりません…

他にも、スコットランド民謡「ライ麦畑を抜けて」（唱歌「故郷の空」の元歌）の替え唄「誰かさんと誰かさんが麦畑…」など、ドリフの替え唄レパートリーはたくさんあります。

替え唄とパロディ・ソング

こうして見てくると、替え唄は、①元歌の歌詞が意識されており、これをひっくり返したり混ぜ返したりして「替える」ことを意図したものと、②元歌の歌詞はどうでもよく、ただメロディーに魅かれて、これに自分の想いを乗せて歌にすることを意図したものの2種類に分かれるように思われます。

前者のタイプは「パロディ・ソング」とも呼ばれ、戦争中の子どもの替え唄の多くはこちらです。元歌をさんざん聞かされたり歌わされたりしたことに対する対抗措置、ストレス解消法の一つが、替え唄を歌うことだったのです。

これに対して、後者のタイプは、日本だけでなく外国の場合も同じですが、民謡（フォークソング）に多いようです。子守唄もその一つで、例えば「ねんねんころりよ おころりよ」で始まる「江戸の子守唄」のメロディーで歌われる、別の歌詞の子守唄は、西館好子さんによると 200 種類を超えるそうです。元歌の歌詞を「替える」という意識が薄いという点において、厳密には「替え唄」とは言えず、これも「類歌」と呼ぶべきかもしれません。

世界の子どもの替え唄

最後に、子どもの替え唄に関する研究の構想をスケッチしておきたいと思います。1つ目の課題は世界の子どもの替え唄を集めて国際比較をすることです。本書では、替え唄づくりの法則性を、I. 物語の脱構築：(a)錯綜、(b)分裂、(c)中断、(d)解体、II. 物語の再構築：(e)鏡像的世界、(f)反復的世界、(g)祝祭的混沌世界、のように分類し構造化しましたが、このような法則性は、外国の子どもの替え唄にどのくらい共通して見られるのかを探ってみたいのです。

本書の中でも紹介したアイオナ&ピーター・オーピー『イーソーを見た 子どもたちのうた』（1947年）の冒頭に、次のような英国の子どもたちの替え言葉が収められています。新学期最初、校門脇の掲示板などに掲げられた標語をモジったものです。

♪ やれやれ またまた学校か！

やることいっぱい やなこといっぱい

Here we are, back again!

Lots of work and lots of pain. (p.19)

おそらく元の標語の最後は“lots of fun”だったのでしょ。全体では「さあ、学校に戻ってきた！楽しいことがいっぱい待ってるぞ」といった具合でしょうか。“fun”が“pain”に替わるだけでガラリと雰囲気が変わります。そして、どこの国の子どもも考えることはおんなじなあと嬉しくなります。

その一方で、例えばシリアや北朝鮮やスーダンといった、困難な状況下の子どもたちは果たしてどんなうたや替え唄を歌っているのか気になります。

子どもの替え唄の過去・現在・未来

2つ目の課題は子どもの替え唄の歴史的な変遷（過去）をたどり、今日的状況（現在）を確認し、今後どのようになっていくか（未来）を予測することです。1つ目を共時的的研究とすれば、こちらは通時的的研究と言えるでしょう。2つの課題を達成するまでにどのくらい時間がかかるかわかりませんが、大ぶろしきを上げておきます。どうぞお楽しみに！

ああ、 結婚！

—婚活日記—

第15回

黒田長宏

<2020年5月9日>

41回の原稿を投稿した。時は新型コロナウイルスの流行中で先がまだ見えてこない。

<6月5日>

新型コロナウイルスはすでに第二波なのだろうか。私は依然として勤務休みの前日の帰宅後、風呂と食事のあとすぐに部屋にこもって映画ビデオを観て、翌日ユーチューブでその感想を主に言うという繰り返しを、『婚難救助隊』という私

のライフワークを有名にするために続けている。それは継続できている。ただ、視聴者側が動かない。かなり久しぶりに某マッチングサイトでマッチングしたのだが、今度の人はずぐに会いたがるという、考えようによっては夢のような人だったのだが、婚活は出会い系サイトとかなんとかというような遊びではないと思うし、もっとメールして、お互いにわかってからという思いが私にあり、積極的な相手を抑制するような説教的なメールを返したらブロックされてしまった。大魚を逃がしたか。それともこれで良かったか。今となっては後の祭り。切り替えて次の人が現れるように応募を新たに続ける。だが、相手は38歳だったので、14歳差でも応募に応じてくれる例もあるのだということは証明されたと思う。これは収穫だ。

<6月19日>

次にマッチングアプリで反応してくれた人の言い分は、東京近郊とのことでそれで謝られてしまったが、年齢ではなかったのを希望にしておこう。婚難救助隊のFacebookでのいいね！が当初から気づけば(気づかなかった)13人にもなっていた。ありがたい。

<7月22日>

『執筆者短信』のネタができたので書いた。それ以外は休日は、婚難救助隊サイトのユーチューブでの結婚難の人たちをどう結婚できるようにするのかというアピール動画と、某マッチングアプリへの女性への応募という2大アウトプツ

トを繰り返しているだけなのだが、だからこそ日記の量は少なくなるが、基本は継続しているわけである。日記へのやる気が減ったわけではない。同様のことを繰り返している。毎日、同様、同様、と書き続けても量を費やすだけで意味を為さないと思っているからである。だから何か書く日は無理しても何か入力せねばならないと思うから、なんということもない文字列が続くだけである。今日は、執筆者短信を読めばわかるが、マイナポイントを予約したのでまだ某マッチングアプリを応募していない。実は一昨日に婚難救助隊の名刺を胸ポケットに携えて看護師エヌさん(星新一かよ)に渡そうと試みたが、ナースステーションに必ず誰かほかにて渡せなかった。職場よりも某マッチングアプリのほうが気が重くない。だが、某マッチングアプリは書き込んでくる人が2人ばかりいたものの結局断りの内容だったのである。とにかく、ユーチューブ発信とそれを頑張ろう。

<8月7日>

昨日の昼休みに普段は自家用車の中で休憩しているのだが、ガソリン給油に少し抜け出したら、都合の良い場所に他の車に入られてしまい、超超のつくほど珍しく残り20分を作業場で休憩していたら、なにやらお金がなんだかという署名がきて、なんの集金だろう嫌だなと思い寝たフリを続けていたら、住所、印鑑を押すと5万円がもらえるのだという。国からの医療従事者の慰労金とのことである。それまで駐車場ととられて

不機嫌だったのが5万円の臨時収入で吹っ飛んだ。金が入るのはうれしいことである。特別定額給付金をまたやればよいのにと思っている。

三浦春馬が自ら命を絶ったのは驚いた。30歳のイケメンスターで性格も申し分なし。身長もたしか180センチ近い人だったと思う。人気ゆえに収入だってかなりのはずだったはずだ。私など、3日で離婚されて166センチから165センチを行ったり来たりしているかどうかで、イケメンかどうかは写真かなにかで判断してもらいたいが、この3か月の間に53歳になってしまった。どう考えても命を絶ちたいくらいなのは私のほうだと思うのだが。関西には茨木市というところがあるらしいが、三浦春馬は私と同県の茨城県出身者であり、それで注目は多かった。しかし、『恋空』とか、『女城主直虎』とか、彼は死ぬ役が多かったようなイメージもある。以前、前の職場でフリーペーパーの企画営業をしていた頃、けっこう有名な美浦のトレセン付近に住むジョッキーがやはり、彼と同様に何が原因かはっきりしないことをして、驚いたことがある。表面上は明るくみせていても、心の中には辛さを抱え込んでいたのだろうか。

茨城県には茨城新聞という伝統ある新聞があり、茨城県の内容は一番情報発信を続けているところだと思うが、それでも小さな三面記事に県内のストーカー事件とか婦女暴行事件とか毎日のように出ている。そしてなぜか容疑を否認していると書かれていることを多々みる。

悪人はどこまでも悪人なのだろうか。そんな中でも、なんとか普通に暮らして悪さもしないような人達が、アラサー、アラフォー、アラフィフ、になっても男女ともパートナーがいない人が多いはずだ。某マッチングアプリでは元アイドルか女優かというようなルックスの人たちがたくさんでてる。しかし反応はない。

気づいたのは、海外旅行が好きな女性が何人も出てくる。理由は省略するがそういうところに結婚難の要因がある気もする。ビールやワインを美味そうに飲んでいる写真を掲載している人も多い。男女雇用機会均等法からの推移は、そういう女性を多く生み出してきたのだろう。そんな中でまだ終了していないが『私の家政婦ナギサさん』というテレビドラマには多少期待をしている。ヒロインの多部未華子は何度か三浦春馬と共演してきたのが悲しくもある。

今まで『婚難救助隊』のサイトにフェイスブック広告をはっていたが、ユーチューブ動画のほうに広告することに切り替えた。するとはっきり効果は感じられるもので、それまでサイトに新たに日に日に10人から20人ほどカウントが増えていたのが、1人か2人くらいになってしまった。ところが、広告に出したユーチューブのある回だけ、閲覧者数が1人くらいだったのが190回くらいになっている。実力なのか広告なのか。いや、実力を持ちながら広告しないと増えないのだろう。広告していないのになぜか11か月前にアップした若尾文子の『女は二度生まれる』の感想を語った回は突出してい

て490回も視聴されている。一体何が原因しているのだろうか。ほかに2つ、100閲覧を超えている回があるが、ゼロとか、一桁とか、何が閲覧数に作用しているのか全くわからない。わかっていれば、いまごろユーチューバーで運営できて、お世話になっている職場を去って、一日中、結婚難問題に取り組み、結婚したいのに結婚できない人を援助できる権力でも金力でもつけられるはずなのだが、そこまでのブレイクはまだまるで見えていない。しかも新型コロナウイルス騒動で新規経営者はおろか、有名大企業でさえ億の損失状態である。独立には非常に難しい時期にあたっている。それでも次回以降に期待していただきたい。連載を了承していただけて生きて意識がはっきりできるうちは連載させていただいて、ブレイクを達成して、それなら対人援助学会にもなんらかの援助を与える有力者になっていることだろう。しかし突然終了したら私の身に何かあったということだろう。そうならないように、マスク、手洗い、熱中症予防、天気予報に注意して、休日にユーチューブを一つ以上増やすことと、某マッチングアプリで婚活の応募を続けよう。

あと毎回どこかに書いておくべきだったが、最も大事なことを忘れていた。私は53歳だが、自分の遺伝子を受け継いだお子さんが諦められず、年の差婚も社会的ブームになってほしい。妊活や妊娠の仕組みなどの本を少しずつ読み始めた。こんな私でも誰でも良いというわけではないが、広瀬すずやももクロの

あーりんくらいなら申し分ないが、どなたか私でなくても茨城県にでも関心がある女性の独身の方々がいらっしゃったならば、興味が少しでもあったなら、『婚難救助隊』サイトから、黒田に関心があるということで誘惑していただけると有難いことだ。

〔PBLの風と土 第14回〕

学びの集団の成熟を通じた個々人の成長

山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授)

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：AAUの実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきています。

1. 専門性を横断する問題解決への要請

2020年8月、筆者はデンマークのオールボー大学に久々に訪問しているはずだった。AALBORG PBL WEEKと銘打って、PBLに関する2つの世界会議が8/16から21に連続して開催されることになっていたのである。本連載の当初にも紹介したとおり、オールボー大学では2013年11月にUNESCOのユニツイン（UNITWIN：University Twinning）／ユネスコチェア（UNESCO Chairs）プログラムに採択されたことで2014年の5/26に「The Aalborg Centre for Problem Based Learning in Engineering Science and Sustainability」（略称ではオールボーセンター、あるいはUCPBL）が設置、特に工学教育の分野でチェアプロフェッサーを置いてPBLを推進している。また、連載第1回にも記したとおり、そもそもオールボー大学は1974年の開学当初から全学でPBLを導入していることもあって、全学のPBLの連絡調整を行う機構としてPBL Academyが設置されており、主に学内向けの研修事業の他、UCPBLの活動と並行して2013年からは学術雑誌「The Journal of Problem Based Learning in Higher Education」（JPBLHE）の刊行にも取り組んでいる。

新型コロナウイルス感染（COVID-19）拡大を受け、AALBORG PBL WEEKは2021年に順延されると共に、一部のプログラムのみオンラインで開催されることが4月28日に発表された。当初、PBL WEEKの前半は、UCPBLが2008年から断続的に開催している国際会議「International Re-

search Symposium on PBL」（IRSPBL）の第8回大会が予定されていた。そして後半は国際学会「Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies」（PAN-PBL）による隔年開催の定例会PBL2020が予定されていた。ちなみに米国・カリフォルニア州のサンタクララ大学で開催された前回大会PBL2018は、2017年度の滞在時に受入担当となっていたMogens Jensen先生とCasper Feilberg先生と共に参加し、本連載第4回でもその内容、とりわけ「PBLのはしご(step ladder)モデル」について紹介させていただいている。



図1：当初のAALBORG PBL WEEK 2020と変更後の案内

今回の部分的なオンライン開催では、1週間の会期は1日に圧縮されて8/18の15時（中央ヨーロッパ時間）から3時間、まずIRSPBL2020としてアメリカ、インド、ガーナ、デンマークからリレートーク形式による1時間半の事例紹介とQ&A、続いてPBL2020として世界銀行などで高等教育のプロジェクトに関わってきたJamil Salimiさんがモデレーターとなりオランダ・南アフリ

力・米国マサチューセッツとつないでPBLは他の教授法より優れている点とCOVID-19への対応を共通テーマとした1時間半のシンポジウムが、それぞれ開催された。日本では22時開始ということもあって、後半のシンポジウムの一部は集中力が途切れてしまったものの、前半のオールボー大学の事例発表では、3年前の滞在時の知識を更新することができた。とりわけ興味深かったのは、2019年の秋学期から開始された「Megaprojects」であり、SDGsの17のゴールに照らし合わせて、予めUCPBLのもとで設定されたテーマ（2019年度は2つ、2020年度は継続2・新規1）のもとスーパーバイザーとなる担当教員が複数の視点（Focus）と具体的な挑戦（Challenge）内容を示し、学生が個人もしくはグループで提案書を記して応募、その後教員が学びのコミュニティを組織化（Cluster）し、学部と学年を横断して問題の分析・探究・解決に取り組むものである。

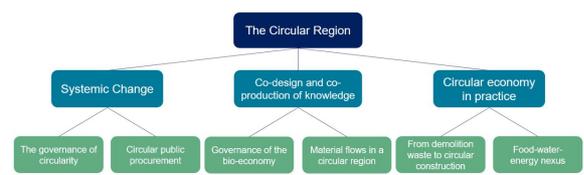


図2：Megaproject「地域資源循環型社会の実現」の例（最上段がテーマ、中段が視点、下段が具体的な挑戦）

ちなみに筆者は、立命館大学文学部の北出慶子先生を代表者とする科研費「日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発」の成果の一部を発表しようと、PBL2020にエントリーし、採択されていた。こうした個別の発表は自動的にPBL2021の発表に振替となり、より充実したものになるよう、共同研究者と共にさらなる調査と分析を重ねているところである。前掲の「Megaprojects」の取り組みに深い興味を寄せたのは、これまでオールボー大学でのPBLでは、1970年代における産業構造の変化と世界的な大学教育改革の議論を踏まえ、高度職業人の養成と輩出という使命のもとで取り組まれてきたこともあって、あくまで学部内で完結するものが中心だったためである。一方で、筆者が実践と研究の対象は、学部・学年を横断するものばかりであり、場合によっては正課科目だけでなく、部分的には課外活動との接続・連携、課外活動からの展開、課外活動へ拡充もなされているためである。そこで今回は、前回予告したとおり、筆者による

教育実践の中でも減災をテーマとしたクラスを履修した学生がどのような学びと成長を遂げたのかを取り上げ、香川と青山（2015）の言う「越境的対話」、すなわち「異なるコミュニティの人が出会い、交流し互いの重なりや共有部分を創出する一方で、文化的、歴史的に生じた差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく、むしろ変化の重要な原動力として生かす実践」（香川と青山, 2015, p.3）の意義と可能性を探っていく。

2. 震災のため(for)から減災を共に(with)

筆者が減災をテーマにしたサービスラーニング科目を担当することになったのは、2011年の4/20の学校法人立命館の常任理事会において、「学外からの支援要請等、緊急に判断・対応が必要なものへの対応や被災地域ならびに日本社会の復興・再建にむけた中長期的な支援活動への対応など、立命館としての復興・再建への支援活動の考え方等の整理・具体化」を担うべく、立命館災害復興支援室が設置されることとなり、その準備と事務局運営に参加したことが大きく影響している。詳しくは谷内ら（2012）において文字として収められているが、ちょうど同志社大学大学院総合政策科学研究科から立命館大学共通教育推進機構へと移るタイミングで発生した大規模・広域・複合型災害に際し、かつて立命館大学理工学部環境システム工学科1回生として在籍していた際に阪神・淡路大震災の支援のために仲間たちと共に学生が主体となって立命館大学ボランティア情報交流センターを立ち上げた際にお世話になった方々が、そうした学園政策の意思決定に携わる役職についていた。また筆者は立命館大学への着任に際し、サービスラーニングセンターの副センター長に就任予定で、「物理的な距離の中でも精神的な距離を縮め、被災者に寄り添い、中長期的な支援のあり様をボランティア活動の実践を通じて学ぶ」科目の設置に携わることができたという事情が重なっている。結果として、4/25の立命館大学教務会議で「東日本大震災地域における本学学生のボランティア活動に対する教学的取り扱いについて（ガイドライン）」がまとめられ、学生の自主的なボランティア活動と正課の関わりを整理し、2011年度後期に震災関連ボランティアをテーマとした正課科目の開設が示された。

東日本大震災は2010年度に発生したものの、既に2011年度の開講方針は議決済であったため、前掲のように年度途中で新たな授業開設にあたっては、既に開講されている科目への増クラスをするという方法を採用することとされた。そのため、授業の開講に先立って4/11に立命館大学学生部とサービスラーニングセンターの共同により学生が大学内のコミュニティの中心となり震災復興支援活動を行う組織として立ち上げた「立命館大学震災支援活動情報ネットワーク」(311+Rnet)を活動先として、2005年に文部科学省の現代的ニーズ取組支援プログラムの採択を経て開発されたサービスラーニング科目「地域活性化ボランティア」(2012年度からはカリキュラム改革で「シズンシップ・スタディーズI」として継承)に「FUKKO+R～震災×学びプロジェクト」(略称：震災P)が設置された。東北からは800kmから1,200km離れている関西から現地に駆けつけて継続的な取り組みを重ねていくにあたって必要となる経費については、立命館災害復興支援室に寄せられた寄付を原資とする基金(復興+R基金)をもとに公募された「東日本大震災復興のための『私たちの提案』」から1,538,000円の支援を受けた。募集と選考の結果、26名の学生が履修し、8/5のオリエンテーションを皮切りに、夏休みには9/7～13に「いわてGINGA-NET」による岩手県気仙沼郡住田町を拠点とした釜石市、大船渡市、陸前高田市、大槌町での活動に参加、10月4日以降は原則として火曜日の夕方に「コアタイム」と称して担当教員(筆者)のコーディネートによる対話型の学習機会を設け、3/16の活動報告会まで、チームでの活動と学習が進められた¹⁾。

この震災Pの経験を踏まえ、2012年度からは現在進行形で復旧から復興の只中にある東北での活動に加えて、未だ被災経験のない「被災者」が、過去の災害から復興を遂げたまち、また復興過程にあるまちを訪れ、それぞれの災害の特性などを見つめ直して災害を追体験することにより、未来の災害の被害を減らすことができるようにする「減災×学びプロジェクト」を開講している。²⁾そのため、立命館災害復興支援室はもとより、NPO法人日本災害救援ボランティアネットワークや関西学院大学社会学部の関嘉寛ゼミ等と連携し、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震で被災

害があった地域でのフィールドワーク等も行うこととしてきた。また、2016年度には開講後に平成28年熊本地震が発生し、立命館災害復興支援室が熊本県西原村での支援活動を展開したことも相まって、震災Pの時代から続く「立命館大学による学生主体の震災救援と復興支援に関する企画調整と推進」という観点のもと、現地の名産品である唐芋の苗付けや収穫などによる農業復興を通じた地域資源を活かした経済基盤の復興に貢献することにした。こうして、平成28年熊本地震まで、阪神・淡路大震災以降の特定非常災害に対して活動の対象を拡張してきていったものの、その後の西日本豪雨、また2015年開学の大阪いばらきキャンパスにも一定の被害をもたらされた2018年の大阪北部地震に対しては積極的に活動を展開することはできず、災害の規模や種別にかかわらず、むしろ近隣地域での防災活動にも焦点を当てていかなければならない、と捉えていたところで発生したのが、COVID-19である。

表1：2013年度以降の減災Pの基本的な展開パターン(2016年度の受講ガイドの素材より一部を字句修正)

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
フィールドワーク			定点観測(神戸)				新潟中越	定点観測(神戸)		阪神・淡路	任意参加	東日本
ボランティア運営参加		田植え(小千谷)		夏祭り(大船渡)	稲刈り(小千谷)							
参与観察					柿町記念(福島)	慰霊祭(小千谷)					追悼式(神戸)	
企画展示・ワークショップ					盆踊り(小千谷)		学祭等(立命館)					
その他関連の動き	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	○中間ふりかえり				○活動報告会			★いのちのついで

東日本大震災の復旧・復興に向けた直接的な貢献のために東北でのボランティア活動のみを組み込んでいた震災Pから、災害の記憶や経験を過去形で語る方々と共に過ごすことで気づきや学びを得ることを重視するようになった減災Pへの移行は、筆者にインター・コミュニティ・デザインという観点のもとでのアクションリサーチを展開をももたらした。一方で、立命館大学の教育実践として安定的に展開され続ける上では、この科目が筆者のゼミではないことを鑑み、属人化を避けねばならない。折しも2017年に筆者がデンマークで学外研究を行う際には同僚の宮下聖史講師(当時、2020年度より島根県立大学准教授)を担当教員にプロジェクトは展開された。ただ、減災Pが現在まで続いてきたのは、本連載第9回などで

紹介したSOFARモデル (Bringle et al., 2009) を援用するまでもなく、立命館大学サービラーニングセンター事務局の丁寧な連絡・調整、さらには現場の皆さんに厳しくも細やかな指導・監督を頂戴した賜物であり、記して謝意を表したい。

3. 学びのコミュニティの維持・発展

震災Pから減災Pへの展開にあたって変化したのは、サービス・ラーニングのプロジェクトとしての現場との関係構築のあり方だけではない。とりわけ、過年度の受講生が次年度以降の取り組みを下支えすることにより、年度を重ねるごとに関係の質が高まりを見せている。それは、E.H.エリクソンの言う個人の発達概念としての世代継承性 (Generativity: ジェネラティビティ) より、マイケル・ポランニーの言う暗黙知の創発 (emergence) によるものではないかと捉えている。松岡 (2019) の解釈を重ねるなら、創発とは「それまでの思考のプロセスや実験のプロセスからは想定できなかったことがおこること」であり、それらは「個人の能力」「時代の要請」「グループの相互刺激」「孤立との闘争」「謙虚な態度」「どうしようもない我欲」「直観」かは「定めがたいもの、決めがたいもの」であり、「不意の確証」を経験し「見えない連携」がはたらくことだという。³こうして列挙された要素を見つめてみるなら、震災Pでは個人の能力、時代の要請が色濃く反映し、減災Pでは(感覚的には相互作用と言い換えたいところだが)「グループの相互刺激」や「直観」を通じて、その場その場の(単に場当たりのという意味ではない)事態の刷新が図られていったと言えよう。

例えば、震災Pでの活動の1つ、気仙沼大島の写真展では、赤澤ら (2013) の報告にも含まれているように、個人を主軸にした活動と学びによって、「何かしたい」受講生に具体的な行為の方法を提示した。それは、図らずも先導する学生が、東日本大震災の発災前に立命館大学生を紹介するインターネットでの連載インタビュー記事の結びの発言を実行することでもあった。⁴具体的には、夏にカンボジアで1,000人の笑顔撮影してきたことを受け「どこかで震災が起きた場合、メディアを通して私たちに伝わるのは、震災の規模や被災者数が主で、その復興の裏側についてはほとんど知られることなく忘れ去られてしまうと思う」

と述べ、「僕は、その裏側にある現地のありふれた日常や人々の笑顔を写真や映像で伝えていきたい」と語った。それから約1年後、彼は震災Pの受講生らと共に現地に足を運び、さらには授業終了後も現地との往復を重ねて小学校の校長先生から卒業アルバムの制作協力の依頼を受けており、卒業後には愛知と東京に本社を置く新聞社で写真記者の職に就き、震災以前からの関心と震災後に出会った人々との思い出を携え、常々時代の要請に応えている。

このように、強靱な個性や使命感をもとに集団の凝集性が高められ、強靱な個性を持たない場合は使命感をもとに社会的な随伴性によって各種の活動や学びが重ねられた震災Pに対して、減災Pでは神戸、新潟、そして東北で、学びと実践の共同体が生成・維持・発展していくこととなった。神戸では、2012年度に「人と防災未来センター」を訪問して展示の観覧だけでなく、5階資料室に訪れたことを契機として、2013年度より震災資料専門員の高森順子さん(当時、2018年度より愛知淑徳大学助教)の協力を得て「『震災を追体験する』方法として、定点観測写真を考える」という活動に取り組んでいる。これは阪神・淡路大震災当時に神戸市東灘区森南町在住の女性による自費出版の写真集『翔け神戸：阪神・淡路大震災の定点撮影』に収められた組写真(発災直後の写真と同じ場所を3~5年後に復興過程の記録として撮影したもの)の続き、つまり組写真の3枚目を撮影し、キャプションを付与することで震災を追体験するという取り組みである。2013年度には複数の新聞社からの取材に加え、人と防災未来センターでの展示、2014年度には大阪の寺院での展示やテレビ取材対応、さらに2016年度には人と防災未来センターが事務局の「災害メモリアル



図2：人と防災未来センター資料室ニュースVol.53より(2014.3発行)

アクションKOBÉ」への参加とNHKラジオによる取材と、多方面からの協力と関心が寄せられる中、減災Pの受講生らのバトンリレーで大仁さんが遺した123箇所の「今」を記録し、当時多くの方にもたらされた悲しみと発災から復興と現在に続く時間の経過に思いを馳せる機会を得ている。

また、新潟での関わりは、春の田植えと秋の稲刈りを手伝いに行くことを授業として行うことで、夏の盆踊りに誘われた学生が任意で参加するようになり、秋の稲刈りの後には10/23の慰霊祭に参列、そして冬には雪深い集落の暮らしを体験するという動きが起きるようになった。⁵これは活動先が新潟県中越地震で3名のお子さんが亡くなった小千谷市塩谷集落であり、つまり現地再建を選択した人たちが立ち上げた将来の理想的な集落のあり方を外部の人々と交流しながら学び合う「塩谷分校」の活動に参加することで生まれた動きである。また、塩谷集落では集団移転事業で集落を離れた人々や、復旧・復興の過程に携わった外部支援者、さらには復興が達成された後にまちづくりの仲間として集落を訪れた人々らが築100年あまりの古民家を拠点に活動する「芒種庵を創る会」という団体もある。震災Pから減災Pへと拡充するにあたって、兵庫県西宮市に事務所を置く日本災害救援ボランティアネットワークの協力を得たことは先に述べたが、その理事長が大阪大学の渥美公秀教授であったこと、加えて関西学院大学の関嘉寛教授の前任校が大阪大学で渥美教授と共に新潟県中越地震の発災当初から塩谷集落を支援してきた後にゼミで活動していること、さらには田植えや稲刈りに加えて花壇づくり等の日常的なボランティア活動に地元の長岡技術科学大学が参加していることなど、大学間連携・交流の機会が多いことも塩谷集落の特徴である。そうした特徴は山口ら（2019）で詳述したが、関西から遠隔地でありながら、復興の過程で一部は取り戻され一部は新たに見出されていた現地の生活リズムを体感し、都市型の災害とは異なる被害の特徴を理解しながら、被災された方々からの経験を未災者が伝承していく実践的な学びがもたらされている。

4. わかりえなさがわかるということ

今回は筆者が担当する立命館大学のサービスラーニング科目「シチズンシップ・スタディーズ」で

災害復興支援をテーマに震災・防災・減災をテーマした授業で、学習者がどのような集団的な学びと成長を遂げているのかについて焦点を当てるべく、プロジェクトの経緯と経過をまとめ、実際にどのような活動を展開してきたか、述べてきた。ただ、勤の良い読者の方にはお気づきのことと思われるのだが、東北との関わりについて、あまり紙幅を裂いていない。言い訳のような物言いと捉えられそうだが、東北の中でも福島県楡葉町をフィールドとした活動と学びは、次回、じっくり取り上げることとしたい。その理由は、サービスラーニング科目を通じたピア・サポートがなされた結果、正課科目と課外活動との効果的な連携、発展的な展開がもたらされたためである。

沖（2016）は、先行研究と立命館大学の各種の取り組みの比較と整理を通じて、ピア・サポートを「報償のあるなしに関わらず、同じ学生(peer)同士が専門性を持つ教職員の指導のもと、仲間同士で援助し、学び合う制度」（p.3）と端的にまとめている。ピアとは仲間という意味であり、直接的には学生のみを指すわけではない。さらに踏み込めば、「同じ学生どうし」と一括りにされることを嫌がる学生（どうし）もいるだろう。したがって、ピア・サポートの重要性は、全く同じ立場・境遇・属性ではないが、仲間どうしという一体感・連帯感を携えて、何らかの目的を達成していくコミュニティの形成を図るということにあると捉えることができよう。

楡葉町を含む福島県沿岸部（いわゆる浜通り）では、減災Pのかつての受講生やその仲間たちが生活者となって大規模・広域・複合型災害を経験した地域の新しい日常をよりよいものにしようと奮闘している。その端緒は、2012年度の減災Pの受講生らが受講中に立ち上げたサークル「そよ風届け隊」だと断言できる。その設立当初からの動きを知る者としては、今回の連載での用語で言えば、越境的対話と創発の連続であった。もちろん、全てが順風満帆ではなく、現地の大学（いわき明星大学など）との協働により東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内から避難された方々への支援へと駆けつける中で、さらにその後は避難指示解除の準備の段階となると帰還するかどうかの選択を通じた住民の方々葛藤に向き合う中で、当事者ではないゆえのもどかしさを学生らが抱いていたことをよく覚えている。

今回は、福島県楡葉町での活動を中心的に取り上げ、放射線という目には見えないものがもたらす被害と奮闘した正課科目と課外活動の両面から、学生としてどのような学びと成長をもたらしたかを明らかにしていく。ある学生は休学を選択し、ある学生は福島でのインターンを選択した。そうして現地に向かった仲間と共に、京都を拠点

としつつも現地の住民の方々を巻き込んで瓦版を作成する取り組みが始められることになった。当事者の悲しみや苦しみはわかりえあないことがわかった学生らが、いかにして未来を拓く新しい当事者になっていったか、その学びと成長の径路を辿っていくこととする。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 赤澤清孝・其田雅美・八重樫綾子・山口洋典. 2013. 大学と震災とボランティアセンター. ボランティア学研究, 13, 25-38.
- Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- Furco, A. 1996. Service-learning: a balanced approach to experiential education. in Taylor, Barbara. and Corporation for National Service (eds.), Expanding Boundaries: Serving and Learning. Corporation for National Service. 2-6. 香川秀太・青山征彦(編). 2015. 越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 新曜社.
- 松岡正剛. 2019. 編集力：千夜千冊エディション. KADOKAWA
- 沖裕貴. 2016. 立命館大学のピア・サポート・プログラム—その特徴と課題、今後の展望—. 立命館高等教育研究, 16, 1-17.
- 諏訪清二. 防災教育の不思議な力：子ども・学校・地域を考える. 岩波書店
- 谷内博史・高見良一・赤澤清孝・山口洋典・松井かおり・甲賀光秀・齋藤重. 2012. 座談会「阪神・淡路大震災」と学生ボランティア活動. 立命館百年史紀要 20, 141-209.
- 山口洋典, 渥美公秀, 関嘉寛. 2019. メタファーを通じた災害復興支援における越境的対話の促進：新潟県小千谷市塩谷集落・復興10年のアクションリサーチから. 質的心理学研究, 18, 124-142.

【注】

¹ サービス・ラーニングの手法については、Furco (1996) の論考などを引用しつつ、本連載でも繰り返し述べてきているとおり、現場での活動と教室での学習との均衡が図られることが特徴である。そのため、コアタイムでは科目担当者による講義、ドキュメンタリー映像鑑賞等を通して意見交換を行い、東日本大震災からの復興動向に関しての関心と理解を深めた。また終了後には同教室にて、学生らの自主活動の奨励と促進を図るべく、受講生が主体的に相互の議論と交流が図られた。そして開講当初の10月26日には合宿も実施され、これらの過程で受講生の自主性・自発性・積極性・継続性を前提とした活動の骨格が定まった。具体的には、(1)「Rマークプロモーションコンテスト～みんなで広げよう！復興支援の輪部門」に新たな形態での募金活動の提案（「おつりで衣笠とBKCから東北を灯そうー『おつRITSプロジェクト!!』」を提案）、(2)気仙沼市・大島での写真教室の企画運営（富士フィルムの支援のもと現地の公民館・児童館の協力により12/9～11、12/17～19、3/3～4の3回にわたり小中学生らが現地の復興の証を写真で撮影）と京都・滋賀での展示（1/17～20に京都外国語大学ユニバーシティギャラリー、2/25～26にエポック立命21）、(3)地域防災イベントの共同運営（2/12の衣笠キャンパス周辺住民を対象とした防災イベントで炊き出しを担当）、(4)活動報告会でのコメント等を踏まえて夏期休暇中を中心とした復旧ボランティア活動のフォローアップ（3/22～26に岩手県大槌町・宮古市に受講生らが訪問）という具合である。一連の取り組みに関連した原稿として、赤澤ら（2013）がある。

² 長らく兵庫県立舞子高校で防災教育を推進してきた諏訪（2015）は、未災とは「被災の一步手前」の状況にあり、明日被災するかもしれない人々を未災者と呼んでいる。災害が多発する中で日常的に「災害を被る（被災）」ことは「災害は未だ被らず（未災）」であって「災害の被害の状態には非ず（非災）」と、被災と非被災ではなく被災と未災を対として捉えようという提案である。2018年度からは減災Pの受講ガイドにて「日本で唯一の環境防災科がある兵庫県立舞子高校で用いられた概念で、未だ被災経験のない世代が防災について学ぶ大切さを確認することができる」と示している。

³ 同書は著者である松岡正剛が2000年に開始した書評サイト「千夜千冊」を再構成したものであり、当該箇所は2005年の5/30にカール・ポランニーの『暗黙知の次元』に対して記した書評である。ちなみに創発（emergence）に関連して、前掲のサイト「千夜千冊」の併載コラム「セイゴオ『ほんほん』」の29回（2020.4.28）には、COVID-19の状況に関連づけて、次の記述がある。「『有事』はエマージェンシーであるのだからこれは「創発」をおこすということであり、さらにコンティンジェンシーでもあるのだから、これは「別様の可能性をさぐる」ということなのである。」よって、創発は「おきる」あるいは「おきた」という結果論あるいは運命論的なものではなく、設計論あるいはシステム論的に「おこす」ものと捉えられる。

⁴ +R人No.176（2011年1月6日更新）「伝えたいのは、笑顔のパワー！」黒田淳一さん（政策科学部3回生）国際ボランティア団体 関西おおぞらプロジェクト 元代表、MERRY PROJECTメンバー。

⁵ 農業はタイミングを逃すと場合によっては1年間の収入が失われること、それゆえ生活再建のために現金収入を途絶えさせないこと、一方で農家の方々にとって田畑は自分たちの誇りであること、それらを加味して、農業復興に取り組む意義が理解された。そしてこの発想は平成28年熊本地震でも、外部支援者との連携のもとで進められる支援の上で重要な視点となった。

接骨院に 心理学を入れてみた

〔13〕 寺田接骨院 寺田弘志

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

「先生、あれは何ですか？」

「ファン循環型殺菌装置です。下から空気を取り込んで、紫外線で除菌して、上からきれいな空気を出しています」

「へー、こんなん売ってるんですか？」

「完成品も売ってるんですが、自分で作りました」

「器用ですね。エアコンにも、何かつけてはりますけど、これも自分で作らったんですか？」

「あれも自分で作ったんです。エアコンに入る空気を紫外線で除菌して、きれいな空気を出してます」



分院の待合室の様子 左上：ファン循環型殺菌装置 右上：殺菌灯を取り付けたエアコン 右下：加湿器

今回は、寺田接骨院での新型コロナウイルス感染防止対策を紹介してみました。

今回は、その後の対策について、続きを書いてみたいと思います。前回と重複する部分もありますが、ご容赦ください。

当院では、今回の流行の以前から、マスクの着用し、アルコールや塩化ベンザルコニウムで手指・物品を消毒してきました。

新型コロナウイルスの流行のせいで、アルコールの不足になり、それを補うために、次亜塩素酸水と紫外線による除菌を取り入れ、さらにできる限り対策を追加しました。

幸い、まだアルコールの在庫があるため、ベッドなどの消毒には次亜塩素酸水を使うには至っていません。

経済産業省は、次亜塩素酸水を消毒に使うときは、「たっぷりとかけて消毒するように」と発表しました。

食品や食器、調理器具などを消毒するにはぴったりの使い方です。

しかし、接骨院の場合、たっぷりかける使い方は不向きです。

ベッドや枕にたっぷり次亜塩素酸水をかけると、ふき取りや乾燥に手間と時間がかかります。

次亜塩素酸水は、接骨院の日常業務では実用的ではないということがわかりました。

もともと当院では、次亜塩素酸水を加湿器で噴霧し、主に院内の空間除菌に使っていました。

例えば、パナソニックのジアイーノの場合、10ppmの次亜塩素酸水が噴霧されるようです。

それが空間に広がると0.1ppmになるので、環境基準の0.5ppmを大きく下回っていて、人体にも安全だと言います。

0.1 ppmという低濃度なのに、12時間で室内の菌が99%以上除菌できるそうです。

(出典：<https://panasonic.jp/ziaino/effect.html>)

低濃度なので人体にはほとんど影響が無く、たとえ体内に入ってもビタミンCと結合して、塩になるだけです。

次亜塩素酸ナトリウムでは、次亜塩素酸はイオンとして存在し、親水性なので、コロナのエンベロープという脂質性の膜にはじかれる分、効果が減ります。

次亜塩素酸水では、次亜塩素酸は分子として存在し、親水性ではないため、エンベロープにはじかれず、エンベロープを破壊する効果が高くなります。

アルコールがエンベロープを溶かすことで除菌するのと同じです。

コロナウイルスは、エンベロープに乗っかっているスパイクというタンパク質を仲立ちにして感染します。

エンベロープさえ破壊できれば、ウイルスは感染力を失います。

さらに次亜塩素酸の分子は、エンベロープの中のRNAなどのたんぱく質も酸化して破壊します。

アルコールがエンベロープを持たないウイルスを除菌しにくいのに対して、次亜塩素酸水はエンベロープを持たないウイルスも除菌することができます。

伝染病の流行がない時に噴霧する必要はありませんが、新型コロナウイルスが流行している今、次亜塩素酸水を噴霧するメリットは、健康に害をもたらしかもしれないというデメリットよりはるかに大きいのではないかと私は思っています。

実験的に3カ月間くらい毎日、20 ppmの次亜塩素酸水で手足や体を洗い、うがいもしていますが、健康上は何の問題もないようです。洗顔したとき目に入っても、しみることはありません。

しかし、WHOが「消毒薬の噴霧を推奨しない」という発表をしました。

経済産業省や文部省もそれを追認する発表をしました。理由は「WHO がそう言っているから」。

私は一時、WHO がなんと言おうが、次亜塩素酸水を噴霧したほうが、感染防止になる、患者さんのためになると考えていました。

塩素濃度が10 ppm以上の次亜塩素酸を含む水を次亜塩素酸水と呼びます。(日本の水道水は塩素濃度が1 ppm以下ですが、それでも菌やウイルスを抑制する効果があります)

WHO が生涯飲み続けても安全という5 ppmの次亜塩素酸の入った水を噴霧していた時期もありました。(塩素濃度2 ppmの次亜塩素酸を含んだ水でも、噴霧すれば除菌ができるそうです)。

ところが、WHO や政府の権威を笠に着て、消毒薬の噴霧は危険だとテレビ番組等で発言する専門家が増えました。患者さんの中には「消毒薬の噴霧はけしからん」と思う人が出てくるだろうなと思えました。

その時点で、患者さんがいらっしゃるときの次亜塩素酸水の噴霧をやめることにしました。

いち柔道整復師が言うことと、WHO や政府が言うことと、人がどちらを信じるかは火を見るよりも明らかです。

良いものだとわかっている、患者さんが不安になったのでは本末転倒です。

心理的な側面を重視して、噴霧を断念することにしました。今では、安心して通院していただくために、患者さんがいらっしゃるときはアロマウォーターで加湿し(加湿の効果については、前回の記事をお読みください)、患者さんがお帰りになった後に、次亜塩素酸水を噴霧して、院内を除菌しています。

WHOのお陰で、加湿器に給水する回数が倍になりました。やれやれです。

今も噴霧している室内で仕事をしていますが、塩素臭がすることも、のどが刺激される感じもありません。

WHOのテドロス事務局長は、中国に資金援助を受けているエチオピアの出身で、中国よりの施策をしていると言われていています。

テドロス事務局長は、台湾が新型ウイルス発生を警告したのに握りつぶし、中国に頼まれてパンデミック宣言を遅らせ、武漢に査察にも行かず、空港封鎖もせず、「マスクは効果がない」と言い、200人以上の専門家が「空気感染する」と報告しているのにそれも無視しました。失策続きで、感染拡大に役立っているWHOです。

そのWHOが「ワクチンが開発されれば、2年後に終息する」とかうそぶいています。つくづく、あきれます。

世界中にウイルスをばらまいて、マスクやアルコールなどの衛生用品を高値で売って大もうけして、あるいは衛生用品や検査キットの提供をちらつかせて自国に有利な外交をし、「わが国はすばらしい対応をした」と自画自賛するマッチポンプな某国に似ています。

もしWHOが「パンデミックではない」とか、「マスクは効果がない」とか、「消毒薬の噴霧は推奨しない」とか言わなければ、感染者と死者は今よりも少なかったかもしれません。

次亜塩素酸水は患者さんがいらっしやらないときに噴霧するとして、では、患者さんがいらっしやる時の、空気の除菌はどのようにすればいいのでしょうか。

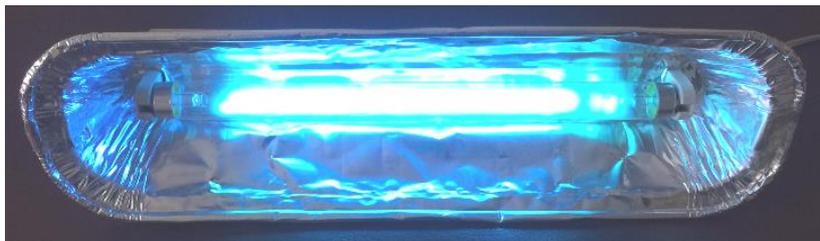
有効な方法として、紫外線を照射できる殺菌灯を使って、空間除菌する方法があります。

波長が253.7nmの紫外線（殺菌線）は、ウイルスのRNAに吸収されやすいため、太陽光に含まれる350nmの紫外線の1600倍もの殺菌力があります。

出典：

<https://www2.panasonic.biz/ls/lighting/plam/knowledge/pdf/0320.pdf>

ハンディー殺菌灯や殺菌灯ボックスを作って、ベッドやカーテン、床、備品、硬貨とお札、手指などを消毒していることは前回書きました。



ハンディー殺菌灯 10Wの殺菌灯にカバーを取り付けたもの。



殺菌灯ボックス 上部の箱の中に殺菌灯が付けられている。足元のスイッチを踏むと、点灯する。

その後追加したのが、「ファン循環型殺菌装置」と「殺菌灯を取り付けたエアコン」による空間除菌です。

空気を除菌する場合、天井など人のいない方に向けて殺菌線を照射する「間接照射方式」と、殺菌線が外に出ないダクト内などに殺菌線を照射し、そこにファンで空気を送り込み、除菌された空気を室内に戻す「殺菌線遮光方式」があります。

出典：

<https://www2.panasonic.biz/ls/lighting/plam/knowledge/document/0320.html>

間接照射方式の場合、使用を1日8時間までに押さえないければならないという制限があるので、当院では殺菌線遮光方式を採用しました。

殺菌線遮光方式なら、24時間つけっぱなしでも人体に影響はありません。

「どうやって作ったんですか？」と患者さんにたずねられることもあるので、作り方を簡単に説明しておきます。

●「ファン循環型殺菌装置」

殺菌灯をアクリル板で囲い（紫外線はアクリルを透過しません）、アクリル板の周りをアルミの額縁で固定します。

上下にステンレスのガラリ（板をブラインド状に取り付けた通気口）をかぶせ、ガラリの内側にファンを取り付けます。

アクリル板がなければ、普通の木の板で囲うのでもかまいません。

殺菌灯からは、青い色の可視光も出ており、青い可視光は一部アクリル板を透過します。

アクリル板を通して青い光が見えていると、除菌していることがわかるので、アクリル板を使うことにしました。

ファンを回しながら殺菌灯を照らせば、院内の空気が除菌されます。

右下：アクリル板を付ける前の装置内部 上のガラリの中に小型のファンが入っている。



● 「殺菌灯を取り付けたエアコン」



感染拡大防止を徹底するために、本院・分院に各2台あるエアコンにも殺菌灯を取り付けて、空間除菌することにしました。

エアコンはファンが大きいので、除菌速度も上がります。部屋の大きさと、エアコンの風量にもよりますが、3分もあれば、室内のおおかたの空気が除菌できます。

エアコンの吸気口付近に殺菌灯をとりつけ、アクリル板やアルミ板で囲って殺菌線が外部にもれないようにします。



前面アクリル板をはずした内部の様子 壁にアルミシートを貼り付け、アルミ板で天井への紫外線を遮光。アクリル板と天井との間から吸気され、エアコンに入るまでに空気が除菌される。

殺菌灯を照らしながらエアコンを使えば、室内の空気が除菌されます。

新型コロナウイルスは空気感染する可能性が高いという報告や、エアコンや空調でウイルスが拡散したという事例の報告がありました。

エアコンに殺菌灯を組み合わせるという方法で、エアコンによる空気感染のリスクを減らせるのではないのでしょうか。

当院の対策が、皆様の参考になれば幸いです。

エアコン1台あたりの改造にかかった費用

殺菌灯 10W1本 1000円程度

蛍光灯本体 1台 2500円程度

アルミ板・コード・スイッチ・金具・両面テープ 各 110円

アクリル板（家にあったパーテーションをリサイクル） 0円

その他 材料取り寄せの送料 2000円程度

当院のその他の感染防止策については前の号の記事をご参照ください。

現代社会を『関係性』という観点から考える^⑬

対人援助職が家族のケアを担うとき(2)

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

この連載でも幾度か触れてきましたが、私は長年家族介護を続けています。実母、実父（存命）、義父母（義母は存命）の介護のほか、母方伯母の看取りも経験があります。こうした経験をベースに、本連載の前回（第12回）と今回（第13回）は「対人援助職が家族のケアを担うとき」というテーマで書かせていただいています。

前回（第12回）は主として介護に関する事例をベースに取り上げ、対人援助職が家族のケア（介護）に直面した際の行動や心の動きについて、それぞれの場面ごとに考察を加え、対人援助職が陥りやすい隘路も含めて、介護においても「関係性」が重視されるという結論を述べさせていただきました。

今回（第13回）は、家族療法でいうところの「夫婦サブシステム」の概念をベースに、「役割」と「関係性」のバランスに注目したうえで、「対人援助職が家族のケアを担うとき」について述べさせていただきたいと思います。

なお、意見はあくまで私見であり、また事例については個人情報保護のため、私を含めた家族のケアを担う対人援助職の体験を幾つか組み合わせさせたものであることを申し添えます。

1 夫婦サブシステムは「関係性」と「役割」から構成されるが、そのバランスは夫婦を取り巻く状況等によって様々であるということ

夫婦となったカップルには、一定の「役割」が生じてきます。お互いを思いやるなどの「関係性」などはもちろん重要ですが、民法上の「絶対的扶養義務」などというに及ばず、状況如何では、お互いの親族関係や地域性などの中で、夫婦それぞれに求められる役割が課せられることになり、時には役割が個人を表す呼び名となることもあります。子どもが生まれた後、夫婦が互いを「お父さん」「お母さん」と「役割」を示す言葉で呼ぶようになることは我が国ではよく見られることです。これは子どもから見た家庭内の「役割」を呼称とするものでしょう。一方で、夫婦となった段階から、集落・親族内で「〇〇家の嫁」といった呼び方をされることもあり、これは集落・親族間での役割期待が呼称に込められていると私は考えます。

本ウェブマガジンの編集長団士郎先生の御著書「対人援助職のための家族理解入門 家族の構造理論を活かす」（中央法規出版 2013年）では下記のように言及されています（48頁）。

「夫婦」から始まった暮らしが「両親」の暮

らしになり、子どもたちの独立後、また「夫婦」に戻る。このライフサイクルのなかで、その時期に応じた夫婦サブシステムのあり方を考えることは、問題を抱えたカップルに限ったことではなく、超高齢化社会を迎える日本の課題だろう。

そもそも、結婚に際して、お互いに何を期待するかということも、カップルによって様々です。そしてその期待は、夫婦となるカップル双方だけの意向に留まらず、

その両親等の思惑なども盛り込まれがちです。夫婦となるカップルとその親世代の間にある世代間の境界線がしっかりと保たれており、かつ、夫婦及びその親世代の双方が、それぞれのサブシステムにおける決定に際して過剰に干渉しないという姿勢が保っているのであれば、まだ問題は起きづらく、たとえ発生しても適切な対応がなされることが期待できるでしょう。カップルとなって日が浅く経験に乏しい夫婦であっても、課題に対応するため相互に連携して対応する経験は、安易に親世代に解決を求めるよりも、「夫婦サブシステム」の強化に役立つといえるでしょう。

しかし、少子化の中で子ども世代の結婚は、親世代にとっても一種の「イベント」としてとらえられる向きも決してないわけではありません。ただ、結婚の成立に伴う一連の結婚式などの催事は（一時的な）「イベント」（いわゆる「ハレ」）ではあっても、その後続く結婚生活（いわゆる「ケ」）は、決して楽しいことばかりではなく、マニュアルや希望通りに進まない出来事も当然ながら発生します。そうした際に、「誰がその役割を担うのか」という単純な「役割分担」論だけに終始することについては、私は好ましくないと考えます。目の前の事態をどのように捉え、それに対してどうやって対処するのかを夫婦で話し合っているだけの「関係性」と、そうした「関係性」を育

んでいく力が必要であると私は考えています。そしてその「関係性」とは、お互いの不断の努力で持って維持されていくものではないでしょうか。努力なしに相手に期待だけをするというのは、人間として成熟した態度ではないと私は考えます。

理想をいえば、まさに「病める時も健やかなる時も」、お互いが関係性の維持に配慮できることが望ましいですが、それが叶わない時もあります。連載の第12回は親世代の介護について考えましたが、今回は夫婦間でどちらかが疾病・障害状態となった際について、対人援助職が「ケアする立場」となった事例を通して考えていきたいと思います。

2 妻側への役割期待が様々に重なり、夫婦サブシステムの機能不全が発生しかねなくなった事例

夫婦はともに対人援助職として長年働いてきました。お互いが「仕事と介護の両立で精一杯」という状態でした。その一方で、夫となる側には親世代からの様々な役割期待が強く、特に「介護の手助けが欲しい」「跡継ぎが欲しい」という思いは強く、特に親世代の介護に対して経験や理解のある女性に嫁に来てほしいという思いは強かったようです。もともと世代間境界の脆弱性が認められる家庭であり、子ども世代の決定に対して親世代が無造作に踏み込むことが続き、それに起因する葛藤も幾度となく発生していました。結果的に夫となる側が40代後半で妻となる側に結婚を申し込むに至りました。妻となる側が長年にわたる在宅介護生活にピリオドを打ち、妻の実母が施設入所に至ったタイミングでした。妻となる側は、夫となる側が配偶者に対して親の介護について理解と協力を求めていることは承知していましたし、でき得る範囲での協力をするということについても了解していました。

家族療法を学んでいたこともあり、世代間境界を踏み込んでこられる可能性があることも十分承知しており、それなりの覚悟も対策もしたうえで、両者でよく話し合い結婚に至りました。案の定、夫の親世代からは「嫁いだ以上は〇〇家の人間」という理由で、子どもを産むことを含め介護に対する労力や財政的支援を含めて妻側に対する要求も重くなりました。

こうした親世代からの要求に関しては、当初話し合ったとおり、夫婦で1つずつ話し合いながら対応していきました。そこには介護以外の問題、例えば数百万円単位の金銭的問題の解決などが含まれていました。こうした際には、知人である法曹に間に入ってもらう、法定外紛争解決という手段を採るなどして、極力夫婦で抱え込まないようにすることを心掛けていました。ただ、夫の親世代からこれらに関する感謝の言葉はなく、「だって子どもだから当たり前」という反応が繰り返されました。

こうした親世代からの要求は年月を経るに連れてエスカレートし、従来から親世代との葛藤を抱えつつもそれを飲み込んで対応してきた夫がまず精神的に疲弊し、ついには一定期間の療養を要する場面が生じるようになってしまいました。妻は夫の療養のために病院や職場と連携するなどして、夫の療養環境を確保することに奔走することになりました。ここまでであれば通常の「夫婦のどちらかが病気になった時」の対応と言えます。しかし妻が精神保健福祉に関する国家資格を所持していたこともあり、医療者からは夫の症状や服薬の状況に関する細かなモニタリングと報告を求められることが重くなりました。夫の生活全般について、「家族としてではなく、国家資格保持者としての視点で観察する」生活、つまり夫婦サブシステムにおける「関係性」ではなく、「役割」がより重視されるようになることについて、妻は疑問を感じつつも、その「役割」

を果たさねばならないという気持ちが強くなりました。事態がここにいたっても夫側の親世代からの要求は続き、これに加えて「嫁であるあなたがついていながら」といった非難も繰り返され、ストレス性の夫の疾患の理由として「嫁の方が給料が高いから、男としてのプライドが傷つけられた」という一方的な決めつけも行われました。一方でこの親世代は、平素は「財布としての嫁」と呼んで憚らない人でした。夫は信頼できる医療機関につながって適切な治療を受けていましたが、親世代はそれを否定し、根拠がない民間療法的なものを押し付けてくるなど、治療に関する不適切な介入もありました。

こうした親世代の要求が夫を疲弊させることは明確でしたし、医療機関からの助言もありましたので、親世代との交渉の窓口は妻に一本化し、妻はよりよい療養環境の確保を心掛けていました。

こうした状況で、従来から妻自身が感じかつ夫の親世代からも直接的に聞かされていた「役割として求められた嫁」という言葉が頭から離れないようになっていきました。いくら資格を持っていたとしても相手は夫であり身内です。自分の「見立て」「観察」を誤ってしまい取返しのつかない事態になった場合のことを考えると、自身の中での立ち位置を見失いそうになるような心持ちだったといいます。また、夫は親世代の介入を負担に思いながらも、「社会的役割」を重視する生真面目さ所以に、親世代へのケアからいったん撤退するという選択肢を採ることはできず、結果的に妻にそれを一任することになったことも、妻にとってはまた辛いことでした。夫の世話と生計維持だけでも手一杯な中で、親世代の介入にも対応する日々の中で妻もまた消耗していきました。

ただ、こうした点について、妻が支援者を自

ら求めて適宜対応方法を話し合うことができたこと、親族の中で親身に支えてくださった方が複数おられたこと、夫の症状が落ち着いた時点夫婦として率直に話をすることができたことは、この夫婦がかつて家族療法を学んでいたことも大きかったと考えられます。

夫の症状が夫の親世代の幼少期に上る不適切な養育態度による可能性が治療過程で指摘されたこともあり、また、親世代から夫の療養への気遣いが一切ないままに「息子が病気でもうダメなら今後は私たちのことは嫁であるあなたの仕事」と夫婦に対して厳しい通告があったことで、親世代との物理的・心理的にも安全な距離感をとることを夫婦で決断しました。介護を一切放棄するという極端な結論ではなく、親世代への介護や支援に関しては地域の関係者や支援者とネットワークをより強固にすることや、非接触型の見守り機能を強化することで、親世代の生活を支えるという方向性に着地することができたのも、「関係性」に力点を置いた話し合いの結果だといえます。

3 夫婦間の生体間臓器移植

生体間の臓器移植については、誰がドナー（提供者）となるのかは非常にセンシティブな事項です。ある夫婦（双方ともに援助専門職）は夫が身体的な慢性疾患を抱えていました。しかし、夫婦で協力し合い子育てや家庭の運営をし、夫も治療を受けつつも仕事をすることができていました。ただ、ある時期に至って夫の病状が急激に悪化し、生体間臓器移植の必要性が生じることとなりました。妻は夫側の親世代や同胞世代に率直に状況を説明しました。この時点で妻は自分がドナーとなることも考えていました。現在の医療では親子や同胞でなくてもドナーになることは可能であるということを、医療機関で働いている妻は熟知していました。それでも夫側親族に説明

したのは、自分がドナーとなることで後々トラブルが起きないようにという配慮のためでした。また、夫は夫方親族の総領息子として、親族間の成功者として、親世代や同胞世代に対し日頃から様々な援助を行っており、それまで目立った葛藤も感じられませんでした。しかし、この時に及んで夫側親族の反応は、夫の体調不良という危機に対して妻を責める言葉と、これまで夫が行ってきた夫側親族に対する様々な援助ができなくなる可能性に対する不安の声ばかりであり、自らの子・同胞のためにドナーとなるという言葉は一切ありませんでした。「嫁である妻がドナーになることがあたりまえ」という、妻である自分への役割期待への言葉が繰り返され、妻に対する労いの言葉もありませんでした。幸い夫婦間の生体間臓器移植は成功し、この夫婦は御自身の子ども世代との平穏な生活を取り戻しましたが、その後の夫側の親世代や同胞世代との関係には隔たりが生じました。ただ、様々な反応があっても、夫婦間で話し合って決定したことを曲げることなく遂行された背景には、「妻の役割」意識だけではなく、夫婦間の関係性がきちんと保たれていたことも大きいと思われます。

4 「あんたたちはそれが仕事でしょ」

援助専門職として長く仕事をしていると、親族等からその知識やスキルを求められることは往々にあると感じています。援助専門職は基本的には困っている相手に対してできることをしたいと思う傾向があり（というよりも、社会や人のためになる仕事をしたいというタイプの人が援助専門職という仕事を選択する傾向があるとも言えます）や、そうした要請にも応じてしまうことはよくあるのではないと私は感じています。実際に、そうした問題解決役を援助専門職である人物が仕事の傍ら担っていることでなんとか回っている親族関

係というものもこれまで見てきました。

ただ、仕事とそうした親族等からの要請には決定的な違いがあることを援助専門職は理解しておく必要があると感じます。これは既に多くの方が理解しておられると思いますが、改めてこちらに記載するのは、援助専門職が親族間からの援助要請に対して陥りやすい陥穽があると感じている所以です。

まず、支援・介入を行う法的根拠が仕事とは異なり親族からの要請にはありませんし、当然ながら仕事であれば与えられている介入の権限もありません。それ以上に行うべき支援や介入が、親族等からの相談ではまず情報収集という段階から、主観的で正確性に欠けたものになりがちで、その結果支援・介入が誤った方向に向かう可能性があります。何よりもその際の責任の所在も不明確です。親族等からの相談等に応じる場面では、信頼できる機関や情報に「つなげる」こと、支援が必要な人を孤立させないということは必要だと思いますが、仕事と同じような方法で支援・介入することは望ましいものではないとは私は考えています。

しかしそれでも「あんたたちはそれが仕事でしょ」という言葉を添えられたうえで、問題解決を丸投げされる場面は、私自身も、周囲の援助専門職も、少なからず経験してきました。そして、そうした親族等が求めるものは、法律や道理に沿った問題解決ではなく、自分にとって都合の良い「結果」であるということも往々にしてあります。そして、仕事におけるクライアントやその家族への対応以上に難しいのは、こうした場面において、親族間の序列や優位性が持ち込まれ、世代間境界を踏み破るような圧力がかけられることです。先ほど紹介した2つの事例でも、子ども世代と親世代との世代間境界に対し、親世代からの侵襲が繰り返されており、当事者は「物事の解決」よ

りも「関係性の中での軋轢」などに消耗することになっています。

私自身が遅い結婚をしてみて実感したことは、出生家族や原家族以外の関係性の中でこうした出来事が起きた際に、夫婦間連合や世代間境界をより意識して対応することの重要性でした。特に、夫婦間のどちらかに疾病等のトラブルが生じている時には、役割を果たしながらも関係性についても十分考えて対応していかないと、夫婦間連合に大きな溝ができてしまうということも実感しました。特に、配偶者となる側の出生家族や原家族の問題解決のパターンをお互い知り、それを評価するのではなく、自分たちの世代ではどうやっていくのかということ話し合うことは非常に重要であると考えます。

5 援助専門職が自らの家族を営むということ

私は、援助専門職としてより良い仕事をしていくためには、自身の成育歴などを十分に振り返り、自己覚知が必要であるということ、家族療法を学ぶ中で実感してきました。

ただ、実際に遅い結婚を経験したことで、自身の家族を営むに際しても、家族療法の視点は非常に役立つと考えています。特に、結婚によって生ずる新たな親族との様々なやり取りにおいて、自身に様々な「役割」が求められる場面における対応の仕方、「夫婦サブシステム」の在り方、夫婦間連合の強化という視点を意識することは重要だと考えます。夫婦の「関係性」は、結婚（事実婚含む）という「手続」に自動的に付与されるものではなく、夫となる側と妻となる側の双方の努力によってつくっていくものであるということも痛感しています。

一方で、家族間トラブルの多くは、「誰が役割を遂行するか」や「役割の遂行の仕方」における混乱に端を発していると考えます。ただ、「役割」に固執してしまうと「関係性」のメン

メンテナンスがおろそかになってしまうのではないのでしょうか。過剰に「役割」の遂行を求めたり、あるいは「役割」の遂行を自らに課す「関係性」は、家族・親族間においては健全なものとは言えないと考えます。「だって、家族だから（子どもだから、親だから）あたりまえ」という論理でなにごともしを進めようとすることは、相手への配慮を欠き、世代間境界を踏み破る無思慮な行為であることはこの連載でも幾度か述べています。「役割」にこだわりすぎて「関係性」に思いを致さないこともまたよろしくないですし、「関係性」が何の努力もメンテナンスもなく「そこにある」ものと考えることも楽観的に過ぎると考えます。

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 12

朴 希沙(Kisa Paku)

今回は特別緊急企画として、新型コロナウイルスに関する基礎知識やよくある疑問、コロナ流行によって社会がどのような影響を受けたのかについてスペシャルゲストの某Iさんをお招きしてお話をうかがいました。

今回からは、また元のテーマに戻り、現代の曖昧な差別「マイクロアグレッション」について考察を深めていきたいと思います。第10回目の連載ではマイクロアグレッションに関してよく聞く疑問や私自身も感じていた疑問についてQ&Aの形式で考えました（前回のQ&A内容：Q1.マイクロ・アグレッションとはなんですか？、Q2.マイクロ・アグレッションと差別

の違いはなんですか？、Q3.マイクロ・アグレッションと一般的な「からかい」や「いじり」とはどう違うんですか？）。今回も引き続き、マイクロアグレッションに関してよく聞く疑問を取り上げ考えてみたいと思います。

Q. マイクロアグレッションでは、小さなことを大げさに言いすぎなのではないですか？

マイクロアグレッションに対する批判の中に、「(無意識的な) マイクロアグレッションを問題にするマイノリ

ティは、針小棒大なのではないか？」
「マイクロアグレッションを気にする人は、敏感過ぎるのではないか？」
といったものがあります。何気ない日常の一言、悪意のない無意識的なマイクロアグレッションを問題にすることは、「小さなことを大げさに言い過ぎる」話なのでしょう。実際、マイクロアグレッションにモヤモヤした場合でも、それを問題にすれば「敏感過ぎる/怒りっぽいマイノリティ」というレッテルをはられてしまうのではないかと恐れ、当事者が何も言わないこともしばしばあります。

マイクロアグレッションに関する議論が盛んに行われている米国においても、「マイノリティはマイクロアグレッションに対して不釣り合いに過敏に反応する傾向がある」とか、「感情的な反応が過剰で馬鹿げているように思える」とかいった批判が存在します(例えば Thomas, Lillienfeld 等)。このテーマに関して、Keon West(2019)は、このような主張をする人々はマイノリティが本当に過敏であるか、実際には調査したことがないことを指摘した上で、有色人種を例にとり、本当に有色人種の人々が白人に比べて過敏なのかを調査した面白い調査があります。

この調査では、いくつかの質問紙を組み合わせ、有色人種および白人の調査協力者の①マイクロアグレッションを経験した頻度、②人種・民族的アイデンティティとは無関係の否定的経験をした頻度、③生活全体の満足度

を評価する調査を行いました。またマイクロアグレッションの形をとったネガティブな体験をする想像をし、その時の気分について質問されました。これらの調査は、本当に人種・民族的マイノリティがマジョリティよりもマイクロアグレッションに対して、より否定的な反応を示すのかを調べるためのものです。もしこの仮設が正しいなら、人種・民族的マイノリティの方がマジョリティよりもマイクロアグレッションとネガティブな心理的反応との間により強い関連性が見られるであろうからです。

調査の結果は、いわゆる「マイノリティは過敏」説に反するものでした。まず、いくつかの質問紙を組み合わせた調査においては、マイノリティはマジョリティよりも多くのマイクロアグレッションを経験していることは明らかになりました。一方で、人種・民族的アイデンティティとは無関係の否定的経験をした頻度や生活全体の満足度を評価する調査においては、両者の違いはみられませんでした。また、マイクロアグレッションの形をとったネガティブな体験を想像することは、確かにポジティブな感情を減少させ、ネガティブな感情を増加させましたが、こちらも当事者がマイノリティであるかどうかはその感情の強さに関係しませんでした。

これらの結果から浮かび上がってくることは、(一部の)人種・民族的マイノリティは、些細な、あるいは無害な出来事に対して「過敏に」で反応

しているだけであるという米国では繰り返し主張されてきた「過敏症仮説」を支持する証拠は見いだされなかった、ということです。調査においては、人種・民族的マイノリティとマジョリティとの間に「感じ方」の違いはなく、両者における唯一の違いはマイクロアグレッションを受ける「頻度」でした。

しかし、米国では実際にマイノリティはより敏感なのかを調べる調査がなかったにも関わらず、このような主張が繰り返されてきました。もしかすると、私たちはその事実により注目すべきなのかもしれません。つまり、さしたる根拠がないにも関わらず、なぜ多くの人には「マイノリティは敏感」という俗説に乗ってしまいやすいのでしょうか？そこには、マジョリティのどのような心理的願望や背景が隠されているのでしょうか？それを探ることで、むしろマジョリティの心性に関する新たな発見が得られるかもしれません。

Q. マイクロアグレッションにはどのような影響がありますか？

マイクロアグレッションは日常的で、比較的些細な出来事に見えるかもしれませんがその悪影響はストレスやトラウマ、抑うつ、希死念慮などを含むほど深刻であることがいくつもの調査において繰り返し明らかになってきています。

またその影響は生涯に渡ることが指摘されており、例えば母親における孤独感との関連、出生時の低体重体重児の増加、幼少期の適応不良、大学生におけるアルコール関連の問題等も指摘されています。また高齢者を対象とした縦断的研究では、日常的な差別という形でのマイクロアグレッションは、感情的な健康に強い負の影響を及ぼすことが明らかになっていますし、高齢者における記憶力の低下を予測することも指摘されています。

さらにその影響は身体にも及ぶことが徐々に明らかになっています。例えば、マイクロアグレッションは心疾患の増加を予測することが調査により明らかになっていたり、心臓病、痛み、呼吸器疾患などの慢性疾患も予測されたりしています。

また米国における 5000 人以上の黒人のアメリカ人に関する全国規模のデータを用いた研究では、人種による差別は人種以外の原因によるネガティブな経験と比較して、深刻な心理的苦痛を発生させることを明らかにした研究もあります (Chae, Lincoln, & Jackson, 2011)。

これらの調査から明らかになったことは、社会的マイノリティのストレスは固有のものであり、すべての人が経験する一般的なストレス要因に付加的なものであるということ、したがって、社会的マイノリティはより多くの適応努力を必要とするということです。

以上、今回はマイクロアグレッションに関して、よく聞く疑問の中から「マイクロアグレッションでは、小さなことを大げさに言いすぎなのではないか」「マイクロアグレッションにはどのような影響があるか」について取り上げて主にこれまでの調査で明らかになってきたことを紹介しました。

様々な調査が、マイクロアグレッションは明らかに心身にネガティブな影響をもたらし、社会的マイノリティに固有の負荷を与えることを示しています。それにも関わらず、「マイクロアグレッションはとるに足らないこと」「マイノリティは過敏」といった俗説が流れたり人々がそれを容易に信じたりしてしまうのはなぜなのでしょう。先にも述べたように、今後の調査ではむしろそのような心性に関する調査や研究が待ち望まれているのかもしれませんが。

【参考文献】

- Chae, D. H., Lincoln, K. D., & Jackson, J. S. (2011). Discrimination, attribution, and racial group identification: Implications for psychological distress among black americans in the national survey of american life (2001–2003). *American Journal of Orthopsychiatry*, 81(4), 498-506.
- Lilienfeld, S. O. (2017). Microaggressions: Strong claims, inadequate evidence. *Perspectives on Psychological Science*, 12, 138-169.
- Thomas, K. R. (2008). Macrononense in multiculturalism. *American Psychologist*, 63, 274-275.
- West, K. (2019). Testing Hypersensitive Responses: Ethnic Minorities Are Not More Sensitive to Microaggressions, They Just Experience Them More Frequently. *Personality and Social Psychology*, 45(11), 1619–1632

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑪ 『ひだまり保育園おとな組』

迫 共
(浜松学院大学)

『ひだまり保育園おとな組』。ジェンダー、セクシュアリティ、子育てなどの問題を鮮やかに描き出す坂井恵理さんの作品です。

保育園の日常は子どもたちが主人公。しかしこの作品は、園児の周りの大人たちが繰り広げるオムニバス・ストーリーです。社会の「よくある光景」の中に、当たり前のように流されてしまう子育ての負担、女性側の生きづらさと、男性の認識とのギャップなどについて考えさせられる場面がたくさん描かれています。

「家から会社までの通勤時間が夫より 15 分短い」、だから毎日の登園とお迎えは「私の担当」と考える美樹は、会社勤めと家事、育児の両立に困難を感じながら子どもと向き合っています（第 1 話「プリンとオムツ」）。

夫は自分が負担を増やしているとは気づかず、『産後うつ』ってホルモンバランスの乱れで…』と美樹に説明。「そんなことをスマホで読んでるヒマがあったら、オムツ替えろ！ 皿を洗え！ 部屋を片付けろ！ 子どもを抱け！」と心の声を押し殺す美樹。翌日、あふれる気持ちを、職場の先輩シングルマザーの前でつい爆発させてしまいます。先輩からは「私たちが『察して』って思っちゃうのは、私たちが常にダシナのこと、察してあげちゃっているからじゃない？」と指摘されます。「私たち、愛とかそんなふんわりしたものだけで育児してないよね」。

美樹は職場で考えます。「定期的な授乳、オムツ替え、予防接種・検診スケジュールの管理・把握、抱っこしても泣きやまなければ他の方法を考え、実行。意外と仕事と育児のやり方って似てる…？」「家事と育児の作業量・情報量の多さ。これがもし、まともな『会社』ならば、たったひとりに業務をまかせず、リスクを分散して情報を共有し、ひとつのプロジェクトに取り組むはず」。

帰宅後、美樹は夫に、平日と土日での家事・育児の分担を提案し、連絡事項はホワイトボ

ードに書くことを提案します。夫は「なんか会社みたいだな」と呟きますが、「やってみると具体的でわかりやすいかも」と納得します。愛情だけでも愛情ぬきでも、育児を含んだ生活と仕事のバランスは成立しません。それは子どもに対してだけでなく、子育てのパートナーに対しても同じように言えると思います。

第10話「需要と供給」は待機児童問題がテーマ。自営業の美容師まどかは、わが子の預け先を求めて、区役所の窓口⇒認証保育所⇒認可外保育所⇒ベビーシッターの登録会社と回った末に、夫に偽装離婚さえも提案します。「すんなり認可が決まった」という常連客が「ウチは夫婦ともに両親死んじゃってるから、そのせいもあるかも」と話す場面では、「今『そのせい』じゃなくて『そのおかげ』って言いそうになっちゃった」と続き、「こんなのおかしいよね」と苦笑い。

ひだまり保育園の職員会議では運動会の準備が話題にのびります。行事の前にはサービス残業が普通になり、「休日はまたしばらくミシン縫いだわ」というつぶやきが保育士たちからこぼれます。保育園の日常に閉塞感をもっていた男性保育士、まさとが発言します。「保育園の行事って全学年が参加する必要がありますかね？」

保育士たちから「楽しみにしている親御さんもいるから」「今は SNS にあげたりする人も多いし」「まさと先生がクレーム対応全部してくれるっていうなら考えてもいいけど」と発言が続き、前年同様の行事が続けられることになってしまいます（第14話「pride and prejudice」）。

まさとには同性パートナーがおり、レズビアンカップルに精子提供してできた息子がいます。息子は別の保育園に通っていますが、まさとも二人のママも保育園には事情を説明していません。ママたちはシングルマザーとその姉として通園しています。まさとも子どもがいればと考えますが、男性保育士というだけでも警戒されてしまう昨今です。仮に男性二人で子育てををするとしても、保育園利用は怪しまれる…というセリフが出てきます（第3話「オトコとオトコ」）。

お月見の製作用に、色画用紙をウサギの形に切っているまさと。自宅での持ち帰り仕事です。イラストレーターであるパートナーから「なんでウサギから描かせないの？」「いいじゃん、メチャクチャなウサギでも。その方が面白いのに」と言われ、「ひとりあたり5~6人の子どもを見てるんだもん。そこまで面倒見きれないよ」と返答してしまいます。

まさとは自分の口から出た言葉にハッとします。「どうして僕は子どもを持つことに躊躇するのか…」「男親ふたりってことへの、まわりの反応を考えるとこわいとか、そういうのはもちろんあるんだけど、ここで『子どもを育てたくない』って、自分の職場なのにそう思

ってるんだ…」『個性を尊重』って口では言いながら、行儀よく並んでみんなで同じことして、そこからはみ出さないのが『いい子』なんだ」。

まさとが持つ違和感の正体は、同僚保育士が大変だと言いながら、仕事のやり方を変えられると思っていないことだけでなく、イレギュラーな自分たちが保育園にいたことが、想定すらされていないことでもあるようです。

翌日、自由遊びの時間におもちゃの台所で遊ぶ園児に、同僚の保育士が声をかけています。「まりちゃん、いいお嫁さんになるわね」「ゆーだいくんは将来、コックさんかな？」

ハートのついたまほうステッキで遊ぶ男の子に、「それおんなのこのオモチャだよ」という男の子が出てきます。

振り切るように、まさとは子どもたちに呼びかけます。「自分のこと、女だと思ってる人ー！ 男だと思ってる人ー！ かいじゅうだと思ってる人ー！」

まさとの同僚、保育士2年目のアイコ先生が「10月いっぱいまで退職させてください」と申し出てきます。まさとはアイコ先生と帰り道を歩きながら、「子どもがキライになったわけじゃないんだ？」と聞き出します。アイコ先生は「キライなのは、保育園に長時間子どもを預けてまで働くような母親です」「子どもが小さいうちは一緒にいてあげるべきですよ」と言い放ちます。

「育児は女がやるものでしょ」と無邪気に話すアイコ先生。「カンタンに別れるくらいなら子ども作らないでほしいです。あたしは結婚したら一生添い遂げます」「あたし、ようやく気付いたんですよ。他人の子じゃなくて自分の子をかわいがりたいんだって」。

アイコ先生と入れ替わりにやってきた男性保育士、こうた先生が新たな問題を巻き起こします。彼が園児たちのプールでの写真をブログにあげたところ、その写真がポルノサイトに転載されてしまい、それを発見した保護者が激怒したのです。こうた先生は、お詫びと言いながらも「あの写真は裸とかじゃないし…」と、保護者の感情を逆なですてしまいます(第15話「crime and punishment」)。

「本音でお話ししない？」と保護者の奥寺さんが呼びかけます。「子どもってかわいいよね。もう若いってだけでキレイだよ。40代の私がどんな高級化粧品使ったりしたってあの頃には戻れない。あのスベスベの肌に触りたいとは、正直思うわ。だから、そういう気持ちじゃまったくわからないわけではないの」。

こうた先生は「そ…そうですね！ それに性癖って生まれつきなところあるし…」
「LGBT とかを差別しちゃダメならロリコンだって認められていいはずですよ？」と返答。奥寺さんは「それにはちょっと違和感がある」と返します。

『俺のいいなりになりそう』とか『女より優位に立ちたい』とかホントにないって言い

切れる?」「子どもにしか興味ない男って、そもそも女性とコミュニケーション取る気がないんだなって思っちゃう」「自分のコンプレックスや弱さだとか、そういうの直視できないくせに、自分より弱い子どもや女の子に自分をまるごと受け止めてほしい——私はそういうのが、他と替えのきかない性癖の小児性愛者とはどうしても思えない!」「中には生まれついての人もいるのかもしれないけど、でももしその自覚があるなら、保育士や教師を目指すべきじゃないと思う」。

「先生がロリコンじゃないのはわかってます。だけど私が感じてると同じくらい、子どもへの性犯罪に危機感を持ってくれないと、こっちは信用できないんです!」「それは男性保育士に限らず、女性でも同じです」。

小児性愛が生得的なものなのだとしたら、当事者にとってこの世界はたいへん生きづらいものです。しかし「他と替えのきかない」LGBTと同列に語っていいのか、ということについては研究の進展を待つ必要があるでしょう。

ただ、保育業界には男女を問わず、「大人と対等のコミュニケーションをすることが難しい」ということから、子ども相手の仕事を選んだという人が（自覚の有無については分かりませんが）、まま見られるように思います。

退職したアイコ先生も、あの認識では世の母親たちと本音で関わりあうことは難しいでしょう。彼女もまた「自分のコンプレックスや弱さを直視できず、自分より弱い子どもに自分をまるごと受け止めてほしいという気持ちを持つ人」なのかもしれません。男女問わずこのような傾向の人が、子どもたちの心と身体を守り、育てるというのは、本質的に無理があることだと思うのです。

『ひだまり保育園おとな組』は、保護者のもつ多様なニーズだけでなく、援助者がもつ無自覚の課題についても考えることができる作品です。男性も妊娠する世界を描いた『ヒヤマケンタロウの妊娠』、作者自身の体験を描いた『妊娠 17 ヶ月!』もおすすめです。

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 11～

<想像力が働かない>

杉江 太郎

～『虐待』という言葉～

虐待という言葉が、メディアなどで頻繁に見られるようになって久しい。昔から虐待という言葉はあったのだろうが、今では、毎日と言って良いほど新聞やネットで耳にするようになった。

毎年、「過去最高」という枕詞とともに、虐待対応件数が報告される。過去最高を更新し続けており、「～年前の〇倍！」という言葉も良くセットで使われている。

虐待という言葉が一般化されたことで、児童相談所は大繁盛である。これは、潜在化していた社会のニーズが新たに発掘されたという意味では、子どもの将来の福祉に繋がる良い結果なのだろう。ただし、これはあくまでも、それを受け止めるだけの土台があつてのことである。

今の政策は、虐待認知件数を増やすという意味では、大いに役立った。実際に件数が増えていることがそれを証明している。一方で、現場にいる私自身は、『虐待』という言葉の弊害を感じている。本当に今の政策が虐待を減らすことに繋がるのかと言われると、誰もそのことに答えることは出来ないだろう。件数のことだけ

を言えば増え続けているのである。

社会の需要が高まると、それに伴って供給が増えるのが一般的である。この20年で、コンビニエンスストアやドラッグストアは激増している。児童福祉の業界ではどうか。現状だけで言うと、件数を増やすことだけで終わってしまっているのではないだろうか。本来ならば、増えた顧客をどう扱っていくのか考えるべきである。件数は増えているという『現実』の中で、虐待を減らさなければいけないという『理想』を掲げることは正直馬鹿げていると私は考える。

～想像力を欠如させてしまう～

児童相談所には「虐待を受けている子どもがいます。」という連絡が頻繁に入る。そのような連絡が入ると、児童相談所は調査を開始するのだが、ここで少し考えて欲しいのが、「虐待を受けている子ども」とは一体どのような子どもなのかということである。

みんな決まり文句のように『虐待』という言葉を使用しているが、実際に「虐待を受けている子ども」と一律に言える子ど

もが存在するのだろうか。そもそも『虐待』という言葉は、私は、ただの分類のためのラベルだと考えている。児童相談所で扱う児童を『虐待』か『虐待でないか』と明確に分類することで、国の政策の効果（ここでは、件数を増やすということ）を測定しやすくしている。

しかし、このラベルの使用方法を履き違えてしまうことは、想像力を欠落させてしまう。先ほどの考えでいくと『虐待』という言葉は、あくまでも数を数えるためにわかりやすくするためのラベルである。つまりは大枠しか示さない。ペットボトルのお茶や水にたくさんの種類があり、その中身が軟水なのか硬水なのか、はたまた、宇治茶なのか、ほうじ茶なのかと細かく見れば何が入っているのか示されてはいるが、実際はその大枠であるラベルのみで判断しているように、『虐待』という言葉で示される子どもは、ラベルが貼られた状態であり、その言葉だけでは、一律に判断が出来ないものである。世の中には『虐待』という言葉だけで語れないたくさんの事情を抱えた子どもが存在する。『発達障害』『いじめ』という言葉も同様かもしれない。

そうした流行り言葉を使用することで、わかったような議論を交わすように見てしまうが、その流行り言葉を使用することで、様々な個別性に蓋をしてしまうということも事実である。ワイドショーや、自称専門家の世界ではそのレベルで良い

のかも知れない。しかし、個別のケースに対応する援助職者が、そのような言葉で片づけてしまうことは、想像力が欠如しているとしか言いようがない。個別の事象を考えたときに『虐待』という言葉で語れないことはたくさんある。

～想像力の欠如が及ぼす影響～

想像力の欠如については、やはりメディアの発達も影響していると思う。虐待事件が起きるたびに、マスコミは連日その事件を報道する。そこで議論される内容が『児童相談所の怠慢』『連携不足』『お役所仕事』・・・という枠組みを超えることはない。そこには、【被害児童～加害親～救えなかった行政】という構図が出来上がってしまっている。確かに幼い子どもが亡くなったという時点で、その対応を見直されなければいけない。そして次に同じことがないように改める部分は改めなければいけない。しかし、メディアや世の関心はその部分ではなく、いわゆる責任追及、つまり誰が悪ものなのか・・・という点である。実際に、事件のたびに、著名人がコメントをしているが、やはり、先ほどの枠組みを超えることはない。被害児童への同情や、その怒りをどこかにぶつけるためのコメントである。そうやって糾弾するだけで何が変わったのだろうか。

正直、こうやってコメントをする方の大半は素人だと思っている。当然、現場の

ことを知らないので想像力を働かすこともできない。『虐待』＝『かわいそう』という枠から抜けることが出来ていない。そうするとそこで議論が終わってしまう。それ以上の進展は見られないし、現状を打破することも出来ない。そのことで解決できないことを証明しているだけである。本当に社会を変えようと思うのであれば、糾弾するだけで解決しない現実にはアクションを起こさなければいけない。

本当に、児童虐待の現状を知っている人間は、軽はずみに『かわいそう』とは言えないのではないか。自身には直接、関係のない話なのかも知れないが、明日は我が身なのである。同じことがないように最大限の想像力を働かせ、リスク管理をしながら、対応しなければならない。それは、ただ単にかわいそうと同情したり、行政を批判したりするだけで解決しないことを実感しているからこそである。

『虐待』という言葉は、議論するという責任を回避させてしまう。その言葉をあたかも専門家のように使用することの無責任さを考えなければいけない。

～想像力を補うために～

想像をすることは日常の中から奪われつつあるのかもしれない。例えば、携帯や、スマートフォンの普及により待ち合わせは格段に効率的になった。SNSのメッセージなどを利用すれば、タイムリーに位置情報を送信し合い、待ち合わせ場所で

出会うことが出来る。

携帯がなかったときは、あらかじめ待ち合わせする場所や時間、乗って行く電車、当日の服装などを確認し、もし待ち合わせ場所にいなかったとしても、「電車が遅れたのか?」「体調不良?」「トイレ?」などとあらゆる可能性を想定しながら、場合によっては館内放送や伝言ボードの利用を検討・・・と、とにかく想像力を働かせなければいけなかった。そこでは相手と自分の性格を念頭に置いて、出会えなかったときの行動パターンや、思考パターンも含めて考える必要があった。

今は、せいぜい「既読」がつかないことに対して、トンネルの中?程度しか想像することはないのでないだろうか。

この仕事は対人援助である。人を相手にしている以上、目の前の人のことについて思考を巡らせる必要がある。どういったニーズがあるのか、どんな気持ちで面接に応じたのかなど想像力を働かせる必要がある。ラベルだけで判断することは浅はかである。まずは、目の前の人に『個人』として興味を持たなければならない。「虐待」という言葉は、『個人』を相対化させてしまう。発達障害や不登校、引きこもりなど、『個人』を相対化させてしまう言葉であふれている。その言葉に惑わされず、想像力を働かせる必要があるのではないだろうか。そのように個人として興味を持った時に、新しい関係に展開する。それは、また次回のお話に。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編～

—11歳のゆりの日記—

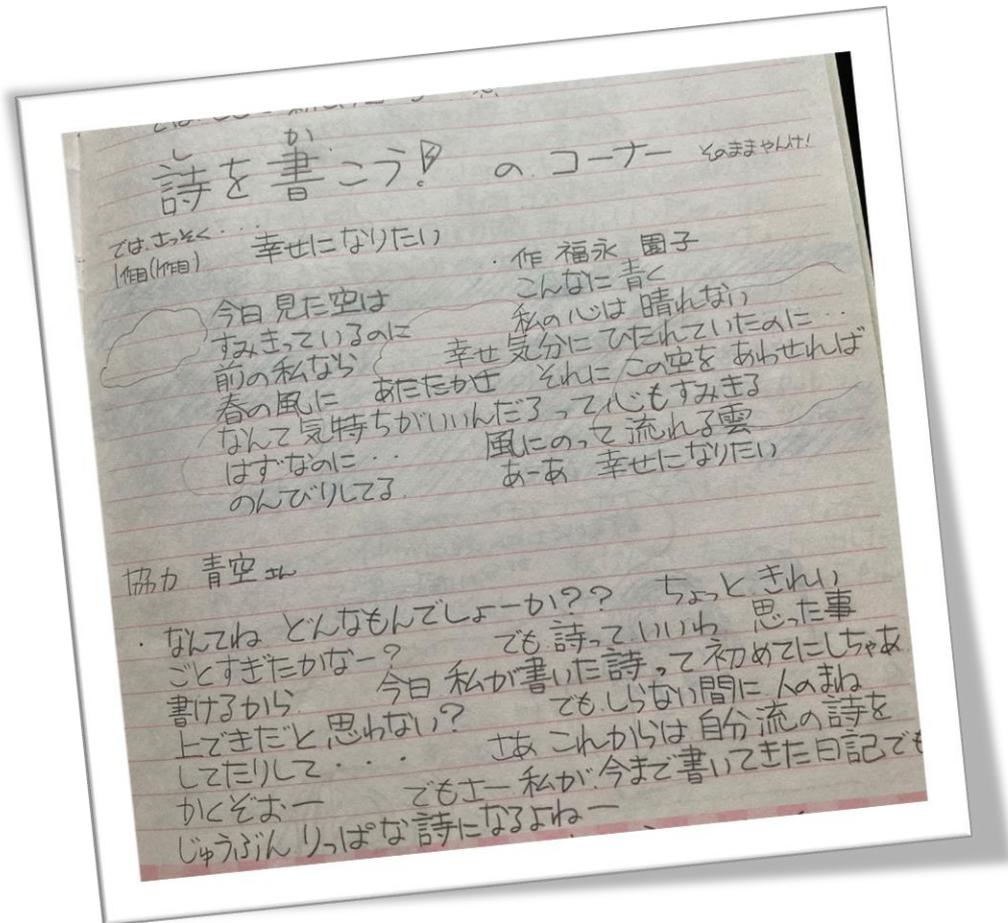


松岡園子

今回は番外編です。

私（連載中の物語に出てくる「ゆり」）が11歳の時に書いていた日記の中から、詩を紹介します（文章を書くのが好きで、詩を書いていました）。

日記や詩を書いていた背景はあるのですが、それはまた別の機会にご紹介します。



2作目(2作目) 本当の幸せ 作 福永 園子

幸せってどんな事だろう
 好きな食べ物を おなかいっぱい 食べられること?
 好きな人と思いが通じ合うこと?
 私の幸せは 気の合う友達と 好きな人と
 楽しくすごせたら そんなで幸せ
 好きな人と両思いになりたい! なんて思わない
 いっしょに楽しい時間をすごせたら
 そんなで幸せ ひとときでも 心から笑えたら
 そんなで幸せ そんなもんだよ

土 2作目かてきてぞーっ どうかなー? 私(福永)かて
 やぱり きんご(と)になっちゃー ても かんぱんは
 (いつか) ... ねー

DATE

詩を書こう! コーナー

土 3作目(1作目) 別れ... として出あい 作 福永 園子

春は 別れ として出あい
 春は 土曜日 想いで いっぱいだけど
 やがて 夏が来る そのころになると
 もう 土曜日は消えて 思い出にかわって
 新しく出あつた 仲間たちは あのころと同じように
 土曜日の思い出を 私と共に 作って行く
 時間はあつという間に すぎ もう今は...
 去年と同じ 別れのまぜつ つかうだけ
 今年の夏は 去年と同じ 思い出にかわつていると思ふから

詩を書こうのコーナー
 11作目(1作目) すなおになてみよう
 2作 福永 園子 ~

すだにワヨクヨ なんじやうのは
 私を悪くさせたな 自分でも
 どれよくして 楽しくやっていたりもいなに...
 心のうらがわって すなおだな 楽しい事は楽しい
 悲しいものは悲しいって言うんだもん
 そうよ もっと すなおにならなくちゃ
 むしとると ぶかに 苦いからぬ
 すなおになてみると もっと 今更知らなかった
 大切な事が見えてくるよ... まじね...

詩を書こうのコーナー <101作目とは記
 11作目(1作目) 私の生き方
 2作 福永 園子 ☺

人から いやな目で見られてもかまわない
 だって これは 私の人生だもん
 人の顔を つかからせてんじや その人に
 人生を 上げなきゃ なんなく なっちゃうよ!
 人それぞれ いろんな 事情とか あるじやない
 それを へんな目で 見れば だんじや
 たまたまもんじやないや 上げよう 上げよう

だから私は 人の目を 気にせずに
 生きていきたい

第 10 回 「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

—— 資産家の跡継ぎ息子の思い ——

一宮茂子

はじめに

生体移植とは、心臓死や脳死による死体移植ではなく、生きている誰か一人が犠牲と負担を全面的に担って、自らの身体にメスをいれて臓器の一部を提供する治療です。欧米では生体移植よりも脳死移植が多くおこなわれています。一方、日本は脳死移植が徐々に増加してきたとはいえ、圧倒的に生体移植が多いのが現状です。生体移植は生体ドナー（臓器を提供する人）が必要です。「誰がドナーになるのか？」という重要な問いには、家族それぞれの事情によって答えが異なる物語が生まれます。

対人援助マガジン第 34 号 337-341 頁の図 1 とその図の解説で紹介しましたように、生体肝移植治療は 22 のファクター、17 のアクター、3 つのタイムが、同時進行で複雑に絡み合って相互作用を及ぼします。そして、その結果は移植にかかわった人たちにポジティブにもネガティブにも影響を及ぼします。今回はこれらのことをふまえて子どもから親へ親子間移植の事例を紹介します。

1 事例紹介

長男である正さん（仮名：20 歳代）は、父親（50 歳代）と母親（50 歳代）、妹（20 歳代）の 4 人家族です。このころは家族全員が職に就いていました。父親は肝臓の病気を患って肝硬変となり、その後、肝細胞がんの再発が数回ありました。その期間は地元病院で定期的な検査や入院治療を受けていましたが、次回再発すれば余命は数ヶ月と地元病院の医師から告知されたのです。そのうえで残された治療法は、(1)何もしないか、(2)肝臓の移植をするか、二者択一しかないと説明を受けました。移植をしなければ父親は亡くなります。移植をすれば父親は 50% の確率で生きながらえる可能性があります。このときの父親の心情はとても複雑であったことが後に分かりました。その詳細は 3.5 節で紹介します。その後の父親は、がんの再発リスクが高くなり、〈腹水〉とって肝臓の機能が悪いため腹腔内に体液が貯まっている状態でした。そのため全身管理と治療をかねて地元病院で 3 ヶ月間にわたって入院しています。その後、生体肝移植目的で Y 病院に転院となるのですが、ドナー決定までに紆余曲折があり時間を要しています。このドナー探しからドナー決定にいたる時間軸における家族の心情は 3 章で、ドナー決定時のドナーの心情は 3.6 節で紹介します。

2 生体肝移植治療の特徴

生体肝移植治療の特徴は、対人援助マガジンで何度も転記してきましたが、重要な内容ですので本稿でも提示します。対人援助マガジン 33 号 352 頁で紹介しましたように、生体肝移植治療には 8 つの特徴があります。それは、(1)代替療法がない、(2)移植をしなければ患者は死亡する、(3)生体ドナーが必須、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となる [安藤 2002]、(5)他者には依頼しにくい、(6)ドナーの負担や犠牲は金銭や時間で分配できない、(7)ドナーは誰かひとりが全面的に担うしかない、(8)時間的制約がある、ということです。

このような生体ドナーを必須とする生体移植は残酷な治療だと思います。かといって何もしなければ患者が亡くなるのは確実です。家族によっては、移植治療があることを知りながら何もしないで弱っていく患者をただ見まもるだけ、という事例もあると思われまます。しかし正さん家族の場合は、移植という有効な治療法があることを知り得たからには、何もしないで見まもるだけという選択肢は考えていなかったのです。この時点のドナーやレシピエント（臓器を受容する人）の心情は次章で紹介いたします。

3 ドナーはどのようにして決まっていくのか？

対人援助マガジン第 34 号 337-341 頁の図 1 やその図の解説で紹介しましたように、患者は「余命告知」を受け、家族は最終的に「生体肝移植」を選択しています。移植を選択した時点で「ドナー決定」となる事例もあれば、家族や親族からドナー探し、いわゆる「ドナー候補者の選定」が始まります。そして「インフォームド・コンセント」を経て「ドナー決定」となる事例が多いのですが、移植治療を勧めた地元病院のかかりつけ医から大まかな説明を受けて、家族内でドナーが決まることもあります。Y 病院では通常、移植術までに「インフォームド・コンセント」が行われます。それは日時を変えて通常 3 回行われ、最終回で正式に「ドナー決定」となります。

3.1 ドナーの倫理的条件

2007 年以降の現在では、親族関係者でない全くの他人でもドナーになれるようになりました [日本移植学会 2014] ^(注1)。しかしそれ以前の Y 病院は、ドナーは誰でもなれるわけではなく移植施設によるドナーの倫理的条件という縛りがありました。当時の正さん家族は、Y 病院の倫理的条件のなかでドナーを選択する必要がありました。具体的には、原則としてレシピエント方の血族 3 親等以内の親族（両親、子ども、きょうだい、おじ、おば、甥、姪）あるいは配偶者でした。ここには姻族（配偶者方の親族）は含まれていません。ドナーとして最も重要なことは、他人に強要されてドナーになるのではなく、自発的な意思で提供を希望する人に限るということは今も昔も変わりません。

^(注1) その際の留意点は、有償提供の回避策、任意性の担保などです。また提供意思が他からの強制ではないことを家族以外の第三者が確認します。「第三者」とは移植に関与していない者で、提供者本人の権利保護の立場にある者で、かつ倫理委員会が指名する精神科医などの複数の者です [日本移植学会 2014]。

父親の立ち位置から見た上記の倫理的条件にあうドナー候補者は、配偶者である妻と子ども、父親のきょうだいでした。正さんは、父親のきょうだいにドナーの相談をしたような語りは見られませんでした。それは次節で述べる医学的条件として、家族全員の血液型が一致していたことと、成人の子どもが 2 人いたことなどから、初めから家族内で解決するつもりだったように見えます。肝臓の一部を提供するドナー手術は大手術であるうえに、ドナーには何のメリットもありません。万が一の事態で死亡する可能性もゼロではありません。だからこそ、親族には依頼しにくい心情であったと思われる。このようなリスクを承知でドナーになるということは、ドナーの自発的意思によって引き受けることがとても重要になります。さらに家族内の問題は家族内で解決したいと考えていたようにも思えます。

3.2 ドナーの医学的条件

医学的条件とは、ドナーとしての適応可否にかんする医学的視点から見た条件です。それは、健康状態、年齢、血液型、体格、感染症の有無、組織適合性などです。ドナーは健康体であることが望ましいのですが、ほかに候補者がいない場合や、移植を強く希望するときには、糖尿病、高血圧、脂肪肝などの持病があったとしても、術前に治療してコントロールされている場合には、ドナーになることもあります。ドナー年齢は、おおむね 60 歳までが望ましいとされていますが個体差が大きいため、一律的に線引きするのは難しいとされています。血液型はレシピエントと一致しているか、適合とよばれる問題の少ない組み合わせが望ましいのですが^(注2)、血液型が全く異なる不適合移植でも可能です^(注3)。この場合、移植後の超急性の拒絶反応が起こる可能性があります。その拒絶反応を抑えるために大量の免疫抑制剤を使用することから感染症を合併しやすいといわれています。感染症として B 型肝炎、C 型肝炎、梅毒、HIV（エイズ）などの感染者は、原則的にはドナー不適応とされています [江川・上本 2007]。

ドナーの肝臓は、画像診断 (CT 検査) によりその大きさが予め把握できるとされており、成人間移植の場合は、患者と同じくらいの体格の人が提供すると、移植肝臓の大きさとしては適しているとされています [田中監修, 2004: 9]。

このような医学的条件を正さんの事例に反映すると次のようになります。(1) ドナー年齢は母親 50 歳代、長男である正さん 20 歳代、妹 20 歳代のため問題なくクリアします。しかし、(2) 母親には不整脈があり、体格差から提供する肝臓が父親には小さかったことと、血管が細くてつなぎにくかったためドナー不適応となりました。この事例では医学的条件だけでドナーが決まったわけではありません。その他の候補者は長男である正さんと妹となりますが、後述の 3.3 節ジェンダー規範によって父親や正さんは、ドナー候補者から妹を除外

(注2) 血液型適合移植とは、問題の少ない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーの血液型が O 型→レシピエントの血液型が A/B/AB 型、A/B/O 型→AB 型の移植です。

(注3) 血液型不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーからレシピエントへの血液型が A/B/AB 型→O 型、A 型→B 型、B 型→A 型、AB 型→A/B/O 型の移植です。近年の血液型不適合移植は、その後の進歩により経験をつんだ施設での成人症例の成功率が 80%にたっているため禁忌にはならないとされています [江川・上本 2007]。

していたのです。その結果、(3)長男である正さんに決まった、ということになります。ただし正さんがドナーを引き受けるにあたって、自分自身が納得できる裏付けがありました。その詳細は 3.6 節で紹介します。

3.3 ジェンダー規範

ドナーには倫理的条件や医学的条件以外にも規範があります。それは対人援助マガジン第 37 号 235 頁で紹介しましたようにジェンダー規範と家族規範（3.4 節を参照）を指しています。

ジェンダー規範とは、江原由美子 [2001] の「ジェンダー秩序」の論考を参考にして定義しました。「ジェンダー秩序」には、「状況」や「社会的場面」のいかんを問わず、「性別カテゴリー」と一定の「行動」「活動」を結びつけるパターンがあります。その秩序の成立は「性別分業」と「異性愛」からなります。「性別分業」とは「男は活動の主体」、「女は他者の活動を手助けする存在」という位置づけです。「異性愛」とは「男は性的欲望の主体」、「女は性的欲望の対象」として両性間の非対照的な力が重要な構造特性をもつと述べています。この説明を参考に、ジェンダー規範とは、女性は他者のサポート役、男性は活動主体であり、女性を性的対象とするような権力があることを指しています。具体的には 3.6 節の長男である正さんの心情に現れていますのでごらんください。

3.4 家族規範

家族規範とは、家族としての責任を意味しており、家庭内の地位、就労の有無、収入の有無、ライフステージ、続柄などがかかわっています。さらに家族規範には優先順位があり、出生の順位、親等関係上の近さ、傍系より直系家族が優先するという順位があります。3.6 節の長男である正さんの心情に現れていますのでごらんください。

3.5 生と死のはざままで揺れ動く父親の心情

対人援助マガジン第 37 号 251-263 頁の事例では、生きながらえるための究極の選択肢として生体肝移植の話が浮上したとき、母親がその場でドナーを決断した事例を紹介しました。3.1 節のドナーの倫理的条件で紹介しましたように、今も昔もドナーとして最も重要なことは、他人に強要されてドナーになるのではなく、自発的な意思で臓器提供を希望する人に限るといことです。その結果、今回の事例はドナー決定までに日数を要しました（4 章を参照）。

父親は 50 歳代と若く、現役で働いていました。まだまだ生き永らえたい心情は自ら生体肝移植を希望したことからもうかがえます。しかしドナーの意思表示をしてくれる人がいないことには生体肝移植の手術は受けられません。そのため父親は自分が移植を受けられず亡くなるかもしれないときのことも考えて、葬式の準備、遺影写真の用意、参列者にたいする挨拶の文面などを用意していたのです。正さんの家族全員がこのような父親の振る舞いを見て知っていたのです。

さらに、もしかしてドナーの意思表示がなくて Y 病院で生体肝移植が受けられない場合も考慮して、海外で脳死肝移植を受けることも考えていたのです。具体的には T 大学を通じてアメリカのシカゴまたはダラスで肝臓移植を受けられるように手はずを整えてアポイントを取っていたのです。このような手はずが可能であったのは、正さんの父親は資産家であったことから、土地を売れば容易に高額の手術費用や渡航費用の用立てが可能であったためです。

3.6 長男である正さんの心情

3.2 節のドナーの医学的条件ですでに述べましたが、父親のドナー候補者は、母親と長男の正さん、妹の 3 人となります。生体肝移植は当初から母親がドナーになる予定でドナー検査を受けました。その結果、母親には不正脈があり、血管が細くて縫合しにくいことと、提供可能な肝臓の大きさが父親には小さかったことからドナー不適応となりました。妹は正さんよりも 3 歳年下で未婚でした。父親は「女の子の身体は傷つけない」と考えていて、正さんも未婚ですが、「妹は若い…まだ結婚もしていない」と同様の思いを語っています。そのため兄であり長男である正さんがドナーになる方向で話が進んだそうです。

当時の移植外科の医師たちは、男性が殆どであったことからジェンダー規範として「嫁入り前の娘は傷つけない」という思いが医師自身にもあったようで、実際にインフォームド・コンセントの席上で医師自身が発言していたのをその場に同席した私は何度か聞きました。ドナー候補者が娘しかいない場合はこのような選択肢はありませんが、この事例では長男であり兄である正さんがいます。結果としてドナーは正さんに決まってしまうのですが、このような流れでドナーが決まってしまうのは、ジェンダー規範から見たドナー探しといえます。しかし、この規範と医学的条件でドナーが正さんに決まったわけではなかったのです。

正さんは資産家である父親の跡継ぎ息子であることを意識して次のように語っています。

正さん：「家柄的に土地もいっぱい持っている…それ以外にも土地を貸している…（不動産が）親父から僕に受け継がれていない…どっかに書類（遺書）とか用意していると思うけど…代の切り替えはスムーズにしたい…（そのため）いま親父に死なれるとまずい…。」

このような正さんの心情は、3.3 節のジェンダー規範と 3.4 節の家族規範が重複して作用していることがわかります。

さらに対人援助マガジン第 33 号 348 頁で紹介しましたように「肝臓は切っても元に戻る」という臓器特異性があります。正さんは「肝臓が元に戻らなかつたら絶対しない」との語りから、正さん自身が納得してドナーになる決断に大きな影響を及ぼしたと考えられます。この臓器特異性の詳細は次章で紹介します。

さらに正さんは年齢的に 20 歳代と若いため、ドナー手術後に「今の仕事（自動車の整備士）を続けられなくてもなんとかなるだろう」という気持ちもあったのです。このように淡々とした語りから、父親が生と死のはざままで心が揺れ動いている心情を知るにつけ、長男

である正さんは冷静に自分のおかれた状況や立場を理解したうえでドナーの決断をしていたことがわかります。

以上述べてきた倫理的条件、医学的条件、ジェンダー規範、家族規範、肝臓の臓器特異性をふまえて俯瞰すると、長男である正さんがドナーになるべくしてドナーに決まっていたことがわかります。

4 インフォームド・コンセント

インフォームド・コンセントの概要は対人援助マガジン第 36 号 294 頁を参照してください。さらに具体的な内容は対人援助マガジン第 37 号 254-255 頁を参照してください。ここでは正さんの語りからインフォームド・コンセントの受けとめかたを見ていきます。

正さん家族は移植術までにインフォームド・コンセントを 3 回受けています。1 回目ときは母親がドナーになる予定で家族 4 人と叔父（父親の弟）が同席して移植外科の医師から説明を受けています。その時点で正さんは、それまで知らなかった肝臓の臓器特異性の知識を得たと思われます。説明後にドナー予定の母親が同意書にサインをしたのですが、ドナーの 2 番手として正さんもサインをしたそうです。そのときの正さんの心情は「まさか自分のところまで（まわって）くるはずはないだろうと…軽い気持ち」でサインをしたことを語っています。ドナー検査の結果は 3.2 節で紹介しましたように母親は医学的にドナー不適合となりました。正さんは当時をふり返って「母親がダメなときは自分でいかなしゃあない」とも思っていたのです。そしてドナーの立ち位置からみたインフォームド・コンセントを次のように語っています。

正さん：「説明内容の理解はなんとなくたぶんしました…リスクとそのへんのところも理解できてたんで、そういう内容が 3 回くらいに分けてというのは確か自分の中の記憶にある…3 回目の説明の時は…真剣には聞いていなかった。」

医学的専門知と移植手術の経験が豊富な移植外科の医師がインフォームド・コンセントで説明する内容は、いくらわかりやすく説明したとしても、素人である患者や家族にとっては高度で複雑で難解であるということは先行研究で明らかになっています [一宮 2016]。

患者を救命するには移植以外に選択肢がないという情報を得て、生体肝移植を選択したからには、家族は医師の説明内容が十分理解できなかったとしても、移植外科の医師に手術をゆだねざるを得ない状況でした。そのため正さんは「なんとなくわかった」状態でドナー手術を受けることに同意したように思えます。

そして、正さんの語りからインフォームド・コンセントでとくに記憶に残っていた情報は、3.6 節で紹介しました肝臓の臓器特異性と、ドナー手術後から社会復帰するまでの期間だったことがわかりました。正さんは「肝臓を切っても元に戻らなかつたら絶対しない」と強調した語りを繰り返し語っていたことから、この臓器特異性がドナー決断の大きな要因になっていたことは確かなようです。

肝臓の臓器特異性とは、インフォームド・コンセントで必ず説明される項目のひとつです。

その内容は、正常な肝臓は一部を切除しても生体の求めに応じて再生し、十分になれば再生が止まるということを示しています。したがって、その一部をとり出して人に移植すれば生着した肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していきます。もちろんドナーの肝臓はほぼ以前の大きさまで再生することを意味していません [田中ほか 1992]。

またドナーの社会復帰までの期間は通常 1-3 ヶ月間の場合が多いのですが、術後合併症の有無や業務内容、仕事上の地位などによって個人差があります。正さんは自動車の整備士という仕事柄、タイヤなど重いものを持ち上げる必要があるため休養期間は 6 ヶ月間と説明を受けていました。具体的には「ウエイトリフティングしている人が退院した翌日にバーベルを持ち上げたら縫っていた腹筋が切れた」という実話から、正さんは「半年以上は（傷を）かばっていく」必要があることを理解したのです。そのため正さんは自分自身がドナーを決断する心の準備だけではなく、会社の上司と相談して 6 ヶ月間の休養許可をえないとドナーの意思表示はできなかつたのです。このような事情からドナーを決断するまでの期間は「2 週間から 1 ヶ月未満」を必要としたと語っています。その間の父親は、3.5 節で紹介したように、生と死のはざままで心が揺れ動いていたのです。

5 移植後の回復状態

手術前のドナーとレシピエントは手術室まで歩いて行きました。手術後のドナーはストレッチャーで病棟へ搬送され収容されています。一方、術後のレシピエントは ICU へ数日間収容されて全身状態の管理、処置、ケアを受けています。

現代では成人間のドナーの肝臓提供は、ドナーの負担を考えて右葉より小さい左葉の肝臓を提供するようになってきているようです。しかし、正さんの場合は当時、成人間で行われていた移植と同様に、対人援助マガジン第 33 号 348 頁の図 1 に提示していますように、ドナーの肝臓切除は肝臓全体の 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植が行われていました。ただしレシピエントが小児の場合の肝臓移植は肝臓全体の 3 分の 1 にあたる左葉を切除して移植が行われることを附記しておきます。ドナーの負担は、小児事例の左葉肝提供よりも、成人事例の右葉肝提供のほうが身体的にも精神的にも社会的にも圧倒的に負担が大きいと言えます。

5.1 順調に経過したドナーの術後

通常、ドナーは手術前日に入院して、翌日にドナー手術を受け、術後 2 週間で退院となります。そのため入院期間は合計 15 日間となります。正さんの入院期間は 17 日間ですが、術前に γ GTP (ガンマジーティーピー) というタンパク質を分解する酵素の一種の数値が高かったのですが、術後の肝機能はとくに異常はみられず、術後経過は順調だったといえます。

インタビューは移植術後、数年経過して行ったのですが、その時点で明らかになったことは、正さんは縦に切開された傷跡がケロイドになっていたことでした。このケロイドは「汗

をかくと痒い」症状をもたらしていました。これは術後合併症のひとつといえます。

正さんはドナー手術の 4 年前から原因不明のケロイドが胸部、背部にあり、今回はあらたに腹部のドナー手術の傷跡がケロイドになったのです。正さんはそのことについて「別にエエかなって思う」と言いながら「ちょっとイヤかな」と矛盾する心情を語っていることから、やはり気にしていたことがうかがえます。さらに正さんは、日本では外見を気にする人が多くいて、ケロイドの傷跡を見られているような視線を感じたことがあったそうです。しかし、米国や豪州では周囲の人たちは、ほとんど気にとめることはなかったと語っています。

インタビューで明らかになった傷跡のケロイドは、Y 病院で日帰り手術で治療可能なことを伝えると正さんは「是非そうしたい」という意向でした。そのため Y 病院の形成外科を紹介しました。その結果、ドレゾニンテープ（合成副腎皮質ホルモン剤で、抗炎症作用があり、皮膚の炎症を抑える作用があります）を貼付して保存的治療をおこない、反応性が悪ければ、切除したうえで放射線治療が望ましいと説明を受けています。しかし、その後は遠方に居住しているため地元病院で治療しているのか否か、その後の情報は得ておらず、詳細は不明です。

5.2 順調に経過したレシピエントの術後

レシピエントの父親は、18 時間におよぶ移植手術を受けたあとは、直接 ICU（集中治療室）に収容されて数日間の全身管理を受けています。そして移植された肝臓の状況を確認しながら濃厚な術後管理や処置やケアを受けています。手術後はたくさんのチューブやドレーンが身体とつながっていますが、どれも全身状態を知るために大切な命綱です [田中監修 2004: 26]。

ICU で目覚めた父親は、自分のベッド周囲に家族や親族、車いすに乗ったドナーである正さんの姿を見て、思わず感極まって大声を出して泣いたそうです。そして今、生きているのは息子から〈いのちの贈りもの〉をもらったおかげだと感謝していたのです。

その後の父親は病棟の個室に収容されました。レシピエントの身体に挿入されていた 10 本ほどのドレーンやチューブは毎日数本ずつ抜去されて術後 10 日目には全てのドレーンやチューブ、点滴も抜去されたということです。

その後は日にち薬で元気をとりもどし、拒絶反応や感染症、術後合併症もなく順調に経過し、術後 4 週間で退院となりました。父親自身は手術前に地元病院で数ヶ月にわたる入院療養によって体力が温存されていたことから、このような大手術に耐えられたのだと考えていたようです。

6 さまざまな支援——人的／心理的／社会的支援

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者や家族に大きな負担や不安をもたらします。そのため移植前から移植後、移植後 1 年以上から終末期の時間軸において様々な支援が必要となります。そ

の支援内容は、対人援助マガジン第 34 号で紹介しましたように、医療的支援、心理的支援、人的支援、経済的支援、社会的支援、代替療法（宗教など）があります。正さんの事例でもこれらの支援は受けていたと思われませんが、語りから得られた支援は、人的支援、心理的支援、社会的支援でしたので以下に紹介します。

6.1 家族による人的支援——安心感

人的支援とはもちろん文字どおり人力による支援ですが、もうひとつ大事なことが含意されています。具体的には家族が患者に付添うことは精神的な安寧をもたらす効果が大きいため、人的支援という行為のなかに心理的支援が含まれていることです。誰かが患者のそばに付添って見守るということは、患者と同じ時間と空間をともにするということであり、このこと自体が患者の心理的支援につながります。また付添っている本人も患者の状態を自ら確認することができることと、患者の心理的安寧になること、異常な徴候がみられた場合には医療者に速やかな連絡が可能というメリットもあります。しかし付添うデメリットとして身体的負担感、病室という狭い空間に居続けるという閉塞感、日常生活が制約される不自由感のほかに、ドナーによってはレシピエントに辛い思いをさせている負債感などをともないます。

移植前の父親は地元病院に入院していましたが、移植術の 2 週間前に Y 病院へ転院しました。そして術前検査のため、循環器科、消化器内科、口腔外科、眼科、耳鼻咽喉科などでさまざまな検査を受けています。移植後 4 週間で退院できるまで回復したのは、地元病院で数ヶ月療養したことと家族のサポートも大きかったと思われま

す。Y 病院では遠方から入院する患者、家族のために近隣の宿泊所を紹介することもあります。正さん家族の母親や妹は Y 病院の近くのホテルに滞在し、約 2 ヶ月間ほど付添っていたのです。会社員である母親は休暇をとっての付添、妹はたまたま仕事をしていない期間であり、家族 4 人が Y 病院に集まって、ドナーとレシピエントの術後経過の見守りや世話をしていたこととなります。幸いに 2 人とも術後経過が順調であったことから付添った家族は、前述の付添うデメリットをそれほど意識せずに過ごせたのではないかと思われま

6.2 周囲の人たちから心理的支援——親孝行として賞賛

正さんは、地元では周囲の人たちから「親孝行とよく言われる」と語っています。しかし、自らは「親孝行したとは思っていない」とも語っています。その理由は「肝臓を切ったら元に戻るんで、金さえあればできる」という正さんなりの考えから得た語りです。しかしながらドナーになったことの意味づけや犠牲や負担を一人で担う重みは、そのような簡単な言葉ではすくいきれないはずで

100%安全な手術はありません。もしかしたら何らかの合併症が残るかも知れないドナー手術です。傷の痛みも伴います。それでもドナーになってかけがえのない父親の命を救った行為自体に周囲の人たちは尊敬と敬意の念をこめて「親孝行」と賞賛したと思われま

す。一方、私が見聞きした他のドナーの経験は、たとえ家族であってもドナーになることを明

確に拒否した人もいました。拒否する権利は誰にもありますが、立場によってはむづかしい場合もあります。たとえばわが子のドナーになることを拒否したくてもできない親がいるのも事実です。その一方で、複雑な家族関係のなかで患者や家族から懇願されて「イヤ」と言えずにドナーになった人もいます。そのドナーは移植後に患者や家族から労いや感謝の言葉すら受けていません。そのようなことも影響してドナーは術後に長期間にわたってうつ状態となった事例もあります。

万が一の事態も考えると、ドナー手術は命がけの勇気ある行為であり、その行為にたいしてレシピエントは労いや感謝の言葉をドナーに直接伝えてほしいと思います。それによってドナー自身が、家族にとって大切なことを成し遂げたというポジティブな意味づけが得られるのですから。

正さんは、移植が成功して父親は生存しています。そして周囲からポジティブな言葉をかけてもらっています。移植による傷跡はケロイド状になりましたが、ドナーになったことにたいしてネガティブな語りはひと言もなかったことを附記しておきます。

6.3 会社から社会的支援／社会復帰——休養期間の短縮

正さんの会社は長期休暇をとると、2ヶ月目までの給与は保障されますが、以後は無給となる仕組みだったのです。20歳代男性で未婚である正さんは、移植術後3ヶ月目には無給になり、当然ボーナスは減額になったそうです。術後休養期間は6ヶ月ですが、給料が入ってこなくなったことが「厳しかった」と語っています。父親からは小遣い程度はもらっていたとも語っていますが、父親は自分自身のことです。「手術前も頭がいっぱいで、手術後も頭がいっぱい」の状態であったことから、正さんは無給になったことまでは父親には話していませんでした。このことは父親にこれ以上、心配をかけたくないという正さんなりの気遣いと受け止められます。また長期休養期間中に体重が増えたことを「精神的によくない」と受け止めています。そのため正さんが選択した解決策は、休養期間を6ヶ月ではなく、5ヶ月にしてもらって、1ヶ月早く職場復帰することだったのです。これには会社側の配慮もありました。職場復帰した最初の1-2週間は仕事内容を従来よりも軽くしてもらって徐々に身体を慣らしていったのです。現在はコロナウイルスの世界的な感染拡大で解雇されている人が多数いますが、正さんは現在のような社会状況ではなかったため、元いた職場に復帰できたことは幸いでした。

7 医療的フォロー体制

退院後のレシピエントは原則として免疫抑制剤を生涯にわたって内服する必要があるため定期的な外来通院が必要です。父親は地元病院とY病院の連携のもと外来通院をしています。外来では血液検査やエコー検査などをおこなって、その結果をもとに免疫抑制剤を微調整していきます。その後の免疫抑制剤は肝機能に異常がなければ術後経過年数とともに徐々に減量されていきます。

ドナーの医療的フォロー体制として Y 病院にはドナー外来があります。ドナーも年 1 回は定期健診が必要です。正さんは術前検査で γ GTP（ガンマジーティーピー）というタンパク質を分解する酵素の一種の数値が高かったため Y 病院に来院してその後のフォローを受けています。遠方に居住している場合は、地元病院や職場で健康診断を受けることを勧めています。

8 関係性の変容

はじめにで紹介しましたように生体肝移植治療は 22 のファクター、17 のアクター、3 つのタイムが、同時進行で複雑に絡み合っただけで相互作用を及ぼします。その結果、今回の事例ではサクセスストーリーとして帰結していますが、最も大きなファクターは家族間の関係性の変容といえます。またレシピエントである父親は健康を取り戻したことで、地域活動に貢献するような変容が見られましたので以下に紹介します。

8.1 家族間の関係性の変容

資産家の跡継ぎ息子である正さんは、移植前は家督相続が未完成であったことから、父親を救命するという家族規範や、肝臓は一部切除しても再生するという臓器特異性などから自分なりに納得してドナーを引き受けました。その結果、移植は成功してドナーもレシピエントも健康を取り戻し、元の生活に戻ることができました。

その後の正さんは結婚して 2 児の父親となりました。数年後、レシピエントである父親は、同じ敷地内に正さん家族の新居をたてています。このことは命を救ってくれた正さんにたいする父親なりの感謝の現れともいえます。そして週末には正さん家族が両親宅へ泊まりに行くという家族間の交流は、ドナーとレシピエントに幸福感をもたらした家族変容になっていたのです。

8.2 レシピエントのボランティア活動

健康状態が回復したレシピエントである父親は、定年退職後には農業や家庭菜園をしながら、青少年補導センター補導員として、子どもたちの非行防止や健全育成に努めています。写真撮影が趣味である父親は、写真日記のように日々の出来事をつづっていて、毎年、詳細な活動の様子を知らせてくれています。移植前と移植後に、あれほど自分のことで頭がいっぱいであった父親が健康を回復して元の生活にもどれたことが心に余裕をもたらし、ボランティア活動に取り組む契機になったと思われます。

ボランティア活動は個人の自発的な意思に基づく自主的な活動であり、活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会においてはその活動の広がりによって、社会貢献、福祉活動等への関心が高まり、様々な構成員がともに支え合い、交流する地域社会づくりが進むなど、大きな意義を持っています [厚生労働省 HP]。父親はこのような活動をとおして自分の存在意義を確認しているように思えます。

8.3 レシピエントのドナーにたいする負債意識

レシピエントの父親は手術前も手術後も自分自身のことで精神的な余裕がなかったようです。それはドナーの傷跡がケロイド状になったことや、ドナーの休養期間が 6 ヶ月（実際にはドナーの意向で 5 ヶ月に短縮）と長く、給料が 2 ヶ月までしか出なかったことは知らなかったことがインタビューを通してわかりました。その一部を父親にお知らせしたとき、次のようなお返事をいただきました。

父親：「息子はケロイドのことも、なにも、自分（父親）には言わない…自分の傷跡はきれいなのに、息子は元気でドナーとなったばかりにケロイドができた。これが反対やったらよかったのにとおもいます。親としては、なんとしても治してやりたい。」

6.3 節でも述べましたが、術前も術後も自分のことで精一杯であった父親に、これ以上の心配をかけたくないという正さんなりの気遣いによって、父親には話さなかったように思えます。通常、レシピエントはドナーにたいして負債意識があると言われていています。対人援助マガジン第 37 号の事例では、母親から長男への移植でした。移植後の長男は母親の体調が悪いときは気にかけて「大丈夫？」と声をかけてくると語っています。正さんの父親も同様に正さんにたいする負債意識はもっていたと思われる。そのエビデンスとして、健康を回復した父親は、感謝やお礼の意味づけで四国八十八箇所の巡礼をしています。さらに結婚して父親となった正さん家族に新築の家を建てています。このような行為は正さんにたいする父親の負債意識の裏側にある感謝や愛情の表現のように思えます。

8.4 ドナーの他者評価は「親孝行」

6.2 節で紹介しましたように、正さんは地元では周囲の人たちから「親孝行とよく言われる」と語っています。別のドナーは移植後 5 年以上経過した職場で「ヒーロー扱いされている」と語っています。さらには「村の人気者になった」と語るドナーもいます。生体肝移植が普及したとはいえ 1989 年から始まった日本の生体肝移植件数は年間累計で 9,136 例です [日本移植学会 2019]。ドナー自身がこのように賞賛され注目をあびることは、日本の総人口が約 1 億 2 千万人からすると、ほんのわずかであるため身近に生体肝移植を経験したドナーは少なく、珍しいことが背景にあることと、わが身を犠牲にして家族の命を救ったドナーの行為自体が崇高で意味のある行為として他者に受け止められているのだと思います。

こうした近隣地域住民や職場の人たちからの賞賛は、移植が成功してレシピエントが生存しているからこそ公に言えるのであって、ドナーもレシピエントも何らかのトラブルで元の日常生活にもどることができない、あるいはドナーやレシピエントが亡くなる事態になれば、このような心情表現はむづかしいと思われます。

おわりに

この事例は生体肝移植の成功事例であり、レシピエントもドナーも順調な経過をたどり社会復帰に成功しています。インタビューは移植後数年以上経た時点で行いました。そのため詳細な内容は記憶されていなくても、家督相続者である長男がドナーとなり、資産家のレシピエントである父親の救命に成功しました。その結果、多くの事例で問題となる「ドナー決定過程」や、「関与者との関係性の変容」のファクターについてドナーの意味づけがポジティブに語られていました。その後のドナーは、移植前の懸案事項であった遺産相続の問題は、結婚して家族をもち、両親と同じ敷地内で幸せに暮らしていることから、何らかの形で帰結したと思われます。こうしたサクセスストーリーは、移植医療にかかわった医療関係者のひとりとして安堵するとともに嬉しく思います。

9 文 献

- 安藤泰至, 2002, 「臓器提供とはいかなる行為か?—その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167.
- 江川裕人・上本伸二, 2007, 「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.
- 一宮茂子, 2016, 『移植と家族—生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- 田中紘一・間中大・田野龍介ほか, 1992, 「生体肝移植の現況」『外科診療』34(7): 895-901.
- 田中紘一監修, 江川裕人・高田泰次ほか, 2004, 『いのちの贈りもの 肝臓移植のためのガイドブック』, 京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部.

10 オンライン文献

- 厚生労働省, 「ボランティア活動」
(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html, 2020.8.23 確認)
- 日本移植学会, 2014, 「日本移植学会倫理指針」
(http://www.asas.or.jp/jst/pdf/info_20120920.pdf, 2020.8.23 確認).
- 日本移植学会, 「2019 臓器移植ファクトブック」
(<http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2019.pdf>, 2020.8.23 確認).

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第7回

私の日常⑤ 漂えど沈まず

新型コロナウイルス流行から生まれたマスク文化のなかで

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

新型コロナウイルスが流行りマスクをすることが、必須、マナーとなりました。自他ともマスクをすることになり、聞こえにくくて見えにくい盲ろう者としての日常も変化しました。緊急事態宣言中も、その前後も変わらず通勤をしているため、生活のリズムの変化はないのですが、お互いの命を守るためのマスクの存在は、私にとっては移動時もコミュニケーション時も、思った以上に影響が大きいです。影響を受けたことを、少しだけでも文学にすることを試みましたが、できませんでした。日々、「今」に対する判断を考えることが精一杯で、その出来事を整理して書くという事まで広げることができませんでした。

第41号執筆者@短信 中條與子（一部抜粋）

はじめに

前号は「第41号執筆者@短信」に、

と書いて、休載させていただいた。

今号は、新型コロナウイルスによる影響について書くつも

りでしたが、あっという間に3ヶ月が過ぎて、締切日がきた。

鼻と口を覆うマスクに影響を受けていることを書きたいと思っても、いまを生きるのが精一杯で、言葉を通して客観的に向き合うエネルギーは、残っていないと思った。今回も休載しようと思った。

お世話になっている方に、思いがけず励ましていただき、単純な私の考えが変化した。休載をして、きちんと整理して書くことが必要だと思っていたが、いま書くことも大事なような気がした。

マスクへの捉え方に対して、前号から変化した自分自身を感じて、3か月後の次号は、今とは違う感じ方の自分があるかもしれないと思ったからだ。(変化していない可能性もある)

現在も新型コロナウイルスから自他とも身を守るためにマスクが必須である状況に変化はないが、流行から生まれたマスク文化のなかで、私自身がすこし変化したことを、簡単に書きたい。言葉足らずで支離滅裂な部分もあるかと思うが、お許しいただきたい。

マスクをつけての移動について

春ごろ、マスクをつけて始めの移動の際、足が止まった。足元が見えなくて、怖かったのだ。外を歩く時、階段を使用する時、電車の乗り降りの時、目の前は見えるけれど、足が勝手に立ちすくむ。

私の視野の欠け方は、真ん中が残る求心性視野狭窄なので、姿勢を正してまっすぐ立つと視線の先は見えるが、足元が見えない。マスクをすると、更に見える範囲が少なくなり、足元、下半身が存在していないような錯覚に陥る。

この夏、気づいたらマスクをして外を歩くこと、階段を使用すること、電車の乗り降り等にも慣れていくことに気づいた。カフェで、マスクをつけながら、コーヒーを自席まで運ぶことができる

ようになったことに、自画自賛した。環境適応している自分が、面白かった。

マスクをしての見え方が、春から夏にかけて変化した。視野が回復したとは思えない。視細胞が存在する部分の視野は見えて、視細胞が細胞死した部分の視野は欠ける。加齢と疾患により視細胞の減少はあっても増加はないはずだ。

きっと見え方が変化した理由は、マスクをして移動をする必要性に迫られたおかげで、眼球の筋トレになり、眼球の下方への可動範囲が広がったことが考えられる。眼球の動きを支える筋肉が、変化したおかげだと思う。

マスクをつけての会話について

春ごろ、マスクでの会話が必要になり、お手上げな気持ちになった。

小学校の頃「きこえの教室」というところで読唇術の教育を受けた。口元の動きを見て、聞こえる音声をききながら会話をしてきた。

相手との会話では、マスクで口元が見えなくなると、聞こえる音声だけが頼りになる。しかし、耳に届く語音もマスク繊維の影響を受けているのか、聞こえ方が違う。

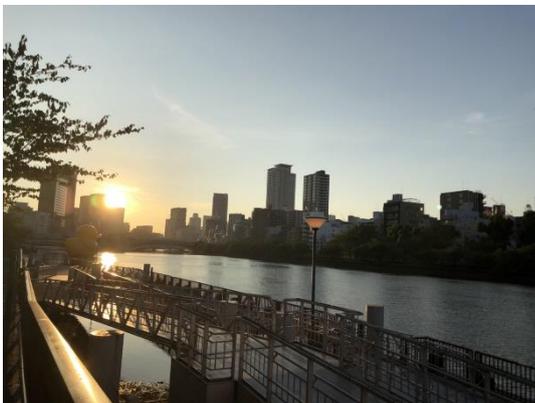
私は感音性難聴のため、高音域が聞こえにくい。言葉の聞きとりにも影響を受ける。母音は低音域が多いため聞きとりやすく、子音は高音域のため聞こえにくい。私の言葉のとらえ方は、母音と聞こえてくる語音をメロディのように聞いて、子音を想像して、言葉を聞き取っていた。

マスクをした相手からは、経験のない語音が聞こえてくる。または、届く音が少ない。私の想像だが、マスクの中で母音と子音が分解した後、繊維を通り抜け、母音と子音の各々に繊維がからまって包まれているのではないかと思うくらい、経験のない語音に聞こえる。わかりにくい説明で申し訳ない。簡単にいうと、マスク(布・紙)を通過した言葉は、わからない事が多いのである。

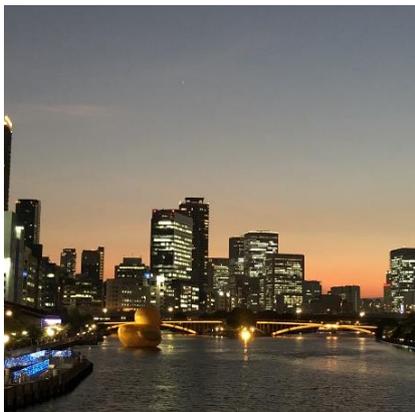
ある朝、人間の手で手当てを受けている場面に



出会った。高湿気と強い太陽光と水面からの反射光、人工的な光にも当て続けられていたはずだ。



私は網膜疾患のため、太陽や光に対して眩しく感じる、羞明という症状がある。ラバーダッグを見に行く時、朝、昼、夜の多くの時間が、眩しく感じていた。



酷暑の一か月間、ラバーダッグは「漂えぞ沈まず」に大川の上に浮き続けていた。

私も暗かったり、眩しかったり、見えにくいこ

とが多かったが、多少見えなくても、この部分は歩道があるとか、私の顔の位置に葉っぱが伸びているとか、柵があって安全だとか、位置を覚える程度には通ってしまった。



ラバーダッグが世界へ、ふたたび旅立つ日の朝、空は天高く秋を感じさせる雲が流れていた。



ラバーダッグの背中（オシリ）を見て、一か月、いろいろと教わった気がした。

マスク文化になっただけで、私は会話でも移動でも、経験のない影響を受けて漂い続けている。しかし、沈まずにいれば、蒸し暑いとしか感じなかった場所でも、涼しく、天高く秋を感じさせる景色に出会えたように、いままでとは違う感覚や景色に出会える瞬間があるかもしれないと思った。

まちの保健室

脇野 千恵

性教育元年！

M先生との様々な人権学習は、私のその後の教育実践に大きな影響を与えました。

今から35年以上前、臨時講師という立場は、勤務上も教諭と大きな格差がありました。小学校では、教諭と変わらず担任をしなければなりません。しかし、教員のための研修に参加させてもらえないこともあり、自分で学び場を見つけるしかありませんでした。性教育に限らず、週末には自身の時間とお金を使って研修に明け暮れたものです。

本格的に性教育を学びきっかけになったのが、1992年(平成4年)に学習指導要領が改訂されたことでした。「性に関する指導」として、小学校5年生用に「保健」の教科書ができ、「初経」や「精通」が登場しました。また理科では「ヒトの誕生」が入ったのです。性に関する具体的な指導が盛り込まれたことで、その年は「性教育元年」と呼ばれました。

指導要領の逸脱と言って随分非難されたけれど、この改訂は性教育実践の後押しをしてくれるものでした。

そして保健に関する指導は、主に養護教諭の担当ですが、指導要領の改訂によって、性教育を学級担任がしなければならなくなったのです。

一方で、当時はエイズ(後天性免疫不全症候群)に対して「正しい知識を持とう」という政府からの宣伝が展開されていました。「エイズ教育」(教育ではないのですが…)が学校の研究授業として公開されるなど、性教育を推進する者にとっては、堂々と実践できる良いチャンスとなりました。

次の転勤先で、「性教育を一緒に取り組んでもいいよ」と言ってくれる教諭のT先生がいました。

その学校も、性教育のカリキュラムが曖昧でした。私たちは職員に理解をしてもらう前に、自身が性教育についてちゃんとした知識を身につけたいと思っていました。

その頃私たちは、朝日新聞社が性教育やエイズ問題について取材したものを26回にわたって連載していた記事を読んでいました。スウェーデンの性教育を紹介し、日本の性教育の実態なども掲載していました。その中に、1980年ごろから日本での性教育の必要性について提言していたスペシャリスト、山本直英さんの講演会の告知がありました。

T先生は、

「新聞の記事見た？この人の講演会に行こうや！」

と声をかけてくれました。

大阪での講演会でしたが、このことがきっかけで、私は性教育にすっかり魅せられてしまい、以降性教育漬けになっていきました。

講演の内容は目から鱗でした。それまでM先生と格闘していた命の学習は、間違っていなかったと確信したものです。



その会場で出会ったのが、新聞の記事を書いた記者の西垣戸勝さん。彼はまもなく、小中学校のユニークな授業実践の紹介や子どもの実態など丁寧な取材を元に、『性教育は、いま』（1993年）という本を出版しました。その中で彼は、『「性」というものを、人として生まれてから死ぬまでの生き方の問題として、捉えられるかどうか。子に教える前に、私たち大人自身が学ばなければならないのではないか。』と書いています。

取材中、執筆中もずっと自問自答してき

たとも語っています。西垣戸さんとはその後、色々なセミナーでの取材でお世話になりました。

性教育は女がやるもん？

どこの学校でも、性教育の担当は女性教員です。性教育について論じたり研究したりする人も、実に女性が多い。なんでやろ？

実はT先生は男性教諭でした。しかも20代でした。私は彼に、

「なんで性教育に興味あるの？」

と聞くと、

「自分がちゃんと性について教えてもらえなかったことかな…。それと、困ったことも誰に聞いたらええかわからなかった」

という答えが返ってきました。

私は少しの驚きと共に、性は産むことや命の尊厳など、どちらかという女性目線で語られことが多く、男性が捉えている性について考えることがなかったなと気づきました。そして、いつも女は損だとか差別的に扱われているとか…「女だから？何！」と、何かにつけて男性を目の敵にしていたことにも…。猛反省です。

西垣戸さんも男性記者です。当時性教育をテーマに記事を書くことは、男社会の新聞社では、かなりの反発があったのではないのでしょうか。男がなんでや！と叱られる場面もあったのではないのでしょうか。最近知り合った女性の記者から、性に関わる記事（性被害、セクハラなど）はなかなか大きく扱ってもらえないと聞きました。時代は変わり女性の記者も増えているのに、仕事の内容には、いまだに男女格差があるようですね。

T先生が男性であることと、その彼が子

どもたちへの性教育の必要性を訴えたことは、その学校の雰囲気を変えていくことになりました。職員への性教育の理解度もぐっと深まり、教材作りや指導案の計画など協力して取り組む教員も増えました。学校の性教育年間計画も整い、その市全体の小学校での実践が広がっていったのは、彼のおかげです。今から振り返れば、この頃が一番充実した日々でした。

あの頃は、普通に「性交」の授業ができていたなあと思うとなつかしいです。

「先生とはその後、民間団体が主催する性教育セミナーに参加することになりました。性教育元年という年でもあり、千人以上の参加者が集まり、会場は熱気がこもり、こんなに性教育を学ぼうとする人たちがいるのかと驚いたものです。私たちは、ほぼカルチャーショック状態でした。

壇上のシンポジウムでは、もちろん男性のパネリストが…。

“すごい、性について語れる男性がいるんや！”と思いました。何より嬉しかったのは、そこで再び山本直英さんに出会うことができたことです。

今でも彼の著書『子育てのなかの性教育』（1989年）をバイブルのように大切に持っています。30年以上前に書かれたものですが、その一つ一つの項目について、今日本の教育現場で実践されているかと問われると、「されていません！むしろ間違いなく後退しています！」と答えますね。

つづく



「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～⑤」

『最期は家で迎えさせたい』～今、ここでの思いを共感する～

高名 祐美

G さん、60 代男性。膵臓癌末期。これまで、自宅から遠方にある大学病院で治療を続けてきた。終末期を宣告され、自宅近くの病院での療養をと当院へ転院してこられた。

転院翌日の午後、病棟 Ns から連絡。「今日の夕方 5 時に、主治医から家族に病状説明があります。かなり厳しい状況だという内容になります。同席してもらえますか？」と。ソーシャルワーク支援依頼の連絡票はまだ届いていなかった。病状が厳しいとなれば、MSW に求められことはどんなものだろう。Ns からは続けて「家族は家での看取りを考えているようです。そこを踏まえて関わりをお願いします。」

そうか、在宅看取りか・・・ どんな状態なのだろうか。準備をする期間はどれくらい猶予があるのだろうか。家族の思いはどんなふうなのだろうか、覚悟はできているのだろうか。と、様々描いてみる。急がないといけないだろう。事前にカルテから情報収集をと思っていたが、その日は次々と対応しなければならぬことに追われた。カルテを見る時間もないまま、病状説明予定の時間となった。その時点で私が把握していた情報は、G さんは妻と二人暮らし、自宅が当院から近距離にあるというこ

とのふたつだった。

5 時を少し過ぎたころ、病棟 Ns から連絡が入った。「今から先生の説明が始まります」と。大急ぎで、病棟へ向かう。病状説明室へ入ると、医師の前には奥様と息子さん が並んで座っていた。二人とも筆記用具を手にし、メモをとる準備をしていた。

Dr：前医から連絡をいただいていた。昨日こちらにきていただきましたが、先週末ではなかった腎臓の機能が悪くなっています。自分でトイレに行こうとして、立ち上がったら血圧が低下して、一時的に意識を消失しました。もう、立ち上がるのはむずかしくなっています。腹水もかなりたまっています。栄養状態もよくないです。いわゆる終末期です。こちらに来てから、おしっこが全くでていないので、危険な状態です。万が一ということがありうる。今日・明日(亡くなる)ということがありえます。

Dr の一言一言に、「はい」「はい」と相槌をうちながらメモを取っていた妻は、医師の最後の言葉に一瞬表情が固まった。重苦しい雰囲気、その場を包んだ。少しの沈黙のあと、妻が口を開いた。メモはもう取

っていなかった。

妻：そうですか・・・ そんな状態ですか・・・
もうそんなに悪いのですね・・・

Dr：はい。時間はそんなにかいと。そこでお聞きするのですが。もしも、呼吸が止まったり心臓が止まった時に蘇生処置をするかどうかなんです。なにも処置はしないという方向だと思います。いかがですか。

DNAR（心肺蘇生は行わないこと）の確認だった。こんな瞬間にこうして聴くのだと思った。

妻は即答した。

妻：はい。そうしてください。もう今まで十分がんばってきたので・・・もう、いいです。

長男：（となりで同様にうなづいている）

Dr：わかりました。

最期の時が近づいていることが説明され、DNAR が確認された。残された時間はわずかなのだなと考えていると、一呼吸おいて妻から申し出があった。

妻：家で息を引き取らせたいのですが。もう遅いですか。動かさないですか。

Dr：在宅で看取るということですか？

妻：はい。最期は家で迎えさせたいと思ってここに来ました。病院にいたら、コロナで面会できないです。今なら家族がみんないます。孫にも会わせられます。そばにいらることができます。今からでは遅いですか？今なら家族がみんないるんです。ベッドもポータブル便器もあります。ばあちゃん

んが使っていたものを使います。私は24時間、大丈夫です。介護の申請もしました。訪問調査も終わっています。家族みんなで協力します。家で過ごさせたい。お父さんもそうしたいと思っています。

妻は声を詰まらせ、こう語った。長男も親の申し出にうなづいている。妻の夫への思いが伝わってきた。新型コロナウイルス感染予防のため、当院でも患者への面会は禁止されている。主治医の許可がない限り、家族は病室には足を運ばない。「家から近い病院に転院しても、面会できないなら意味がない」「自分の家なら、コロナに関係なく家族で過ごすことができる」「残りわずかな時間は、夫のそばにいたい」そんな妻の思いが伝わってきた。「今なら家族がみんないる」と繰り返す妻には、看取りの覚悟はできていると感じた。この希望をなんとか実現したい、させなくてはという感情が私の中に瞬間にして沸き上がった。

Dr：家に連れて帰る・・・（MSWの方を向いて）どのくらいの時間があったら準備できますか？

妻の申し出に主治医は「退院は無理だ」と言わなかった。私と同じ気持ちなのだと思った。

MSW：家に帰りたいのですね。準備、急がないといけません。先生、最低限何が必要ですか。

Dr：点滴ですね。ポートはあるから。点滴をしてもらえば・・・そして看取り。

MSW：訪問看護と訪問診療、点滴の準備で

すね。介護は奥さんをお願いできますね。

妻・長男の前で点滴の中身、管理の方法、在宅医への依頼など医療面で必要な準備について医師・Ns・MSW で話し合った。場所を変えて話す余裕はなかった。希望をかなえられるように動きださなければならぬ。

私たちのやりとりを聞いていた妻が再び口を開いた。

妻：私たち家族は何をしたらいいのでしょうか。家に帰れますか。間に合いますか。

MSW：帰りましょう。とにかく急いで準備しましょう。ベッドがあるのですね。お父さんを寝かすお部屋にベッドを配置して、すぐに使えるようにマットレスもひいてください。それから点滴をぶらさげるところはありますか？

妻：あります。寝かせるところに点滴をつる準備すればいいのですね、わかりました。今日帰ったらすぐに準備します。（力がこもった声で長男とも目をあわせながら）

MSW：今日は木曜日。明日、金曜日。明日のうちに家に帰れるように、全力で準備します。先生、それでよろしいですか。在宅担当医へ朝一番に相談をお願いします。私は訪問看護ステーションにこれから相談します。とにかく急ぎましょう。奥さん、息子さん、一緒に頑張りましょう。お父さんに、今晚一晚頑張ってもらいましょう。それでよろしいですか？

妻：はい！わかりました。ありがとうございます。先生、よろしくをお願いします。これから少し本人に面会してもいいですか？「明日家に帰るよ」と直接本人に伝えたい

です。

Dr：いいですよ。声掛けしてあげてください。

その場に居合わせたみんなの波長がぴたり合った、そんな気がした。初めての出会いの場。かなり強気に発言したが、Gさん家族が抱えている課題の解決策はひとつしかないと感じたからだった。「帰るのは無理」という感情はなかった。私は妻・長男と一緒に病室を訪れ、Gさんに面会した。鼻に挿入されている胃管チューブからは廃液が多くあり、つらそうだった。たったいま嘔吐したとベッドサイドで病棟Nsが処置をしていた。

妻：お父さん、お父さん。今先生とお話ししてきたよ。明日、うちに帰ろう。準備してくれるって。うちに帰る許可がでたよ。つらいね、明日まで辛抱したら孫にもあえるよ。

Gさんは、妻の言葉に「うん」「うん」と答える。相当つらそうである。この状態で明日、家に帰れるかどうか・・・ひょっとしたら・・・準備が間に合わないかもしれないという思いがよぎった。いや、とにかくできるだけことはしよう、家族の希望を実現させよう、そう自分に言い聞かせた。自宅への退院をあきらめるという選択肢は私の中にはなかった。その場にいた妻、長男からも同じ思いを感じ取った。Gさんに「家に帰ってご家族と過ごせるように超特急で準備します。おうちへ明日帰りましょう。」と声をかけた。Gさんはやはり「うん」とだけ答えてくれた。

私が病室を出て、デスクに戻ったのは夕

方6時を少し過ぎていた。とにかく、明日。Gさんの希望、Gさんが家族と家で過ごせるように、準備を最優先しよう。なにからどう働きかけるか。訪問看護ステーションにはすぐに依頼の電話をした。朝いちばんでスタッフカンファレンスをと予定を立てて帰宅。家に帰ったあともGさんのことが頭から離れなかった。

そして翌朝。出勤した私を待っていたのは、「Gさんが深夜に亡くなられた」という事実だった。間に合わなかった・・・何もできなかった。心にぽっかり穴があくというのはこういうことなのだろうと思った。

その日、Gさんの主治医が私にこんな言葉をくれた。

「もう1週間早くに転院してきていれば、希望を叶えることができたと思います。残念でした。でも、ご家族から『ここに来ていろいろしてくださって(自宅への退院に向けて)考えてもらえて、よかったです。感謝しています』と言葉がありました。なんにもできなかったんですけどね。するつもりであったことは伝わったのでしょうかね。それだけでも救いですかね。一緒に考えてくれてありがとうございました。またこれからもよろしく願いいたします。」

目標は達成できなかったが、厳しい病状説明の場で家族の思いを「共感」できた瞬間を、この主治医と共有できてよかったと心から思った。

心が大きく動く瞬間がある。目の前の相手と気持ちがピタリと合うその瞬間。それ

が「共感」なのだろう。「一緒に頑張りましょう」と自然と言葉が出る。目標に向かって私はこれを、あなたはこのことを。役割分担がしっかりできて同じ土俵で踏ん張る。クライアントが決めた課題の解決策を審判しない。目標に向かってクライアントと共に前へ進む、それが対人援助の醍醐味ではないだろうか。こんな瞬間がいとおしくて、この仕事を続けてきたように思う。Gさんとの出会いは、私にこの仕事の魅力を思い起こさせてくれたと感じている。



原田牧場

Note

Page 3

原 田 希

北海道農業士になって4年がたちます。「新規就農者への助言」「経営改善や地域農業の振興に関する協力」ができる地域のリーダーという位置づけで昭和50年頃から認定が始まり、全道で1700名ほどが活動中です。その中で女性は3%ほどですが、わが町には4名おり、農業士の上の組織になる、北海道指導農業士も女性が2名おり、チームで女性農業者向けの勉強会の開催をしています。私が嫁いで酪農を手伝い始めた頃、牧場の母に言われてびっくりしたのは「教えられないからどっかで習ってきてください」でした。母たちの世代は、親や夫が言う通りの家流を守ることが普通とされていて、どうしてこうなのか？と私に聞かれると理由を説明できなかつたのかもしれない。4,5頭しか飼養していなかった時代から大規模経営へ。今は200頭に増えているので、新しいやり方を習ってきて、という意味でもあったかもしれません。じゃあ勉強しに行くしかない、といろいろな勉強会に顔を出しているうちに、様々な農家のお嫁さんたちと出会います。勉強会なんて行かなくていい、うちはうちのやり方なんだから。と言われてます、というお嫁さん。勉強して帰って実践しようとしても相手にされません、というお嫁さん。機械化が進んだ昨今は、仕事はしなくてもいい、と言われていたお嫁さんもいました。勉強はしたいけど、子供が小さいから預けてまで参加するのは気がひける。という方も。うちは勉強してこいと言われたけど、勉強不要とされる状況のひとつもいるんだなあ。それでも学びたいと思う原動力はなんだろう？と考え始めます。昔は、お嫁に行く＝家に嫁ぐでしたが、今は、人に嫁ぐ時代です。夫が働く姿を間近で見て、力になれば！と思っているお嫁さんがこんなにたくさんいる！強制されて家を手伝うのではない、その伸びやかな意欲をもっともっと後押ししたいな、と思うようになったのでした。

勉強会は2部制で、講義と自由参加のサロン。サロンはお昼を食べながら講義の質問や交流ができる場です。講義の後なので、知らない人とでもすぐ話題にできるテーマがあるし、同じ酪農家でも営農手法は千差万別。おたくはどうしてるの？なんかいい方法ない？これやって失敗しちゃった！と実体験からくる生の声があふれます。お嫁に来たばかりで、質問できるほどの知識がまだないという方でも聞いているだけで面白い話ばかり。さらに、経営（お金）の切実な悩み、夫婦関係のグチまで女性の本音祭りです。ちなみに男性たちが集まる合合でこういう話は出るのか？と夫に聞いてみたところ、自慢話、成功事例は話すことはあっても、失敗談は誰も語らないとのこと。女性を外へ出して、大いに語らせることにはすばらしい意義がある。勉強会から家に帰って、夫婦での話題にもうひと花咲けばいいな。とサロンの風景を遠目にみながら今日も思います。

さて、私自身は、講義や優良農家の視察に足を運びつつ、得てきたことを実践する前に、牛一頭一頭のデータを頭に記憶していきました。分娩の癖（早産、難産、双児を産みやすい）、乳房炎などの病歴、発情徴候の特長、牛の性格（餌を食べ負けないか、人に対して神経質か）、脚や爪の丈夫さ、搾乳性（搾り残しをするか）など。時には搾乳しながら牛に話しかけたり、牛が話せない分、この牛のいいところは？と想像し、全頭の顔の区別もつくようになった頃、牧場の家族は牛一頭一頭について、全部私に聞いてくるようになりました。技術面ではまだ足りないことだらけでしたが、家族の牛談義に入れるようになったのです。勉強会で聞いた新しい知識を実践できたのは、ここから10年かけて少しずつでした。経営が安定している農家ほどやり方を変えるのを嫌います。今うまくいっていったら変えなくていい。昔の苦勞に比べればなんともない。効率は悪いけどこれでやろうと思えばできるんだ精神を否定するつもりはありませんが、30分でも早く仕事からあがってゆっくりしませんか？どんぶり勘定せず、ここは節約しましょうよ、と話しをしながら一歩ずつでした。

新しくお嫁にきた方も、家業の実体（農家の労働環境はいまだ過酷）を見て焦る気持ちがあるでしょう。私も経験した一歩ずつをご希望あらばお話できますが、サロンでは、夫婦の仲の良さは経営に表れる。大丈夫やで！と一言いうだけでいいのかな、と思っています。なぜかというと、こんな田舎の、基本休みもない3Kといわれる職種の酪農家に、彼が好きというだけで嫁いできた女性の意志の強さを知っているから。きっと自らの居場所を自分の手法で開拓していくでしょう。

私が農業士を引き受けたのは、自分が学びたいテーマで勉強会を開催できるからでした。肩書きには全く興味がないのが本音です。ただ、肩書きと役割をいただいたから、参加者の小さな声にも耳を傾けるスイッチが入り、地域全体の女性がいきいきと活躍できる足がかりとしてのコミュニティ＝勉強会を立案していきたいと考えるようになりました。案内文で呼びかけ、性にあってないながらPR活動もやっております。また、個人的な相談にのる時には、農業士は関係なく、ただのご近所の同志として、元気ないやん、どうしたん？とそっと声をかけられる人でありたいです。

最後に「教えられないからどっかで習ってきてください」と言った牧場の母さんについて。当時は、右も左もわからない私に教えもしないで、なんて無責任な！と少なからず思ったのですが、母さんがこれまで生活や仕事に関して「やりなさい」と言ったことは一度もありませんでした。私から新しく試したいことを話せば「やろう！やってみよう！」とってくれるのです。やってみよう！と言いながら、母さんは絶対やらないのですが（笑）。「やれ」と強制されたらやりたくない私の性格を読み切っていたのか？母さんの計算かはいまだわかりませんが、私をぐんぐん伸ばしてくれた魔法の言葉です。

筆者 原田 希 ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住。自身も酪農家に。

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や、

女性の農業者向けの勉強会、道外からのお嫁さんの会のお世話係を担当

かけだ詩②

そだちと臨床研究会

かわばた たかし
川畑 隆

さんみつ

(よろしければ声に出してお読みください)

義満 家光 光圀に
三つ指 貢ぐ 三つどもえ

密閉 密集 密接で
隠密 密会 三つ揃い

竹光 嘯みつき 踏みつけて
緻密に 見積もる みみっちく

蜜豆 あん蜜 蜜氷
やみつき 三つ組 見繕う

さんみつ 読みつつ 文月に
満つ 充つ そして…

三つめ未だ 見つからず

緘黙宣言

わたしは
リンゴが好きだ
だからといって
ミカンが嫌い
なわけじゃない

わたしは
虐待はゼロにならないと思う
たしかにそう言ったけど
子どもが死んでもかまわない
なんて思っていない

わたしは
性のこともちゃんと話したい
でも それってセクハラですよ
言われたときの衝撃
言葉を飲み込む

あなたは
コラ！と怒鳴っただけ
でも子どももの暗い顔が責める
心理的虐待
心の闇…

あの子は
君は喋らないんだねと言っただけ
喋らない友だちは泣いた
内では戸惑い
外では問題になった

わたしもあなたもあの子も
何も言わないことにした
だからといって
何も思っていない
なんて思わないでほしい

ニュアンス

食べる じゃなくて
食べはる
遊ぶ じゃなくて
遊ばはる

尊敬の言葉

子どもに向けて
それってどうだ
京都はそうでも

しつけはどうだ

京都に暮らし
馴染んだ耳は
馴染んだ分の
アクを抜いて聴き取る

笑うてはる
泣いてはる

あがめるでなく
一己の他者として
それを護ろうとするまなざしで
認めている

尊重の言葉

帰着点

誰が名付けた
ホンネとタテマエ
誰が説いたか
善と悪
心がふたつに

かけだ詩② (川畑 隆)

分かれている

誰が選んだ

好き嫌い

誰が決めたか

得手不得手

心がふたつを

分けている

オセロゲームは

白と黒

勝負の世界は

勝ちと負け

わかりやすいと

面白い

わかりやすさは

理屈を作る

理屈は人を

騙しすい

騙されないよう

必要な理屈

それは

心はふたつに分かれていない

ってこと

この理屈に

騙されるか騙されないか

まさにこれも二分法
わかりにくさを受け容れようか

安堵

あれっ？

君がいる

あのブラウスと肩幅

そこに閉じ込められた

輪郭と空気

むこうを向いている

もう会わない

っていう君からの宣言

それはただの悪夢だったんだ

だって

君はここにいるんだもん

僕を見てほしくて

顔を覗き込もうとする

何度も

でも

その僕の存在は消し去られている

僕とは無関係に

君は
むこうの世界にしかない

夢じゃなかった

こちらとむこうは
もう超えられない

ああ

駄目だ駄目だ

どうしよう

破滅だ！

僕が壊れるその瞬間に

目が覚めた

君の寝顔が横にあった

暗黒のトンネルを

抜けた感触があった

よかった

貼り紙

叩きました
虐待はしていません
それが虐待だと

言われていることは
知っています

叩きました
でも

虐待はしていません

叩いたのは

子どもがとっても悪いことを

しでかしたからです

私は驚愕しました

なんてことをしたんだ！

やったことと

やった子どもを前にした

私の課題は

そこにへなへなと崩れ落ちず

どう立ち続けられるのか

：ふんばったんです

そうです

私にとって

叩いたという言葉の

一番近い翻訳は

ふんばった：

です

虐待はしていません

叩いたんだから

体罰だと言われるのは

仕方がないでしょうか

でも
罰じゃなかったような
気がします
だから体罰でもないんです
ふんばったんです
こんな話
やっぱり聴きたくないですか

犬も生きにくい

からかいとは
豊かなことだと思っていた
青々と刈り上げられた頭を
「おはつ！」
みんなから叩かれたのも
今でもニヤツとするような
いい想い出
でも
からかうなんて駄目
いじめの始まりだから
理屈はそうかもしれないが
窮屈だ

からかいにも
いろいろあるでしょう
あれも駄目これも駄目
だったら
何を言えばいいの？
どう振舞えばいいの？
手足を縛られて
自由に羽ばたけ
なんて言われても：

飼い主に連れられて
犬がこちらを見ている
そして激しく吠える
飼い主は首輪を引っ張り
私に申し訳なさそうな顔を向ける
それでも
ワンワン！ワンワン！
飼い主は頭をひっぱたく
キーン！
後ずさりながら
戸惑いで震えた瞳が
飼い主を見上げる
犬も生きにくい

ブルーグレーの肖像

当事者から見たHSPの日常

天川 浩

敏感すぎる人達

HSPの人間は全体の20%、5人に1人がHSPとされています。

HSPの人の中には普通の人よりも感覚が過敏な人が多くいるように見受けられます。

日中に外を出歩いていると太陽の光がとても眩しかったりしてサングラスを常用している方もいらっしゃいます。

私も大きな音が気になったり人の話す声が自動的に耳に伝わってくるので、イヤホンをして、音楽を少し大きめに掛けて、そういった音が聞こえない工夫をしています。特に若い人たちが大声で会話をしているのを聞くと自分では必要のない情報まで、耳に入ってくることになるので、とても辛い時があります。

自分の声があることに対して特に敏感で、ひそひそ話をしている人の会話の中に自分の名前が出てきても、返事をしてしまうぐらい他の音から抽出されて自分の名前を聞き分けてしまいます。おそらく自分のことを話題にされることに対して恐れがあるのだと私自身は感じています。

匂いについても同じような事が起こっている方が多いと思います。自分の嫌いな匂いがものすごく鼻につく時があります時があります。ゴミ箱の中で腐った食べ物や、強すぎる香水などの匂いは頭が痛くなるほど強い刺激となって脳に伝わってきます。これで時々私は偏頭痛が起こったりしています。逆に、自分の好みの香りは心を落ち着けてくれるのでハンカチなどに染み込ませたエッセンスなどを、疲れた時などに嗅ぐとストレスを和らげ、少し疲れを取ることができたりします。

味覚も鋭い方が多いように思います。例えば複雑な味付けを楽しんだり、エスニック料理などのスパイスの香りを嗅ぎ分けたりできるので味覚に広がり生まれ料理を楽しむことができます。逆に水道水などの夏場の生臭さなどが気になり顔を洗えなかったりする時もあります。

触覚に関しても、ザラザラした生地や、カサカサして肌に刺激があるものは、あまり着ないようにしています。そういったものを着ると一日中ザラザラやチクチクした感触に悩まされて、それが気になって集中できないことなどが多々あります。

おそらく HSP ではない人のあいだではこういったことは生活の支障に影響を与えないことなのかもしれませんが、こと HSP の人にとっては、とても不快な感覚になり集中力の低下や気分の落ち込みなどにつながることもあります。

正しく分からない人には分からないことなのです。

子供の時の HSP を HSCと呼びますが子供時代でも耳を手で塞いで音を遮断している子供やTシャツのタグなどが気になりすぎていつもそこを触っている子供も見かけます。

これは発達障害の方などにも見られるような行動ですがHSP と発達障害がどこかで繋がっているのではないかとも思います。

人間関係

人間が生きることというのは何かしらの集団に所属し人間関係を構築していくことと等しいと考えられます。それは最初家族という形から始まり学校などの携帯を経て、やがて就職して社会の構成員となっていくます。

最近でこそリモートワークなどコロナ対策により実施をされている企業も増えてきていますが、まだまだ在宅で一人で仕事をするような環境にはとってま及びません。

「人付き合いがうまくないというだけで配慮するのはどうかと思う」とお考えの方もたくさんおられるかもしれません。確かにHSPであるというだけで必ずしも配慮が必要であるかどうかはまだ分かりません。簡易テストなどがネットなどに載ってはいますが、あくまでもそれは目安であり精神疾患ではない限り医師の判断もそこには全く入っていません。

ただ単に性格を理由に職場での配慮を必要とすることは企業としてもそんなに重要だとは思えないと思います。

しかし現在もHSPにより人間関係に支障をきたし配慮を必要とする状態に陥っている人が、少なからず存在するということが現実です。

職場にいれば少なからず人間関係の悩みなどは誰でも抱えていると思うことが現在の常識となっていると思います。しかしHSPの人間にとっては職場での人間関係で大きな悩みを抱えている人間がたくさんいるのも現実です。

私は病気でないなら配慮する必要はないという考えには反対です。例えば職場の上司に人間関係についての悩みを相談したとしても「みんな悩んでるよ」「仕方ないよ、君の方が後輩なのだから」「傍から見たらそんなことないように見える」などと一蹴されてしまうことがたくさんあり私もそういう経験に泣いてきた人間の一人です。

働くということはお金を得ることであり、それは生活費を稼ぐということであり日常生活の基盤になる行為であります。

働くことに支障があること=生活に支障がある。これは今の日本では常識的なことです。働かざるもの食うべからずという言葉そのままの国家であります。セーフティーネットが整備されているとはいえ、生活保護を受けるには様々な審査をクリアしなければならないという現状があり、年齢によっては就労可能であるという理由から生活保護を受けることができず、最悪の場合、死に至ってしまったケースも確認されています。

もしも5人に4人がHSPだったとしたらどうでしょうか？国としても対応をせざるを得ないのではないのでしょうか？普通の人が多ければ5人に1人は放っておかれてもよいという考えなのではないでしょうか？

HSPの度合いが強度になれば、話しかけることや報告、連絡、相談といった社会人の基礎されることもままならない状態に陥っているHSPの人間も存在するのです。

極論になってしまいますがそれらの行為が出来なければ社会人ではないのでしょうか？また彼らには仕事をする能力がないのでしょうか？

そういった偏見を持つことがマジョリティのエゴであると私は確信しています。一般的に大企業や人気企業に勤める人間はあらゆる競走を勝ち抜いてきた優秀な人材と位置付けられています。もちろん彼らは人間的にも豊かな感性を持ちコミュニケーション技術も高い本当に優秀な人間たちだと思います。しかし彼らにHSPの人間の気持ちが果たして理解できるのでしょうか？彼らにとって当たり前である行為ができない人間たちを、彼らはどういう扱いをしてきたのでしょうか？近年、世界的不況が常態化し、もれなく日本の経済も右肩下がりになっていますが、日本経済を作り上げてきた人間たちはいわゆるHSPなどとは違う優秀な人間たちなのではないのでしょうか？

また極端に言うと、日本はHSPの定義における5人に4人の人間が作り上げてきた社会なのでは

ないでしょうか？

そしてその5人に4人が作り上げてきた不況によってまた HSP の人間が煽りを食うのはどうしてなのでしょう？

HSP の人間の中にもパソコンのプログラムに精通したものや高度な計算能力を持った人間も存在します。また文章力に優れ、繊細な感情を活かした接客などをできる人間も数多く存在します。

これからの時代、もう少し人事形態を見直す必要があるのではないのでしょうか。例えば面接の形式を変えていくなど、人間関係が苦手な人間にも有利になるような面接の形式を取り入れていくことも必要になってくるのではないのでしょうかと私は思います。

現状から見えること

私自身、HSP としての生活が通常となっているために長い間、他の人もそう感じていると思っていました。

そうなのです、自分が HSP と気づかずに生活している方も多くおられるということなのです。

一生 HSP であるとわからずに亡くなった方もおそらくおられるような気がします。

心療内科などにかかってしまうと精神医学による基準に照らし合わせて、何らかの病名を背負わされてしまいます。投薬治療により体調がどんどん悪化していく方もいらっしゃいます。

一時的にはうつ病のような、二次症状に陥って、通院が必要になる方もおられるとは思いますが。しかしそれは HSP の一時的な症状の改善には繋がりません。なぜなら今のところ HSP は疾病とは認定されていないからです。受診して何らかの病名を与えられ、その病名の治療に専念してしまう方がたくさんおられます。

うつ病やパニック障害のように HSP の症状と似たような状態の病気はたくさんあります。

もう少し、個人が HSP かどうかを判断できる公的な基準が必要だと私は考えます。そういった基準があれば少なくとも、自分が HSP かどうか疑念を持っている人が、自己判断をすることができます。二次的に精神疾患を治療する際にも、ベースに HSP が存在していることを加味して、処方箋を考えていくことも出来るのではないかと考えます。

もう1つは、就職の際に、企業に HSP であることを伝えてもマイナスポイントにしないことです。日本は空前の人手不足です。特に、医療や介護の現場では、深刻な問題に発展しています。

HSP は協調性がありチームワークが得意だったり、チームのメンテナンスの役割りを担ったり、ある部分に対してものすごい力を発揮することがあります。しかしながら、面接の印象から「声が小さい」「覇気がない」「やる気を感じられない」などの理由で入社できない時が多いのです。これは企業にとっても貴重な人材の獲得のチャンスを逃していると言えるのではないのでしょうか？

まだまだ HSP は思い込みのレベルであると思われている節もあります。普通の人か思い込みかと思っていることで悩んでいるというのは大変つらいことです。

私も HSP である以上、ある種の判断の基準を作っていく、覚えられる環境を作っていく土台づくりを始めたいと思っています。

今回は、具体的なシチュエーションを上げながら、HSP の人間がどう感じているかを書いてみる予定です。

HSP の才能と無限の可能性を社会に活かすためにどうしたらよいか、皆様のご意見もお待ちしております。私自身では考える範囲も限られてきますし、色々な角度からご意見をいただければ、これからの何らかのアクションのヒントになっていくかもしれませんので興味がある方はまたよろしく願いいたします。

Twitter https://twitter.com/amashanty_Kai

DMでもかまいません、よろしく願いいたします。

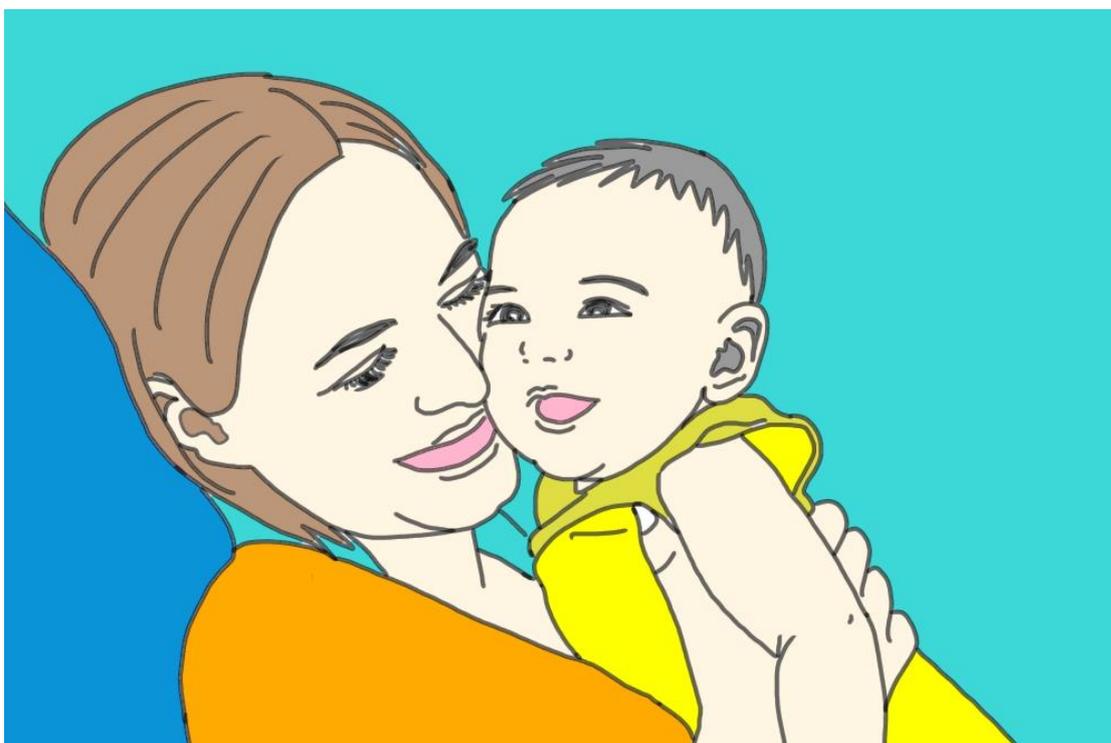
応援、母ちゃん！～はたらく母親たちの日常～

2

－ おっぱいあれこれ －

たまむら ふみ

玉村 文



1. 母乳って不思議

いきなりですが、母乳って不思議です。自分の身体から出てくる不思議な液体。乳白色で本当に牛乳みたい。牛の母乳、牛乳

はスーパーで必ず目にしますが、母乳は子どもを生む前は見たことがありませんでした。自分が赤ちゃんの頃、飲んでいたはずですがもちろん覚えていません。街中でも、授乳風景は目にしないでしょう。

最近になって、デパートや駅の構内など授乳室がある場所は増えてきました。新幹線では、多目的室を授乳室として使用させてもらえます。わたしがしばらく住んでいた横浜市では、移動式授乳室（正式には、ベビーケアルーム）である「mamaro」が置いてある施設もありました。これは畳一畳分くらいのスペースで、工事の必要もなく、かつレイアウトに合わせて移動もできる、昔よく街で見かけた電話ボックスのような箱です。しかしながら、自分が授乳するまで、そうした事情を全く知りませんでした。

母乳は栄養満点、「完全食」と言われています。また味も、子どもがゴクゴク飲むぐらいだから美味しいのでしょう。言葉が話せるようになった2歳くらいの子どもの母乳の味を尋ねると、「甘い」と答えたというエピソードを聞いたことがあります。そのくらい、栄養も味も良いのでしょう。

ところで、アフリカの一部の地域では、夫が妻の母乳を飲む習慣があるところもあるらしいのです。近年、それが女性と子どもへの搾取として問題になっています。女性と子どもは男性の所有物であるという文化が背景にはあります。その上、そうしたくなるくらい、母乳は美味しいし栄養があるということだと思います。夫に母乳を飲まれることに対して背筋が凍るほどゾットするとともに、母乳の味についても興味が出てきました。

母乳を作ることはコントロールできません。ここでは、母乳は勝手に作られて、赤ちゃんがしばらく飲まないで作られた母乳の行き場がなくなり、胸が張って痛くなってきます。母乳が出る人は出るし、出ない人はでない、というところもコントロール

している感覚が持ちにくい点です。でも、これはコントロールできる方もいるかもしれないし、ある程度はできる気もする。私は、「桶谷式母乳育児」と出会って、ある程度コントロールできることを覚えました。

2. おっぱい

子どもが0才のとき、断乳をするまで「おっぱい」という言葉を発しなかった日はありません。母乳や授乳を指す言葉として「おっぱい」を使っています。乳児を育てる親たちの間では共通用語です。この「おっぱい」には性的な意味は入っていません。「子どもの食事」という意味合いで使用しています。童謡の「げんこつ山のたぬきさん」の歌詞「おっぱい飲んでねんねして、抱っこしておんぶしてまた明日」の通り、日々「おっぱい、おっぱい」。こんなに「おっぱい」と言う日々が来ることを想像していませんでした。ところで、上野千鶴子さんの『サヨナラ学校化社会』の中で、「情報」とは、自分にとって自明のものと異質度の高いものとの「あいだ」から、その「落差」から生まれます。」と書いています。わたしにとって、この「落差」が最も大きかったのが、母乳育児でした。

だって、これまでおっぱいについて学んだことがない。日常生活でも目にしない。秘められたものでした。

3. 桶谷（おけたに）式母乳育児とは

桶谷式母乳育児とは、「桶谷式母乳育児ママサポートサイトOPPA!」によると、桶谷そとみさん（1913-2004）という助産師さんが考案した乳房マッサージと母乳育児方法のことです。彼女は、第二次世界大戦の最中、母乳が足りず栄養状態が悪いため命を落としていく赤ちゃんを目の当たりにするというつらい経験から、「母乳は出るものではなく、出せるようにしなければ」という思いで試行錯誤の末、お母さんに苦痛を与えず乳房の調子を整える独自のマッサージ方法を確立」されました。桶谷式母乳育児推進協会の認定を受けた助産師が、いまや全国に約330の母乳相談室（助産院）を開設しています。来院時の母親の悩みは様々ですが、一番多いのは、母乳が足りない、または足りない気がするという母乳の量に関する相談です。他にも、「生まれたばかりでおっぱいが上手に飲めない」、「おっぱいが腫れて痛い」、「そろそろ断乳（卒乳）したい」など赤ちゃんが生まれてから、母乳育児を終えるまでの様々な相談に対応し、楽しく、元気に母乳育児ができるよう、お母さん、赤ちゃんをサポート」してくれます。

【桶谷式母乳育児との出会い】

母乳の調子を整えるために、出産後退院してすぐに乳房マッサージを受けに行かれるという方もいました。私は産院を退院後、胸にチクチクした痛みと痒みを感じ、行くことになりました。初めての乳房マッサージ。桶谷式は痛くない、と聞いていたのでどんなものかドキドキ・ワクワクしたことを覚えています。母乳が詰まっているとそ

れを出すための感覚があってやはり痛い。だけど、終わってみるとスッキリして、授乳がつかなくなります。その後、断乳するまで通いました。

4. 助産師Nさんのこと

実家の近くにある桶谷式母乳育児を掲げる助産院を開業している助産師Nさん。実母に紹介されました。実母もその昔通っていたようで、親子二代に渡ってお世話になりました。

助産師Nさんは70歳。看護師免許を取って、助産師免許をとって、病院で働き始めます。その後「桶谷式乳房管理法研修センター」に1年通って、40歳で自宅で助産院を開業されました。看護学生の時代、病院の実習でいろいろな科を回りました。産婦人科、小児科、整形外科など。そこで自分がどの分野に興味があるのかを知っていきます。まだ20代だったNさんは、整形外科で実習しているときに、ここは合わないなと思ったそうです。「整形外科って、身体の怪我だけでしょ。頭ははっきりしていて、でも身体が痛かったり、ベットから出られなくて暇している人もいて、暇に任せて私達看護師はよくからかわれたりしたの。」と、きっと現代だとセクハラ！と言われることを、当時は「からかい」と「暇つぶし」という文脈で受けてきました。「それでね、整形外科の経験から、私は困ってる人を助けたいと思ったの。あと、わたしは子どもが好きかな」と思って小児科を希望し、学校卒業後は小児科で働いておられ

ました。小児科での経験は、実際には困っているお母さんとの出会いの場だったようです。「わたしは女性が好きなのかもしれません」と感じられました。これは「女性の役に立ちたい」という「困っている人を助きたい」最初の思いを実現することになります。桶谷式との出会いから、そのための手段を得ました。

助産師Nさん自身も、一人息子がいます。その息子も結婚し孫も生まれて近所で暮らしています。孫が生まれてしばらくすると、息子の妻もパートで働き始めます。その間、孫の世話をするために、助産院の開院を週3日に減らしました。「お嫁さんが、月・水・金と働いているので、私は火・木・土で働くの」と孫育てサポートもバッチリ。と言っても、孫も成長していく。どんどん手が離れていく。Nさんがずっと続けてきたガーデニングの趣味から、「お花の絵を描きたい」と絵画教室に行き始める。たまに来る海外からのお客さん（NOVAが近くにあったときは英語圏の母語のお母さんがたまに来られていたそう）との関わりから、「英会話もできるようになりたい」と英会話を習い始めます。英会話では、「断乳のやり方」などを英訳するなど、自分の仕事で使えるスキルを養っています。

4. Nさんの実践

母親と女性の両方を応援すること

ところで、桶谷式母乳育児の考え方は、「おっぱいは良質な食事」です。ですから、乳房マッサージ以外にも、日々の食事の指導や赤ちゃんとの接し方へのアドバイスなども、助産師Nさんの仕事です。おっぱいをあげている間は、アルコールや刺激物を避ける、コーヒーをカフェインレスに変える、健康的な食事を摂るなど気をつけます。桶谷式母乳育児の思想としては、「おっぱいは良質な食事」のために、その良質さを担保するための努力を求めます。つまりおっぱいの質を確保するために、母親に自己コントロールを求めます。かなり気を使って生活する母親もいることでしょう。助産師Nさんは、この思想を「今の人に合わせて」アレンジしていると言います。指導は「この人にできることにして伝える。できない事は伝えてもできないから」と。

母乳育児が最も良いというのは一つの価値観でしかないと思います。母乳が出ない人もいますし、子どもを預けることを想定して粉ミルクとの混合をしている人もいます。双子を育てている母親は、「粉ミルクを使わないと身体がもたない」と多胎児育児の過酷さを語ります。

母乳育児は、自分が母親であり生活者でもあることを教えてくれます。母親役割を重視すると、桶谷式の考え方「子どもに良質な食事」を与えるために、おっぱいコントロールに励みます。しかし、いち生活者としてのバランスをとることも、生きていく上で必要です。助産師Nさんは、目指すべき思想はあれど、個々の状況に合わせて援助をアレンジしていくことを大切にされています。

5. まとめ

助産師 N さんは、「子どもにとってこれが一番良い」とも、「お母さんが一番ラクな方でいいよ」とも言いません。子どもと母親にとって最も良い選択が何なのかは、N さんが決めることではないからです。子どもにとって良いことと、母親であるわたしにとって良いこと、どちらも採りたいわたし。プロとしてニュートラルであり続けることの重要性を、助産師 N さんの姿勢から教えられます。きっと専門家として言いたいことはあるのだと思います。しかし、初心である「女性の役に立つ」ために、今向き合っている目の前の人ができることを示す役割に徹しています。このことから、母としての役割応援だけでは未だ不十分で、いち生活者としての視点をもった応援が求められることに気づきます。

子どもが生まれた瞬間、「母親」というものになります。でも、母親になるからといって、一人の人間としての生き方を全て捨てて、母親という役割だけに全てを捧げることにはできません。上世代からはワガママに見えるかもしれませんが、母親であると同時に、一人の女性だったり、一人の仕

事をする人だったり、一人の趣味に生きる人だったりするわけです。たった一人の人間だけど、人には多面性があります。だから応援する時にも、母親という役割に対して応援するのではなく、多面的な応援の仕方があるのかもしれない。

6. おまけ

N 助産師は言います。「仕事は細くても長く続けていきなさい。子育て中は6割くらいに落としてもいいじゃない。」そんな彼女は週に3日間開業しています。残りの4日は、孫預かりをしたり、ご自身の趣味である絵画教室、ガーデニング、英会話などに使います。開業している3日間では、一人1回1時間、1回3,500円（桶谷式の規定通り）。スキルがあれば年齢に制限されることなくずっと続けていけます。週3日間開業でも、70歳になったN助産師はそれなりに収入があります。趣味のガーデニング、絵画教室、英会話、孫預かりととても充実した日々を送っています。「色々やることがあるから毎日5時起きなの」と楽しそうに話されました。

2015年頃からコマ漫画を大きなキャンバスに描くことを続けてきました。小さなサイズのケント紙にペンと水彩絵の具で描くというこれまでの1コマ漫画の表現形式では十分に伝えられないものがあること、アクリル絵の具で刷毛や筆で描くダイナミックさに魅力を感じていること、ユーモアアートとしての見せ方にこだわって描き続けてきた作品は2018年度の漫画家協会賞カートゥーン部門の大賞を頂きました。

あらためてこの場で私なりのユーモア表現をご覧いただければと思います。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



あこがれ

ショーウィンドウの中のトランペットを覗き込む黒人少年の姿は、多くの人たちの記憶の中にイメージとして存在する。しかし正直なところこれが何の映画なのかあるいは小説だったかを私自身は知らないでいる。サッチモと呼ばれたルイ・アームストロングの少年時代の逸話だとまことしやかに解説する人もいるがどう

やら伝説の巨人に乗った作り話のようだ。映像としては何年か前に某クリエイティブ会社のコマーシャルにそういうシーンが作られ流されていて、それを記憶している人も多いようだ、これも元々あつた話をパロディとして使ったものだ。

今なら何でもカードで買ってしまつて、あとで多重債務に苦しむ事になるのかもしれないが、貧しい少年が手の届かない世界をガラスの壁を通して眺めている姿はいくつもの物語を想像させる。



B-2

そろわぬ足並み

コロナは最初には予想もしなかった展開を見せ世界中を混乱させている。多くの研究者の英知を結集しても未だ決定的な解明はされていないしワクチンの開発もまだまだ心もとない。テレビでは連日専門家とされる医師学者、研究者たちが日々変化する感染状況を眺めながらそれぞれの立場でコメントする。そんな毎日の情報を受けてたくさんコメントーターたちがわかったようなコメントする。政府と自治体の見解の相違や対応の違いも出てくると庶民は誰か道を指し示してくれる絶対的なリーダーの出現を期待するが日本ではそれはなかなか難しい。誰も最終的な責任を取るのが怖いからだが大阪人ならこう言うはずだ。「知らんけど」



空気注入

芸能人たちの家族のルーツを探るテレビ番組が話題だ。先祖代々の家系図があるような由緒正しき家は限られているだろうが、多くの庶民の家庭では二世代前の先祖の情報でさえ把握できていない人も多い。親がわが子や孫たちに自分の人生を語ることに無い人も少なく無い。積み重ねてきた人生で得た知識や体験は、記録できるホンの一部を残して、死とともに消滅するが、『才能』は見えないところで受け継がれる。番組を見る度に今の自分に至る先人や自分の歴史をちゃんと次の世代に伝えておきたいと思うのは、歳をとった証拠かなと思う。

F-30号

乗り換え

暑い夏の日
仲良しだった同級生がお父さんと遠くの街へ引越して行く。
海辺の無人駅まで、みんなで見送りにやって来た。
一緒に作った縄電車からこの駅で乗り換えるのだ。
それぞれの心の中にこの日の情景は鮮明に残るだろう。
いつの時代も子どもたちの出会いや別れは、
大人たちの事情で決められて行く。



F-30号

深夜徘徊

深夜の街を車で走っていると
歩道に沿って動き回る路面清
掃車と遭遇する事がある。
高速で回転するブラシで道路
隅のゴミを次々とかき込みな
がら、ちゃんと散水もして通
り過ぎる。

家庭用のお掃除ロボットは基
本的にこの動きと同じようだ
が当然の事ながら散水は無い。
海外旅行をして日本に帰って
来た時、いつも感じるのは街
に殆どゴミが無いことだ。
都会のビル街でも、地方の住
宅街でもそれは同じである。
日本人の道徳心と美意識のなせ
る技と思うが、路面清掃車の
通らない細い道路や路地裏も
綺麗なのを見ると、もしかす
ると、大量の屋外用の小型お
掃除ロボットが深夜の街中を
動き回っているのではないか
と思ったりする。



B-2

趣味

今ならハッシュタグを付けたメッセージをリツイート、拡散することが賛同の意志表明になり、それが集まると大きな力になるということになるのだが、先日の裁判では他人の問題あるツイートを軽い気持ちでリツイートした人にも責任が問われるという判決が出て、安易なリツイートに警鐘が鳴らされた。

スマホの画面に指先を軽くタッチすれば良いだけの現代人には、自分の指先を切って血判を押し、命を賭けるほどの覚悟はないだろう。



F-8号

血判状



B-2

アダルトグッズOL日記 01

楊 梓 (ヨウ シ)

自己紹介

私は中国内モンゴル自治区出身、2020年3月に立命館大学人間科学研究科を卒業し、日本のアダルトグッズメーカーに就職した。来日5年目で、違う文化に触れ合い、性、ジェンダー、女性の社会的地位などのテーマに関心を持つようになった。卒業論文のテーマは「現代中国女性のアダルトグッズに対する態度についてのインタビュー調査」だった。

アダルトグッズといえば、まだタブー視されたり、神秘的だと思われたり、「ザ・アダルトグッズ」という男性目線、嫌らしい、エロい、昔からのイメージなど、様々な印象があると思っている。この記事は現場の出来事を紹介することにより、現代のアダルトグッズに関する実情を伝え、性とジェンダーに関する文化的、社会的なことも自分の感想で述べたいと考えている。

入社して約4ヶ月が経った。去年の今頃まだ就活で精一杯の時期だった。

唯一新卒募集している某社に落選し、某社以外の会社を探し始めた。

他の業界なら、新卒求人サイトで見つかるが、アダルトグッズ会社は一切なかった。アダルトグッズ会社があるとしても、転職サイトにしか掲載されていなかった。さらに、他の業界より、会社の数がかなり少なく、二十数社しか見つけられなかった。興味のある会社に全てメールし、自分をアピールし、2社しか返事がなかった。

アダルトグッズの小売店なら、アルバイトから就職という進路があると発見し、同時にアダルトグッズ小売店のアルバイトも探していた。応募の際に、自分の状況を説明し、本社の面接チャンスを頂いた。

3社面接受け、そのうちの1社に就職した。

アダルトグッズ会社に

対する反応が人それぞれ

就活のあらゆる悩みがあり、相談をした。相談の場で面白いことが起きていた。全部

アダルトグッズ業界は

新卒募集がほとんどないため、

就職は別方法

で3人の相談員に面談し、アダルトグッズ会社に対する態度は全く違った。Aさん(30代女性)はとても興味津々で自分が知っているアダルトグッズに関するニュースなどを共有しつつ、相談してくれた。Bさん(30代女性)はアダルトグッズ会社に関するコメントは一切なく、相談内容についてアドバイスをくれた。Cさん(50代女性)は相談内容より、「アダルトグッズ会社」に就職すること自体についてとても心配してくれた。「本当にこんな会社でいいの?」「もっと考えた方がよい」「こんな会社で転職が難しいよ」、まるで私が騙されたようで、最後に「賃貸してくれなかったらどうしよう」と生活まで心配してくれた。

この件から、日本女性がアダルトグッズに対する態度が多少でも反映されていると思う。Aさんはアダルトグッズに関する情報に興味があり、人に語る。その語りから、アダルトグッズは悪い、嫌らしいなどの考えがあまりなかったし、逆に興味があり、積極的な感じであった。Bさんの場合は2種類の可能性がある。アダルトグッズ関係の話は恥ずかしく、語ってはいけないため、わざと触れずに相談を行っていた。あるいは、アダルトグッズ会社も他の業界と同じで、特に触れる必要がない。Cさんの場合は、明らかに、アダルトグッズはよくないもので、アダルトグッズ関係の仕事は社会的承認されないという考えだった。相談員3人の態度がそれぞれ典型的で、代表的だと思っている。

では、3人が違う態度になった原因を考えてみると、まず、社会全体は生殖の性を

推奨するが、快樂の性を推奨しない、逆に禁じる部分もある。例えば、生殖に関する研究が多いが、快樂に関する研究が少ない。もう一つの理由は女性は「生殖のための聖女」と「快樂のための娼婦」に分けられ、良い女性は性快樂を追求してはいけないという思想の影響で、Cさんはアダルトグッズ会社に対する態度はそうなっただろう。生殖のためでも、快樂のためでも、主語は男性であって、女性は長年性の中では客体として存在していた。しかし、近年、女性のためのAV、女性のためのアダルトグッズショップなどが増え、女性が性の中での主体性の研究も増えている。日本社会がこういった変化があるからこそ、Aさんは積極的にアダルトグッズについて語れるだろう。

アダルトグッズ会社でも文化が様々

アダルトグッズ会社はほとんど同じではないかと世の中はそうイメージしているだろうし、自分も大した違いはないだろうと考えていた。しかし、面接を受けることにより、同じくアダルトグッズ業界でも企業文化がそれぞれ違うと実感した。

A社はメーカーかつ卸売のビジネスで、女性社員が世界中の女性のためのグッズを卸売するというので、女性社員が女性の快樂の正常化という信念をもち、仕事をしている。

B社は「性の貪欲を追求する」「変態でも弊社の大事なお客様」という文化で、女性用グッズだが、ターゲットは男性客という、

昔からの the アダルトグッズメーカーみたいな感じだった。

C社は主に男性向け商品だが、アダルトグッズメーカーだが、いかにビジネスをよくできるかということに力を入れている。

アダルトだからこそ、

よりハラスメントに注意

学生時代のアルバイト先や日常生活から一部の中年男性はエロジョークが好きで、よく語る。あるアダルトグッズメーカーの女性社員のインタビューに自分がよくエロジョークを語るという記事を読んだことがある。入社前に仕事をしたらもっとよくエロジョークを耳にするだろうと思っていたが、実際はまだ一回も聞いたことがない。エロジョークだらけの議員日中懇親会と比べ、どうやら不思議な感じ。コロナでまだ一回も飲み会したことがないので、飲み会の時にどうなるかまだ分からないが、飲み会の後にまた報告する。

アダルトグッズ会社で働く人というのは、性、アダルトグッズとかエロ系に興味があるから入社しただろうと思う人は少なくないだろう。自分もそう思っていたが、現実には全く違った。

アダルトグッズ会社だが、先輩たちの入社理由はそれぞれで自分の想像を超えた。会社の事業内容がよく分からないままに応募して、仕事してからあれ？と後から分かった先輩、町が好きだから入社した先輩、IT企業から転職した先輩、語学を生かしたいことで転職してきた先輩など、様々な経緯がある。

あるアダルトグッズメーカーが社員みんなにグッズを配るとその会社のHPで見ることあるので、就職した会社も恐らくあると思い、入社したが、そのような制度がなかった。チームの先輩に聞いてみると、人それぞれ違い、ハラスメントと感じて欲しくないなので、あえてチームから「使うか」と聞かない、本人からテストしたい意思があれば、もちろんサンプル申請などができると、アダルトグッズ会社だからこそ、よりハラスメントに注意するところは少し驚いて、尊敬した。

キャリアと文化の心理学

(1) 教育・発達心理学とキャリア教育の接合

土元哲平・サトウタツヤ

本連載では、「キャリア」と「文化」の関係性について、心理学の見地から考えていきたい。第1回では、教育・発達心理学とキャリア教育との接合について検討する。そのために、教育・発達心理学の歴史の変遷を概観し、それらがいかなる点でキャリア教育との接点を持つのかについて提案する。

I. 教育・発達心理学との出会い——ライフストーリー

学部時代——教育心理学との出会い

理学部物理学科に入学して高校教員を目指していた第1筆者と教育心理学の出会いは教職課程での「教育心理学」の授業であった。高校理科、情報教員免許取得のために受講した授業であったが、授業で扱う教育心理学の概念、「〇〇効果」のような現象がすべて新鮮に思えた。この時期の第1筆者は、「教育心理学」とは心理学を「学校での」教育方法に応用したものだと考えていた。また、応用というのは物理学などで得られた研究成果を、産業に活用することのアナロジー(類推)で考えていた。当時は「教師になる」という将来に、強いこだわりや熱意を持っていたものの、「教育」や「心理学」を——そして「物理学」も——かなり狭い意味で捉えていたといえる。

しかし、学部4回生で受験した教員採用試験は不合格であった。それは、第1筆者にとって大きな挫折経験であり、「教師になる」ということに不安を感じるようになった。非常勤教員として、教育に携わりつつ受験を続けるという選択肢もあったのだが、それすら尻込みするようになったのである。そんな中、親から大学院への進学のおすすめを受けた。この選択肢の出現は、当時の私にとって「道が現れた」「暗闇に光が差した」感覚であった。「教育学の大学院で学ぶ」ことで、残り数単位で取得を逃していた中学校理科教員免許をも取りつつ、教師になるために何かを学ぶことができると考えた。

大学院へ——キャリア教育・転機との出会い

大学院修士課程に進学をしながら教職を目指すことになった第1筆者は、「キャリア教育」と出会うことになった。この用語をいつ知ったのかは定かではないが、重要性を感じるようになったのは、当時の恩師からキャリア支援を受けた頃(修士課程1年生であった2015年10月頃)であった。当時の私は、高校教員を目指すか中学校教員を目指すかについての迷いがあった。その迷いを相談したところ、恩師は、第1著者が自分自身の適性や社会に貢献で

きることを考えたうえで、キャリアを考えるようにと促したのであった。こうして第1著者の自己分析が始まり、大学院でのキャリア教育の講義などで学んだ「価値カードソート」や「キャリア・アンカー」(シャイン, 2003)に取り組む中で自己理解を深めていった。こうした中、第1著者は、目の前にいる学生のキャリア教育・支援をデザインできるだけでなく、学術的な探究を通してより広い他者を支援できる大学教員を将来の目標として目指すようになった。

自己分析の過程において、第1著者は「転機」という言葉に出会うこととなった。この概念によって自分自身の高校・中学校教員から大学教員までのキャリア目標の変容経験がまさに「言い当てられた」と感じ、これまで行ってきた「教師のリーダーシップと自律的学級経営に関する研究」から方向転向しようと考えた。しかし、ここで問題となったのは、研究アプローチである。どうやって「転機を経験した人」を探すのか。その人が「転機」だと思っていることと、自分の考えている「転機」とはまったく感覚が違うこともあるだろう。自分の感じている「この」転機経験を理解するためにはどうしたいだろうか?—こうした問題を頭に巡らせながら、大学院の講義を受ける日々が続いていた。

オートエスノグラフィーと博士論文研究

研究アプローチについてしている中で出会ったのが、「オートエスノグラフィー」であった。オートエスノグラフィーのことを知ったのは、同期の大学院生から「自分のことを研究してみたら?」と言われたことがきっかけであった。それを聞いて、研究したい「この経験」に最も近い存在は自分自身であると考えたのである。このようにして、オートエスノグラフィーを用いて、自分自身の転機を研究したいと考えたのである。以下、オートエスノグラフィーについて土元(2020)を元に要約すると次のようになる。

オートエスノグラフィーとは、社会科学において、研究者の「有する文化」(own culture)を理解することを目的とした記述的研究の総称である。オートエスノグラフィーの対象は狭い意味での「研究者自身の経験」に限定されるものではなく、「研究者を含むシステムの経験」(つまり、他者を含む)を指す。したがって、オートエスノグラフィーにとって重要な点は、研究者が有している(own)文化—それは個人が有する文化だけでなく、他者と共有する文化もある—を理解することであり、その理解のために自ら動く(auto)ことであると考えられる。ⁱ

さらに、博士後期課程に進学した第1筆者は心理学と出会うことになった。筆者は、キャリア心理学、文化心理学を専門として博士論文の研究を進め、「転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー」を提出した(土元, 2020)。この博士論文では、これまで自分自身が経験してきた転機経験や、それに関するキャリア支援経験(支援者として、非支援者としての両方の経験)を、オートエスノグラフィーによって検討することを通して、学生の転機を促すためのキャリア支援のあり方を検討した。博士後期課程で学んだことは、心理学における「一人称的研究」(自己分析、オートエスノグラフィー)の重要性である。自己を対象

とした研究の存在は、修士課程の頃から知っていたが、どこか「客観的でない」「普通でない」心理学の方法ではないように感じていた。しかし、それは単に思い込みであって、ヴント(Wilhelm Maximilian Wundt)による内観(introspection)ⁱⁱ、フロイト(Sigmund Freud)やユング(Carl Gustav Jung)が実施した自己分析(self analysis, autoanalysis)、1920年以後ⁱⁱⁱに行われたビューラー(Charlotte Bühler)、エリクソン(Erik Homburger Erikson)、オルポート(Gordon Willard Allport)らによる個人的ドキュメントの分析、そして、自らの強制収容所経験を描いた فرانクル(Viktor Emil Frankl)の『夜と霧』(1946)のような、ひとりの人間のユニークな生を深く丁寧に研究する志向が、心理学の大きな流れとして存在することを理解することになった。かくして、人の心を探究しようとするとき、必ずしも「主観的」「客観的」にこだわる必要はない、と考えるようになった。

教育・発達心理学とキャリア教育

博士論文を書き上げた今、第1筆者は教育・発達心理学を、「教える(他者の学びに影響を及ぼす)こと」「学ぶこと」「成長すること」のプロセス全般に関わる心理学と考えている。教育は個々人が発達を成し遂げるための「習慣」(後述)ないし文化を形成する営みであり、文化的・社会的な側面を持つ。そして、こうした問題は、第1著者の専門であるキャリア教育・キャリア支援にも深く関係している。かつては職業指導(後述)と言われていた領域は人生100年時代を迎えて、キャリア教育というより包括的な概念に内包させることになった。存在する職業に自分を合わせるのではなく、人生の中に今ある職業を組み込んでいき場合によっては他の職業を選びながら人生を歩いていく、あるいは自ら新しい職業を創りながら人生を歩いていく、というのがキャリアのイメージであろうか。人は何かを学んだり、人に影響を与え(られ)たりしながら自分のキャリアと向き合い、前進させていく。そして、ある時ある側面において、それまで学んできたことが通用しなくなる。これまでの経験を問い直し、再構成することである事態を乗り越えられたとき、それが成長だといえるだろう。キャリア教育とは、個々人が成長を遂げるための習慣を形成するための他者からのガイドであると考えている。ここに発達・教育に関する心理学とキャリア教育の接点が生じる。以下では、教育・発達、キャリアに関する心理学がどのように成立したかのプロセスを追っていくことで、この接点について検討するための契機としたい。今から見ていくように心理学は、教育や発達に学問として取り組んだ学範(ディシプリン)としても一定の存在感をもっていたのである。

II. 発達と学習——発達支援と学習支援

キャリア教育という場合、誰がキャリアを歩んでいるのかを考えれば、児童・生徒・学生ということになる。ところが、かつての職業指導における適性の考え方は、誰が歩むかというよりはどのように歩ませるのかという側面も否定できなかった。人間を理解するための学問の一つの心理学があるが、それがどのようにキャリア教育（もしくは教育）に関係していたのか、その点について見ていこう。教育と心理学の関わりである。アメリカ中心の記述になるが、20世紀の心理学及び教育と心理学の関係（教育心理学）の中心はアメリカだったのであるから、あまり問題はないだろう。

1 発達への関心・心理学の成立

古くから人は発達していたし、教育という営みも行われてきたが、そうした営みが学問的に扱われるようになったのは決して古いことではない。

進化論の提唱者であるダーウィン (Charles Robert Darwin) は、自らの長男 (ウィリアム) を対象に観察日誌をつけており、37年後にその日誌記述をもとに「乳児の日記的素描」を『マインド (Mind)』誌に発表している (Darwin, 1877)。

心理学はこれと同じ時期 (19世紀の中頃) に学問としての体裁を整えた。近代心理学の始まりとされる出来事は、1879年にヴントがライプツィヒ大学(ドイツ)に実験室を開設したことだとされている。もちろんこれは象徴的なものであり、この年にいきなり心理学が始まったわけではないし、彼が一人で心理学を研究していたわけでもない。たとえば同時代の優れた研究者にエビングハウス (Hermann Ebbinghaus) がいる。彼は無意味綴りを開発して記憶の研究を行い、今でも参照されることが多い記憶の忘却曲線を提出した。さてヴントの優れた点は、心理学の研究を推進するシステムを整えたところにあった。アメリカなどから少なくない若者がヴントのもとを訪れ (後述のキャッテルが代表例である)、心理学の博士号を得て、母国に帰り大学の研究・教育職に就いたのであり、こうしたシステムを通じて心理学が広まっていったと考えられる。

キャッテル (James McKeen Cattell) は大学卒業後にドイツに留学し最終的にヴントのもとで心理学を学び反応時間の研究を行い、博士号を取得した (1886)。博士号取得後に、ケンブリッジ大学でゴルトン (Francis Galton) と出会い、個人差研究に刺激を受けた。彼は「Mental Test (精神検査)」という語を作り (Cattell, 1890) 感覚や意志などを測定する小項目の成績をまとめることで知能を測定しようと試みた。

アメリカでは心理学と教育の関係が初期から探究されていた。ジェームズ (William James) は、『心理学原理』 (James, 1890) で知られるアメリカ心理学の初期における推進者であった。『心理学原理』出版後の彼は講演などに呼ばれることが多かったが、教育関係者も多かった。こうした経験をもとに公刊したのが『心理学について——教師と学生に語る』 (1899) である。その第1章は「心理学と教える技術」というものである。この本においてジ

ジェームズは、行動を形成することが教育の重要な目標であると訴えている。そして、第8章では、「習慣の法則」を扱っている。習慣というのは第二の天性であり、教師は習慣の重要性を認識する必要がある(サトウ, 2015)という。

ホール (Granville Stanley Hall) もアメリカ初期の心理学者である。彼はヴントの『生理学的心理学綱要(1873)』やスペンサー(Herbert Spencer)の『心理学の原理(1855)』に触発されて心理学を志し、ハーバード大学のジェームズの下で学位を取得した。スペンサーは「進化」や「適者生存」という考え方から社会進化論を唱えた学者である。ホールはやがてダーウィンの影響を強く受けることになった。彼は 1880 年から児童研究を開始した。そして、心理学者や教師や親などがその立場や観察場所に依じた子どもの様子を報告することから成る児童研究運動を主導する。多くの大人が子どもに関心をもち、その様子を観察して記述するようになったことは、大きな意義があったと言える。彼は、1904年に『青年期』、1922年に『老年期』をそれぞれ出版しているが、彼の時代において学問的テーマとして成立するとは見られていなかったものである。19世紀末の彼の時代に「児童心理学」という名称で始まった学問は20世紀に「発達心理学」に変わり、21世紀においては「生涯発達心理学」と呼ばれることになるが、ホールはこうした動向を見通していたと考えることも可能である。

2 教育心理学の成立

アメリカではジェームズが『教師のための心理学』を刊行すると教育場面に心理学を適用しようとする流れが強まってきた。その代表人物がソーンダイク(Edward Lee Thorndike)である。彼は児童を対象にした教授法や学習の研究を行うという目的をもってハーバード大学で心理学を専攻した。しかし、その当時は人間の子どもの対象とする研究が今よりも難しかったため、動物を用いた学習研究に転じたのである。ネコを対象にした問題箱の研究を行い、試行錯誤に基づく効果の法則を提唱した。ネコは、(エサを得るなど)自分が望んだ結果が起きた場合には、その結果を引き起こした行動を繰り返し行うようになる。これは、行動の結果がその行動の生起に影響するということであるからオペラント条件づけの先駆となる考え方である。ソーンダイクは1903年に『教育心理学』に関する最初のテキストを刊行した。また、彼は児童・生徒の学習の成果を量的に捉えることで、客観的な評価が行えるとして教育測定運動を展開した。こうした考えに対する批判も無いわけではなく1930年代以降は教育評価 (educational evaluation) という考えも発展するようになった。産物の客観的測定ではなく過程を見たり、生徒の自己評価を視野に入れるなどして教育の効果を見ようとする動きが出てきたのである(サトウ, 2020; 印刷中)。

1910年代になるとヴントによる近代心理学に対する批判的な潮流(ゲシュタルト心理学、精神分析、行動主義)が現れた。このうちアメリカで発展したのは行動主義である。スキナー (Burrhus Frederic Skinner) は、媒介変数による説明を拒み、ラットが問題箱においてエサを得るため行う行動について研究を行った。この問題箱ではレバーを押すとエサが出てくるような仕組みが取られていた (後にスキナー箱と呼ばれる装置)。ただしスキナーは、動

因(drive)など内的な変数による説明を避けるため、エサの剥奪時間（何時間エサを食べずにいたか）などを指標として用いた。また、スキナーは、レバー押し行動が、その後の環境からの反応（エサが出るか出ないか）によって統制されていることを見出し、行動には2つのタイプ（レスポンドとオペラント）があるのではないかとする分類を提案した（Skinner, 1932）。

スキナーは後に、次女の授業を参観し、自身が見いだした学習原理を活用すればより良い教育が可能になるとして（スモール・ステップの原理に基づく）ティーチングマシンを開発した（1953）。

学習支援から臨床心理学も展開した。心理学に臨床という概念を持ち込み、今日に至るまでの臨床心理学の発展の基礎を築いたのはウィトマー(Lightner Witmer)である。彼が主として関心をあてたのは、学校において子どもたちが抱える学習上の困難である。彼はアメリカ心理学会において、学童の問題行動の調査に、実験心理学の手法がいかに有用かということに訴えており(Witmer, 1896)、ウィトマーはペンシルバニア大学に心理学クリニックを設立する。残されたケース記録から、1896年には最低でも23の事例検討が行われたことがわかっている（McReynolds, 1987）。そして心理学史では、この1896年をもって、ペンシルバニア大学に心理学クリニックが開設されたとしている。

以上、近代心理学と教育は不即不離だったことがわかる。教育心理学は教育社会学などと同様、教育に関わる学問の中に大きな位置をしめることになった。

3 キャリアに関する心理学

1908年、パーソンズ（Frank Parsons）がボストンに職業指導室(The Vocation Bureau of Boston)を開設した。職業補導もしくは指導（vocational guidance）運動のはじまりである。死後に出版された『Choosing a Vocation（職業の選択）』（Parsons, 1909）によれば職業選択にあたっては、1）適性・能力・興味などについて自身を理解する、2）職業について知る、3）自身と職業を理解した上で合理的推論を行う、ことが重要であり、従って、職業指導はこうした側面の援助を行うことが重要となる。

アメリカだけのことではないが、20世紀に入ってから急速な工業化は産業構造を変え第二次産業従事者を増やすことになった。また、その周辺の第三次産業従事者も増えることになった。第一次産業が中心の時代には親から子へ職業が継承されるのが普通だったが、近代社会では様々な選択が可能になったのである。自由は混乱を生み出すことがあるように、アメリカの若者達のなかには選んだ職業に適應できずに一年以内に離職する者が増加し、これらの若者のうちの一部は生活に困って犯罪に走る者も少なくなかった。従って職業指導は若者支援だけでなく犯罪予防という側面も持っていた。職業指導は職業選択が自由になった時代にしか存在しないから、まさに近代的な営みなのである。

その後、第二次世界大戦が終わると、職を得るということの意味も変化していった。職業に合った人を適性にに応じて配分するという考え方から、人が職に就くことによって、人生を

どのように紡いでいくか、ということが注目をあびるようになったのである。こうした変化を表しているのが「キャリア教育(発達)」という考え方である。なお、キャリアとはラテン語の Carraria (馬車などの乗り物の通り道=轍) が語源で、それから経歴とか資格という意味に転じていった概念である。キャリア教育については後述する。

4 仏独の教育 (発達・学習) と心理学

この章の最後にアメリカ中心ではない発達や学習についての心理学についてみておくことにする。アメリカの心理学はキャッテル以来、個人差に着目し、それを量的に捉えようとする傾向があった。従ってこれは個人を分断的に理解することを意味するが、こうした傾向はやはりアメリカの特徴を示しており、フランス・ドイツ等の大陸の心理学とは少し違っていた。大陸の動向をいくつか見ておこう。

フランスでは19世紀末におけるフランスでは遅滞児の客観的把握を行うことが急務となっていた。そうした中で、ビネ(Alfred Binet)とシモン(Théodore Simon)はそれまでの知能検査と異なり、総合的判断を重視する知能検査を作成した(1905)。知的レベルの基準として子供の年齢を指標とし、知能を注意力、理解力、判断力、推理などの総体として捉えた。ビネの知能検査は、丁寧に子どもの実態を把握し、それに応じた教育を行うためのものであった。

子どもの発達についてはスイスにピアジェ(Jean Piaget)が現れた(ちなみに母語はフランス語)。ピアジェの活動はあまりに広く全てを紹介するわけにはいかないが、臨床法と呼ばれる方法を工夫して我が子を対象に発達の様相を捉えたため、多くの研究者が発展的な実証研究を行う素地を提供することができた。また構造主義という思想の枠組みを通じて心理学以外の他分野の研究者にも影響を与えていた。彼は認知発達に関心をもち、知識の構造をスキーマとして概念化し、子どもの認知の発達が同化と調節の繰り返しと統合による均衡化プロセスなのだと主張した。

ドイツではゲシュタルト心理学が比較心理学を通じて教育心理学に対する貢献を行った。ソーンダイクの「試行錯誤学習」に対して、「洞察学習」を提案したことで知られているのがゲシュタルト心理学者のケーラー(Wolfgang Köhler)である。ケーラーは「類人猿の知恵試験」と呼ばれる、チンパンジーを対象とした研究を行い、問題解決には「回り道」やゲシュタルトの理解が重要であることを指摘した。ケーラーの研究を子どもの発達支援へと援用したのが、ロシアのヴィゴツキー(Лев Семенович Выготский)である。彼は、発達の最近接領域(Zone of Proximal Development)という概念を提唱した。この概念は、子どもが現時点において、ひとりで達成出来ること(現在の発達水準)と、大人や他者の援助を受けることで達成できることとの境界域(明日の発達水準)を示すものである。なお、アメリカのブルーナー(Jerome Seymour Bruner)はこの理論を発展させ、大人が子どもの発達を「足場がけ」することの意義を示すことになる。ロシアに生まれ、才気煥発で夭逝したことから、心理学のモーツァルトと呼ばれたのがヴィゴツキーである。彼は1926年に『教育心理学講義』

を著すなど心理学と教育の関係にも関心を持っていた。教育実践における問題を、教育過程の分析によって解決またはその道筋をつけ、現場の教師たちが教育実践を行う助けにするというのがこの書の目的であるという（サトウ, 2015）。

仏独の教育心理学では、発達当事者視点での学習・発達に注目した教育心理学研究が展開されていた。最後に引用したヴィゴツキーに端的に現れているように心理学は教育のために有効であるという考え方が一定存在し、それはキャリア（教育）の問題でも同様だと考えられる。

III. 教育・発達心理学とキャリア教育の接点としての「移行」と「ラプチャー」

1908年にパーソンズが始めた職業指導はアメリカにおいて職業教育として展開した。1971年にマーランド(Sidney P. Marland, Jr.)が全米中等学校長協会年次大会において「キャリア教育(career education)」を提唱したことを契機として、20世紀後半に職業指導からキャリア教育への転換が進められたのである。キャリア論を牽引したD.E. スーパーは、キャリアを「生涯の過程を通じて、ある人によって演じられる諸役割(roles)の組み合わせと連続」(Super, 1980, p. 282)と定義している。キャリア教育と職業指導は、特定の職種だけでなく幅広い役割を対象としたこと、生涯にわたる連続的なキャリアを想定したという大きな違いがある。

20世紀後半に「職業指導」は「キャリア教育」へと転換し、職業を選択するというだけでなく、人が人生をどのように紡いでいくかという視点が重視されるようになった。本節では近年におけるキャリア観の転換を踏まえ、教育・発達心理学とキャリア教育はいかなる接点を持ちうるのかについて検討する。

近年におけるキャリアの転換

近年では、「キャリア」についての考え方自体が、さらなる転換期にあるといえる。キャリアの不確実性、複雑性がこれまでと比べ著しく増加している現代においては、主体が自らのキャリアを切り拓いていく必要が出てきている。この背景には、長寿化による「人生100年時代」の到来(Gratton & Scott, 2016)や、労働の自動化による職業構造の変化などがある。さらに、2020年の新型コロナウイルス(Covid-19)の流行による失業者の増加や勤務形態の変化(テレワーク、リモートワーク)もこうした転換に拍車を掛けている。

このような背景から、キャリア論においては、組織・企業中心から個人中心のキャリアデザインへと理論的転換がなされている。組織・企業中心のキャリアデザインとは、1つの企業に勤め上げながら、キャリアをデザインしていく考え方であったが、不確実な時代においては、1つの企業に一生勤め上げることはできないことが多い。したがって、近年では複数の組織の境界を渡り歩くような「境界のないキャリア(boundaryless career)」(Arthur, 1994; Arthur & Rousseau, 2001)も珍しいものではなくなっている。これが個人中心のキャリアデザインの一例であり、個人が自分自身のキャリアを主体的に構築していく考え方を指す。社会の変化が複雑で不確実となった現代においては、以前には想定していなかった出来事に出会いやすくなっている。今後、生活の領域と職業の領域がさらに融合をすすめ(テレワーク)、新しい雇用形態の登場や、情報技術の発展によって、キャリアに対する人々の意識は大きく変容するだろう。このような現代においては、「移行」や「危機」を経験しやすくなると考えられる。

教育・発達心理学とキャリア教育との接点としての「移行」

ある経験から新しい経験へと、どのように「移行」するかという点は、教育・発達心理学とキャリア教育との接点のひとつである。発達心理学の見地からは、移行には「危機」を伴うことが明らかにされてきた。例えば、発達段階(ライフ・ステージ)論の文脈では、エリクソンによる心理社会的危機(Erickson, 1968)の概念や、レビンソンが「中年の移行期」としての危機 (Levinson, 1978)のような研究がある。また、ヴィゴツキーやブルーナーは、ひとりで達成できること(現在の発達水準)から、大人や他者の援助を受けることで達成できること(明日の発達水準)への移行を扱っていたと解釈することができる。

一方で、最近では世界規模で新型コロナウイルス感染症流行(covid-19)という、世界規模の危機があった。このような個人の生活システムの外部の力による移行をどのように捉えればよいただろうか。このような危機は、個人の発達段階に位置づけることは難しい。社会的な領域で生じた危機が、個人のキャリア上の危機をもたらしているという意味で、「個人と社会との相互作用」(土元・サトウ, 2019b)において生じた危機として捉える必要がある。

こうした社会文化的にユニークな出来事と個人の移行の関係を扱う上で、「ライフコース(life course)」(e.g. エルダー, 1991)。や「人生径路(life trajectory)」という概念(e.g. 複線径路等至性アプローチ(以下、TEA); Sato, 2017)が重要である。いずれも人生をプロセスとして捉えるという点において、発達段階という考え方と一線を画している。なお、エルダーによる『*Children of The Great Depression: Social Change in Life Experience*(大恐慌の子どもたち——生活経験における社会変動)』(Elder, 1974)は、大恐慌の時代、つまり1920年から21年にかけて生まれたアメリカ人と、その親の人生における恐慌経験の研究をもとにした社会学的調査である(エルダー, 1974/1991)。Elder (1974)は、大恐慌という危機状況を、困難な経験であり多くの犠牲を伴った出来事としての側面と、人びとが新しい社会に適応し変化していくという積極的な側面の両面から記述した。この著作は、社会全体が危機的状況にある中での、経済剥奪や職業生活、家計や家庭関係、自己、パーソナリティ、世代間の関係といった側面を精緻かつ体系的に明らかにしている。新型コロナウイルスによって、世界情勢に暗雲が立ち込め、同時に「新しい生活様式」が生じようとしている今、注目されてよい古典的研究である。

ラプチャーと移行

人生径路を歩む当人の視点から見て、人生がその地点で途切れてしまうほどの経験は「ラプチャー (rupture)」(Zittoun, 2009)と呼ばれている。ラプチャーは「危機」よりも突発的に生じ、人生を断絶する側面が強調されている。Zittoun (2009)によれば、この「移行」と「ラプチャー」という概念の組み合わせは、人生径路における発達の研究のための有用な方法論的分析単位を提供するという。移行とラプチャーを分析した例として、有澤 (2018)は、2011年3月11日に発生した東日本大震災による原発事故(ラプチャー)を経験した、避難

区域外の住民へのインタビューと複線径路等至性モデリング(TEM; TEAに基づき人生径路をモデル化するための方法)による分析を行った。それによって、避難行動選択時に家族が分離しない避難(福島県内に「留まる」こと)を選択し、生活を営む中で新たな未来展望である「福島県の畜産の復興に協力したい」を見いだしていくレジリエンスの過程を明らかにしている(有澤, 2018)。また、土元 (2020)は自身が経験したキャリアの転機経験をオートエスノグラフィーとして分析する中で、TEMを導入し(Auto-TEM)、「高校教師として正規採用される」(上述した、教員採用試験に失敗したこと)というラブチャーを契機として「教師になる」ことの意味を問い直し、「大学教師=研究者として学生の学びをデザインさせながら、学問を発展させたい」という域的目標(後述)を生み出す移行プロセスを明らかにしている。そして、土元 (2020)ではキャリア選択のレジリエンスを高めるために、そのキャリア目標が領域的に設定された「域的目標」(ある資格を取得したい、などの「点的目標」ではなく)であること、自己内空間の他者を多様にすることの重要性が示唆された。

有澤 (2018)が指摘するように、たとえ人生を断絶させるほどの「ラブチャー」が生じたとしても、人はなお新たな等至点(目標)を見いだしていく、新しい人生の意味を見いだしていけるということは、ラブチャーをネガティブなものと価値づけないために重要である。ラブチャーは、個人のキャリアを断絶するものであるが、一方で成長のための「転機」ともなる。例えば、「新型コロナウイルスを起因とする職業の剥奪経験」を経験したとしても、決してその後いつまでもラブチャーとして捉えられるとは限らず、後成的に、「あれが私の成長のための転機だった」と積極的に意味づけ直すことができるということである。キャリア教育にとって、このような「移行」を乗り越え、さらに発達・成長するための素地をいかに育むのか(レジリエンス)という点が重要である。

IV. 移行のためのキャリア教育——「足場かけ」の具体的観点

移行における発達を考える上で、キャリア教育はどのように寄与できるだろうか。それを考えるために、ブルーナーの「足場かけ」(Wood et al., 1976)概念が鍵となる。足場かけとは、一人では成し遂げられない目標や実践への参加に対して、適切な援助が与えられることで、課題達成を可能にすることを意味している(河野, 2007)。この概念は、人が主体的にキャリア発達するための他者からの教育的支援(道具的支援)の意義を考える上で有益である。言い換えれば、個人は単独で危機を乗り越えることも出来るかもしれないが、他者からの道具的支援があることで、一人では成し遂げられないような発達が可能となる。以下では、大学教育におけるキャリア教育(大学の授業など)では、具体的にはどのような「足場かけ」の観点があるかについて、提案したい。ただし本稿では、移行期における教育というよりも、ラブチャーや移行に備えた開発的なキャリア教育という観点で論じている。なぜなら、ラブチャーは誰にでも生じ、いつ生じるかも予測できないという点で予防することができない。また、ラブチャーによって意味づけが出来なくなったときには、教育というよりも支援(ケア)がより重要だと考えているからである。

第一に、移行のための「心理的道具」(ヴィゴツキー, 1982)を使えるようにするという観点がある。キャリア教育の現場において、自己の経験を反省するための教材開発は盛んに行われている。文章完成法による記述、ライフライン法などの描画、価値カードソートなど多岐にわたる。キャリア教育には、将来のラブチャーに備え、こうした自己分析・自己反省のための「道具」を用いるための素地を養うという意義がある。とりわけナラティブ(語り、物語)は重要な「道具」となる。ワーチ (1998/2002)はナラティブを、行為を媒介する「文化的道具」とみなしている。そのため、他者がどのようにラブチャーを経験したかの語りなどは、主体が移行を乗り越えるための「道具」として用いることができると考えられる。

第二に、自分自身の言葉を作り出すという観点である。キャリア教育において「既製の語や句」(ジェンドリン, 2004/2004)を用いたキャリア内省に留まってしまうことがある。例えば、文章完成法において「私は大阪出身です。私は明るい人間です。」というような、「よくある言い回し」での自己内省で留まってしまう場合である。言葉は思考そのものであるから(ヴィゴツキー, 1956/2001)、既製の言葉を用いるということは、既製の考え方から抜け出ないことを意味する。逆に言えば、既製の言葉を越えた新しい言葉を創出することができれば、新しい自己の側面が見えたり、他者に自分の独自の考え方を共有することができるようになる。このような観点は、キャリア教育の新しい方法的展開の可能性を秘めていると考えられる。

この第2の観点の取り組みについて、より詳しく述べておこう。例えば筆者は、メタファーを用いてキャリアを考えるワークを授業に取り入れたことがある。このメタファーをキャリア教育に用いるというアイデアは、土元 et al. (2020)のオートエスノグラフィーを参

考にしたものである。メタファーとは、あるもの A を別のもの B で(暗に)喩える表現を指す。メタファーは単なる言語表現や装飾というよりも、ものの考え方や経験、日常の営みのような現実を規定する概念体系である(レイコフ・ジョンソン, 1980/1986)。例えば、AKB48 の楽曲「365 日の紙飛行機」(作詞 秋元康 King Record, 2015)の歌詞のなかには「人生は紙飛行機」という表現があるが、これは「A:人生」を「B:紙飛行機」で喩えているメタファーである。ただし、私たちは一般的に「人生」を「旅」「出会い」「道」といったもので捉えており、日常的には「紙飛行機」のようなものだという考え方はしない。だからこそ「人生は紙飛行機」というメタファーが娯楽(芸術)作品として意味をもつ、ということがいえる。

メタファーは日常的にも用いられるが、それを意図的に使用することで、聴き手の豊かな想像や思考の転換を促すことができる。具体的には、学生に自分の目指す職業を何かに喩えるワークを行った。例えば、著者がリハビリ系の大学で実施したワークでは、「よいリハビリとは鯉のぼりだ」(療法士が風であり、鯉のぼりである患者さんを美しく元気になびかせることができる)というメタファーを考えた学生がいた(土元・サトウ, 2019a)。リハビリ職はネガティブに捉えられることもあるが、「鯉のぼりのメタファー」はそのような社会的イメージを変革する可能性を秘めている。このように、自分自身の言葉を作り出すことで、自己や社会が持つ価値を、言葉を通じて問い直すきっかけを作ることができる。

以上、教育・発達心理学とキャリア教育との接合の一つとして、「移行」のためのキャリア教育について論じてきた。特に「足場かけ」の具体例を提案した。ただし、本稿での提案は、制度的なキャリア教育・学習(授業など)に限定していることに留意すべきである。実際、移行においては制度的な教育で得られた資源だけでなく、日常的なやりとりの中で関与するメディア(本、写真、映画)、ルール、制度といった象徴的要素(symbolic elements; Zittoun et al., 2003)が資源として活かされることもある。本連載の今後の方向性としては、家庭、地域、友人との関わりといった非制度的な教育や学習も視野に入れながら、第1筆者自身が行っているキャリア教育・研究について紹介していきたい。それによって、キャリア教育をどのように豊かなものにすることができるかについて、考えていきたい。

V. 引用文献

- 有澤晴香. (2018). 避難区域外での行動選択と支援に関する研究——福島県の住民の語りから. *応用社会心理学研究～サトゼミ卒論集～* (Vol. 14, pp. 40–56).
- Arthur, M. B. (1994). The boundaryless career: A new perspective for organizational inquiry. *Journal of Organizational Behavior*, 15(4), 295–306.
- Arthur, M. B., & Rousseau, D. M. (2001). *The boundaryless career: A new employment principle for a new organizational era*. Oxford University Press on Demand.
- Darwin, C. R. (1877). A Biographical Sketch of an Infant. *Mind*, 2, 285–294.
- エルダー G. H. (1991). 新版 大恐慌の子どもたち(本田時雄・川浦康至・石井昭男, 訳者代表). 明石書店. (Elder, G. H. (1974). *Children Of The Great Depression: Social Change in Life Experience*. University of Chicago Press.).
- Elder, G. H. (1974). *Children Of The Great Depression: Social Change in Life Experience*. University of Chicago Press.
- Erickson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: WW Norton & Company.
- ジェンドリン E. T. (2004). 「TAE (辺縁で考える)」への序文(村里忠之・村川治彦, 訳). (Gendlin, E. T. (2004) Introduction to “Thinking At the Edge”. *The Folio*, 19, 1–8.). <http://previous.focusing.org/jp/tae-intro.html>
- Gratton, L., & Scott, A. (2016). *The 100-year life: Living and working in an age of longevity*. Bloomsbury Publishing.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology*.
- 河野麻沙美. (2007). 算数授業における図が媒介した知識構築過程の分析——「立ち戻り」過程に支えられた子どもたち同士の足場がけに注目して. *質的心理学研究*, 6, 25–40.
- レイコフ G.・ジョンソン M. (1986). レトリックと人生(渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸, 訳). 大修館書店. (Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.).
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. Random House Digital, Inc.
- McReynolds (1987). Lightner Witmer: Little-known founder of clinical psychology. *American Psychologist*, 42, 849–858.
- Persons, F. (1909). *Choosing a Vocation*. Gay & Hancock.
- サトウタツヤ. (2015). 心理学の名著 30. 筑摩書房.
- サトウタツヤ. (2020). *臨床心理学史*. 東京大学出版会.
- Sato, T. (2017). *Collected Papers on Trajectory Equifinality Approach*. Chitose Press.
- シャイン E. H. (2003). キャリア・アンカー——自分のほんとうの価値を発見しよう(金井壽宏, 訳). 白桃書房. (Schein, E. H. (1985). *Career anchors: Discovering Your Real Values*. University Associates San Diego.).

- Skinner, B.F. (1932). On the rate of formation of a conditioned reflex. *Journal of General Psychology*, 7, 274-86.
- 土元哲平. (2020). 転職におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 立命館大学大学院文学研究科 博士論文(未刊行).
- 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚—TAE ステップを用いた理論構築. *質的心理学研究*, 19, 46-67.
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2019a). メタファーによる自己表現と職業的アイデンティティ発達—リハビリテーション学生のワークから. *日本質的心理学会第16回大会*. 明治学院大学(東京都).
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2019b). 転職研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. *キャリア教育研究*, 37(2), 35-44.
- ヴィゴツキー L. S. (2001). 思考と言語 (柴田義松, 訳). 新読書社. (原書 1956 年)
- ヴィゴツキー L. S. (1982). 心理学における道具的方法(田丸敏高, 訳). *心理科学*, 6(1), 28-32.
- ワーチ J. (2002). 行為としての心 (佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子, 訳). 北大路書房. (Wertsch, J. V. (1998). *Mind as action*. Oxford University Press.).
- Witmer, L. (1896) Practical work in psychology, *Pediatrics*, 2, pp. 462-471.
- Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G. (1976). The Role of Tutoring in Problem Solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17(2), 89-100.
<https://doi.org/10.1111/j.1469-7610.1976.tb00381.x>
- Zittoun, T. (2009). Dynamics of Life-Course Transitions: A Methodological Reflection. In J. Valsiner, P. C. M. Molenaar, M. C. D. P. Lyra, & N. Chaudhary (Eds.), *Dynamic Process Methodology in the Social and Developmental Sciences* (pp. 405-430). Springer. <https://doi.org/10.1007/978-0-387-95922-1>
- Zittoun, T., Duveen, G., Gillespie, A., Ivinson, G., & Psaltis, C. (2003). The Use of Symbolic Resources in Developmental Transitions. *Culture & Psychology*, 9(4), 415-448.

VI. 注

-
- i ただし、以上のオートエスノグラフィーに関する記述は、博士論文を書き終えた現在の理解であって、当時の理解とは異なる。オートエスノグラフィーを実施しようと考えた当時は、オートエスノグラフィーとはそもそもどういうものなのかが分かっていなかった。修士論文での文献研究を通して、その輪郭が理解できるようになった。
 - ii ヴントの内観心理学は、実験的手法によって意識を統制できるという前提のもと行われていたという点、データとして扱う指標が量的なものに限られているという点で、オートエスノグラフィーと大きく異なっている。
 - iii 心理学における個人的ドキュメントの分析は、社会科学の方法として個人的ドキュメントを利用した『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(Thomas & Znaniecki, 1918-1920)に端を発している。

フランスのソーシャルワーク

第一回

ソーシャルワーカーはかかりつけ医

安發明子

(在パリ ライター/通訳)

筆者は 2000 年代半ばに首都圏の福祉事務所で生活保護の担当をしていたが、そこでは他に「子ども家庭支援課」「高齢・障害支援課」などと担当が分かれていて、区役所に来た人が相談先を選ぶというスタイルだった。そのため「たらい回しにされた」と言われることがあったり、引きこもりなどどこにも専門とする担当者がいないという問題もあった。生活保護家庭の子どもの支援や就労支援も十分ではなかった。例えば生活保護を受けている母子家庭で、母親の病気、彼氏である男性や家族との不安定な関係、経済的脆弱さ、子どもの学校生活で気がかりなことなどがあり、実際は全て関わり合っていて起きていた。しかし、生活保護担当のソーシャルワーカーとしてそこまで多くの手段を持ち合わせておらず問題に対応しきれていなかった。就労支援、不登校児支援など、支援がポイントポイントに絞られてしまうという弱みもあった。

パリ市のソーシャルワーカー

筆者は 2011 年にパリ市に移住し、2015 年より福祉分野の調査を続けてきている。第一回目は日本とは全く違ったアプローチをしているパリ市のソーシャルワーカーの仕事について紹介したい。

パリ市のアプローチは家庭を「システム」、問題を「不具合の症状」と捉え、家族全メンバーを 1 人もしくは 2 人の担当者がサポートすることで根本的な解決を目指す。ソーシャルワーカーは自分たちのことを「かかりつけ医」だと言う。つまり、家族全員を継続して担当

し、特別ケアが必要な症状があれば「専門医」につなぐ役割だ。この方法によって不具合の「予防」をする役割も担う。強みは層の厚い専門的支援があり、ソーシャルワーカーはそれらをコーディネートして提供できることだ。

パリ市の各区役所内もしくは別の建物に Centre d'action social という日本の社会福祉事務所にあたるセクションがある。そこで働くソーシャルワーカーを assistant social de SSP(Service Social de Proximité 地区ソーシャルサービスのソーシャルワーカー)と言う(以下 SSP)。以前は Service Social Polyvalent「多目的」ソーシャルサービスという名前だった。誰でも訪れることができ、どんな問題でも話せる場所という意味合いだ。滞在許可がなくても身分証がなくても住居がなくても子ども 1 人でも相談に来ることができる。「誰に対してもオープンで無条件で受け付ける」ことが重要であるとする。その任務は以下である¹(カッコ内安發注)。

SSP は社会福祉・子どもの福祉・健康福祉にわたる多目的のミッションを引き受ける。在住期間に関わらず全ての区民を迎え入れ(友人宅に滞在という形でも可)、同居している全員、本人の関わる集団に対応する。個人、家族または集団の抱える全ての問題に関与し、期間は限定しない。

- ・ 区内の住民を迎え、情報提供し、関係機関につなぎ、サポートする²。
- ・ 周産期と子どもの医療的社会的保護に参加するとともに、子どもや弱い立場の大人が危険にさらされていないか早期発見に努め予防する。
- ・ RSA(連帯手当。日本の生活保護に相当)の実施を担当する。(生活保護の仕組みについては文末)
- ・ 住環境を改善するサービスの提供。
- ・ 未来のプロフェッショナルの育成。

今回の調査はパリ市内の一つの区に 2020 年 8 月中通い、SSP の事務所において電話での区民とのやりとりやソーシャルワーカー会議・管理職会議を観察し、SSP と一緒に担当地区を

¹ Fiche de poste assistant-e socio-éducatif-ve de Service social de proximité, CASVP Sous-Direction des Interventions Sociales de la Ville de Paris.

² 「accompagner する」と言う。直訳は「一緒に行く」である。支援とも手助けともニュアンスが違う。SSP によると「並んで一緒に歩く」「本人が本人の意思と力で目的に向かっていくのを隣を歩きながら応援する」イメージである。ここではサポートと訳した。Suivi はフォローに意味合いが近い。

訪問し、多くの SSP、心理士、管理職にインタビューをおこなった。本庁の管理職のインタビューも実施した。

*他の県では SSP の働き方や仕組みが異なることがあり、この原稿の内容がフランス全土に当てはまるわけではない。

*職業名、サービス名、機関名の説明は文末にある。

調査した区ではディレクターと補佐、チーム責任者 6 人、SSP55 人、医療社会事務 25 人、他に受付セクションにソーシャルワーカー 5 人と医療社会事務 5 人が勤務する。(なお、SSP の数には家庭経済ソーシャルワーカーを含む。他に心理士が週 3 回在所している)。

SSP は経済的な問題も子どもの不登校も家族内の不具合が表出した一つの「症状」として捉えているため、金銭的支援や不登校支援をすればいいというわけではなく、不具合の原因を探り根本的な問題への働きかけをしようとする。SSP1 人で担当するのは約 80 件。問題が複雑な家庭や SSP の精神的負担が大きいケースは 2 人で担当する。パリ市職員は希望しない限り異動を命じられることはないので、もう 16 年同じ地区を担当しているという SSP もいた。一つの区を 4 つの地域に分け、それぞれ約 10 人ずつの SSP と 2 人の家庭経済ソーシャルワーカーがつく。家庭経済ソーシャルワーカーは家計のやりくりのアドバイスをし家庭の経済的な問題の解決をサポートする。パリ市全体で SSP がサポートしているのは 5 万 8000 件³である。

ある家族への SSP のサポート<家計・心理・子ども>

一つの家族を例にとって SSP の役割について紹介したい。

イムジ(仮名)一家は 2011 年に「家賃が払えない」という相談で SSP のもとを初めて訪れた。両親と子ども 2 人という世帯である。母親は就労しておらず自覚していないものうつ傾向があり、婚姻関係のある父親がいるが不在がちで収入もあてにすることができないということで、父親とは連絡がつかないまま母子 3 人世帯として生活保護の手続きをする。生活保護の申請をするといくつか担当機関がある中で就労可能性が高い場合は職業安定所にあたる機関が担当するが、幅広い支援が必要な場合や既に SSP がサポートしている人の

³ サポートを受けている人(被支援者)を文献では利用者 usagers と書くことがあるが、調査先では「サービスを利用する」というニュアンスが好ましくないということで les personnes accompagnées と呼んでいた。「SSP が一緒に歩く人」という意味である。

場合は SSP の担当となる。SSP は改めて母親と金銭面以外の社会的サポート内容についての生活保護の契約を結ぶ。1 ヶ月から 9 ヶ月の単位の契約で SSP とサポートする相手である母親がサインする。

この契約書には母親と話し合いの上で 3 ヶ月間の目標、その間の母親の計画を書き込む。この母親の場合は心配があり多めの頻度会った方がいいので 3 ヶ月単位で更新を続けている。会う頻度は決まっていないが更新のために確実に 3 ヶ月後には会うことになる。

SSP 側が支援目標をたてるのではなく、サポートを受ける人が自分の字で計画(Projet)を書き込む。次に「目的・その方法と行動・期限」を書き込む欄が 5 行続く。

この母親の場合は「家計の把握と整理・家庭経済ソーシャルワーカーに相談、電話をする・1 ヶ月後まで」「健康状態改善のためのケア、区役所の心理士との面会、予約の電話をする・1 ヶ月後まで」などと書くことになる。

生活保護の他に受け取れる社会保障がないか SSP や家庭経済ソーシャルワーカーが県、パリ市、家族手当基金(CAF)、雇用窓口(pôle emploi)、児童相談所から探す。

手続きの結果、子ども 2 人の母子世帯(家賃 550euro)に対し、以下の金額となった。

生活保護(RSA) 696euro(約 8 万 7000 円)

家族手当(Allocation familiale) 140euro

家族補助・家賃補助(CAF) 320euro

片親家庭家賃手当(Logement familles monoparentales) 150euro

電気ガス予防手当(Energie preventive) 122euro (年)

月 16 万 3000 円ほどに、電気ガスの手当ということになる。その他に必要なに応じて、家族手当基金から家族で旅行をするための手当や、児童相談所から子どもの勉強机代 220euro、運動療法士代などが必要に応じて支払われた⁴。

⁴児童相談所のフォローケースでなくても、市の手続きで子どもの環境改善のために必要な一時金(allocation exceptionnelle)を児童相談所に申請し受け取ることができる。その機会に、子どもの学校での通知表を見せてもらったり子どもと直接会ったり、子どもを無料塾や心理士につないだりする。子どもの費用を捻出することができていないというのは何かうまくいっていないことが家の中にあるという目安であるため、支援の機会にする。他に心配な事態が生じないように、子どもをサポート機関につなぎより多くの目で子どもを見守ることができるようにする。親の役割はどのように担っているか、家族の状況、なぜお金が足りなくなったのかを知る機会にする。一時金の支払いの後家族がサポートを希望しない場合は学校のソーシャルワーカーに連絡し SSP の子どもへの役割は終了となる。どれか一つ家族や子どもが気になる機関が繋がっていればいいという考え方である。

銀行の取引明細書は持参するように言うが、本人の申告以外の口座を探したり不在がちだという父親の口座は必ずしも求めない。他の親族の協力が得られないと申告がある場合 SSP から親族に確認することもない。困っている個人とその子どもをスムーズに直接サポートできるような仕組みになっている。

SSP による支援内容

【家計面】

家賃の支払いについては家庭経済ソーシャルワーカーがお金のやりくりについて相談にのり、さらに「住宅に関するソーシャルサポート」という専門サービスを依頼し、その民間団体から毎月担当者が家庭訪問しより手厚い支援が組まれた。それでも改善しないので、児童保護目的で裁判所から家計管理の支援を受ける司法決定(MJAGBF Mesure Judiciaire d'Aide à la Gestion du Budget Familial)の手続きをした。家賃を払えないといったリスク事態を防ぐため、子どもに関する手当が家賃の支払いや給食費など親の子どもに対する義務⁵に優先して当てられ、他の用途で使われてしまわないよう専門とする団体が金銭管理する。他に無料のレストランや食品を無料で買えるスーパー、衣服や家電の寄付を受け取れるなど様々なサービスを行う民間団体を紹介した。

【心理面】

母親は家事をする気力がなかったので SSP は看護師が家に通うサービス、生活保護専門の心理士、SSP の事務所にいる心理士等につなげたが、どれも約束の日に母親が不在で継続的なケアには至らなかった。このような状況なので就労は勧めず、まずは母親の体調が良くなることを優先させた。生活保護はより困難な状況にするためではなく、力になるためなので、健康回復や職業訓練が必要なときは無理な現金収入は求めない。母子家庭は特に仕事と子育ての両立は大変なので、子どもが全員小学校高学年になるくらいまで仕事の話は出ないことも多い。この母親は就労は難しいので県の障害担当(MDPH⁶)による障害認定を受け

⁵ 国のホームページに親の義務として「子どもを保護すること」には住む場所、食事、医療、安全、教育などを含むとされているため、家賃の滞納があり追い出される危険性があつては義務を果たせなくなるので子どもに対して支給される手当をこれらに優先的に使うよう手続きする。

<https://www.service-public.fr/particuliers/vosdroits/F3132>

⁶ 県の障害担当 MDPH Maison Départementale des Personnes Handicapées による障害者手当 AAH L'Allocation aux Adultes Handicapés(2020 年月 903euro=11 万 4000 円)。障害という名前ではあるが、癌の治療など病気で一般的な就労が困難な場合も認定を受けることができる。更新時期があるので、その度に診断を受け更新手続きをする必要がある。

る手続きを勧めた。認定を受けられれば月約 11 万 4000 円の手当と家事の補助などが受けられ、後々就労する際も負担の少ないものを探することができるが、本人が治療の必要性を自覚し医者診察を受けに行かなければ認定は受けられない。

SSP とチームを組む市の心理士は、生活保護ケースにはよく「なすがまま(laisser aller)」という状況が見られると言う。お金を自分でコントロールできなかった経験から無力感に陥ってしまい、必要な手続きやケア、しようと思っていたことをしなくなってしまう状況である。より密なサポートができる生活保護専門の心理士がいる団体につなぎ「コントロールを自分の手に取り戻させる」、つまり、したいと思っていることを実行に移せ、必要な手続きを進めることができるように継続して見守る。

【子ども】

社会家族テクニシャンという家事育児を母親と一緒にすることで家族を支えるサービスを入れたが、その中でやはり母親は家事も子どもの世話もできておらず、子どもたちは学校を欠席しがちで金銭管理の司法決定が行われるまでは家賃滞納によりアパートを追い出される危険が迫っていた。子どもに関する懸念事項としては以下の記載がある。

10 歳の子ども：授業を妨害することが多い。自信がないのでピエロのように笑いをとろうとする。何もかも諦めがちである。体重過多。

12 歳の子ども：勉強に集中することができない。勉強に遅れのある「適応クラス」に入っている。

2 人とも本人たちの能力が低いわけではなく、母親が心配で勉強に集中したり自分自身を築く余裕がない。

母親が在宅教育支援を希望すれば児童相談所経由でサービスを依頼できるのだが、希望しなかったことで「子どものリスク情報統全局」に SSP から「心配な情報」の伝達をした。手続きについては後述するが、この家族のフォローを担当していない SSP が「心配な情報」の調査をし、その結果、この家族には在宅教育支援の司法決定が下りた。新たに在宅教育支援のエducatorが母親と子どものサポートに加わることになった。エducatorや社会家族テクニシャンは SSP と違って、食事をともにしたり、一緒に過ごす時間を定期的に持つことができる。前者は親の子どもへの教育をサポートし、後者は生活リズムを整え日常生活を支える。裁判官から母親にも体調を改善させるべくケアするよう指示され、改善しない場合は保護(施設または里親措置)の対象となると伝えられた。

母親は子どもたちの状況について悩んでいるが、母親自身の問題を改善しようとは思っていない。それゆえ、子どもたちの状況もなかなか改善しないという事態が起きている。

「家族全体をサポートしないと子どもだけ助けることはできない」と担当 SSP は言う。

子どもたちは、SSP の紹介した無料塾に通い、精神分析を受け、柔道とギターを習い、長期休暇にはその団体が企画する家族全員参加の旅行に参加している。家族セラピーも受けている。

SSP は在宅教育支援を実施している担当者と学校との会議もコーディネートしている。多くの専門家が重なり合うサポートをしているが「重複する」とは言わず、お互い「補完し合う」関係である。家族にとってほどの機関のどの担当者でもいいので話せる人がいることが大切、話ができることが大切であると言う。SSP はコーディネートする立場上全ての支援が矛盾なく一貫しているよう配慮している。「氷の薄いところから落ちることがないように、氷全体を厚くしていくのが私たちの仕事」と SSP は言う。

SSP の支援コーディネーション

SSP はどのようにして様々な支援をコーディネートするのか。

まず、利用者情報の共有システムが SSP、学校、妊産婦幼児保護センター、児童相談所、家族手当基金、生活保護の間である。つまり、名前でシステムを検索すると、学校のソーシャルワーカーがフォローしているか、生活保護を受けているか、兄弟が妊産婦幼児保護センターのフォローを受けているか等知ることができる。家族手当基金では市営住宅に入居している人の家賃滞納者リストも SSP と共有している。このようにして連携をスムーズにしておき、心配な情報が入ったときも早急に対応できる。「心配な情報」を元に調査する際、6割は SSP や学校ソーシャルワーカーや妊産婦幼児保護センターが既にフォローしている子どもであると言う。「子どもと家族を守り予防する会議⁷」という定期的に行われている会議では、地区担当児童相談所職員、区内の学校の校長と児童福祉専門職、妊産婦幼児保護センターや医療機関や精神医療センター、民間団体などが参加しそれぞれの機関で気になっているケースについて話し合うことでリスクの認識や手続きのすり合わせ、裁判前の情報整理を行う。

同じ情報システム(PEP'S)は民間団体のサービスを選ぶ際にも活用される。例えば「親であることの支援⁸」と選択すると 12 もの近隣で利用できるサービスが出てくる。台帳として用

⁷ CPPEF Le comité de prévention et de protection de l'enfant et de la famille

⁸ Parentalité はフランスの児童福祉において重要な概念である。予防に力が入れられているが、予防と parentalité はセットと言ってもいい。「親であることは簡単なことではない」という共通認識の上、よりよ

意されている区内の支援リスト⁹は 112 ページにも及び 800 近い連絡先が記載されている。親であることの支援としては、パリ市が提供している電話相談、心理士とお茶を飲みながら話せる親カフェ、赤十字の親子広場、親の離婚を経験している親子を支える機関、家族手当基金が提供する親支援サービス、子どもが暴力・いじめなどを経験した親を支援する窓口などがある。

これら民間団体の厚い層はフランスの強みである。専門特化した支援が多く存在するからこそ SSP は全てを自身が抱えることなくコーディネーターとして様々な他の機関に任せられることができるのである。サポートしている 80 ケース全てについて複数の民間団体と連携しており、様々な視点や意見を交えながら支援できるようにしている。一見 SSP と機能が重なる民間団体の相談窓口もあるが、民間団体では専門的な技術を持った人だけでなくボランティアを抱えているので、例えばイムジ一家の母親の病院や学校での面談の付き添いなど SSP は特に重要な機会しか同行できない場合も民間団体では依頼する度に同行できるなど補完し合うことができる。

教会や活動家たちによる民間団体が福祉を始め、それが制度化されたのがフランスの福祉の成り立ちであり、今でも民間団体の社会的影響力が強いからこそ、福祉が守られているという側面もある。

皆に共通の権利<Droit commun>の概念・本人の意思の尊重

パリ市の統計によると SSP のフォローケースの 37%は生活保護を受けている。しかし、SSP にとって金銭的問題はきっかけでしかなく、支援の入り口にすぎないと言う。まずは話し合える関係を築くこと、何が起きたのかその人のことを理解しようとする、その上でしか適したサポート内容を提案していくことができない。生活保護を受けるということは「何か出来事が起きてしまった」ということなので、お金が足りないという症状に対しお金を提供するだけでなく違う症状が出て来ないために不具合自体の解決ができるような機会にする。つまり生活保護はそれ自体の終了が目的ではなく、サポートをしていけるきっかけとみなされている。本人が自身の計画を実現していくことができるような機会にすることが目指されている。

く親の役割を果たせるようサポートする。ここでは「親であることの支援」と訳す。

⁹ Repertoire SSP

1977 年よりパリ市 SSP 事務所は Droit commun=「皆に共通の権利」のための公的機関であると明記される¹⁰。「皆に共通の権利」という表現には、「自分で解決できなかったから福祉を利用する」といったニュアンスはない。SSP によると「引っ越ししたら近隣にいる医者を探してかかりつけ医を決めるのと同じで、医者福祉事務所はセットで抑えておくと安心」という位置づけであると言う。

SSP に限らずフランスの福祉に携わっている人はよく「福祉国家(Etat providence)として」どう判断すべきか、何をすべきか、という言葉を使う。福祉国家とは日本の『大辞林』によると「国民の健康で文化的な生活を保障し、国民の福祉の増進を最優先しようとする国家」である。つまり、国は国民の生活を保障すべきであるし、自分たちがその一端を担っているという意識で職務に取り組んでいることがわかる。全く新しい取り組みについて「よく予算がつかしましたね」と言うと、「福祉国家なのだから文句をつける人はいない」という言い方をする。

SSP は「『誰でも大変なときはあって助けを求めている』と伝えることが重要で、罪悪感を抱かせないよう細心の注意を払う」と言う。罪悪感があるとコミュニケーションを十分とり予防のための取り組みをする協力関係を築くことが難しくなってしまう。最初から家庭内の問題について話す人は少なく、関係性がある程度築かれてからの方が多いため時間をかけてでも良い関係性を築けることが一緒に解決していくには特に大事であると言う。「『これが自分には難しい』と言っていいのですよ、私はあなたに良い悪いと言うことはありません。できなくても大丈夫です。解決法を一緒に探すために私たちがいるんです」「誰 1 人『子どもを 18 歳まで育てるのがずっと簡単だった』なんて言うお母さんはいません」と話しかけると SSP は言う。

アルコール中毒、攻撃的、虚言癖など根が深く解決の難しい状態をパリ市の SSP たちは「とても傷ついている」という言葉を使う。ソーシャルワーカー側の捉え方接し方も日本とは違いがある。

本人の意思を尊重するという点も特徴である。利用できるサービスを勧め自分の判断で決める余地を残す。生活保護や心配な子どものいるケース以外は 3 ヶ月間やりとりがないと自動的に担当ケースのリストから削除される¹¹。サポートを受ける側の意思に委ねられてい

¹⁰ Livret d'accueil, Formations qualifiantes en travail social, SSP

¹¹ その後 6 ヶ月以内であれば継続ケースとしてまた同じ人が担当するが、それ以降は新規ケースとなる。また、記録は 3 年経つと破棄され残らない。「忘れられる権利」があるからである。

るのである。「SSPも相手と同じペースで歩く。戻ることもある。とてもゆっくりであったとしても相手のペースを尊重する。誰1人つながりがいない中でSSPにだけは困ったとき電話をかけてくるとしたらそれだけでSSPは存在価値がある。相手にとって頼りにできる場所でいられればいい」とSSPは言う。生活保護ケースであってもSSPに結果は求められない。「人の人生はソーシャルワーカーの実力で変わるものではなく、その人の歴史が紡ぐものであるから」と言う。かえって、ソーシャルワーカーの判断で相手が望んでいない就労や治療を勧めるのは不適切な扱いであり、自身の問題や病気に気づいて行動に移すのに何年もかかる人もいるが、それはその人が決めることであると言う。ソーシャルワーカー全国会の規約¹²には「ソーシャルワーカーはどのような困難があり、どのような結果であっても、状況が必要とする限りの期間をかけて関わる」と書いてある。

SSPが企画するプロジェクト

SSPは個人的な支援だけでなくグループでの活動をおこなうことも仕事内容として明記されている。SSPは自身で企画を提案することができる。サポートしている人との関わり方を「支援・被支援」のように一様にしない取り組みや、サポートしている人たちの要望に応える企画が実現している。

例えば「裁縫アトリエ」。習いごとをしたい人がいた時には民間団体などの中から紹介するのだが、適するものがない場合は自分たちで企画・実施する。裁縫アトリエは区役所内で毎週同じ曜日の同じ時間に2時間SSPがコーディネーターとして開催された。SSPにとっては、窓口で問題について話し合う時とは違ったコミュニケーションをすることができ、その人らしい姿を見て、より多面的な関係性を築くことができる。SSPのもとに通う人同士もこのアトリエで知り合うことでコロナによる外出禁止期間にはお互い助け合うことができた。大きな成果は「孤独であるという状況をなくすことができたこと」とSSPは言う。

「心の文化アトリエ」は毎週一回希望者をつのりSSPが同伴して演劇や映画を見に行き、その後お茶をしながら観たものについて話し合う。

心理士は外出禁止期間中に区内でフォローしている全ての母子家庭に電話をするというプロジェクトを立ち上げ、週一回電話するとともにメールでいつでも悩みや相談にのれるようにし、更にSSPから「相談したいことがあったらいつでも連絡ください」という手紙も送った。SSP・心理士ともに、密に個人的にやりとりができたおかげでより家族と絆を深め支援しやすくすることができたとしている。

¹² Article 14 du code de déontologie de ANAS Association Nationale des Assistant de Service Social

「ホテルで暮らす家族の『親であることの支援』」プロジェクトは、住居が確保できず区内のホテルに長期滞在し SSP がフォローしている 205 家庭の調査をおこなっている。全て子どもがいる家族だ。75%は片親家庭、71%は6歳以下の子どもがいる。54%は滞在許可がなく生活保護など受けられない上正規の仕事にも就きにくい。55%は収入がない。ホテル生活の期間は平均2年半。そこに特別なニーズがあるに違いないと感じた SSP はプロジェクトを立ち上げ、まずは親たちからヒアリングを行い何に困っているか状況把握を進めている。義務教育である3歳以上の子どもについては学校のソーシャルワーカーも共同で違う視点から調査を進めている。特に「親であること」をホテルという制限の多い空間で思うように実現していくことの難しさについての話が多くあがっているのでどんなサポートができるか模索したいという。「難しい環境であるからといって悪い親というわけではない、誰もがいい親でありたいと願っているのに実現するのが難しい状況であるとしたら何かしら改善の方法を見つけたい」と話す。

「分類し整理し見つける」というプロジェクトは、決められた曜日に区役所の一室を用意し、SSP に相談をした人が自宅にある書類一式を持参し、SSP が一緒に整理するというものである。自分で片付けるのが苦手な書類がたまってしまっている人に喜ばれている。

他にも生活保護の人を対象にした「定年後の暮らし」というプロジェクトもある。

SSP の本職は調査分析や新しいサポートの提案ではないので、プロジェクトの実施を支える全国組織¹³に通い研修を受け、月一度その場所で研究者にアドバイスをもらいながら調査結果の整理や分析をおこなうこともある。

サポート内容の優先順位は自分と相手で違うことがよくあり、その差について考える機会になると言う SSP もいる。状況を改善するには相手にとってピンとくる、関心を持ちやすい方法でなければならず、これまでの自分たちの方法を超えていくにはそれを模索する機会が必要と話す。

このような現場で得られた社会的分析をもとにした「グループに共通の利益のための社会活動」プロジェクト¹⁴はそれぞれ市に報告して他の区でも得られた知識を共有できるようにしている。SSP の企画がボトムアップ式に他の区や市へ広がることもあり、現実に即したサポート方法が生まれやすい土壌がある。また、職員にとっては、評価の高いプロジェクトを実現するほど希望すれば昇進しやすいという点で人事の評価が明確である。

¹³ ANTSAG Association Nationale pour le Travail Social avec des Groupes et des interventions sociales collectives.

¹⁴ グループに共通の利益のための社会活動 ISIC Intervention Social d'Intérêt Collectif. Christina de Robertis の著作に詳しい。

児童保護の最前線を任されている SSP

フランスの児童保護のミッションは児童相談所、保健所のような位置づけの妊産婦幼児保護センター、そして SSP の3つの機関で担っている。親が「問題がある」「助けが必要」と認識しなければ窓口自ら足を運ぶことはなく、それができるとは限らないので、妊娠中から幼児期、学齢期それぞれ親と子どもが関わる機関にはソーシャルワーカーがいてチェックできる仕組みになっている。子どもは環境適応力があまりに高いので、赤ちゃんでも泣かなくなったり不安にもならなくなるということがある。子どもの泣き声を待っていたり、不登校などの症状が出てからではケアが遅れてしまうので専門的な視点で子どもを観察し、状況を読み取り、ケアにつなげる「予防」が役割として課されている。問題が大きくなってからよりも予防の方がコスト的に低く済む。

SSP のもとには学校から気になる子どもについて通報すべきか相談がきたり、近隣の住民や親戚などが気になる子どもについて電話通報すべきか相談してくることがよくあり、直接顔を見て話しやすい窓口になっている。

SSP は普段家族をフォローする中で予防的な取り組みをすることと、リスク情報の調査の二つの児童保護の役割を担う。

普段のフォローについてはイムジ一家で少し触れたが、親の経済的な問題などの相談に対し、家族全員に目配りする中で子どもにサポートが必要なときは積極的に関わり、学校などと連携しさまざまなサービスを組み合わせて提案する。

リスク情報の調査については、パリ市は「子どものリスク情報統合局(CRIP)」より年間2258件、1日約6件の「心配な情報(IP Information Préoccupante)」についての調査指示が各区の SSP に出されている。SSP は心配な情報が出た子どもに関わる学校などの機関と一緒に3ヶ月以内に調査を終え CRIP に戻さなければならない。私の調査した区では1人の SSP で常に2-3件は「心配な情報」についての調査を抱えており、区によっては専門部署を置き SSP5人で対応しているところもある。

子どもがリスク状態におかれていると感じた人は誰もが連絡義務がある(リスク状態にある人が成人であっても通報義務があるのは同じ)。リスクの定義は「子どもの健康、安全、精神面が危険やリスクにさらされていたり、子どもの教育的・身体的・情緒的・知的・社会的発達状況が危険やリスクにさらされている場合」だ。その場合、専門の番号に電話すると全

国の情報を 1 カ所で受け取り、その中で本当にリスクに関わる情報が各県の子どものリスク情報統合局に伝達される。暴力があったり危険がある場合は 24 時間以内に裁判所経由で保護の手続きがされるが、すぐに危険がない場合は子どものリスク情報統合局からパリ市の場合は各区の SSP に調査指示が出る。その中で両親が SSP と話し合いの上サービスを受け入れたり民間団体の支援につながり 3 ヶ月以内にリスクの状況がなくなると判断された場合は「児童相談所のフォロー必要なし」として報告される。

在宅教育支援を希望した場合は児童相談所に引き継ぎされ、児童相談所が在宅教育支援をおこなう団体に委託する。両親が話し合いに応じない、積極的に協力しない場合などは子どものリスク情報統合局から司法に判断を仰ぎ、司法命令による在宅教育支援、施設や里親宅での保護、またはフォローなしと判断される。虐待があるかどうかという判断基準ではなく、リスクという概念を使い、親と子どもがそれぞれどのような困難を抱えているかに注目する。

図 1: 「心配な情報」があった際の流れ(パリ市の資料¹⁵をもとに筆者作成)

(同じ子どもについて心配な情報が一年間で複数回あることがあるため数字に重複あり)

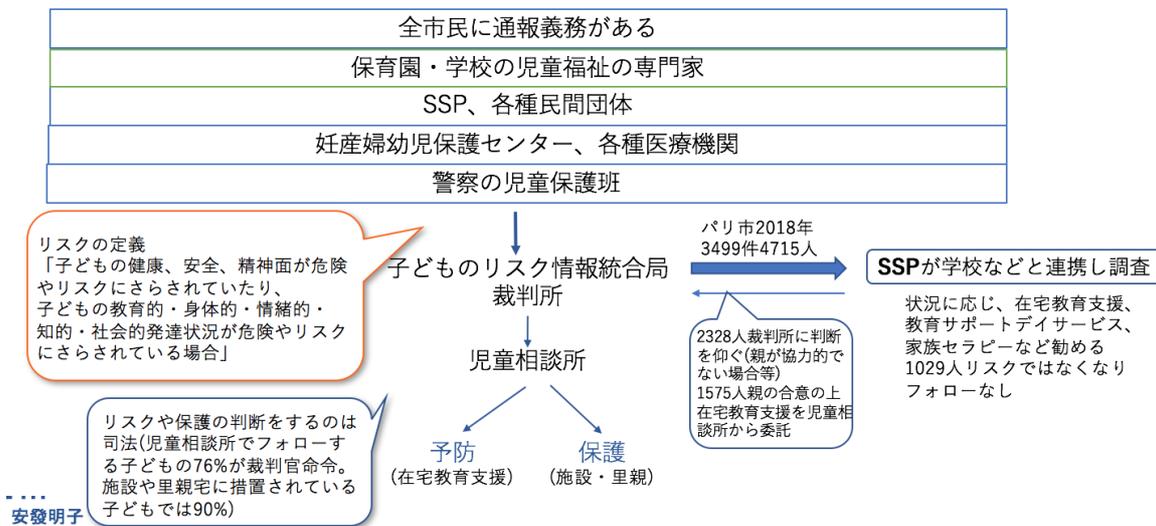
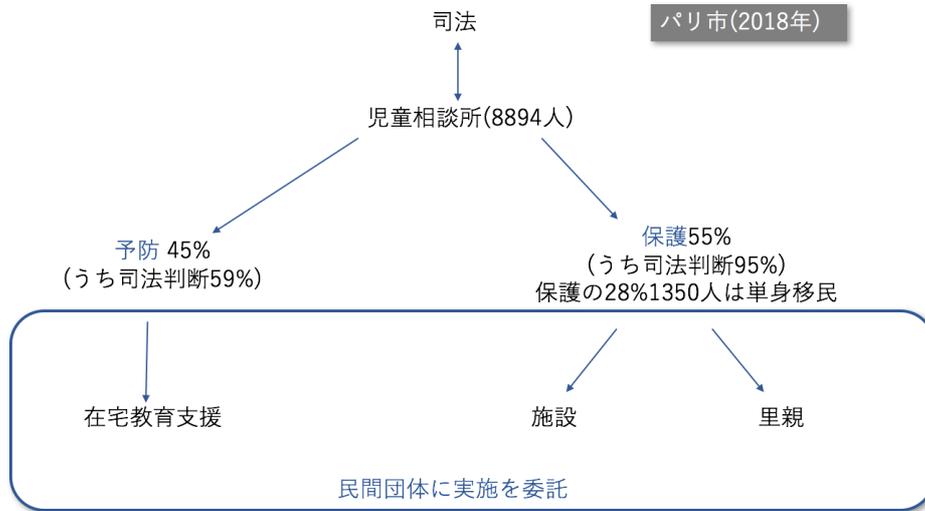


図 2: パリ市児童相談所でフォローしている子どもの内訳(パリ市の上と同じ資料をもとに筆者作成)

¹⁵ Louis Merlin Responsable de la CRIP75, Information Préoccupante et signalement, Janvier 2019, DASES Direction de l'action sociale, de l'enfance et de la santé Sous direction de la Prévention et de la protection de l'Enfance.



例えば先のイムジー家の場合、2人の SSP が継続のフォローをしているが、「心配な情報」についての調査はフォローを担当していない他の 2 人の SSP が担当者となる。まっさらな状態で子どものリスクにのみ焦点を当て調査し親と対応について話し合えるためである。リスク調査担当の SSP は、子ども 2 人の学校のソーシャルワーカーと組む。学校のソーシャルワーカーは本人・学校内の心理士・教育相談員・担任などから情報収集しレポートを提出する。

フランスは 3 歳から義務教育なので 3 歳以上は学校のソーシャルワーカー、3 歳未満は妊産婦幼児保護センター、3 ヶ月から 3 歳未満は保育園の心理士、看護師、医師等も調査のパートナーとなる。

児童保護において予防的観点から家族への働きかけをすることは 1958 年の法律から明記されているが、近年では、1998、2002、2004、2007 年の法律により予防がさらに強調されるようになった。SSP であり本を書いている Olivier 氏によると、これらの法律の中で度々「リスクや危険な状況に置かれている子どもの家族もサポートする」ことが強調されている。国には弱い立場の者を守る義務があり、その最たるものが子どもであるが、保護にあたって一番の主役となるのは親である。社会保護(protection sociale)つまり、家庭の社会的な環境の改善を最優先し、SSP などによる社会的サービスの提供をまずはおこなう。それでも危険な状況が改善しない場合や、SSP が家族と協力関係を築けない場合、状況の把握が困難な場合に司法による子どもの保護がおこなわれる(Olivier, 2016)。

法律には子どもに関する全ての決定において子どもが最優先であると明記されている¹⁶。

パリ市では心配な情報の調査に CREAMI というメソッドを使っている。子どもが必要としていること、つまり子どもの精神的・肉体的健康、子どもの成長、子どもが自身をどのように構築しているかということに着目する。その次に、両親がどれだけ親としてのあり方を改善させていく余地がありそうかを判断する。同じ空間に住んでいる子ども全員にそれぞれ必ず会い、親それぞれと個別に会い、家庭訪問もする。環境が同じでも子どもによって受けるインパクトは違い、反応も違うので、サポートする必要のある子どもがいるか注意深くチェックする。

調査に 3 ヶ月間かけることができるのでその間に両親の教育面について補強方法を提案していく。暴力がない場合は施設措置よりも「親であること」の強化が優先される。つまり、調査期間内に SSP が在宅教育支援、社会家族テクニシャン、教育サポートデイサービス、精神医療センター、家族セラピーなどの中から適したものを提案し、親が積極的に「親であること」について取り組むようであれば保護しないで数ヶ月後にまた状況を確認するという方法をとる。まずはさまざまなサービスを利用しどこまで子どもの状況を改善できるかを優先させる。

親であることについて働きかけをし、「親の意識の向上」を目指すのが、難しい場合もあると調査した区の SSP は言う。親自身がまず必要とする治療やケアを受け良いコンディションであること、さらに「自身と子どもの状況を改善するための努力をしたい」という気持ちがあることが条件になるが環境があまりにも整っていない場合もあると言う。

SSP は親から直接相談を受け手伝うことも多い。「13 歳の息子が学校でクラスメイトを殴り次回同じことがあると退学になってしまうので助けてほしい」「子どもが万引きで裁判所に呼ばれることになったが施設に入れられることは避けたい」「子どもが家出することが度々ありどうしたらいいかわからない」などの相談があり、親の同意による在宅教育支援を開始することでこれ以上事態が悪化することを防ぐようにする。パリ市では少年法に触れた未成年は児童保護の方でもダブルでフォローするという取り組みが続けられてきた。更生教育と家庭全体のサポートを同時に行えるためである。

¹⁶ « Dans toutes les décisions qui concerne les enfants, l'intérêt supérieur de l'enfant doit être une considération primordiale ». Article 3-1 de la loi numéro 2017-293 du 5 mars 2017 modifiant le code de l'action sociale et des familles.

しかし、うまくいかないこともあると SSP は言う。親が自分たちの抱えている難しさに目をつむり形だけしか応じないので状況が改善しない、子どもがどのようなサポートをつけても逃げ回り関係形成できない、裁判官判断を仰いだ理由が親の協力が得られないことだったのに裁判官が親の意向を尊重しチャンスを与えるため「フォローなし」の決定を下したことで関係者がフォローしにくい事態になってしまうことがある、SSP による調査でリスクがあることがわかり在宅教育支援が開始されるが改善しておらず再調査になることがある、親が SSP と在宅教育支援を担当する人に違う話をしてそれぞれから支援を引き出そうとしたり対立構図を作ろうとすることがある等、難しさは残る。

パリ市の児童福祉は虐待などの悪をなくすというよりも、家族の構成員全員の状態を良くすることを目指している。優先順位や手続きについては明確で、誰もが意見を言いやすい仕組みになっており、小さな気づきも支援につなげやすくなっているが、解決までの道のりが容易なわけではない。

ソーシャルワーカーの仕事

相談者が窓口を訪れると、初回は受付担当が SSP が受ける案件か聞き、その後初回相談を担当するソーシャルワーカーが詳細を確認する。その場所はセキュリティスタッフもいる総合受付である。その後担当ソーシャルワーカーが決まり、予約による面接をするが、場所は二方面からドアのある個室が用意される。SSP は週二回半日を面談日に当てており、他の業務は事務所でを行うが、コロナが流行しだしてからはほぼメールと電話のみで直接会う機会はほとんどなくなっている。SSP の事務所自体は 2 人部屋で外部の人の出入りの少ないフロアで静かに任務に当たることができる。

生活保護と児童保護の分野については紹介したが、そのほかの相談の内容は様々だ。「自己破産を複数回したがまたたくさん借金を抱えてしまった」「電気代の請求が 9 万円も来たのだが払えないから助けてほしい」「高齢なのに娘から家を出てほしいと言われているから娘の方を追い出してほしい」「夫の介護で看護師の役割をし続けて疲れたので別居したい」「大家が住居の工事に応じてくれないが床が崩れ落ちそうなので裁判所から大家に命令を出してほしい」「足の専門医からの電話で、お年寄りの足があまりに痛んでいて原因は近隣住民に嫌われているという思い込みがあり家にいられず毎日外を歩き続けているようなので対応してほしい」「近隣とのトラブルで出ていくよう言われたので新しい住居探しを手伝ってほしい」「息子が一年前から家から出なくなって部屋でゲームをして過ごしている」

「26 歳でこれまで同居している両親に養ってもらっていたがなかなか仕事に就けないし体調も良くないので生活費の相談にのってほしい」。

ソーシャルワークのアプローチ

歴史や背景についてはここで細かく記述するスペースがないため次回のテーマとする。今回はソーシャルワークのアプローチの特徴のみ手短かに述べるに留める。

まずは家族をシステム(systemie)と捉えているという点がある。母と子どもといった二人の間だけの相互作用のみに注目されがちだったが、1980 年代から家族の構成員全員の相互作用が子どもの成長に関係すると考えられるようになった。それぞれの構成員が家族の集団力学(dynamique familiale)にどのような貢献をしているかを重視する(Rouyer, 2012)ので、子どもの心配な情報についての調査も必ず同居している子ども全員が対象になるし、在宅教育支援も同居している未成年全員とその親に対しておこなうことが多い。例えば子どもの不登校があった場合、不登校の子どもとその親だけに働きかけをするのではなく、不登校という症状だけに注目するのでもない。症状はメッセージであり、本人のコミュニケーションの「入口」または「出口」と捉えられている。個人の行動は家族の構成員それぞれの行動の結果として生じているもので、家族の構成員の行動によって変わるものである(Rouff, 2007)。

サポートを受けている人、未成年に対するサポートをする側の姿勢としては 1900 年代の精神分析家 Françoise Dolto の影響が強く見られる。自分のしたかったことを思い出させ、その人が望んでいる方向に向かえるようにすることで、エネルギーが生まれ生きる喜びが取り戻せるという考え方である。悲しい思い出や現在抱えている困難を言語化できると、より能動的に自分の計画に取り組めるようになるという認識が福祉分野の調査先では共通して見られる。子どもを 1 人の人間として捉えている。子どもには年齢に合った言葉で真実を説明する。子どもであっても自分のために生き、自分の人生の責任を持つという考えの上接している。それゆえ心理面は福祉の各機関とも重視している。

サポートを受けている人が「どう生きたいか」ということを尊重している。SSP がサポートしている人の中にはほとんど絵が売れなくても 15 年間生活保護を受け芸術活動が続いている人がいた。芸術的な計画が生計を立てられるものになるよう支援する団体と共同でサポートしていた。子どもに自分が作った食事を食べさせたいから給食時間家で過ごさせたい

という母は子どもが小学生になっても働いていない。生活保護を受けていて資格を取りたい人、違う職業に就けるよう職業訓練につきたい人にはそれを認める。

そして、方法としては本人の現状を変えていく力、自身の望むものを得ていく力を支えることが重視される。心理学者 Yann Le Bossé の「行動する力の発達(Développement du pouvoir d'agir)」は SSP に支持されている理論の一つである。自分自身や自分のまわりにいる大切な人について自分がどうしていきたいかというコントロールを手にすること、自分の人生の中での出来事を自分で解決できるようになること、無力感から脱出することであると言う。それは、自分の人生は自分の責任で解決するよう押し付ける、つまり、他人が「あなたにとってこれがいいから」と就労するよう指導する、治療するよう指導するというのとは真逆のことで、主役として、自分にとって重要なことについて行動できるようになる力を支えることである。

ソーシャルワーカーを取り巻く困難な状況

フランスは毎年たくさんの移民を迎えており、パリでは住居不足が続いている。10 年前から SSP をしている人は、6 年頃前から宿泊場所が全く見つからない事態が起き、さらに臨時で泊まるためのホテル代の補助も出なくなってしまったと言う。政策として移民を受け入れているものの国は住宅を十分増やそうとはしていないため困難な暮らしを強いられている人が増加していった。SSP が毎週各機関にプッシュを続けたにも関わらず新生児を抱え 1 年間も路上や友達の家を転々とせざるを得なかった親子、幼少期を数年間も手狭なホテルで暮らし、そんな環境の中人格形成をしなければならない子どもたち、田舎の住居と生活保護が用意されても仕事に就きたくてパリに戻ってきってしまう家族。滞在許可が下りるまで数年の間正規の仕事に就きにくい人もいる。

移民は滞在許可がないと生活保護や児童手当、市や県の扶助を受けることはできない。子どもが保育園や学校に行け、児童相談所から保護を目的とした一時金を受け取ることができ、仮住まいとしての施設やホテルが優先的に与えられるのみで、他は無料のレストランやスーパーや物品の寄付に頼るしかないため現金の少ない困窮した暮らしを強いられる。

「解決できないこともたくさんあって自分たちの福祉が弱すぎると感じることもある」と話す SSP もいる。

それでも、話せる相手で居続けようという姿勢は貫く。家の状況が悪いから見に来てほしいという電話を置くなり 40 代の SSP はキックボードを片手に事務所を出て行った。

今回は日本と大きく違った働き方をしているパリ市のソーシャルワーカーについて紹介した。

- 家族全員の全ての問題に取り組み、家族を「システム」、問題を「症状」と捉えるので、対処療法に比べ根本的な解決を目指す原因療法と言える。
- その結果「予防」の役割を果たす。次世代まで見据えた長期的視点も併せ持つ。
- 全てのケースについて民間団体など外部と連携し複数で対応している。
- 子どもや弱者の保護に関しては基準や手続きが明確で安全を最優先した手続きがとられる。
- サポートを受ける人の意思やペースを優先する。

今回はフランスのソーシャルワークが今の形をとるに至った背景、歴史について書く。

安發明子

在パリ ライター/通訳

akikopivoine@gmail.com

参考文献：

SSP Paris <https://www.paris.fr/pages/services-sociaux-197>

Chantal Le Bouffant, Faiza Guélamine, 2005, *Guide de l'assistante sociale*, Dunod.

Charline Olivier, 2016, *La rencontre au Coeur du métier d'assistant social*, érès.

Conseil supérieur de travail social, 2014, *L'intervention sociale d'aide à la personne*, Presses de l'EHESP

Cristina de Robertis, 2007, *Méthodologie de l'intervention en travail social: L'aide à la personne*, Bayard.

François Aballéa, 1999, *Le Métier de conseiller(ère) en économie sociale familiale*, Syros.

Katia Rouff, 2007, « La systémie, une approche efficace... », *Lien social*, n.842, 31 mai 2007.

Pierre-Brice Lebrun, 2020, *La protection de l'enfance*, Dunod.

Véronique Rouyer, 2012, « Approches systémiques de la famille : actualités de la recherche et pratiques cliniques », *Devenir* 2012/4(Vol.24), pp269-274.

Yann Le Bossé, 2015, *Sortir de l'impuissance : invitation à soutenir le développement du pouvoir d'agir des personnes et des collectivités*, Ardis.

生活保護の仕組みについて(パリ市 SSP でのヒアリングを元に記述)

生活保護 RSA Revenu de Solidarité Active

2020 年単身月 564,78euro=7 万 1000 円、夫婦で 847,17euro=10 万 7000 円。家賃補助は CAF に別に申請できる

申請窓口は EPI Espace Parisien pour l'Insertion である。ここで申請をした後、EPI・職業安定所・民間団体・CAF・SSP 等の中からどこがフォローするか伝えられる。サポート内容について改めて担当機関と契約を結ぶ。収入の申告や支払いなど金銭面の窓口は CAF が担う。外国人は滞在許可が一定期間以上ないと受けることができない。

本人の申告を元に手続きをするので、持参した以外の口座、海外の口座、家族の支援などは必ずしも求めない。家族の病気の費用を負担していたり母国の家族にお金を送り家賃が払えないなどのケースも多く見られるが、足りない分を補う手続きをする。夫婦でも別居の準備をしていたりする場合は個人的に申請することができる。

就労するまでの支援を前提としているため、25 歳から 65 歳までのみ。25 歳未満でも子どもがいる場合は受けられる。

65 歳以上は高齢者向け社会的扶助(ASPA Allocation de Solidarité aux Personnes Agées 2020 年度月 903euro=11 万 4000 円)がある。障害のある場合や病気により就労が制限されると認定を受けている場合は別の扶助(MDPH 同じく 11 万 4000 円)がある。そのため、生活保護で高齢・障害・傷病世帯はない。

家庭訪問の必要はなく、会う頻度も決まっておらずサポートを受ける側の希望に任されている。1 ヶ月から 9 ヶ月更新の契約書を結び、サポートを受ける人が更新のための手続きをしに来る。夫婦と未成年の子どもがいる場合以外は個人単位で、21 歳以上の子どもが両親と同居の場合、子どもは別個に生活保護の契約を結ぶことで個々にサポートできるようにしている。お金に関する決定は EPI が行うので SSP はあくまでも生活保護を受ける人をサポートする役に徹することができる。パリ市「社会福祉・子ども・健康局 DASES(Direction de l'Action Sociale, de l'Enfance et de la Santé)」による監査の際も他に提案できるサポート内容を SSP にアドバイスし、SSP を助ける内容であり結果を SSP に求めることはない。

職業名、サービス名、機関名の説明

職業名

ソーシャルワーカー(DEASS Diplôme d'État d'Assistant de Service Social)：国家資格。大学卒業と同じレベルで高校卒業後 3 年間を要する。理論に 1749 時間、研修に 1820 時間、合計 4 個所の研修先から合格をもらわなければ卒業することができない。

家庭経済ソーシャルワーカー(CESF Conseiller en Economique Sociale Familiale)：国家資格。家計のやりくりができるよう支援する。市営住宅から雇用されて滞納者の支援をする人もいる。パリ市の SSP 担当においては入り口は家計だが、実際には全面的に必要とされているサポートを担う。

専門的エデュケーター(éducateur spécialisé) : 国家資格。3 年間専門学校で学ぶ。理論に 1450 時間、研修に 2100 時間、合計 4 個所の研修先から合格をもらわなければ卒業することができない。児童保護、障害、アルコール依存や路上生活者の支援を学んでいる。児童養護施設、路上エデュケーター、在宅教育支援など児童福祉の現場で大きな役割を担う。社会的教育者として、不適応を起こしている子どもやティーンエイジャーの教育を専門とする。身体的精神的困難を抱えている成人の自立支援もおこなう。

社会家族テクニシャン(TISF Le Technicien de l'Intervention Sociale et Familiale) : 国家資格。1 年半から 2 年で理論に 950 時間、研修に 1155 時間。高校卒業程度。家庭を特定の目的達成のため毎週複数時間訪れる。目的とは、生活リズムを整えることや子どもの年齢に応じた必要なケアや習慣を身につけられることなどで、親子とともに取り組む。

学校のソーシャルワーカー(SSS Service Sociale Scolaire) : ソーシャルワーカー資格で就く。学科は教員の担当、児童保護は SSS、教育相談員、心理士、学校医、看護師が担当と役割分担している。生徒の個人的・社会的成功のために話を聞き情報提供しサポートする。学校内、家庭、校外でのこと全ての相談に対応する。生徒にとって情報提供を受け、自分の権利について知り、相談にのってもらい、手伝ってもらい、守ってもらえることができる。校外の機関につないでくれる。

教育相談員(CPE Conseiller Principal d'Education) : 修士卒業で受けられる国家公務員資格(または学士に 3 年以上の公務員実務経験)。1970 年の法律で制定された学校生活について生徒を支える職業。学科教員と連携し、生徒を個別にフォローする。子どもの家族とのやりとりをおこなう。学校内の雰囲気(climat scolaire)の質の向上、長期欠席の予防、校内の暴力根絶、リスク行為の予防がミッションである。SSS は外部機関とのやりとりを担当するのに比べ CPE は生徒と密に関わる。

子ども裁判官(Juge des enfants) : 1945 年の法律によって未成年の刑法について、1958 年の法律によって民法についても担当することになった。つまり、子どもの罪を裁くことと、子どもの保護と二つのミッションを担う。

サービス名(パリ市)

地区ソーシャルサービス(SSP Service Social de Proximité) : パリ市のサービス。各区の Centre d'Action Sociale(社会福祉事務所)でおこなわれる。統括しているのは CASVP Le Centre d'Action Sociale de la Ville de Paris。ソーシャルワーカー資格で SSP をしている場合が多い。(Action sociale は社会福祉と訳されていることがあるが、action は活動、働きかけという意味である。ソーシャルワーカー側が提案するサービスを利用者が選び活用するというイメージである)。

住宅に関するソーシャルサポート(ASLL Accompagnement Social Lié au logement) : 市営住宅は ASLL や家庭経済ソーシャルワーカーを雇っており家族のサポートをおこなう。

市営住宅に専属のソーシャルワーカーがいて母子家庭や高齢世帯等に支援をする場合もある。

在宅教育支援(AED Aide Educative à Domicile, AEMO L'action Educative en Milieu Ouvert)：児童相談所経由でおこなわれるサービス。専門的エデュケーターが実施する。親の同意がある場合(administrative)は AED、親の同意がなく司法判断である場合(judiciaire)は AEMO。それぞれパリ市では民間団体が実施する。担当エデュケーターが家庭に通い、食卓を共にしたり、一緒に出かける中で親であることについて働きかけをし、教育をサポートする。

教育サポートデイサービス(SAJE Service d'Accueil de Jour Educatif)：児童保護の予防目的で親子を支援するサービス。心理士、専門的エデュケーター、学校エデュケーターなどの専門職がいる。教育、家族、学校、精神的に難しさを感じている家族を受け入れる。宿題をする場所の提供、行政手続きのサポート、クラブ活動や遠足や家族旅行を実施することにより親であることについて働きかけをし、親子関係、家庭内の循環を改善する。学校で授業に参加することの難しい子どもには授業のある時間帯に受け入れて勉強の個別指導を行うと同時に、ストレスマネジメント、自信や不安、感情の言語化、睡眠のコントロールなどの働きかけもおこなう。

家族セラピー(Thérapie familiale)：家族やカップルなど家族の構成員複数を交えた精神療法/心理療法で、家庭内の循環、システムを改善させることを目的としている。

機関名(パリ市)

妊産婦幼児保護センター(PMI Protectoin Maternelle et Infantile)：日本の「保健所」に相当する。各区に1箇所以上あり、周産期の女性から6歳までの子どもを対象とし、検診と、医療的社会的予防活動を行う。妊娠届や子どもの生後8日、9カ月、24カ月の健診データが医療機関から送られ、それらを全件チェックし、必要と判断した場合フォローし助産師や保育士による家庭訪問を実施する。産後は特に赤ちゃんの体重を定期的に量りに行く場所であり、ベビーマッサージなどの会も開催している。児童保護専門医がおり、担当地区の全ての保育園をまわる。児童保護の三本柱として児童相談所・SSPと連携して取り組む。

家族手当基金(CAF Caisse d'Allocations Familiales)：社会保険の家族部門で家庭生活と仕事の両立を容易にし日常生活において家族を助けること、障害者支援を役割としている。経済的支援(家族手当、社会支援、住宅補助、障害者保障や生活保護)の支給、家族をサポートをするサービスの実施(社会家族テクニシャン、保育士派遣等)、保育園などの手続きの実施。

パリ市児童相談所(ASE Aide Sociale à l'Enfance)：日本の児童相談所に相当する機関。専門的エデュケーターまたはソーシャルワーカー資格。「予防」として子どもと親への在宅教育支援(AED、AEMO)をおこなう場合、「保護」として施設措置や里親委託をする場合、それぞれ民間団体に支援業務を委託している(施設と里親のみ市でも機関を

持っていて一部は市で引き受ける)。ASE によるフォローが親の合意もしくは裁判官命令で決まった場合、ASE は子と親に面談を実施し、子どもに合った委託先を探す。委託中は適宜監督業務を実施している。

子どものリスク情報統合局 (CRIP Cellule de Recueil des Informations Préoccupantes) : 各県に設置されている機関。子どものリスク情報を収集し、主に SSP に調査指示を出し、ASE へフォローを指示したり、裁判官に判断を仰いだりする。全市民は、心配な子どもがいる場合、119 番に連絡する義務があり、連絡しない場合には罰則がある。119 番 Allô enfance en danger (危険にさらされている子ども)は全国の電話をパリにある SNATED Le Service national d'accueil téléphonique pour l'enfance en danger が受けており、情報を整理してリスク情報を CRIP に伝達している。CRIP は緊急性のあるものは裁判官に連絡し 24 時間以内の保護、緊急性のない(暴力がない)場合は、SSP による 3 ヶ月以内の調査の結果、支援を受けることについて親の同意がある場合は、ASE に在宅教育支援を指示する。親が協力的でない、心配が大きい場合は子ども裁判官に判断を仰ぐ。

精神医療センター(CMP Centre Médicaux Psychologique) : 1986 年から全国に設置されており、通所で予防活動、診断、ケア、在宅訪問をおこなう。精神科医、心理士、看護師、ソーシャルワーカー、作業療法士、精神運動訓練士、言語障害治療士、エデュケーターなどの専門家が勤務し専門多分野にわたるケアをする。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第42号も順調です。新規連載がまた三本。ギョッとするタイトルのものもありますが、対人援助領域の奥深さと多面性を表していると思います。

前号から今号に至る間、私自身が様々な対人援助領域に働く人達のお世話になることになりました。医師、看護師、ソーシャルワーカー、病棟業務従事者、薬剤師、救急隊員、葬祭業者、僧侶、火葬場職員など。それぞれの場にあるプロフェッショナルのディテールに触れる思いでした。

「誰が担当しても、中身はおおむね変わらない」という専門技術はあると思います。担当者によって、中味が違いすぎるのは問題です。そういう意味で、「どこでも同じサービスが受けられます！」は正しいと思います。

その上で、サービスを提供する姿勢とか言葉とか、身のこなしに、思いがけないメッセージが届いてしまうのだと思います。

私は時の勢いで、時々言葉が暴走するところがあるので、結果的に相手が傷ついていることがあるようです。言い訳すれば出来るのですが、そう受け取られた事実は誤解だろうと現実です。

そんなことを起こすのは目的ではないので、心がけたいと、自分が援助を受ける立場で接していると、あらためて思いました。

そんなわけで、様々な分野における実践中心の連載者諸氏の記述に、まだまだ学ばねばなあと思わされるものがたくさんある最近です。

編集員(チバ アキオ)

私の住んでいる京都衣笠周辺には、地層が露出している道路の壁面がある。きぬかけの道にあるその場所は近隣の児童が授業で地層について習う時に必ず訪れて学んでいる。地層といえば、少し前に話題になった「チバニアン」は全国の千葉姓は思わず耳を傾けたらう。チバニアンのすごさは地球の地磁気

逆転、つまりN極とS極の逆転を繰り返した歴史の中で、そのもっとも最近の地層があることらしい(多分)。なぜ、その逆転の繰り返しがわかるかという、同じ場所にある玄武岩に含まれる鉄分が、時代によって寄っている方向(その岩にコンパスを近づけるとNを指す方向)が逆になることからわかったという。その繰り返しによって、地磁気が今と同じ時期、逆転の時期がわかってきたそうだ。今を生きる私たちにとっての興味は、この地磁気逆転(ポールシフト)がいつ起こるのか?その時にどうなるのか?である(これをテーマにした映画もあった)。地磁気逆転時期の地球への影響は逆転時期の動植物の状況を紐解くことでわかるそうである。幸い自然レベルでは大きな影響がないといわれ、一方電気系統のテクノロジーでは影響が大きいともいわれている。

マガジンも地層である。その地層、つまり各号に含まれる内容の方向性も、その時々で変わってくる。その変化の時期に社会で何があったか?は何百万年前ではないのでわかる。こうした地層にも似たマガジンの歩みは未来推測するとき、未来を作り出すときに大いに役立つことは間違いない。その編集部に「チバ」という名前の編集員がいるのはただの偶然です。

編集員(オオタニ タカシ)

依然として新型コロナの影響が続く世の中ですが、対人援助学マガジン 42号は変わらず予定通りの発行です。無料 Web マガジンで、原稿集めから発行までオンラインであるためコロナの影響が少なかったという面がもちろん大きいですが、一方でコロナ禍においても対人援助の営みが途絶えることがないという現れでもあります。

様々な事情を抱えながら、人が生き、暮らしていく限り、対人援助の営みは続くのです。

今号の編集会議は、久しぶりの対面実施でした。オンライン会議でも遜色ないようにも思っていたのですが、対面の良さを改めて実感します。話の間合い、息づかい、同じ場と時間を共有しているという感覚。そのようなものを感じられることが、やはり自分は好きなのかなと思いました。思ってもいないようなことをこの場をやり過ごすために口にしたりはしないとお互いが理解している状況で、言葉を交わし、話題がつなが

り、広がり、思考を紡いでいく時間が、とても心地よく、自分の力を与えてくれるように感じました。

仕事も、病も、思いがけない事態も、すべて人が生きていく過程の一部です。よりよい生を望むとするならば、適度に妥協したり、忖度したり、責任回避したりするのではなく、自分なりに考えて判断し、結果を引き受けながら、ひとつひとつ選び取っていくしかないのだと、改めて思いました。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻42号

第11巻 第2号

2020年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第43号は2020年12月15日
発刊の予定です。
原稿締切2020年11月25日！**

執筆者募集

11年目を迎えたマガジン。常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌です。必要な回数を、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしていま

す。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

タイタニック号の救命ボートの底に穴が空いていた、それだけのことを大きなB全ボードに描いた。40年ほど前の事だ。その一部をトリミングして表紙絵に使った。

タイタニック号遭難の話は大ヒット映画になる前から大好きな話だった。そしてあの映画の撮影真っ只中の時期に、NYを訪れていた。

金がかかりすぎて製作会社が傾くとか、監督が自分のギャラを供出するとか、いろいろゴシップ新聞ネタになっていた。沈没当時の新聞の復刻版がお土産に販売されていた。まさかあんな空前の大ヒット作になるとは、制作会社も配給会社も想像できていなかった。

私達はいつも、結果が出るまで何も分かっていない。そのくせ、結果が現れたとたん、自分分かっていたなどと言いたがる。

だからと言うわけでもないが、まだ結果が見えない時期の不安や期待の渦中にある時、この時間を後でどんな風に語る事になるのだろうと思ってワクワクすることがある。

子育ては基本的にこの繰り返しだった気がする。

(2020/09/15)